

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第457巻

芋田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

国道4号赤松バイパス建設事業関連遺跡発掘調査

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

い も だ に
芋田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

国道4号渋民バイパス建設事業関連遺跡発掘調査



空撮遠景



空撮直上



墨書土器 (多文字)



墨書土器 (六文字が全周)

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな泉土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず削減する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、国道4号渋民バイパス建設事業に関連して、平成15年度に発掘調査された玉山村芋田Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、縄文時代および平安時代の集落跡が複合する遺跡であることがわかりました。特にも平安時代においては、大形の住居跡や付属する作業場などが確認され、また墨書土器などの文字資料や他地域との関わりを示す遺物も多数出土しています。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所や玉山村教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成17年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 合 田 武










例 言

1. 本報告書は、^{いわてびんいかりてんたみやまむらやまあらいだきあひら}岩手県岩手郡玉山村大字宇田字宇田53-10ほか所在する^{いんげん}宇田II遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、国道4号渋民バイパス建設事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡情報検索システムに記載される遺跡番号・遺跡略号は、KF47-2199・IDII-03である。
4. 発掘調査期間は、平成15年4月11日～11月11日、調査面積は6,784㎡である。調査は、濱田宏・飯坂一重の2名で行った。
5. 室内整理期間は平成15年11月1日～平成16年3月31日で、濱田宏・飯坂一重が担当した。
6. 本報告書の執筆は、Iを国土交通省岩手河川国道事務所、それ以外は、飯坂・濱田・石崎が分担して行った。当センター期限付調査員の石崎には、本遺跡出土の墨書土器について検討してもらい、VI、3の執筆を依頼した。なお、執筆分担は文末に示している。
7. 発掘調査では、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、玉山村教育委員会、岩手県教育委員会のご協力をいただいた。
8. 本報告書作成にあたり、次の方々にご指導いただいた。(順不同・敬称略)
井上雅孝 (滝沢村教育委員会)、宇部則保 (八戸市教育委員会)、小椋勇紀 (東北芸術工科大学院生)
鎌田祐二 (宮古市教育委員会)、神原雄一郎 (盛岡市教育委員会)、菊地幸祐 (玉山村教育委員会)
佐藤正彦 (陸前高田市教育委員会)、熊谷賢 (海と貝のミュージアム)、佐藤浩彦 (遠野市教育委員会)
佐藤麻広・女鹿潤哉・高木晃 (岩手県立博物館)、菅原修 (岩手町教育委員会)、神敏明 (岩泉小学校)
高橋昭治 (日本考古学協会会員)
9. 野外調査では玉山村、西根町の作業員18名のご協力をいただいた。
室内整理作業は、当センター期限付職員7名で行った。
10. 各種委託業務は以下の機関に依頼した。
<基準点測量・基準杭設置> (株)ハイマーテック
<航空写真> 東邦航空
<石質鑑定> 「花崗岩研究会」
<金属製品の保存処理> 岩手県立博物館
<木器の樹種同定> (株)バリノ・サーヴェイ
<炭化材の樹種同定> 岩手県木炭協会
11. 今回の調査成果は、現地説明会(9月13日開催)および調査略報に概略を公表しているが、本書と記載が異なる場合は、すべて本報告書が優先する。
12. 調査で得られた出土遺物や整理に関わる諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターで保管・管理している。

凡 例

1. 本報告書に掲載した遺構図の方位は平面直角座標第X系の座標北を、遺構図の水糸レベルは海拔高度を示す。
2. 遺跡内に設けた基準点の成果は、平成9年度調査と同様、日本測地系における値である。
3. 遺構図の縮尺は原則1/50であるが、住居のカマドに関する断面図は1/25とした。また、焼土遺構と土器埋設遺構の平・断面図については1/40、柱穴の平面図は1/100である。
4. 遺構名は、野外調査ではその遺構が属するグリッド名を付けて表していたが、整理作業の段階で遺構毎の連番に付け替えている。なお、本書第IV章では、新遺構名とともに旧遺構名についても併記した。
5. 層名は基本層序にはローマ数字を、遺構の埋土にはアラビア数字を用いた。
6. 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。
7. 遺物実測図の縮尺は、剥片石器1/2、礫石器1/3、土器類1/3、鉄製品・土製品・木器・陶磁器1/2、銭貨は原寸である。
8. 遺物写真図版の縮尺は、遺物実測図のそれにほぼ準じている。

実測図凡例

	焼土（カマド・燃焼部・炉）		内面黒色処理（内黒）
	焼土（焼失時のもの）		タール付着部分
	灰白色火山灰（十和田a火山灰・To-a）		羽口溶着層
	灰層の範囲		羽口還元部分
			礫石器磨面

目次

序
例言
凡例

< 本文 >

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	3
1. 遺跡の位置と立地	3
2. 地形・地質	3
3. 基本層序	5
4. 周辺の遺跡	6
III 野外調査と室内整理の方法	10
1. 野外調査	10
2. 室内整理	11
IV 検出された遺構と遺構内出土遺物	14
1. 竪穴住居跡	14
2. 住居状遺構	59
3. 土坑	67
4. 焼土遺構	79
5. 柱穴	83
6. 土器埋設遺構	83
V 遺構外出土遺物	143
1. 平安時代の遺物	143
2. 縄文時代の遺物	143
VI まとめ	181
1. 遺構	181
2. 遺物	184
3. 黒書土器について	187
4. 芋田Ⅱ遺跡の集落のあり方	192
付篇 芋田Ⅱ遺跡の自然科学分析	195

＜ 図 版 ＞

第1図	岩手県全図	1	第36図	第14号住居跡(2)	54
第2図	遺跡の位置(1:50,000沼宮内)	2	第37図	第15号住居跡(1)	55
第3図	地形分類図	3	第38図	第15号住居跡(2)	56
第4図	周辺の地形	4	第39図	第16号住居跡	58
第5図	調査区について	5	第40図	第1号住居状遺構	59
第6図	土層柱状図	5	第41図	第2号住居状遺構	60
第7図	トレンチ配置図	6	第42図	第3号住居状遺構	62
第8図	周辺の遺跡	8	第43図	第4号住居状遺構	63
第9図	遺構配置図	13	第44図	第5・6号住居状遺構	65
第10図	第1号住居跡(1)	15	第45図	第7号住居状遺構	66
第11図	第1号住居跡(2)	16	第46図	土坑(1)	69
第12図	第1号住居跡(3)	17	第47図	土坑(2)	71
第13図	第2号住居跡(1)	19・20	第48図	土坑(3)	73
第14図	第2号住居跡(2)	21	第49図	土坑(4)	75
第15図	第3号住居跡(1)	23	第50図	土坑(5)	78
第16図	第3号住居跡(2)	24	第51図	焼土遺構・土器埋設遺構	81
第17図	第4号住居跡(1)	27・28	第52図	柱穴(1)	84
第18図	第4号住居跡(2)	29	第53図	柱穴(2)	85
第19図	第5号住居跡(1)	31	第54図	遺構内出土遺物(1)	87
第20図	第5号住居跡(2)	32	第55図	遺構内出土遺物(2)	88
第21図	第6号住居跡(1)	35・36	第56図	遺構内出土遺物(3)	89
第22図	第6号住居跡(2)	37	第57図	遺構内出土遺物(4)	90
第23図	第7号住居跡(1)	38	第58図	遺構内出土遺物(5)	91
第24図	第7号住居跡(2)	39	第59図	遺構内出土遺物(6)	92
第25図	第7号住居跡(3)	40	第60図	遺構内出土遺物(7)	93
第26図	第8号住居跡	41	第61図	遺構内出土遺物(8)	94
第27図	第9号住居跡	43	第62図	遺構内出土遺物(9)	95
第28図	第10号住居跡(1)	45	第63図	遺構内出土遺物(10)	96
第29図	第10号住居跡(2)	46	第64図	遺構内出土遺物(11)	97
第30図	第11号住居跡(1)	47	第65図	遺構内出土遺物(12)	98
第31図	第11号住居跡(2)	48	第66図	遺構内出土遺物(13)	99
第32図	第12号住居跡(1)	49	第67図	遺構内出土遺物(14)	100
第33図	第12号住居跡(2)	50	第68図	遺構内出土遺物(15)	101
第34図	第13号住居跡	51	第69図	遺構内出土遺物(16)	102
第35図	第14号住居跡(1)	53	第70図	遺構内出土遺物(17)	103

第71図	遺構内出土遺物 (18)	104	第99図	遺構内出土遺物 (46)	132
第72図	遺構内出土遺物 (19)	105	第100図	遺構内出土遺物 (47)	133
第73図	遺構内出土遺物 (20)	106	第101図	遺構内出土遺物 (48)	134
第74図	遺構内出土遺物 (21)	107	第102図	遺構内出土遺物 (49)	135
第75図	遺構内出土遺物 (22)	108	第103図	遺構内出土遺物 (50)	136
第76図	遺構内出土遺物 (23)	109	第104図	遺構内出土遺物 (51)	137
第77図	遺構内出土遺物 (24)	110	第105図	遺構内出土遺物 (52)	138
第78図	遺構内出土遺物 (25)	111	第106図	遺構内出土遺物 (53)	139
第79図	遺構内出土遺物 (26)	112	第107図	遺構内出土遺物 (54)	140
第80図	遺構内出土遺物 (27)	113	第108図	遺構内出土遺物 (55)	141
第81図	遺構内出土遺物 (28)	114	第109図	遺構内出土遺物 (56)	142
第82図	遺構内出土遺物 (29)	115	第110図	遺構外出土遺物 (1)	144
第83図	遺構内出土遺物 (30)	116	第111図	遺構外出土遺物 (2)	145
第84図	遺構内出土遺物 (31)	117	第112図	遺構外出土遺物 (3)	146
第85図	遺構内出土遺物 (32)	118	第113図	遺構外出土遺物 (4)	147
第86図	遺構内出土遺物 (33)	119	第114図	遺構外出土遺物 (5)	148
第87図	遺構内出土遺物 (34)	120	第115図	遺構外出土遺物 (6)	149
第88図	遺構内出土遺物 (35)	121	第116図	遺構外出土遺物 (7)	150
第89図	遺構内出土遺物 (36)	122	第117図	遺構外出土遺物 (8)	151
第90図	遺構内出土遺物 (37)	123	第118図	遺構外出土遺物 (9)	152
第91図	遺構内出土遺物 (38)	124	第119図	遺構外出土遺物 (10)	153
第92図	遺構内出土遺物 (39)	125	第120図	住居跡長辺・短辺比	181
第93図	遺構内出土遺物 (40)	126	第121図	カマド煙道方位	182
第94図	遺構内出土遺物 (41)	127	第122図	土器分類図	185
第95図	遺構内出土遺物 (42)	128	第123図	代表的な墨書・刻書土器	189
第96図	遺構内出土遺物 (43)	129	第124図	「山マ」に関わる墨書土器	192
第97図	遺構内出土遺物 (44)	130	第125図	集落の変遷	193
第98図	遺構内出土遺物 (45)	131			

< 写 真 図 版 >

写真図版1 空中写真 …………… 199	写真図版36 遺構内出土遺物 (1) …………… 234
写真図版2 平坦部近景 …………… 200	写真図版37 遺構内出土遺物 (2) …………… 235
写真図版3 基本層序と調査区各部の全景 …… 201	写真図版38 遺構内出土遺物 (3) …………… 236
写真図版4 第1号住居跡 …………… 202	写真図版39 遺構内出土遺物 (4) …………… 237
写真図版5 第2号住居跡 …………… 203	写真図版40 遺構内出土遺物 (5) …………… 238
写真図版6 第3号住居跡 …………… 204	写真図版41 遺構内出土遺物 (6) …………… 239
写真図版7 第4号住居跡 (1) …………… 205	写真図版42 遺構内出土遺物 (7) …………… 240
写真図版8 第4号住居跡 (2) …………… 206	写真図版43 遺構内出土遺物 (8) …………… 241
写真図版9 第5号住居跡 …………… 207	写真図版44 遺構内出土遺物 (9) …………… 242
写真図版10 第6号住居跡 …………… 208	写真図版45 遺構内出土遺物 (10) …………… 243
写真図版11 第7号住居跡 …………… 209	写真図版46 遺構内出土遺物 (11) …………… 244
写真図版12 第8号住居跡 …………… 210	写真図版47 遺構内出土遺物 (12) …………… 245
写真図版13 第9号住居跡 …………… 211	写真図版48 遺構内出土遺物 (13) …………… 246
写真図版14 第10号住居跡 …………… 212	写真図版49 遺構内出土遺物 (14) …………… 247
写真図版15 第11号住居跡 …………… 213	写真図版50 遺構内出土遺物 (15) …………… 248
写真図版16 第12号住居跡 …………… 214	写真図版51 遺構内出土遺物 (16) …………… 249
写真図版17 第13号住居跡 …………… 215	写真図版52 遺構内出土遺物 (17) …………… 250
写真図版18 第14号住居跡 …………… 216	写真図版53 遺構内出土遺物 (18) …………… 251
写真図版19 第15号住居跡 …………… 217	写真図版54 遺構内出土遺物 (19) …………… 252
写真図版20 第16号住居跡 …………… 218	写真図版55 遺構内出土遺物 (20) …………… 253
写真図版21 第1号住居状遺構 …………… 219	写真図版56 遺構内出土遺物 (21) …………… 254
写真図版22 第2号住居状遺構 …………… 220	写真図版57 遺構内出土遺物 (22) …………… 255
写真図版23 第3号住居状遺構 …………… 221	写真図版58 遺構内出土遺物 (23) …………… 256
写真図版24 第4号住居状遺構 …………… 222	写真図版59 遺構内出土遺物 (24) …………… 257
写真図版25 第5号住居状遺構 …………… 223	写真図版60 遺構内出土遺物 (25) …………… 258
写真図版26 第6号住居状遺構 …………… 224	写真図版61 遺構内出土遺物 (26) …………… 259
写真図版27 第7号住居状遺構 …………… 225	写真図版62 遺構内出土遺物 (27) …………… 260
写真図版28 土坑 (1) …………… 226	写真図版63 遺構内出土遺物 (28) …………… 261
写真図版29 土坑 (2) …………… 227	写真図版64 遺構内出土遺物 (29) …………… 262
写真図版30 土坑 (3) …………… 228	写真図版65 遺構内出土遺物 (30) …………… 263
写真図版31 土坑 (4) …………… 229	写真図版66 遺構外出土遺物 (1) …………… 264
写真図版32 土坑 (5) …………… 230	写真図版67 遺構外出土遺物 (2) …………… 265
写真図版33 焼土遺構 (1) …………… 231	写真図版68 遺構外出土遺物 (3) …………… 266
写真図版34 焼土遺構 (2) …………… 232	写真図版69 遺構外出土遺物 (4) …………… 267
写真図版35 焼土遺構 (3)・土器埋設遺構ほか …… 233	写真図版70 遺構外出土遺物 (5) …………… 268

写真図版71 墨書・刻書土器集成 (1) …… 269

写真図版72 墨書・刻書土器集成 (2) …… 270

写真図版73 墨書・刻書土器集成 (3) …… 271

写真図版74 墨書・刻書土器集成 (4) …… 272

< 表 >

表1 周辺の遺跡 …… 9

表2 柱穴観察表 …… 86

表3-1 遺物観察表 (遺構内) …… 154

表3-2 遺物観察表 (遺構外) …… 176

表4 住居跡一覧表 …… 182

表5 カマド一覧表 …… 183

表6 遺構別出土土器一覧表 …… 186

表7 墨書 (刻書含む) 土器一覧表 …… 190

I 調査に至る経過

「芋田二遺跡」は、「渋民バイパス改築工事」の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

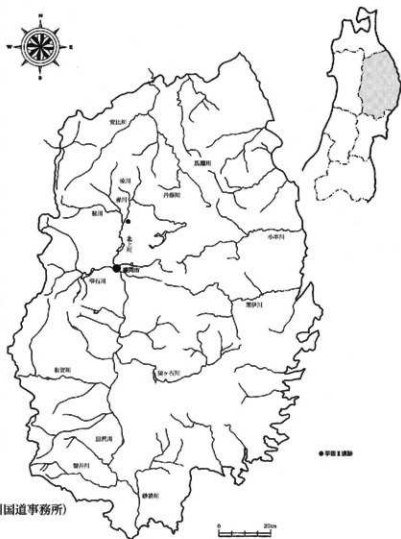
一般国道4号は、東京都中央区を起点として、青森県青森市に至る延長約858kmのわが国最長の国道で、東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。

渋民バイパスは、岩手郡玉山村渋民と同村馬場の間約5.6kmの区間で計画されている。現国道は全幅員7.8～8.5mと狭く、且つ市街地を通過しているにもかかわらず、両側に歩道がない状態であり、近年の自動車交通の増大と車両の大型化に伴い、沿道環境の保全及び交通安全の確保が困難になっている。このため交通の円滑化、交通安全の確保、沿道環境の改善などを目的に渋民バイパスを建設することとなり、昭和61年度に事業着手し、平成2年度に用地着手、平成8年に工事着手した。

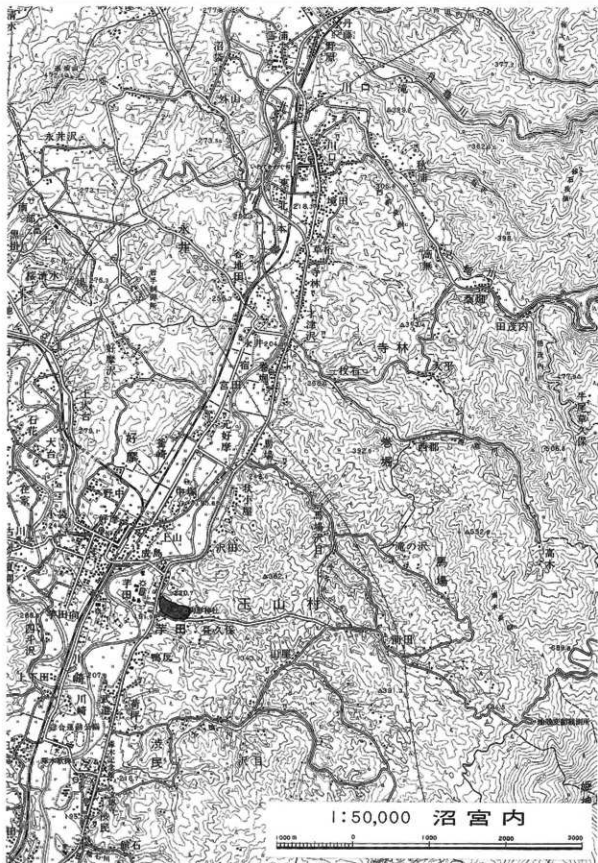
この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が分布調査を実施し、「芋田二遺跡」も確認されている。「芋田二遺跡」については、平成14年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会は、国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所（現河川国道事務所）に対し、事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は、岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、岩手県教育委員会は平成15年度事業について平成15年1月14日付け「教生第1457号」で財団法人岩手県文化振興事業団に、平成15年3月6日付け「教生第1630号」で岩手工事事務所長に通知した。これを受けた財団法人岩手県文化振興事業団は、平成15年4月1日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、同年4月11日から「芋田二遺跡」の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡の位置図

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置と立地

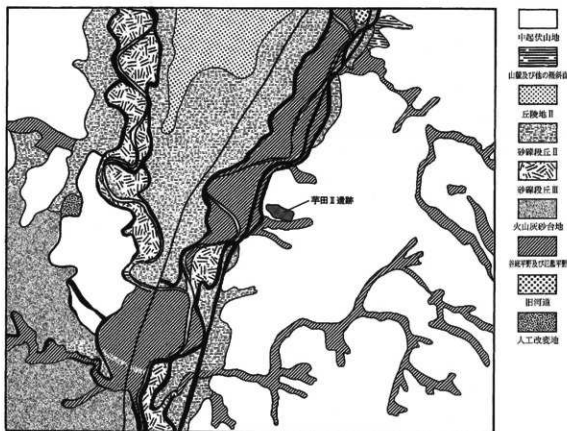
芋田II遺跡の所在する玉山村は、岩手県の中央やや北寄りに位置し、県庁所在地である盛岡市の北東に隣接している。北は岩手郡岩手町・葛巻町、東は下閉伊郡岩泉町、西は岩手郡滝沢村・西根町の1市4町1村と接している。また、村の西方をI GRいわて銀河鉄道線と国道4号が縦断している。

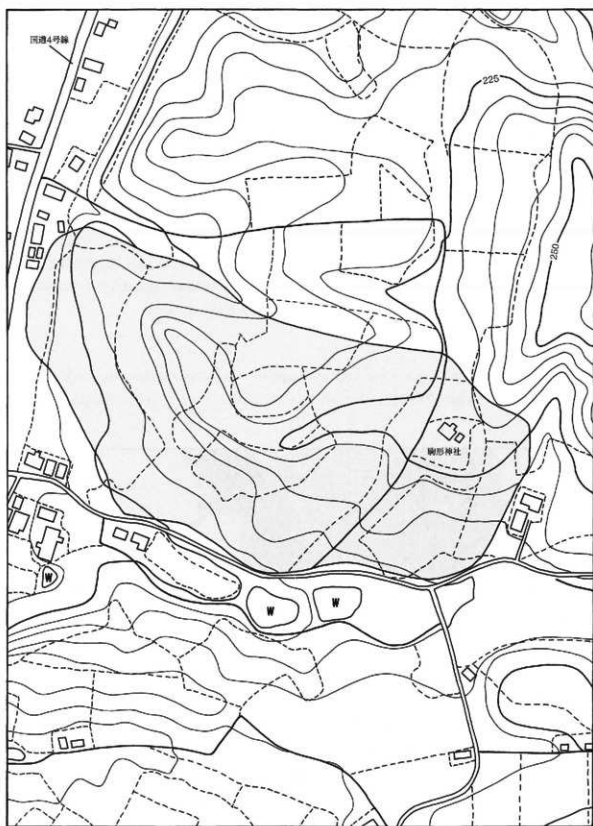
芋田II遺跡はI GRいわて銀河鉄道株式会社好摩駅の南東約1km、国道4号芋田交差点の東側に位置し、岩手郡玉山村大字芋田字芋田53-10ほかに所在している。その地点は北緯39度51分49秒、東経141度11分9秒(日本測地系)付近であり、国土地理院発行2万5千分の1地形図「浪民」、同5万分の1地形図「沼宮内」の図幅に含まれる。

遺跡は、秀峰姫神山から延びる小起伏山地の縁辺部に立地し、遺跡の範囲は南北に200m、東西に450mを測る。南側は西流する沢で区切られており、沢は西方約500mで北上川と合流している。遺跡の標高は、北側の尾根部で223m前後、南側の平坦地で205.7~206.7mほどで、平坦部と尾根部の比高はおおよそ17mである。調査前の状況は、平坦部が畑地として利用されていたほかは、ほとんどが山林である。

2. 地形・地質

玉山村は、西部には岩手山をはじめとする奥羽山脈が連なり、一方東部には姫神山を中心に物見山・時館山などの北上山系の山々を謳む。県内最大河川である北上川の upstream にあたり、川は村西部を南流している。

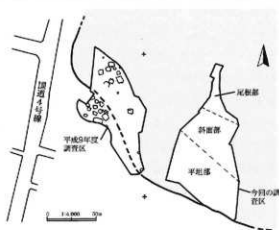




第4図 周辺の地形

また、この周辺は、東西にある数本の支流が合流する地域で、東側からは西部川や芦名沢川が、西側からは松川などの支流が合流する。本村内の北上川周辺は河岸段丘がよく発達しており、平坦性も強い。この地域の河岸段丘は3つに区分され、最も発達している段丘を中位段丘、それより高位の段丘を上位段丘、低位のものを下位段丘としている。中位段丘は北上川や松川沿いに連続して分布し、村内の主要な台地を形成している。下位段丘は、中位段丘を侵食して形成されたもので、中位段丘の前面、川沿いの両岸に断片的に分布している。遺跡が立地する北上川の東側は、北上山系から延びる山地とそこにある小河川が形成した平野からなっている。

(飯坂)



第5図 調査区について

3. 基本層序

今回の調査区は地形的に大きく3つに分けられた。調査では調査区北側から、北西方向に延びる尾根の一部を「尾根部」、そこから南側の平坦部に続く南向きの斜面を「斜面部」、平安時代の遺構が集中する遺跡の南端までの平坦地を「平坦部」と呼ぶことにした。これまでの試掘調査や周辺の地形からみても、各部の層序が異なっていることは明らかで、調査開始当初には数カ所（第7図参照）で基本層序の確認と堆積状況の把握に努めた。しかし、調査区全域の層序をつかむまでには、相当の時間を要することとなった。以下に「平坦部」トレンチにおける層序を示す。

<第I層> 黒褐色土 (10YR3/2) シルト 表土・耕作土で草木根を多く含む。層厚25~30cm。

<第II層> 黒色土 (10YR2/1) シルト 岩手山起源の火砕流堆積物であるオレンジバミスを含む黒色土。上面が平安時代の遺構検出面で、かつ縄文時代後期・晩期の遺物包含層である。層厚20~25cm。

<第III層> 黒色土 (10YR2/1) シルト

第II層のオレンジバミスの混入が減り、他の浮石粒や小さな円礫を含む。第II層との区別は明瞭でない。層厚10~25cm。

<第IV層> 黒褐色土 (10YR2/3) 粘土質シルト

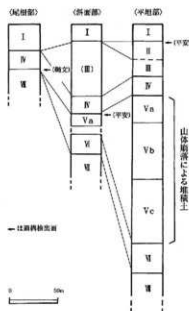
浮石、円礫を含み、第II・III層よりも黒みを欠く。層厚5~20cm。

<第V層> 褐色土 (10YR4/6) 粘土質シルト

当初地山と思われた層で、詳しくは後述のとおり。大きく3層に分けられ、最下層では砂礫が含まれる。縄文時代後期以前の山体崩落が原因となって形成された層と思われる。層厚120~160cm。

<第VI層> 黒色土 (10YR2/1) 粘土質シルト 第V層が崩落する以前の沢地形の堆積物で、青黒く水っぽい。本層上位から湧水があり、無遺物層であった。層厚20~30cm。

<第VII層> 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 粘土質土 地山で層厚は不明。部分的にグライ化している。



第6図 土層柱状図

なお、「尾根部」では第Ⅱ・Ⅲ層が発達せず、表土（森林腐植土）下に第Ⅳ層・第Ⅴ層の順で層位が確かめられた。第Ⅴ・Ⅵ層については、上述のとおり尾根部には存在しない層である。

調査も中盤に差しかかった頃、それまで竪穴住居の床面となる礫混じりの層（第Ⅴ層）が地山、いわゆる最終的な遺構検出面ではなく、さらにその下位に縄文時代後期以前の黒色土層（第Ⅵ層）が存在していることが判明した。このことは、斜面部から平坦部への変換点付近につくられた竪穴住居に付属する土坑の底面が黒色土であったため、あらかじめ予測していたものであった。部分的にトレンチ調査を行ったところ、第Ⅵ層は平坦部全域に分布することが明らかとなったが、いずれのトレンチにおいてもその黒色土中から湧水が見られ、かつ遺物も含まれていなかった。このことから、第Ⅴ層以下の取り扱いについては、平坦部面積約3,900㎡のおよそ3%程度のトレンチ調査（第Ⅶ層上面の検出まで）で終了することとなった。

前回の調査で確認された層序と今回の層序との関係であるが、前回報告の第Ⅵ層（褐色土層）は今回の第Ⅴ層にあたり、それ以前の層についてもほぼ対応するものと思われる。なお、前回の調査では、第Ⅴ層褐色土層以下については確認していなかった。（演田）

4. 周辺の遺跡

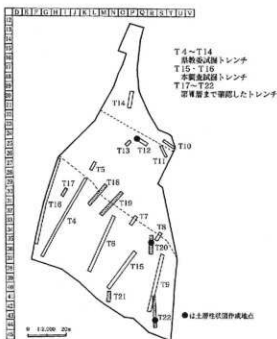
岩手県教育委員会が作成した平成14年度版『岩手県遺跡情報検索システム（盛岡地方振興局管内北部）』によると、玉山村内にはこれまでに旧石器から近世までの遺跡206箇所が確認されている。時代毎のそれぞれの遺跡数は、旧石器時代1遺跡、縄文・弥生時代130遺跡、古墳～古代14遺跡、中世以降10遺跡、縄文・弥生と平安、中世の複合遺跡が19遺跡である。ここでは、調査された主な遺跡とその特徴を挙げておく。また第8図には、芋田Ⅱ遺跡を中心とする周辺の遺跡を、表1にはその図中の遺跡の内容を示した。

旧石器時代の遺物が出土した遺跡は、小石川遺跡である。昭和55年に玉山村教育委員会によって発掘調査が行われた。出土遺物は、尖頭器4点、剥片27点、石核4点、屑片104点、礫製ハンマー1点、台石1点等であり、後期旧石器時代の遺跡であることが確認された。

縄文時代の遺跡には、日戸遺跡、間洞遺跡、長渡遺跡、小長根Ⅱ遺跡、才津沢遺跡、芦名沢Ⅰ遺跡、芦名沢Ⅱ遺跡、宇登遺跡がある。それぞれの遺跡の概要は次のとおりである。

<日戸遺跡> 昭和31年に草間俊一氏らによって調査された。中期～後期の遺物のほか、早期・前期の土器及び土器片が出土していることが日戸遺跡の調査略報に記されている。代表的な出土遺物には、長さ47cmもの大形磨製石斧がある。また、平成8～9年には熊谷常正氏（盛岡大学）らによって調査が行われており、中期の土器、後期の土器・土偶が出土している。

<芦名沢Ⅰ遺跡> 平成9年に（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下埋文センター）により調査され、前期のものと思われる竪穴住居跡3棟を検出した。



第7図 トレンチ配置図

<芦名沢Ⅰ遺跡> 平成10年に埋文センターにより調査され、中期後葉の複式炉を持つ竪穴住居跡1棟を検出した。

<圃利遺跡> 平成7年に埋文センターにより調査され、後期のものと思われる土坑が数十基検出されている。遺物は中期後葉の大木系土器や後期前葉末に相当する土器が出土している。

<長渡遺跡> 平成8～9年に埋文センターにより調査され、後期のものと思われる竪穴住居跡が2棟、土坑が21基検出されている。

<小長根Ⅱ遺跡> 平成9年に埋文センターにより調査され、早期及び後期・晩期の土器が出土した。

<才津沢遺跡> 平成8年に埋文センターにより調査され、後期の竪穴住居跡が1棟、晩期の竪穴住居跡が1棟、縄文時代に属するものの詳細な時期が不明な竪穴住居跡が1棟、土坑が7基検出され、後期の土器が出土している。

<前田Ⅰ遺跡> 昭和60～平成元年に東北大学により調査が行われている。3棟の竪穴住居跡が検出され、うち1棟から晩期の土器が多量に出土した。

<宇登遺跡> 平成11年度に玉山村教育委員会によって発掘調査が行われ、晩期を主体とする土器や土製品(土鍋など)、石器類が捨て場から大量に出土した。住居跡も確認されている。

弥生時代の遺跡には前述した才津沢遺跡がある。竪穴住居跡、住居状遺構がそれぞれ1棟ずつ、土坑が4基検出された。遺物は弥生前期に属すると思われる土器が出土している。

古墳時代～奈良時代の遺跡には、昭和48・49年に早間俊一氏らによって調査された釜崎遺跡、永井沢遺跡がある。釜崎遺跡からは、奈良時代の土師器を伴った竪穴住居跡が2棟確認されている。永井沢遺跡からは石組みや片石を持たない円墳が確認され、隣接する岩手町浮島古墳群、西根町谷跡平古墳群との関連性が想定される。

平安時代の遺跡は本遺跡同様、縄文との複合遺跡がほとんどで、前述の才津沢遺跡、芦名沢Ⅰ遺跡、小長根Ⅱ遺跡がある。各遺跡の概要は次のとおりである。

<才津沢遺跡> 住居跡が3棟検出され、うち2棟は土和田a降下火山灰を埋土中に含み、1棟は含んでいない。また、この時期の上坑が1基検出されている。

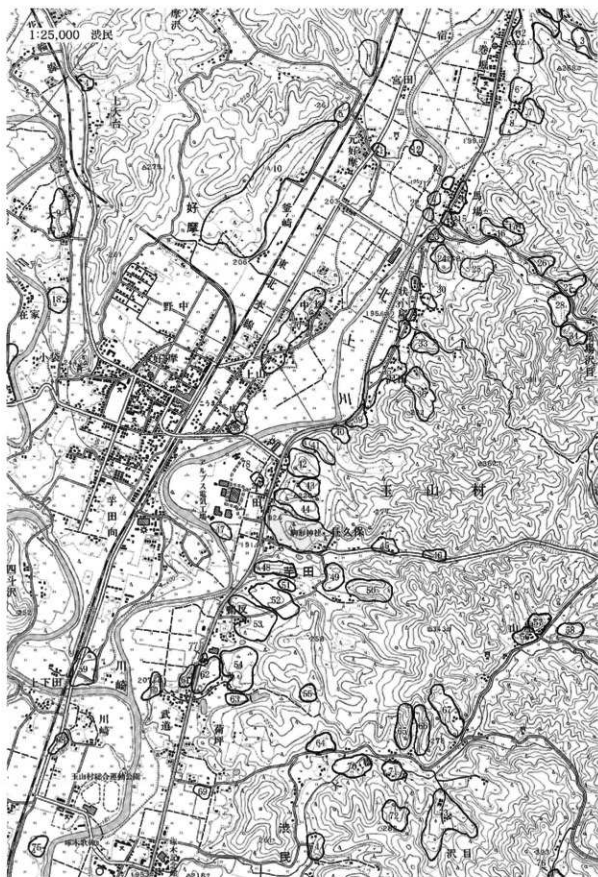
<芦名沢Ⅰ遺跡> 住居跡が6棟検出され、うち2棟からは鍛冶炉とみられる施設が設けられ、床面からは鉄製品が多量に出土した。その他、土坑は6基検出されているが、9世紀後半から10世紀に相当する遺構と思われる。

<小長根Ⅱ遺跡> 平安時代の墨書土器が1点出土したほか、玉山村教育委員会が調査した部分からはこの時期の住居跡2棟が検出された。

中世の遺跡には、現存するものとしては日戸館、玉山館がある。日戸館では15世紀末に相当する天目茶碗が表面採集されている。また、玉山館は玉山村史跡に指定されている。発掘調査されたものとしては下田八幡館、川口平館がある。

<下田八幡館> 玉山村教育委員会により調査され、堀が4条、土塁が2条、掘立柱建物跡が10棟、竪穴住居跡が1棟検出された。

<川口平館> 玉山村教育委員会により調査され、2条の堀と4基の土坑が検出された。 (飯坂)



第8図 周辺の遺跡

表1 玉山村の遺跡

番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地
1	いたこ石	散布地	奈良・平安	土師、土師器、須恵器	大字水戸字木島沢
2	本宮	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	大字水戸字本宮下
3	幡下	散布地	縄文・弥生	縄文土器(後期)、弥生土器	大字水戸字幡下
4	上大石館	城跡跡	中世	青磁器	大字好摩字新田
5	元好摩	散布地	縄文・奈良・平安	縄文土器(前期、中・後期)、土師器	大字好摩字元好摩
6	海堤	城跡跡	縄文	縄文土器	大字好摩字海堤
7	熊文館(えぞ館)	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字熊文
8	赤沼	散布地	縄文	縄文土器(晩期)	大字好摩字赤沼
9	小袋山	集落跡	奈良・平安	土師器	大字好摩字小袋山
10	茶崎	集落跡	縄文・奈良・平安	縄文土器	大字好摩字茶崎
11	袋袋	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字袋袋
12	袋袋北	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字袋袋北
13	馬場	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字馬場
14	馬場	集落跡	縄文	縄文土器	大字好摩字馬場
15	馬場山	集落跡	縄文	縄文土器	大字好摩字馬場山
16	馬場山	集落跡	縄文	縄文土器	大字好摩字馬場山
17	馬場山	散布地	縄文	縄文土器(中期末)	大字好摩字馬場山
18	小袋	集落跡	奈良・平安	土師器	大字好摩字小袋
19	古川	集落跡	奈良・平安	土師器	大字好摩字古川
20	中塚	城跡跡	中世	土師器	大字好摩字中塚
21	馬場中	散布地	縄文	縄文土器、土師器	大字好摩字馬場中
22	馬場中	散布地	縄文	縄文土器、土師器	大字好摩字馬場中
23	小豆	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字小豆
24	麻石山	城跡跡	中世	縄文土器	大字好摩字麻石山
25	枕小袋	散布地	縄文	縄文土器(前期)、すり石、陶器	大字好摩字枕小袋
26	馬場	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字馬場
27	馬場名	散布地	縄文・平安	縄文土器	大字好摩字馬場名
28	声小袋	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字声小袋
29	枕小袋	散布地	縄文	縄文土器、土師器、ブレイク	大字好摩字枕小袋
30	枕小袋	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字枕小袋
31	沢田	散布地	縄文	縄文土器、土師器	大字好摩字沢田
32	沢田	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字沢田
33	沢田	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字沢田
34	沢田	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字沢田
35	沢田	集落跡、散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、陶器	大字好摩字沢田
36	沢田	集落跡	縄文	縄文土器	大字好摩字沢田
37	上山	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字上山
38	上山	城跡跡	中世	土師器	大字好摩字上山
39	沢田	集落跡、散布地	縄文・平安	縄文土器(前期)、土師器	大字好摩字沢田
40	沢田	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字沢田
41	芋田	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	大字好摩字芋田
42	芋田	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	大字好摩字芋田
43	芋田	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字芋田
44	芋田	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	大字好摩字芋田
45	芋田	散布地	縄文	縄文土器(後期)、弥生土器、土師器	大字好摩字芋田
46	芋田	散布地	奈良	土師器	大字好摩字芋田
47	芋田	散布地	奈良	土師器	大字好摩字芋田
48	芋田	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字芋田
49	芋田	集落跡	縄文・平安	縄文土器(中・後期)、土師器	大字好摩字芋田
50	芋田	散布地	縄文	縄文土器(中・晩期)、土師器	大字好摩字芋田
51	芋田	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	大字好摩字芋田
52	芋田	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字芋田
53	芋田	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字芋田
54	武蔵	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字武蔵
55	武蔵	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字武蔵
56	武蔵	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字武蔵
57	山屋	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字山屋
58	水上	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字水上
59	天城	城跡跡	中世	土師器	大字好摩字天城
60	八幡	城跡跡	中世	土師器	大字好摩字八幡
61	武蔵	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字武蔵
62	武蔵	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	大字好摩字武蔵
63	武蔵	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字武蔵
64	大坊	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字大坊
65	山屋	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字山屋
66	山屋	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字山屋
67	山屋	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字山屋
68	敷屋	城跡跡	中世	土師器	大字好摩字敷屋
69	戸	散布地	縄文・平安	土師器	大字好摩字戸
70	山屋	散布地	縄文	縄文土器、土師器、平埴	大字好摩字山屋
71	山屋	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字山屋
72	山屋	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字山屋
73	山屋	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字山屋
74	山屋	散布地	縄文	縄文土器(後・晩期)、すり石、土師器	大字好摩字山屋
75	下田	城跡跡	中世	土師器	大字好摩字下田
76	寺	散布地	縄文	縄文土器(晩期)	大字好摩字寺
77	武蔵	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字武蔵
78	上芋田	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字上芋田

Ⅲ 野外調査と室内整理の方法

1. 野外調査

(1) グリッド設定と遺構名

グリッドの設定は、今回の調査区が平成9年度調査区の東側数十メートル内に隣接し、また地形面も同じであることから、前回同様、日本測地系の平面直角座標第X系を用いた。調査区内には、3級基準点2点と補助点4点の計6点を委託測量し、それを基に区割りを行った。6点の成果値は以下のとおりである。

基準点1 X=-15075.000m Y=30025.000m H=218.967m

基準点2 X=-15150.000m Y=30025.000m H=206.000m

補助点1 X=-15075.000m Y=30050.000m H=223.057m

補助点2 X=-15075.000m Y=30000.000m H=209.939m

補助点3 X=-15125.000m Y=30025.000m H=206.696m

補助点4 X=-15125.000m Y=30000.000m H=205.700m

前回調査のグリッドは、座標原点をX=-14050.000m、Y=29925.000mに置いた5×5mを一区画としたもので、北から南方向にアラビア数字の1、2、3……、東から西方向にアルファベットの大文字A、B、Cを組み合わせて表示(例:A1区・B2区)した。今回の調査にあたっては、前回の座標原点をそのまま用いることとし、Y方向(東西方向)についてのみ、前回とは逆に西から東へアルファベットの大文字を付け直した。つまり、座標原点のY方向、Y=29925.000mを境として、東西方向のそれぞれにアルファベットが付き、東から西にA~が付くものが平成9年度調査、西から東にA~が付くものが今回使用したグリッドとなっている。なお、調査における杭の名称は、北西隅のグリッドを与えた。

なお、遺構名については、その遺構の北西隅が属するグリッド名を付けて、A1住居跡・B2土坑のように呼称し、室内整理の時点で第1号住居跡・第2号土坑など、遺構毎の連番に付け替えた。また、住居状遺構と方形土坑については、規模等から総合的に判断し、住居状遺構から土坑へあるいは逆に付け替えたものが数遺構にある。

(2) 雑物除去・粗掘・遺構検出

4月11日午後には調査器材の搬入、その後野外作業員に対するオリエンテーリングを行い、次の日から現場設置、雑物の除去、試掘調査を行った。平坦部については、事前の試掘調査時に行われた刈り払いからあまり時間も経っていないためか、雑物も少なく試掘トレンチの確認や新たに設定したトレンチ調査にはすぐ着手することができた。しかし、調査区内の斜面部には不法投棄されたゴミの山(ビン・カン類、タイヤ、洗濯機、トタン板、毛布、衣類など)があり、最終的には村の生活環境課の職員数名と遍跡の野外作業員18名で分別しながらの処理作業を丸1日行った。5月の連休明けのことであった。

試掘調査では、尾根部・平坦部の表土の厚さや遺構の有無、遺物の出土状況を確認した。その上で、第1層(表土・耕作土)の除去については重機の使用が可能と判断、5月の連休明けからほぼ1ヶ月間、調査区全域にわたって重機による表土除去を行った。

遺構の検出は、平坦部では部分的に十和田a降下火山灰が含まれる第II層上面で行った。さらに、縄文時代の遺構の有無を確かめるため、調査終盤には第IV層の褐色土上面まで検出面を下けている。なお、既述したが、第IV層下にも縄文時代の遺物が含まれる可能性があることから、平坦部全体面積の数%ではあるが、第IV層下

2mの湖水がある層までトレンチ調査を行った。が、それらは確認されなかった。なお、尾根部については第IV層相当層のみ、斜面部は第II層相当層と第IV層の2面で検出作業を行っている。

(3) 精査・実測・写真撮影

遺構は、原則として竪穴住居跡・住居状遺構・大きめの方形土坑などは4分法で、円形や楕円形の土坑類・柱穴の一部は2分法で精査した。遺物の取り上げについては、4分法で行った住居跡などは、Q1～Q4の4つに全体を分け、基本的には埋土・床面直上・床面・カマド内・ピット内・貼床内などの名称を付けて取り上げた。床面や付属施設から出土したものには、それぞれの場所と順番を付して取り上げている。

なお、焼土遺構と土器埋設遺構の精査は、検出状態の平面を作図後にたちわり、その断面図を作成した。

実測は基本的に簡易造り方測量で行ったが、部分的に光波測距儀（トータル・ステーション）も使用した。現場で作成した各遺構の平面図の縮尺は、基本的に1/20であるが、住居跡のカマドに關係する断面図はすべて1/10で作成した。

野外調査での写真撮影は、35mm版2台（モノクローム1台・カラーリバーサル1台）と6×7cm版モノクローム1台、デジタルカメラ1台の計4台を用いた。住居跡の全景はすべて、住居埋土・土坑は35mm2台のみなど、その都度状況に応じて使い分けた。デジタルカメラは、現地説明会や各種資料の作成に大いに役立った。空中写真は、平坦部の調査が終了に近づいた時点の9月17日にセスナ機による撮影を行っている。

(4) 普及活動

遺跡の現地説明会は、平坦部に検出された平安時代の遺構をメインとして、9月13日（土）10：30から一時間半にわたって開催した。通常より幾分早い時期に開催したが、平安時代の検出面をさらに下げる必要からそうなったものである。天候もあまり良くなかったためか、一般参加者は40名あまりであったが、村内の方々のみならず、仙台市や山形市など遠方からもおいでいただいた。

また6月には、村内にある洗民中学校一年生約70名の遺跡見学会も行った。地域の学習という授業の一環で遺跡を見学したいとのことで、当日は出てきた土器や石器に直に触れる時間を設けた。やはり、話を聞くよりもモノに触れる喜びのほうが大きかったようで、その後はいろいろな質問も出て、こちらもいい機会を与えていただいたと思っている。

2. 室内整理

(1) 遺物の整理

今回の調査で出土した遺物は、当センターの収納用大コンテナ（容量40箱）25箱である。これらの水洗は、ほとんど野外調査期間中の雨天時に行ったが、一部は11月からの室内整理作業において実施した。その後、土器類は遺構内・外および種類毎の仕分け、ジェットマーカー・手書きによる注記、接合・復原作業の順に進め、掲載用遺物の選別・登録作業を行った。登録した遺物は、実測（採寸）・写真撮影・実測図トレースを行い、遺物図版を作成した。他の遺物についても、概ねこのような作業を経て図版作成まで行っているが、次にそれらについて、上記の整理手順と異なる点について記載する。

石器類は、フレイク・チップ、砥石の細片など全点登録し、製品についてはすべて掲載した。鉄製品は、錆を落とし実測・写真撮影後、外部機関で保存処理を行った。これらは全点掲載している。木製品（木器）は、炭化していることから保存処理は施さなかった。これは樹種同定のサンプリング後、乾燥、3点を接合させた。焼失住居出土の炭化材、およびカマド内出土の骨片等、自然遺物については肉眼による同定を行った。骨片は

細かいものが多く、いずれも種不明と判断されている。

(2) 遺構実測図の整理

野外調査で得られた遺構の実測図は、平面図・断面図の照合後、必要に応じて合成等の編集をし第2原因を作成した。その後トレース、版組を行い遺構図版を作成した。土層注記は、「色調」「土性」「土質」をベースに「備考」として層の特徴を付け加えているが、掲載にあたっては「備考」部分を若干編集し直している。これらの遺構図面は、原図・第2原因とも通し番号を付して台帳作成の後、収納した。

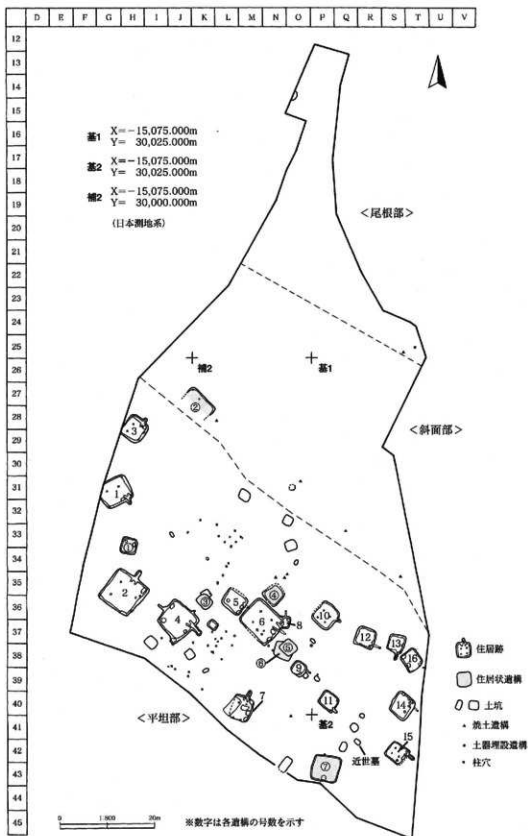
(3) 写真類の整理

調査で撮影した遺構写真は、フィルムの規格毎(35mm版モノクローム、同リバーサル、6×7版モノクローム)に整理し、台帳は撮影カード順のものと遺構毎のもの二種類を作成した。写真図版は、主に後者を用いて作成した。なお、野外調査では9月17日には航空写真を撮影している。写真は、6×7版モノクロームと35mm版リバーサルの二種で、遺跡の遠景・調査区の近景等を3カット撮影した。

遺物写真は、当センターの写真技師が35mm版モノクロームフィルムで撮影した。その後は、遺構写真同様、アルバムに整理し、掲載遺物は写真図版を作成した。(濱山)

<引用・参考文献>

- | | |
|--------------|---|
| 岩手県庁政務部北上海発室 | (1978)：「北上山系開拓地域 土地分類基本調査 岩宮内」 |
| 上野猛ほか | (1964)：「下山八幡館」 文化財調査報告書第10集 玉山村教育委員会 |
| 菊池幸祐 | (1997)：「川口平館跡」 文化財調査報告書第15集 玉山村教育委員会 |
| 木戸口俊子ほか | (1997)：「岡割日遺跡発掘調査報告書」 岩文報告書第260集 (財)岩文振 |
| 金子在知子 | (1998)：「才津沢遺跡発掘調査報告書」 岩文調査報告書第278集 (財)岩文振 |
| 菊池強一ほか | (1962)：「小古川遺跡」 文化財調査報告書第9集 玉山村教育委員会 |
| 草間俊一 | (1956)：「玉山村日戸遺跡調査略報」 岩手大学学芸学部年報第14巻 |
| 土井宣夫ほか | (1983)：「岩手山麓、柳沢麻石・五百森泥流の ¹⁴ C年代-岩手火山噴出物とそれに関連する埋積物の ¹⁴ C年代 (その1) - 『岩手県立博物館研究報告』 1 |
| | (1986)：「岩手火山、分火山灰の ¹⁴ C年代と完新世の火山活動-岩手火山噴出物とそれに関連する埋積物の ¹⁴ C年代 (その2) - 『岩手県立博物館研究報告』 4 |
| 晴山徹光・岩淵計 | (1999)：「長巻・小長根II遺跡発掘調査報告書」 岩文報告書第284集 (財)岩文振 |
| 古館貞身 | (2000)：「芦名沢II遺跡発掘調査報告書」 岩文報告書第322集 (財)岩文振 |
| 村上 拓 | (1999)：「芦名沢I遺跡発掘調査報告書」 岩文調査報告書第295集 (財)岩文振 |
| 玉山村役場 | (1979)：「村誌たまやま」 |
| 玉山村教育委員会 | (2003)：「玉山の文化財」 |



第9図 遺構配置図

IV 検出された遺構と遺構内出土遺物

1. 竪穴住居跡

今回の調査によって、竪穴住居跡は16棟確認された。いずれも調査区南側の平坦部から検出されているが、すべて平安時代、9世紀後半～10世紀初頭の時期を主体とする住居群である。一部に住居間の重複があることから、16棟すべてが同時に存在し集落を構成していたわけではない。

確認された住居跡は、一辺が7～8m前後の大形のもの、4～5m前後の中形のもの、それ以下の小形のものに大別され、それぞれ規模に応じた特徴を有している。

第1号住居跡 (G30住)

遺構 (第10～12図、写真図版4)

〔位置・重複〕 調査区南側の平坦部西端G31区付近にあり、第2号住居跡とは南に13m、第3号住居跡とは北に7mの距離がある。また、第2号住居跡との間には第1号住居状遺構を挟んでいるが、遺構間の重複はない。また、本遺構の西隅は調査区外に延びている。

〔検出面・状況〕 第II層で、方形の黒色土のプランに円形に入る灰白色火山灰が確認された。

〔平面形〕 西側の壁を若干掘りすぎているが、わずかに東西方向に長い長方形である。

〔規模〕 5.57m×(6.30m) 〔壁高〕 51cm～69cm

〔埋土〕 11層に分層される自然堆積である。上位から中位にかけては黒色土・黒褐色土を主体とし、3層と4層間に灰白色火山灰を含む。それ以下も黒褐色土が基調となるが、II層起源の黒色土、IV層起源の暗褐色の崩落土ブロックがみられる。

〔壁〕 いずれの壁も底面から外傾して立ち上がるが、第II層の崩落により本来の壁の立ち上がりではない。

〔床面〕 ほぼ平坦で、第IV層を床面とする。貼床は施されていない。

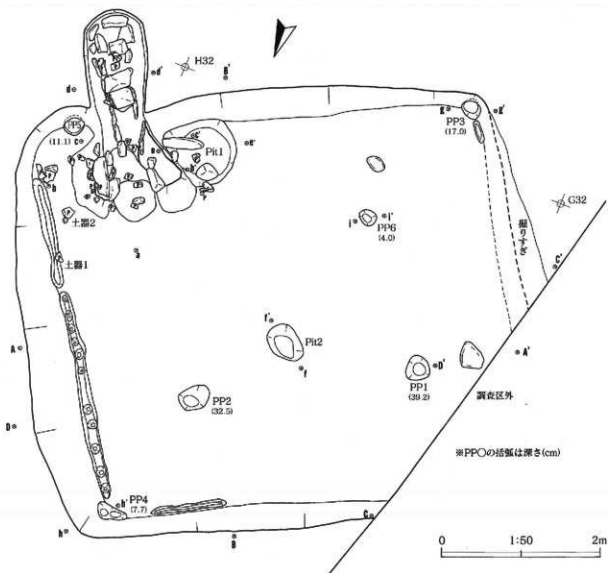
〔カマド〕 まず、煙道の両側に沿って入れられた礫群が確認された。それはひとまわり大きな掘り方を持ち、その部分に反された黒色土の拡がりも検出の手がかりとなった。

<位置> 南東壁の東隅寄り <煙道方位> N-155° -E

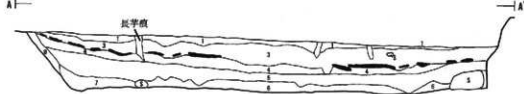
<本体> 残存状況は極めて良好で、周辺には土器片が散在する。羽口から転用された支脚も確認された。袖部には芯材として扁平な礫が数個ずつ配され、それは煙道へと延びている。芯材は黄褐色のシルト質土により被覆され、左右の袖の間には天井部が押しつぶされた状態で確認された。その下には、直径50cm、厚さ5～16cmほどの燃焼部焼土が形成されているが、それは本体奥側で厚みを増す。全体的に焼けは良好である。

<煙道・煙出し部> 上述のように、煙道から煙出しに向かって扁平な礫が埋め込まれた煙道である。全長は160cmほどで、煙出し部まで緩やかに立ち上がる。濡れないように礫と礫とは一部が重なるように組み付けられ、それでも空いてしまう隙間は粘土やシルト質土が充填されているようである。また、煙道中央にある礫の上には天井としての礫がわたされ、同様の隙間処理がなされている。煙出しも礫は上部に向かって煙突状に組まれており、煙道・煙出しあわせて大小20個あまりの礫が用途に応じて使われている。煙出し孔の直径は、礫の崩れにより計測不能。深さは50cmあまりで、その底面はわずかに低められている。

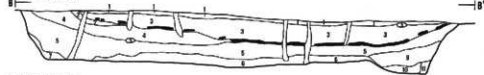
〔柱穴〕 北西隅を除く各コーナーにPP3～PP5、位置的に主柱穴と思われるPP1・PP2・PP6の計6個を検出した。配置は、主柱穴4本と住居の四隅に4本配されるものと思われるが、カマドに近い側の主柱穴が確認で



L=205.400m



L=205.100m



(A-A'・B-B'・C-C')

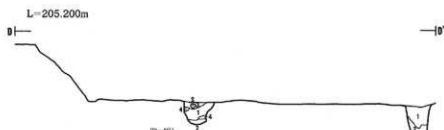
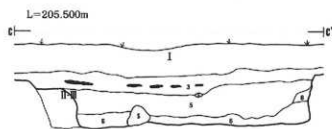
- 1 10YR2/2黒褐色砂質シルト
- 2 10YR2/1黒色砂質シルト
- 3 10YR2/2黒褐色シルト
- 4 7.5YR2/1黒褐色粘土質シルト
- 5 10YR2/1黒褐色土質シルト
- 6 10YR2/2黒褐色粘土質シルト

To=60層群、浮石群を含む。
 オレンジハイス、To=60層群を含む。
 層下にTo=6をレンズ状に含む。その上に覆った火の痕？
 炭化材 (7.5YR5/6暗褐色) を部分的に含む。
 オレンジハイス・黒土小ブロックを全層に含む。
 浮石層、灰土層を含む。
 5より軽い色調でTo=6を穿す。

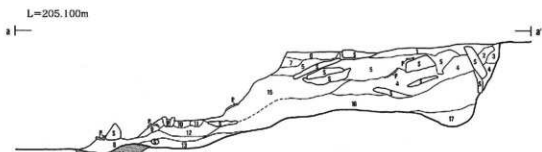
- 7 10YR2/1黒色シルト
- 8 7.5YR2/1黒色砂質シルト
- 9 10YR2/1黒色粘土質シルト
- 10 10YR2/3暗褐色粘土質シルト
- 11 10YR2/4暗褐色粘土質シルト

■ 黒炭層の上部土。
 ■ 黒炭層の下部土。
 ■ 浮石群をまばらに含む。
 ■ 黒色土と暗褐色土の混色土。
 ■ 黒炭層の埋込部ブロック。

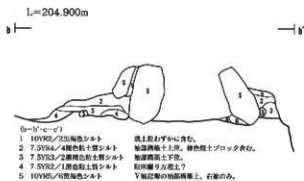
第10図 第1号住居跡 (1)



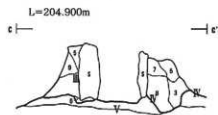
- (b-b')
- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト | 褐色土含む。 |
| 2 10YR1/7/1黒色粘土質シルト | 凝り固まったブロック (V層) 含む。 |
| 3 10YR6/1/1赤褐色土質シルト | 石灰質、オレンジ色土を含む。 |
| 4 10YR4/4褐色粘土質シルト | V層状の構造ブロック。 |



- (a-a')
- | | |
|-----------------------|------------------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 赤褐色粘土質小ブロック全体に含む。 |
| 2 10YR3/4暗褐色シルト | 褐色粘土層を含む。 |
| 3 10YR4/4褐色粘土質シルト | 50cm厚層状構造ブロックを含む。 |
| 4 7.5YR3/3暗褐色シルト | すずけた土層 |
| 5 10YR3/2暗褐色粘土質シルト | 赤褐色粘土質、褐色板を全体に含む。 |
| 6 10YR3/1暗褐色シルト | オレンジパイス、褐色土層を全体にまばらに含む。 |
| 7 10YR2/2黒褐色シルト | To-aの層状物質を含む。 |
| 8 7.5YR6/4にぶい褐色粘土質シルト | カマド穴の凝り土、粘土層を含む。 |
| 9 7.5YR5/6暗褐色シルト | 赤褐色粘土層を含む。 |
| 10 7.5YR2/2暗褐色シルト | にぶい褐色土の小ブロックを含む。 |
| 11 10YR5/6暗褐色粘土質シルト | ブロック状。 |
| 12 7.5YR4/4褐色シルト | 粘土ブロックを含む。 |
| 13 7.5YR2/2暗褐色粘土質シルト | 構造面に凝ったカマド下位置土。 |
| 14 2.5YR5/6暗褐色シルト | 構造面からでた石灰質。 |
| 15 10YR2/2暗褐色シルト | 凝り固まった土層、粘土層を含む。 |
| 16 7.5YR3/2暗褐色シルト | 暗赤褐色粘土層を全体に含む。 |
| 17 10YR3/2暗褐色シルト | 凝り固まった土層を含む。 |
| 18 10YR2/2暗褐色シルト | 凝り固まった土層、すずけた土層、構造面から取り出された。 |



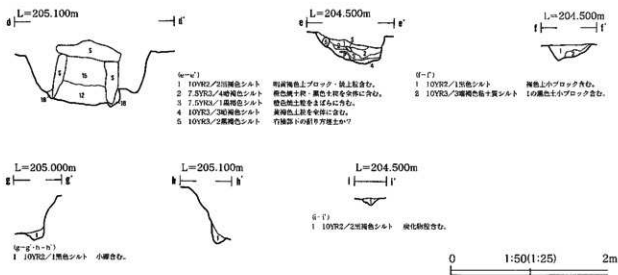
- (b-b')
- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 凝り固まった土層を含む。 |
| 2 7.5YR4/4褐色粘土質シルト | 凝り固まった土層、褐色粘土ブロックを含む。 |
| 3 7.5YR3/2暗褐色粘土質シルト | 凝り固まった土層、石灰質粘土層を含む。 |
| 4 7.5YR2/2暗褐色シルト | 凝り固まった土層、石灰質粘土層を含む。 |
| 5 10YR5/6暗褐色シルト | V層状の構造面粘土層、右端のみ。 |



- (c-c')
- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 7.5YR4/4褐色粘土質シルト | 凝り固まった土層を含む。 |
| 2 10YR3/3暗褐色シルト | 粘土層を全体に含む。 |
| 3 5YR4/4にぶい赤褐色シルト | 7との凝り土。 |
| 4 10YR2/1暗褐色シルト | 赤褐色粘土層を含む凝り固まった土層。 |

0 1:50 (1:25) 2m

第11図 第1号住居跡(2)



第12図 第1号住居跡(3)

きなかった。

〔土坑〕カマド右側のPit1からは土器も出土し、位置的に貯蔵穴と思われる。中央部のPit2は不明である。

〔周溝〕東壁沿いと北壁の一部、南西隅に深さ10cm程度のものが巡る。全周しないのは、壁の崩落が著しい部分だけに構築したためか。

〔その他〕埋土からはおびただしい量の円礫(直径5~20cm程度)が出土した。他の住居跡でも同じような傾向が認められたので、調査時に大らかな数量を計測した。ここからは大コンテナ2箱強の出土をみた。

遺物(第54~61図、写真図版36~40)

〔出土状況〕遺物は埋土からの出土が最も多く、カマド脇のPit1やカマド周辺からも出土した。遺物の総量は大コンテナ1箱あまりである。全部で97点掲載した。

〔土器〕土師器坏・甕・羽釜、須恵器坏・甕・大甕・壺などがある。土師器坏のうち、内面に黒色処理が施されるものと同様でないものの割合は、全体でほぼ半々である。墨書土器は9点、刻書土器は3点出土したが、いずれも土師器坏に書かれたものである。その他、坏を棒状のもので人為的に壊したと思われる破片(3)や、灯明皿として使われた坏(29)などが見られる。

〔土製品〕羽口の転用と思われる支脚がカマド周辺から出土した。また、羽口の先端部が1点出土している。

〔鉄製品〕7点出土した。内訳は鉄線3点、刀子1点、鉤杖状鉄製品のような振りのある製品(木製品?)2点、刀子が金具と思われるもの1点である。

時期 理上に灰白色火山灰が堆積する状況やカマド・付属する土坑等から出土する土器の特徴から、9世紀末~10世紀初頭(前回調査時報告の第Ⅲ期)の年代が与えられる。

第2号住居跡(G34住)

遺構(第13・14図、写真図版5)

〔位置・重複〕平坦部南西端のH36区付近に位置する。この南東側約5mには第4号住居跡が露出、北側約3mには第1号住居跡遺構がある。遺構間の重複はないが、南東壁に沿って新旧3本の電柱・ステーによる覆

乱がある。

〔検出面・状況〕第Ⅱ層であるが、南側はⅡ層が薄く一部第Ⅲ層まで下げて検出している。灰白色火山灰がプランの外側にまばらに観察された。

〔平面形〕方形をなすが、わずかにゆがんでいる。〔規模〕7.40m×7.78m 〔壁高〕35cm～50cm

〔埋土〕6層に分層される自然堆積で、上位は黒色土、中位以下は黒褐色土が主体である。2層・3層間には灰白色火山灰が堆積、下位の黒褐色土中には焼土粒が混入している。壁際には第Ⅱ層起源の黒色土や第Ⅴ層起源の褐色土等が崩落している。

〔壁〕いずれの壁も床面から直立気味に立ち上がる。

〔床面〕ほぼ平坦で、第Ⅳ層を床面とする。貼床は概ね全域に施されていたが酸化していない。

〔カマド〕構造的には第1号住居跡と同様の作り込みがなされている。検出状況も煙道部の礫と焼土の混りから認識したものであるが、その長方形土坑のような大きさから、当初は煙道とは認識できていなかった。

〈位置〉北東壁のほぼ中央 〈煙道方位〉N-38° E

〈本体〉第1号住居跡のカマド同様、残存状況は極めて良好で、土器類もカマド周辺からの出土が多い。本体の構造は第1号住居跡と同じで、その倍以上の礫が使われ構築されている。燃焼部には44cm×59cmの楕円形の焼成面が形成され、厚さは最大で13cmほどを測る。焼け具合も極めて良好、カマド奥壁には支脚の臺が据えられている。右袖は、カマド右に広がる不純物が混じる焼土の上につくられていた。この焼土は、鍛冶関連等の作業の際にできたものが廃棄され、貼床として使われたものと思われる。

〈煙道・煙出し部〉これも第1号住居跡と同じ構造を持つもので、天井に置かれた礫が煙出し付近まで見事に敷き詰められ、煙出しも煙突状に組み上げられている。煙道底面はほぼ水平に延びた後、緩やかに煙出しに向かって下がっていく。煙出し孔は、崩れた礫と焼土粒・黄褐色土粒を含む土で完全に埋まっていたが、その直径は約40cm、深さは79cmを測る。その底面はわずかに掘り下げられている。

〔柱穴〕位置的に主柱穴と思われるPP1・PP3、通常的位置からはずれているものの深さなどからそれと考えられるPP5、東隅・南隅を除くコーナーにPP4・PP10の計5個を確認した。その他のものは柱穴状の小土坑とした。柱穴配置は、第1号住居跡と同様と思われるが、壁際にあるPP5の位置に対応してあるべき柱穴が検出できなかった。

〔土坑〕北隅にあるPit2、南東壁にあるPit3・Pit5などは貯蔵穴の類と思われる。Pit4は不明である。

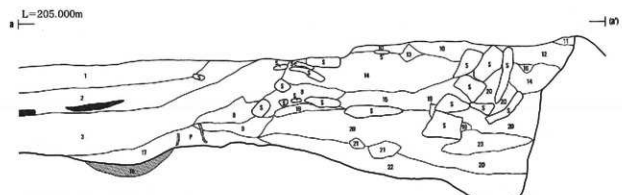
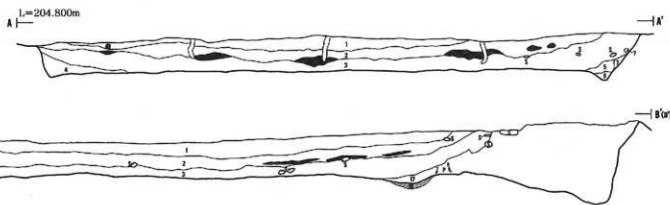
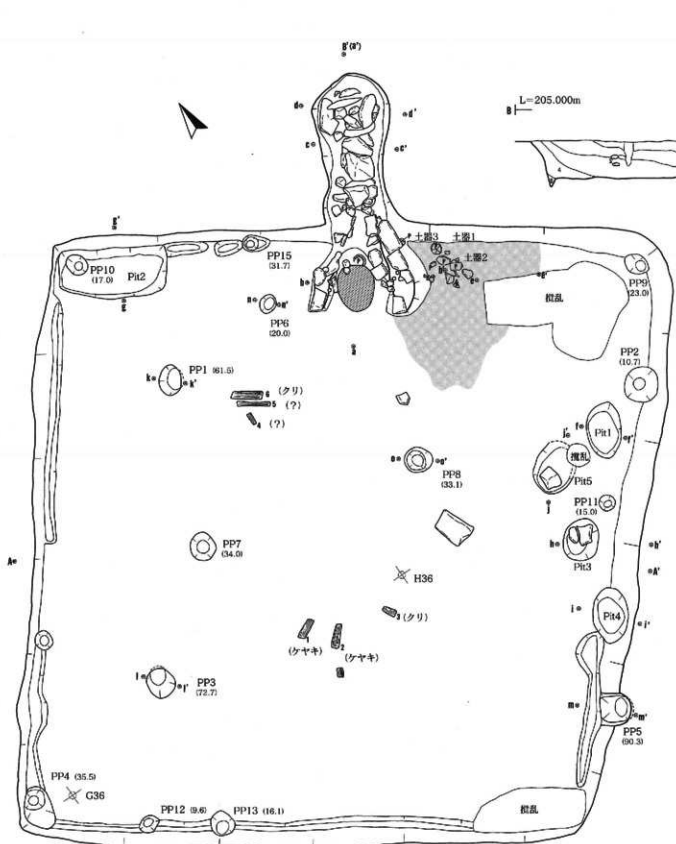
〔溝溝〕各壁に深さ数cmの溝が途切れ途切れに巡る。

〔その他〕埋土からの門礫の出土量は、小コンテナ1箱と規模の割に少ない。床面に炭化材が散在するが焼土は観察されず、焼失に伴うものとは判断されない。樹樫はいずれもクリと同定された。

遺物 (第61～67図、写真図版40～42)

〔出土状況〕遺物は埋土からの出土が最も多く、貯蔵穴やカマド周辺、貼床内などから大量に出土した。遺物の総量は小コンテナ 箱あまりである。全部で67点掲載した。

〔土器〕土師器・甕・羽釜・把手付土器、須恵器・甕・大甕・壺などがあり、量的には須恵器の出土が目立つ。土師器の内黒・非内黒の割合はほぼ半々である。墨書土器は7点、刻書土器と思われるものは1点出土した。墨書のうち、須恵器に書かれたものは1点で、それ以外は土師器である。刻書としたものは、土師器甕の底部に「一」と書かれたように見えるもの。その他には、灯明皿として使われた土師器(108)や把手付土器の把手の基部(120)、羽釜(144)などがある。



(A-A'-B-B'-C-C'-D-D'-E-E')

- 1 IYR2/1層褐色シルト
- 2 IYR3/2層褐色シルト
- 3 IYR3/3層褐色シルト
- 4 IYR3/4層褐色シルト
- 5 IYR2/2層褐色シルト
- 6 IYR2/3層褐色土層シルト
- 7 IYR4/4層褐色シルト
- 8 IYR2/4層褐色シルト
- 9 IYR3/4層褐色シルト
- 10 IYR2/3層褐色シルト
- 11 IYR4/4層褐色シルト
- 12 IYR2/2層褐色シルト
- 13 IYR3/4層褐色土層シルト
- 14 7.SYR5/4層褐色土層シルト
- 15 7.SYR5/3層褐色シルト
- 16 7.SYR5/4層褐色土層シルト
- 17 5YR4/5層褐色シルト
- 18 5YR4/6層褐色シルト
- 19 IYR2/2層褐色土層シルト
- 20 5YR5/4層褐色土層シルト
- 21 5YR5/3層褐色土層シルト
- 22 7.SYR5/4層褐色シルト
- 23 5YR4/6層褐色シルト

オレンジ系土、Tomの電子含む。

Tomのブロックを軸下から含む。Tomのブロックも赤褐色土を含んでいる。

赤褐色土層・黄土層 (赤褐色) 層下層に含む。

黄褐色土の凝り土。

黄褐色土のブロック 植物を含む。

黄褐色土の凝り土層に含む。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

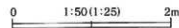
黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

黄褐色土の凝り土層。

第13図 第2号住居跡 (1)



L=204.600m

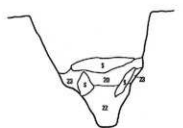


他-1)

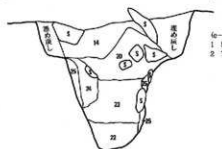
- 1 10YR3/2黒褐色土質シルト
- 2 10YR6/4にぶい黄褐色土質シルト
- 3 7.5YR4/4暗褐色シルト
- 4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
- 5 5YR4/6赤褐色シルト
- 6 10YR2/2黒褐色シルト
- 7 10YR3/2黒褐色粘質シルト
- 8 10YR2/2黒褐色粘質シルト
- 9 5YR4/6赤褐色シルト

炭化物付・粘土状を含む。粘質硬粘土。
粘土状を含む。粘質硬粘土。
炭化物・硝子硝子土質を含む。粘質硬粘土。
硝子の混入による。粘土状を含む。粘質硬粘土。
硝子質の赤変層。
炭化物を含む。
炭化物付・硝子土質を含む。硝子質方解土。
硝子の付方解土。
硝子質硬粘土で、透けは良好。他-a) 18に同じ

L=204.900m



L=204.900m



他-2)

- 1 5YR4/6赤褐色シルト
- 2 7.5YR3/2暗褐色シルト

3-5cmの軟土。透けは良い。
褐色粘土状を含む。硝子質方解土。

L=204.400m



L=204.400m



他-3)

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 炭化物を含む。
- 2 10YR3/3暗褐色シルト To-mブロック
- 3 10YR4/6赤褐色シルト 硝子質の硝子質ブロック。

L=204.800m



他-4)

- 1 10YR2/1黒色シルト 褐色土状を全帯に含む。

L=204.800m



他-5)

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 褐色土状を含む。
- 2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 褐色土の硝子質ブロックを含む。
- 3 10YR3/2褐色シルト 硝子質の硝子質土を含む。

L=204.800m



他-6)

- 1 10YR3/2黒褐色シルト 褐色土状をよばらに含む。

L=204.400m



他-7)

- 1 10YR4/4褐色粘土質シルト にぶい黄褐色の全ブロックを含む。
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 炭化物なし。
- 3 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 炭化物を含むよばらに含む。

L=204.300m



他-8)

- 1 10YR3/2黒褐色シルト 褐色土状を含む。
- 2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 黄褐色土のブロックを含む。

L=204.300m



他-9)

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 褐色土との境界土。
- 2 10YR3/2暗褐色粘土質シルト 褐色土状を含む。

L=204.800m



他-10)

- 1 10YR2/2黒褐色シルト オレンジパリスを含む。
- 2 10YR2/1黒色シルト 褐色土ブロックを含む。
- 3 10YR3/1黒褐色シルト 黄褐色土ブロックを含むみアカフカやわらわら。
- 4 10YR4/5黒褐色粘土質シルト 硝子質方解土。

L=204.400m



他-11)

- 1 10YR3/2黒褐色シルト 褐色土状を含む。

L=204.300m



他-12)

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 褐色土状を全帯に含む。
- 2 10YR2/2黒褐色シルト 褐色土状を含む。

0 1:50 (1:25) 2m

第14図 第2号住居跡(2)

〔土製品〕 羽口の先端部破片が1点出土した。

〔鉄製品〕 刀子が2点出土している。

時期 灰白色火山灰の堆積状況やカマド等から出土する土器の特徴から、9世紀末～10世紀初頭の年代が想定される。

第3号住居跡 (H28住)

遺構 (第15・16図、写真図版6)

〔位置・重複〕 平坦部北西端の調査区境、H28区付近に位置する。南西約10mの距離には、第2号住居状遺構がある。遺構間の重複はないが、南西隅がわずかに調査区外に延びている。

〔検出面・状況〕 第Ⅱ層下位で確認された。プラン内の灰白色火山灰はごく微量観察されるのみである。

〔平面形〕 方形をなすが、北東隅が崩落しており若干歪んでいる。

〔規模〕 4.94m×5.08m (壁高) 57cm～71cm

〔埋土〕 自然堆積で15層に分層した。全体に黒褐色土を基調とするが、下位ほど焼土粒や黄褐色土粒の混入が多い。上述のとおり、灰白色火山灰は1層に小ブロックで入るだけである。壁際には第Ⅲ・Ⅳ層起源の地山崩落土が堆積している。

〔壁〕 いずれも床面から緩やかに外反気味に立ち上がる。

〔床面〕 はほぼ平坦で、第Ⅳ層を床面とする。貼床は施されていない。

〔カマド〕 第1・2号住居跡のそれに似た構造であるが、煙道・煙出し部にあまり礫が用いられていない点で異なる。煙道・煙出し部は、斜面の傾斜に向かって掘り込まれており、底面までかなり深かった。

<位置> 北東壁中央からやや東寄り <煙道方位> N-40° -E

<本体> 残存状況は良好である。左袖には芯材の大きい礫が3個並べて据えられ、その後シルト質土で被覆し構築している。対して、右側の袖は芯材が小さく礫自体が脆い。天井部崩落土下には、28cm×30cmの不整形の焼土が形成されているが、厚さは最大で10cmほどである。それより煙道側のカマド奥壁には、支脚として置かれたと思われる土師器の環・甕が重なった状態で出土した。この支脚と燃焼部焼土には10cmあまりの差があり、使用時の効率はあまり良くなかったものと思われる。

<煙道・煙出し部> 掘り込み式の煙道で、全長は約130cm。礫はほとんど用いられない。底面はほぼ水平に煙出しまで延びている。煙出し孔の底面は掘り下げられていないが、検出面からの深さは150cmを測る。煙出しが斜面方向に向いていることから、雨水等の住居内への流入は避けられなかったであろう。

〔柱穴〕 主柱穴となるPP1～PP4、補助柱となる可能性のあるPP5、その他2個の計7個が検出された。柱穴は長方形に配置されるが、内2本 (PP2・PP4) は壁際に寄る。この間が出入り口となる可能性がある。

〔土坑〕 東隅にPit1が確認され、平面形はほぼ円形をなす。貯蔵穴と思われる。

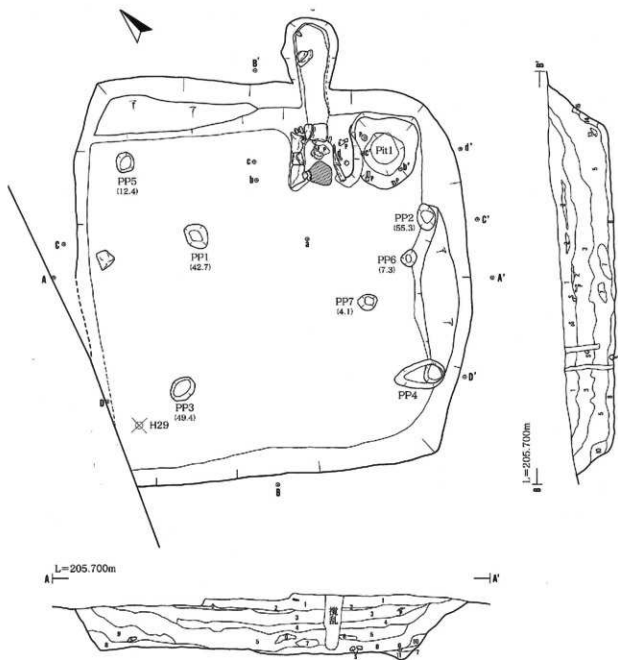
〔周溝〕 確認できない。

〔その他〕 埋土に含まれる円礫は、中コンテナ1箱分出土した。

遺物 (第68～72図、写真図版43～45)

〔出土状況〕 遺物はカマド周辺とPit1から多く出土した。遺物の総量は中コンテナ1箱である。掲載遺物は全部で61点である。

〔土器〕 土師器環・甕、須臾器環・大甕・壺・平瓶が出土している。須臾器の環が目立つ。平瓶 (221) は、

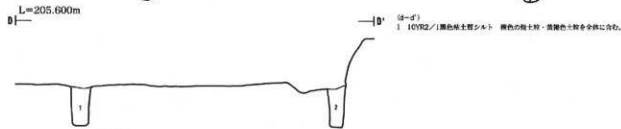


(A-A'・B-B')

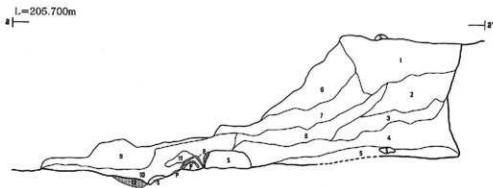
- 1 10V93/2黒褐色シルト
- 2 10V92/1黒色シルト
- 3 10V92/1黒色シルト
- 4 10V92/2黒褐色シルト
- 5 10V92/2黒褐色シルト
- 6 10V95/0黒褐色粘土質シルト
- 7 10V92/2黒褐色シルト
- 8 10V93/2黒褐色粘土質シルト
- 9 10V92/3黒褐色粘土質シルト
- 10 10V92/2黒褐色粘土質シルト
- 11 10V93/2黒褐色年泥
- 12 7.5V95/0暗褐色シルト
- 13 5V94/0暗褐色シルト
- 14 10V94/0赤褐色粘土質シルト
- 15 10V92/3黒褐色シルト

To-aの小ブロック含む。
 褐色材に編み入ると思われる黒色土。炭化材含む。
 におよ・黄褐色土の小ブロック・オレンジパリス含む。
 オレンジパリス・粘土状含む。
 褐色土の小ブロック・浮石殻を主体に含む。
 浮石殻を含む。
 黄褐色土の小ブロック含む。
 浮石殻・炭化材・褐色粘土質を含む。
 中に炭化材が少し埋もれた色土。
 土は黄褐色の粘質土。
 黒濁 (10V7) 層上。
 褐色粘土状土とばらに含む。
 黄土ブロック。
 粘土質土。
 Y軸は黒濁層上。

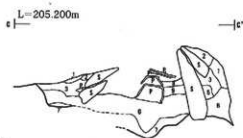
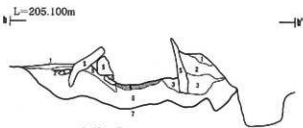
第15図 第3号住居跡 (1)



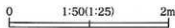
- (C-C'・D-D')
- 1 10YR2/2黒褐色土質シルト 黄褐色土群を全株に含む。
 - 2 10YR2/2黒褐色砂質シルト 黄褐色土群・小礫を含む。



- (A-A')
- | | | | |
|--------------------|------------------------|--------------------|-------------------------|
| 1 10YR3/3暗褐色土質シルト | 黄褐色のブロック・黄褐色のブロックを含む。 | 8 7.5YR4/3暗褐色土質シルト | 緑色土上の小ブロックを含む。 |
| 2 10YR2/2黒褐色砂質シルト | 暗褐色の小ブロックをまばらに含む。 | 9 10YR2/2黒褐色土質シルト | 自然土上の地下層・石灰を含む。 |
| 3 10YR2/1黒色砂質シルト | 垂直線状の網をブロックを含む。 | 10 10YR4/4褐色土質シルト | 黄褐色のブロック・黄褐色の塊土ブロックを含む。 |
| 4 10YR3/3暗褐色砂質シルト | 赤褐色土質を全体に含む。 | | カマド天井部の断層土。 |
| 5 7.5YR3/3暗褐色砂質シルト | 壁上の小ブロックが散見。 | 11 5YR3/3暗赤褐色土質シルト | 壁のぬい塊土ブロック。 |
| 6 10YR2/1黒色シルト | 砂小片・黄褐色土群を全体に含む。層状に散る。 | 12 5YR4/3赤褐色シルト | 断層面直下で散らばる。 |
| 7 10YR2/2黒褐色砂質シルト | 黄褐色の小ブロックを含む。 | | |



- (B-B'・E-E')
- | | |
|---------------------|--------------------------------------|
| 1 7.5YR4/4褐色シルト | 壁面に貼り付いたシルト質土で石材の隙から露出したもの。 |
| 2 10YR2/2黒褐色シルト | 粘土質・炭化灰粒・暗褐色土上のブロックとなる。断層面直上。 |
| 3 10YR4/4褐色土質シルト | 断層面直上ブロック・黄褐色土を含む。石材の隙り面上。 |
| 4 5YR4/4黄褐色シルト | 断層面直上で板状は法材。厚23~4cm。 |
| 5 10YR5/5灰色シルト | 疑いなくなし。 |
| 6 10YR4/3暗褐色土質シルト | 小破瓦の黄褐色土ブロックを含む。 |
| 7 10YR1.7/1黒色粘土質シルト | 水っぽい。泥がらみか? |
| 8 5YR3/3暗赤褐色土質シルト | 壁のぬい塊土ブロック。E-E' [1]に同じ。 |
| 9 10YR4/4褐色土質シルト | 黄褐色のブロック・黄褐色の塊土ブロックを含む。B-B' [10]に同じ。 |



第16図 第3号住居跡(2)

カマド周辺とPit1から出土した破片が接合したもので、わずかに頸部の立ち上がりを残している。この底部の内面には所々墨が付着しており、破損品を墨液等の容器に転用したものと考えられる。

土師器環の内黒・非内黒の割合はやや非内黒が多いか、という程度である。墨書土器は5点、刻書土器と思われるものは2点出土した。刻書土器としたものは、土師器環の底部外面にあるもの(171)と同じ内黒の環の内面に数珠の線がみられるもの(174)である。

〔土製品〕〔鉄製品〕出土していない。

時期 カマド・貯蔵穴等から出土する土器の特徴から、9世紀末～10世紀初頭の年代が与えられる。ただし、灰白色火山灰の堆積が第1号・2号住居跡ほど顕著でないことから、廃絶した時期に多少の差は認められる可能性がある。

第4号住居跡 (J36住)

遺構 (第17・18図、写真図版7・8)

〔位置・重複〕平坦部南西側、本遺構のほぼ真ん中にJ37区のグリッド杭がある。第3号住居跡遺構とは北東に2mの距離をもち、また北東・南東・南西の3辺それぞれに平行して、方形土坑4基が住居を取り囲むように存在している。遺構間の重複はない。

〔検出面・状況〕第II層が本来の検出面であるが、南側はそれが残いため部分的にIII層上面での確認となった。黒褐色土の方形プランで検出されたが、灰白色火山灰の混入はごく微量であった。カマドの煙出しに伴う礫や、煙道状の施設に埋め込まれた礫も検出の手がかりとなった。

〔平面形〕方形基調だが、カマドが設置される南東壁がやや外側に張り出している。

〔規模〕6.90m×7.00m 〔壁高〕45cm～59cm

〔埋土〕自然堆積層で8層に分けられた。上位の黒褐色土と下位のその中間に黒色土を挟んでいる。灰白色火山灰は壁際に堆積した4層中に確認されたが、火山灰降下直前に廃絶した住居の可能性が高い。

〔壁〕いずれも床面から急傾斜で立ち上がる。第II層黒褐色土が薄いため、壁際の地山崩落は少ない。

〔床面〕ほぼ平坦で第IV層を床面とする。図示していないが、貼床はほぼ全体に施されていた。

〔カマド〕本遺構の四辺いずれにも煙道状のものが見られるが、精査の結果、南東壁にある礫を伴うものがカマドに伴う通常の煙道であった。ここでは南東壁のカマドについてのみ記述し、他の3つは付属施設扱い(煙道状施設と仮称)とする。

<位置>南東壁中央と東隅のほぼ中間部 <煙道方位>N-135° -E

<本体>左右の袖には芯材となる礫が据えられておらず、シルト質土の積み上げだけで構築されていたものと思われるが、その残りは悪い。燃焼部焼土は60cm×63cmほどの弧がりを持ち、厚さは最大で4cm程度、焼けは良好である。奥壁には支脚らしき土師器臺が置かれている。遺物はこのカマド周辺からも大量に出土した。

<煙道・煙出し部>煙道は、いったん大きめに土を掘り貫いた後に、礫を組んでから土を戻すといった作業を行って構築したものである。全長は220cmを測り、煙道の煙出し寄りと煙出し内には崩れた礫が入り込んでいた。底面は、燃焼部付近から緩やかに上がりいったんくぼんだ後、再び立ち上がって煙出しに至る。

煙出しの深さは78cm、煙道最深部のそれは110cmである。

〔煙道状施設〕上述のとおり、カマドが設けられている南東壁以外の3辺に確認された付属施設を、その形状から煙道状施設と呼び記述する。煙道状施設1は南西壁に検出した。全長は約200cmである。住居側は開口

が広くしだいに細くなって煙道縁に延びていくが、その両側には礫が配されており、いかにも本集落で確認される住居の煙道そのものである。特徴的なのは、住居側に確認された灰層の拡がりである。付近には焼土は観察されず、でき方もよくわからない。同様の灰の拡がりや煙道状施設2にも確認された。細部の形状は異なるものの、同種の施設であることには違いない。こちらの全長は約150cmで、埋土からは底部有孔の小形の耳皿が出土している。煙道状施設3には灰の拡がりが見られないことから、煙道状として扱うのは適切でなかった。調査では確認できなかったが、仮に本遺構が建て替え拡張されたと仮定すれば、建て替え前の煙道とも想定できる。遺構間の重複ではないことだけは確かである。

これらの遺構の性格については、灰層の検出と変わった耳皿の出土がカギとなる。その耳皿を仏具とする向きもあり、そうだとすれば祭祀的な要素を感じざるを得ない。

〔柱穴〕PP1～PP4が主柱穴である。PP5も補助柱となる可能性があるが、PP2～PP4の間には検出されない。〔土坑〕合計5基の貯蔵穴と思われるものが見つかった。平面形は円形・楕円形のものが多い。中でもカマド右脇にあるPit3は、構造に特徴があるので詳しく記述する。大きさは78cm×85cmの不整形で、底面の形状から元々は方形基調であったと思われる。床面からの深さはおよそ30cmで、底面の四隅に直径10cm強、深さ15cmほどの小孔を有している。遺物は埋土全体から出土し、完形の土師器環が数枚出土した。四隅の小孔は何か四つ足の柱状のものが据えられたものと思われるが、例えばテーブルのような台が置かれ祭祀的な使用を促した土坑なのか、あるいは単に床下収納的に機能したものなのか、詳細は不明である。後述するが、この住居からは耳皿等の特殊な遺物が出土したり、灰層を伴う煙道状の施設があるなど、祭祀的な使用を思わせる部分が無いわけではない。なお、Pit5は貼床除去後に確認したものである。

〔周溝〕各辺それぞれに途切れながら巡る。幅は8cm～20cm前後、深さは10cm程度である。北西壁の周溝は、遺構4ではPit5に切られているようになっているが、周溝のほうが新しい。

〔焼土〕床面中央ややカマド寄りに1箇所確認された。大きさは40cm×55cm、厚さは8cmほどで、小鍛冶等の作業の結果形成されたものと思われる。

〔その他〕埋土に含まれる円礫は、火コンテナ1箱出土した。規模の割には少ない印象である。

遺物 (第73～78図、写真図版46～49)

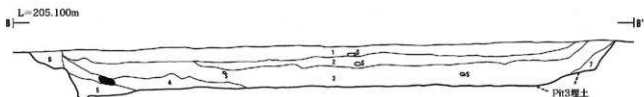
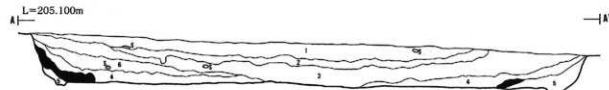
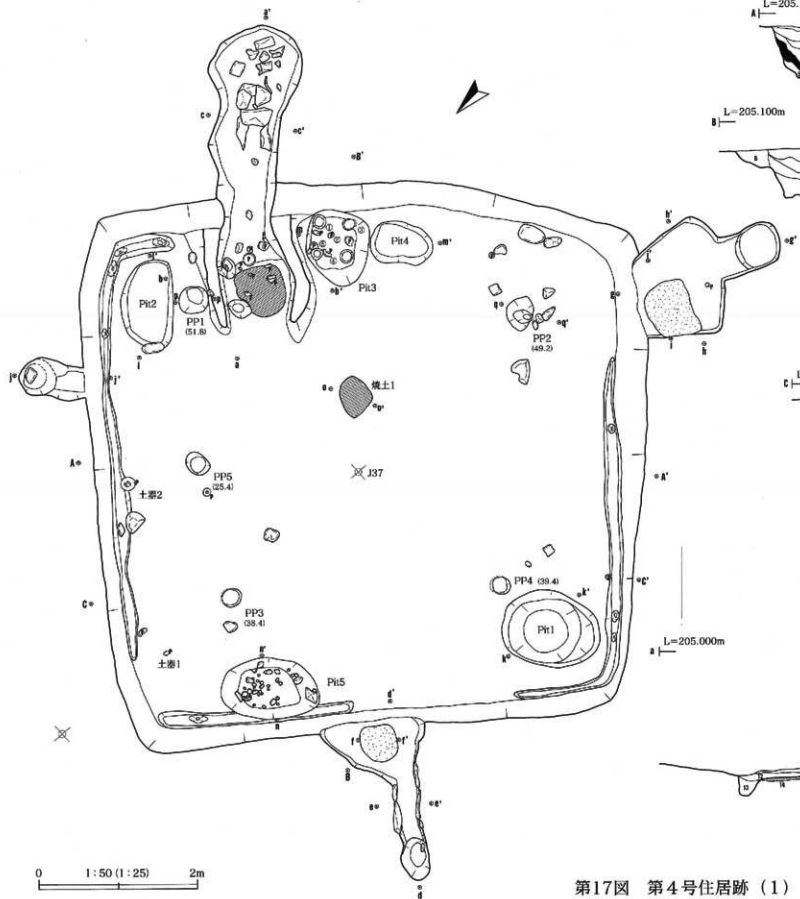
〔出土状況〕遺物は、埋土を中心に貯蔵穴・カマド周辺・貼床から出土している。遺物の総量は火コンテナ2箱である。出土遺物は77点掲載した。

〔土器・土製品〕土師器環・甕・壺、須恵器環・甕・長頸壺・大甕が出土した。土師器環の内黒・非内黒の割合はやや非内黒のほうが多い。墨書土器は5点、刻書土器は2点の出土をみた。墨書はすべて土師器環に、刻書は2点とも土師器のロクロ裏に見られる。耳皿 (283・284) の底部の孔は、いずれも焼成前に開けられたもので、煙道状施設と埋土からそれぞれ出土した。体部にはリング状の張り出しが全周するが、若干角度が異なっている。

〔石器・石製品〕縄文時代の石皿 (297) の一部と、凹みを有する鉄床石 (298) が出土した。

〔鉄製品〕角釘1点と刀子4点が出土している。いずれも欠損品である。

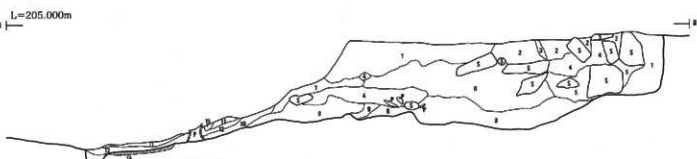
時期 カマド・貯蔵穴等から出土する土器の特徴と灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀初頭の年代が想定される。火山灰の堆積状況から多少遡る可能性もある。煙道状の施設や特殊な土坑、耳皿など祭祀的な施設も兼ねていた可能性が高い。



- 図 16 A'-B' (部)
- 1 10V32/2 凝結色シロト 灰層5~30mmほどの小礫・オレンジバミを含む。
 - 2 10V32/1 凝結色シロト オレンジバミを中層に含む。より層厚がある。小礫は認められない。
 - 3 10V32/3 凝結色シロト オレンジバミ。To-aの塊がブロック状。
 - 4 10V32/2 凝結色シロト To-aブロックを多数に含む。中央部にはTo-aのブロック。(15~20mm) 垂直面が粗大する。
 - 5 10V32/1 凝結色シロト 凝結色の小ブロックを含む。
 - 6 10V33/4 凝結色土質シロト 塊状のブロック・灰化物・小礫を含む。他に観察されない層。
 - 7 10V32/3 凝結色シロト 凝結色の塊状の層で、小礫を含む。
 - 8 10V33/3 凝結色シロト 塊状の土質の土質土。オレンジバミ・To-aのブロックを含む。

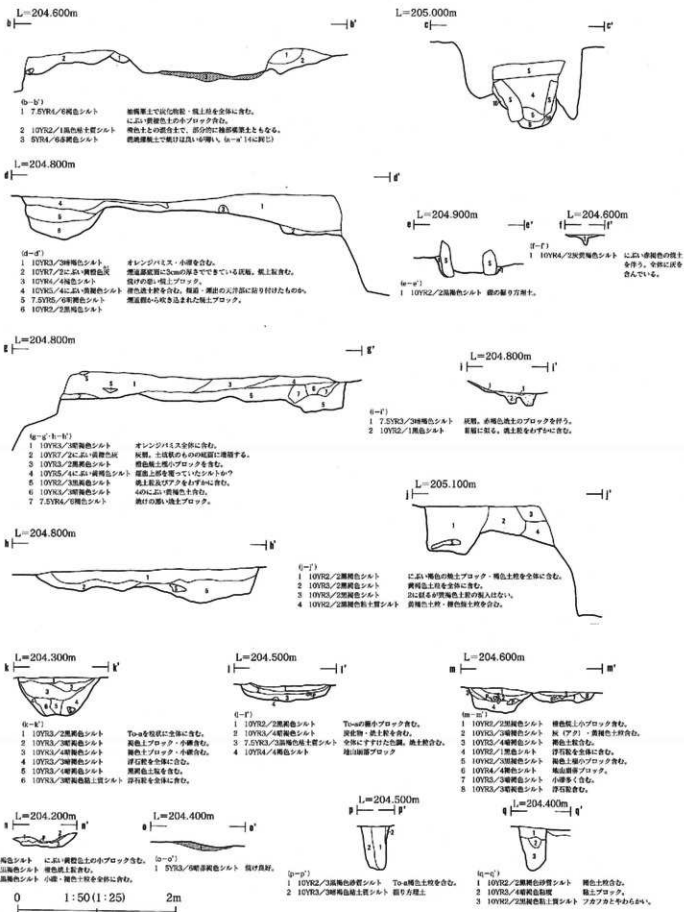


- 図 17 C-C
- 1 10V33/3 凝結色シロト To-aの塊小ブロックを含む。
 - 2 10V32/2 凝結色土質シロト 凝結色土質を含む。
 - 3 10V32/1 凝結色シロト 凝結色のブロック。



- 図 18 D-D (部)
- 1 10V32/2 凝結色土質シロト 灰化物・小礫を含む。
 - 2 10V32/3 凝結色土質シロト 凝結色土質・塊土を含む。
 - 3 10V32/1 凝結色土質シロト 凝結色土質を主体に含む。
 - 4 10V34/4 凝結色土質シロト 塊状の凝結色土質の凝結色シロト。下部にこり (灰化物のため)。
 - 5 10V32/2 凝結色土質シロト 下部に凝結色土質を含む。
 - 6 10V32/3 凝結色土質シロト 凝結色土質・凝結色土質のブロック状をばらばらを含む。
 - 7 10V32/2 凝結色土質シロト 凝結色土質を主体に含む。
 - 8 10V32/3 凝結色土質シロト 凝結色土質を主体に含む。灰化物も含まれる。灰化物を含む。
 - 9 10V34/4 凝結色土質シロト 凝結色土質のブロック。
 - 10 7.5V33/2 凝結色シロト 凝結色土質・凝結色土質を含む。
 - 11 7.5V32/3 凝結色土質シロト カマド実用部の断面土。灰化物を主体に含む。
 - 12 7.5V32/1 凝結色土質シロト 灰化物を含む。凝結色土質の断面土。
 - 13 7.5V32/2 凝結色土質シロト 灰化物を含む。凝結色土質の断面土。
 - 14 7.5V32/3 凝結色土質シロト 凝結色土質を主体に含む。凝結色土質の断面土。
 - 15 7.5V32/1 凝結色土質シロト 凝結色土質を主体に含む。凝結色土質の断面土。
 - 16 7.5V32/2 凝結色土質シロト 凝結色土質を主体に含む。凝結色土質の断面土。
 - 17 7.5V32/3 凝結色土質シロト 凝結色土質を主体に含む。凝結色土質の断面土。

第17図 第4号住居跡 (1)



第18図 第4号住居跡(2)

第5号住居跡 (L35住)

遺構 (第19・20図、写真図版9)

〔位置・重複〕平坦部中央やや西寄りのL35区周辺に位置する。第3号住居状態遺構とは西に約2mの距離を置き、第6号住居跡とは重複関係にある。本遺構の煙道が第6号住居跡に切られる状況である。

〔検出面・状況〕第II層が検出面である。黒褐色土の方形プラン内に、灰白色火山灰の堆積が認められた。第6号住居跡の検出を完了するまでは、何度検出を試みても煙道・煙出しは確認できなかった。重複はないと決まっていたためである。

〔平面形〕長方形で主軸方向にわずかに長い。若干ゆがんでいる。

〔規模〕4.17m×4.98m 〔壁高〕43cm～71cm

〔埋土〕11層に分層される自然堆積層で、全体に黒褐色土・黒色土を基調とする。灰白色火山灰は2層中、円礫は4層中に多く認められる。下位ほど炭化物や焼土粒の混入が多い。

〔壁〕いずれも床面から急傾斜で立ち上がり、中でも南西壁はほぼ直立している。

〔床面〕大きく緩やかな凹凸は認められるが平坦で、第IV層を床面とする。そのままでは第IV層中の礫が邪魔になるためか、床面のほとんどは貼床処理されている。

〔カマド〕煙道・煙出し部は新しくつくられた住居により壊されたが、両部の底面がわずかに残っていた。

〈位置〉南東壁中央からやや西寄り 〈煙道方位〉N-128° -E

〈本体〉本体は良好に残っていた。これも左右の袖には芯材の礫が内側に傾けて据えられ、それをシルト質土で被覆して構築している。その間にある燃焼部焼土は、35cm×42cmほどの不整形をなし厚さは最大で8cmを測る。カマドの奥壁には柱穴状の小土坑 (PP5) があるが、本施設に伴うものか不明である。支脚はない。

〈煙道・煙出し部〉煙道の構造は桁置き式と思われる。上述のとおり、煙道から煙出しにかけての底面が残るのみである。全長は2m前後と思われる。煙道の底面は、PP5付近から煙出しに向かって急傾斜で下がっているが、最深部の深さは163cmを測る。煙出しの直径は不明である。

〔柱穴〕位置的にはPP1が柱穴となりそうだが、他の位置に確認されていないため不明である。PP2・PP3は性格がわからない。PP4はPit1に伴うものとした。

〔土坑〕カマド南西脇にPit1、南隅にPit2の2基が確認された。いずれも不整形で遺物を伴っており、貯蔵穴に類するものと思われる。〔周溝〕検出されなかった。

〔焼土〕床面中央部やや東寄りに焼土が形成されていた。それは、径50cm×70cm、厚さ4cmほどの規模で、小鍛冶等の作業によるものと推定される。しかし、それを裏付ける鍛造薄片などは出土しなかった。

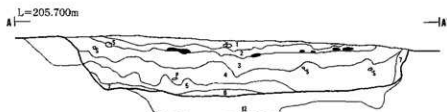
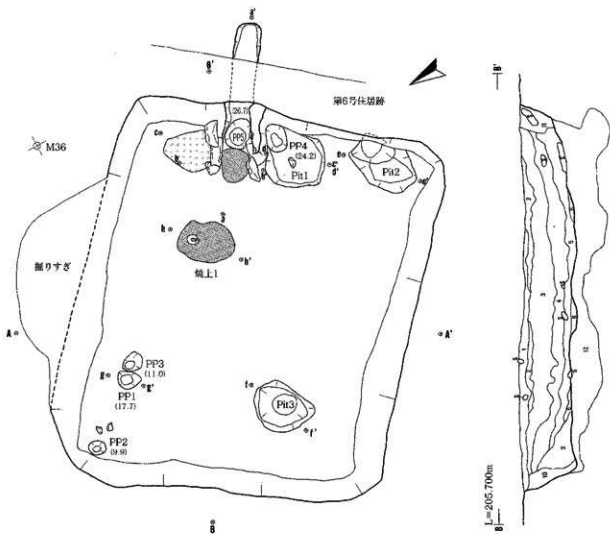
〔その他〕埋土に含まれる円礫は、大コンテナ2箱弱出土している。

遺物 (第79～82図、写真図版49・50)

〔出土状況〕遺物は、埋土を中心に検出面・貼床内からも出土している。遺物の総量は大コンテナ1箱、掲載した遺物は41点である。

〔土器〕土師器杯・甕・壺・把手付土器、須恵器杯・甕・大甕・壺があり、土師器の杯の完形品が比較的多い。土師器杯の内黒・非内黒の割合はほぼ半々である。特徴のある遺物としては、ロクロ使川の土師器甕で内面が黒色処理されるもの (332) や、内外面に黒色処理が施される土師器の壺 (334) などもある。把手付土器 (335) は、柄の先端部分の破片で全体がミガキ込まれている。墨書土器は7点したが、刻書はない。

〔石器・石製品〕縄文時代に所属する石皿 (340) 1点と、鉄床石と思われる安山岩質の礫2点 (341・342)



(A-A'・B-B')

- | | |
|--------------------|--------------------------------|
| 1 10YR2/2 黄褐色シルト | オレンジバリス・To-aをわずかに含む。小礫混入。 |
| 2 10YR2/2 黄褐色シルト | To-aブロック・築上層を含む。 |
| 3 10YR2/2 黄褐色シルト | オレンジバリスを少量に含む。灰化層や・To-aは少量。 |
| 4 10YR2/2 黄褐色シルト | オレンジバリスの混入がやや多量。炭化物を含む。下層多量混入。 |
| 5 10YR2/2 黄褐色シルト | オレンジバリスをほとんど含む。上部層より炭化物が混入。 |
| 6 10YR2/1 黄褐色1層シルト | 層中厚層より厚上。明黄褐色の粘土ブロックを含む。 |
| 7 10YR2/2 黄褐色シルト | 黄褐色土層を含むが混雑せず。 |
| 8 10YR2/2 黄褐色シルト | 築上ブロックを含む。 |
| 9 10YR2/2 黄褐色シルト | 炭化物をほとんど含む。 |
| 10 10YR1/7 1層色シルト | 灰上段・地山崩落ブロックを含む。 |
| 11 10YR1/7 1層色シルト | 自然が崩れ落ちて混入された粘土。築上層をわずかに含む。 |
| 12 一部掘り跡と認められる。 | |

0 1:50 2m

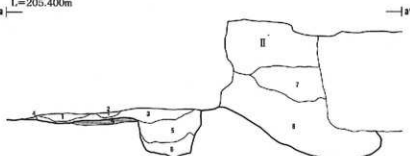
第19図 第5号住居跡(1)

が、いずれも埋土から出土している。

〔鉄製品〕 曲がった角釘が1点出土している。

時期 カマド・貯蔵穴等から出土する土器の特徴と灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀初頭の年代が想定される。

L=205.400m

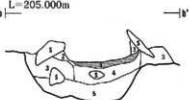


(a-a')

- 1 7.5YR5/2黒褐色粘土質シロト 焼土跡を含む。
- 2 10YR2/2灰褐色粘土質シロト 褐色土跡を含む。
- 3 7.5YR2/3黒褐色粘土質シロト 褐色土跡と暗褐色土粒との混在土。天井から落ちた土か?
- 4 7.5YR2/1黒色シロト 粉り所屬り丹敷土。
- 5 10YR2/1灰色シロト 浮石層・灰土層を含む。

- 6 10YR3/2黒褐色粘土質シロト 暗褐色土跡を含む。
- 7 10YR3/3暗褐色粘土質シロト 黄褐色土ブロックを含む。
- 8 10YR2/1黒褐色粘土質シロト すすけた色泥。灰褐色土跡まばらに含む。
- 9 5YR4/4にぶい・暗褐色シロト 暗褐色土跡と敷け痕跡。

L=205.000m

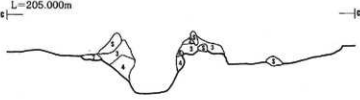


(b-b')

- 1 5YR4/4にぶい・赤褐色シロト 焼遺跡上で敷け痕跡。
- 2 5YR2/4暗褐色シロト わずかに着色した焼遺跡。
- 3 10YR3/3暗褐色粘土質シロト 褐色土との混在土で局部を凝結。焼土跡をまばらに含む。
- 4 10YR3/2灰褐色粘土質シロト カマド主体が作った人通りくぼりから成る溝跡がおり、その裏り方跡となる溝。

- 5 7.5YR3/2黒褐色粘土質シロト 4と似るが灰化層が含まれている。
- 6 10YR3/4暗褐色シロト 焼土跡を主体に含む。
- 7 10YR4/4暗褐色粘土質シロト 溝り所屬り方跡土。

L=205.000m



L=205.000m



(d-d')

- 1 10YR2/2黒褐色粘土質シロト 焼土跡わずかに含む。
- 2 10YR2/4暗褐色粘土質シロト 褐色土跡・黒褐色土粒との混在土。
- 3 10YR2/3灰褐色粘土質シロト 焼土跡・黄褐色土跡を含む。
- 4 10YR2/1黒褐色粘土質シロト 焼土跡わずかに含む。

L=204.900m



(e-e')

- 1 10YR2/1灰色シロト オレンジパキスを含む。
- 2 10YR2/3黒褐色粘土質シロト 褐色土小ブロックを含む。

L=204.900m



(f-f')

- 1 10YR3/2黒褐色粘土質シロト オレンジパキスを含む粘土。
- 2 10YR2/1灰色粘土 焼化層分を含む。
- 3 10YR4/2灰褐色粘土質シロト 焼化層分を含む。1・2より明るい色の泥。
- 4 10YR3/3暗褐色粘土質シロト 浮石所屬り方跡土の堆積ブロック。
- 5 10YR3/3にぶい・暗褐色粘土質シロト 焼化層分多量。

L=204.900m



(g-g')

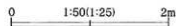
- 1 10YR2/3黒褐色粘土質シロト オレンジパキスを含む。
- 2 10YR2/3暗褐色粘土質シロト 暗褐色土ブロックを含む。
- 3 10YR4/4暗褐色粘土質シロト 暗褐色土ブロック。

L=204.900m



(h-h')

- 1 5YR5/6暗赤褐色粘土質シロト 焼けの良好な焼土。厚さ2～4cm。
- 2 5YR2/2灰褐色粘土質シロト 溝がはったすすけた色泥。灰化層を含む。
- 3 7.5YR4/4暗褐色粘土質シロト 褐色土跡を全体に含む。
- 4 5YR4/4にぶい・暗褐色粘土質シロト 灰化層跡をまばらに含む。



第20図 第5号住居跡(2)

第6号住居跡 (I.37住)

遺構 (第21・22図、写真図版10)

[位置・重複] 平坦部中央M37・N37区周辺に位置する。第5・第8号住居跡とは重複関係にあり、いずれよりも本遺構のほうが新しい。

[検出面・状況] 本遺構は、平面プランに火山灰の混入が認められず、第II層中では確認できない部分もあったため、III層上面まで検出面を下けている。

[平面形] 方形基調であるが、若干歪んでいる。(規模) 7.08m×8.30m (壁高) 28cm～50cm

[埋土] 14層に分層された。自然堆積層で、黒褐色土を主体とする。灰白色火山灰はごく微量のブロックが5・13層に観察されるだけである。また、下位ほど炭化物や焼土粒の混入が目立つ。

[壁] いずれの壁も床面から緩やかに外傾して立ち上がる。

[床面] 緩やかな凹凸が認められ、床面は部分的に貼床処理されている。第IV層を床面とする。

[カマド] 煙道および煙出しの一部は、検出面を下げた際に壊してしまった。煙道が緩やかに立ち上がっていくタイプのカマドだったものと思われる。

<位置> 南東壁中央からやや東隅寄り <煙道方位> N-136° -E

<本体> 残存状況は良好で、本体の幅1.3mと規模も大きい。左右の袖には芯材に礫が隔えられておらず、黄褐色シルト質土の積み上げだけでつくられている。燃焼部焼土は、50cm×87cmの不整形に形成され、厚さは最大で10cmである。焼け具合は良好である。崩落した天井部の上には「カヤ」の痕がりが確認されている。

<煙道・煙出し部> 煙出しの一部のみ残存する。煙道は掘り込み式であったと思われる。その底面はカマド本体裏にかけて緩やかに立ち上がるが、煙道部分は削平され不明である。推定される全長は1.2m前後と短めで、煙出し底面には掘り込みが認められない。

[柱穴] 位置的に上柱穴と思われるものは、PP1・PP2・PP8・PP6である。柱穴間距離はPP1・PP2間は350cm、PP1・PP8間は415cmを測る。他の柱穴状としたものは、各コーナー付近に多く見受けられるが、性格は不明である。

[土坑] 全部で6基確認できた。貯蔵穴と思われるものは、カマド左にある円形のPit4、南東壁にある楕円形のPit5などで、Pit6は貼床除去時に確認されたこれらよりも古い土坑である。Pit2・Pit3については次に記述する。

[ロクロピット] この二つについては、ロクロ回転台を据えたロクロピットと思われる。Pit2は直径42cm、深さ50cmで、心棒を入れたと思われる小孔は直径10cmである。その部分の埋土はフカフカと軟らかい。Pit3は直径約50cm、深さ46cm、小孔は直径10cm前後で、両方も様相が似ている。また、他の報告例(久慈市鼻館跡・北上市俣孫遺跡など)をみても、大きさや住居内の検出地点などに共通点があることから、このように判断した。素材となる粘土は確認できなかった。

[溝溝] 一部途切れながら巡る。幅は10cm～25cm、深さは10cm程度である。北東壁の中央部が途切れているが、出入口口になる可能性もある。

[その他] 円礫は直径10cm前後のものが20ヶほど出土しているだけで、規模の割に量が少ない。

遺物 (第82～90図、写真図版51～54)

[出土状況] 遺物は、埋土を中心にカマド周辺や各Pit類、貼床内から大量に出土した。遺物の総量は大コンテナ2箱弱の出土をみた。掲載した遺物は92点である。

〔土器〕上師器坏・甕類・手づくね土器・耳皿、須恵器坏・壺・甕類が出土している。土師器坏の内黒・非内黒の割合は、ほぼ半々である。その中には、高台付のものもある。土師器甕は、器厚のあるいわゆるナタケズリ調整される非ロクロ成形のものが多い。耳皿は2点（415・416）出土した。いずれも内外面ともヘラミガキ調整されているものである。墨書土器は10点、刻書土器は4点出土した。前者はいずれも土師器の坏に書かれるものであるが、判読できないものが多い。後者には、土師器甕の頸部に「奈」と刻まれるもの（405）があり、また379のような文字と言えない器書きのようなものや「一万」の逆さ文字とも判断できるもの（393）など、文字資料が豊富に見つかっている。

〔石器・石製品〕縄文時代？の磨石（428）、手持ち砥石の欠損品2点（429・430）が出土している。砥石は本遺構からしか出土しなかった。

〔鉄製品〕5点出土した。鎌の一部や刀子、角釘、鍋杖状鉄製品に似た投り入る製品がある。

時期 カマド・貯蔵穴等から出土する土器の特徴や灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀初期の年代が想定される。また、ロクロピットが確認されたことにより、往時に土器工房としても機能した住居と考えられる。

第7号住居跡（I,40住）

遺構（第23～25図、写真図版11）

〔位置・重複〕平坦部南端のほぼ中央、L41グリッド付近にあり、第4号住居とは北西に約16m、第6号住居跡とは北に13mほどの距離を置く。全体の遺構配置からみると、本遺構の周辺には近接する遺構がほとんどない。遺構間の重複も見られないが、遺構西側がサイロにより攪乱を受けている。

〔検出面・状況〕この周辺は第II層が薄く、本遺構は第III層上面で確認された。黒色土のプランに、灰白色火山灰がわずかに認められた。

〔平面形〕長方形をなし、わずかに主軸方向に長い。東側はやや張り出す。

〔規模〕(4.70) m×5.28m 〔壁高〕34cm～57cm

〔埋土〕10層に分層された。自然堆積層で上位と下位は黒色土、その中間は黒褐色土からなり、全体的に炭化物や焼土粒の混入が多い。灰白色火山灰は1層中にくくわずかに見られるだけである。

〔壁〕南壁が急傾斜で立ち上がるが、その他は比較的緩やかな立ち上がりをもつ。

〔床面〕第IV層を床面とし、大きな凹凸がある。貼床は施されていない。

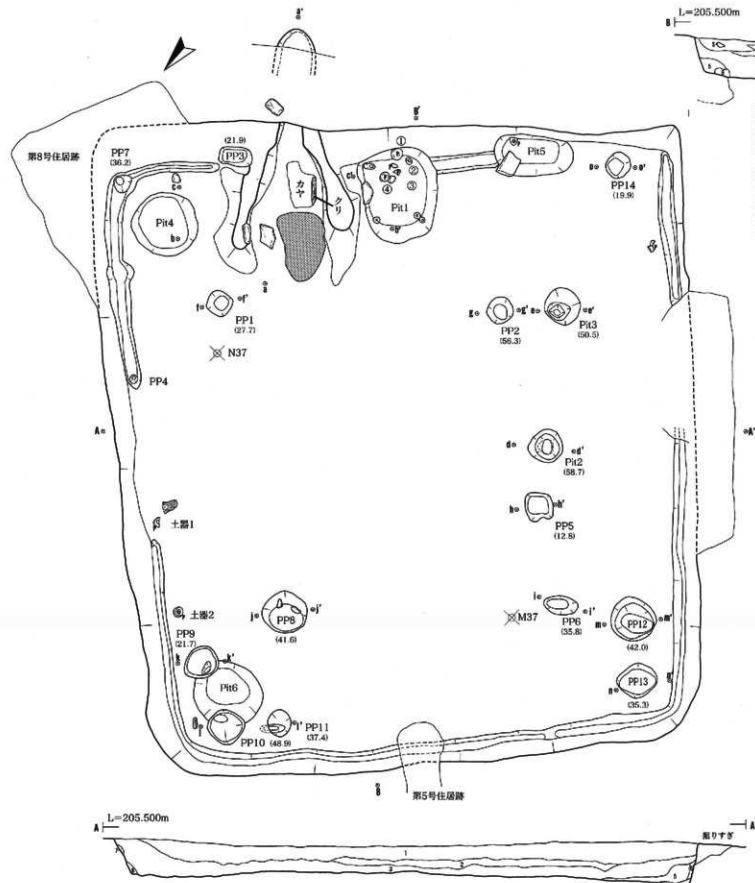
〔カマド〕本体・煙道部とも残存状況は良好であった。煙道に礫が配されないタイプである。

<位置>北東壁中央からやや東寄り <煙道方位>N-22° -E

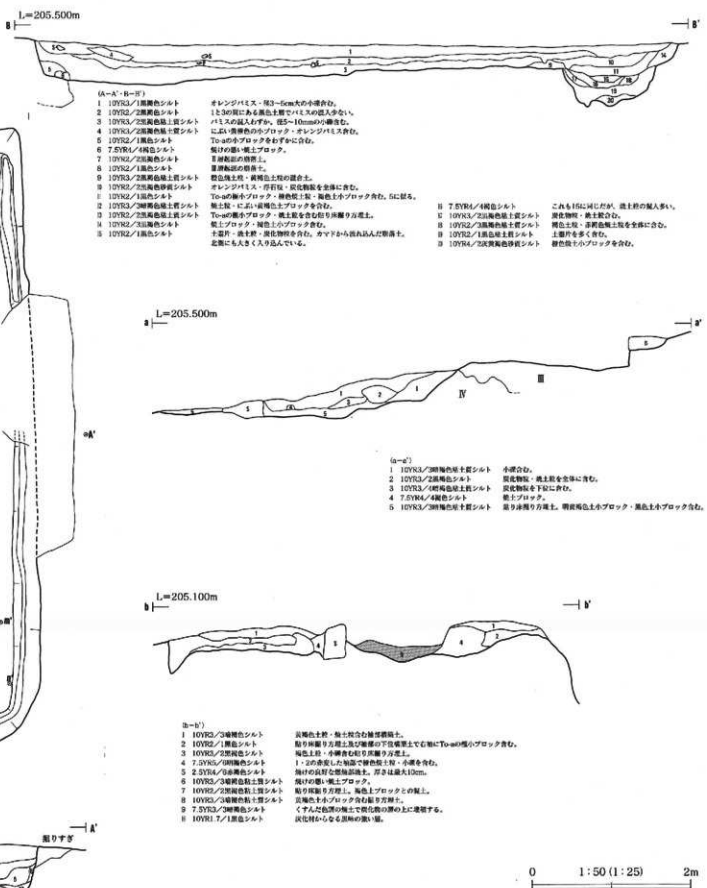
<本体>左右の袖には芯材の礫が数個ずつ据えられ、右袖には被覆したシルト質土が明瞭に残る。天井部には、35cm×40cmあまりの焼土が形成されており、厚さは6cm前後である。カマド奥壁には、支脚の礫が置かれている。

<煙道・煙出し部>掘り込み式の煙道で、全長は約180cmを測る。底面は奥壁付近から緩やかに上がっているが、煙出し部で急激に振り込まれているが、その検出面からの深さは55cmほどである。いずれも埋土にはカマド側から吹き込まれた焼土や炭化物が多く含まれている。

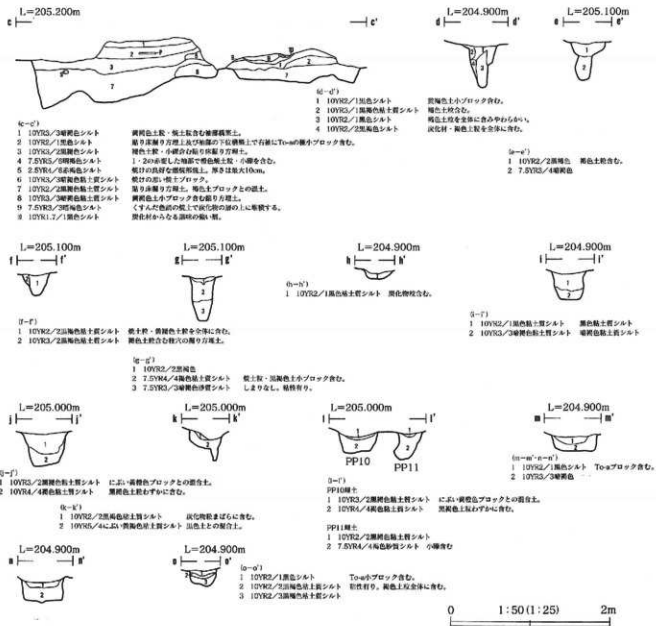
〔柱穴〕主柱穴はPP1～PP4である。これらは長方形に配置されているが、PP3・PP4は南壁際でありここが出入り口となる可能性がある。PP3とPP4の柱穴間距離は167cm、PP2とPP4のそれは340cmである。その



第21図 第6号住居跡 (1)



0 1:50 (1:25) 2m



第22図 第6号住居跡(2)

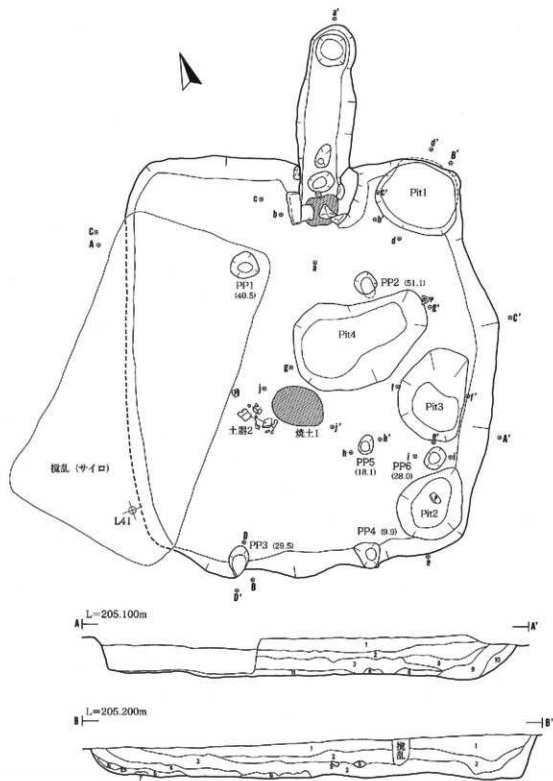
他の柱穴状のものは性格がわからない。

〔土坑〕北東隅にPit1、南隅にPit2、東壁中央付近にPit3、焼土1の東側にPit4が確認された。Pit1～Pit3は貯蔵穴の類、Pit4は焼土との関連が考えられる長楕円形の土坑で、小鍛冶等の作業に使われたものと考えられる。〔周溝〕検出されなかった。

〔焼土(炉)〕床面中央やや南寄りに49cm×67cmの楕円形をなす焼土が形成されていた。厚さは最大で4cm程度である。先述のように、小鍛冶等の作業によりできたものと考えられる。ここからも鍛造刺片は出土していない。

〔その他〕埋土に含まれる円礫の出土量はチェックしかねた。この他、第24図に示したように、焼失に伴う焼土と炭化材が床面直上に確認された。炭化材の樹種は第24図内に示したとおりである。

遺物(第90・91図、写真図版51～54)



(A-A'-B-B')

- 1 10YR2/1黄赤シルト
- 2 10YR2/2黄褐色シルト
- 3 10YR2/1黄赤シルト
- 4 10YR1/7黄赤シルト
- 5 10YR2/3黄褐色シルト
- 6 7.5YR6/4黄赤シルト

Toaの赤ブロッカ・オレンジハリスをばらに含む。
 オレンジハリス・浮石質・焼土粒を全体に含む。
 黄赤土粒もわずかに含まれている。
 オレンジハリス・浮石粒を含み、緑色の焼土ブロッカが混入する。
 オレンジハリス・焼土粒を含む。
 黄赤土ブロッカを含む。
 焼土質に形成された焼土ブロッカ。

- 7 10YR1/7黄赤シルト
- 8 10YR2/3黄褐色シルト
- 9 10YR2/2黄褐色シルト
- 10 10YR2/3黄褐色シルト
- 11 10YR2/3黄褐色シルト

焼土質を含むため層位を結びず。黄褐色土との混合土。
 赤土・黄褐色土層・黄褐色土・焼土層を含む。
 黄褐色土ブロッカ・黄赤土ブロッカ・黄赤土粒を含む。
 オレンジハリス・黄褐色土粒をばらに含む。
 浮石が混入する。

0 1:50 2m

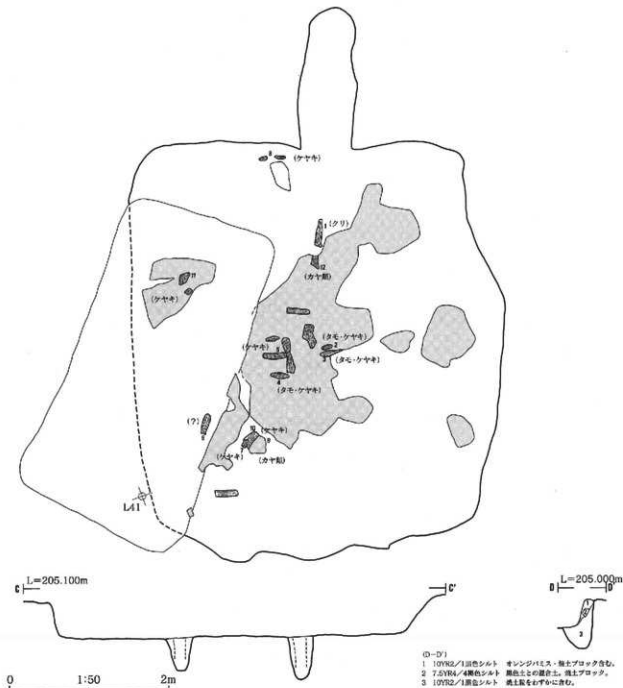
第23図 第7号住居跡(1)

〔出土状況〕遺物は全体的に少なく、遺物の総量は中コンテナ1箱弱である。掲載遺物は11点である。

〔土器〕土師器と須恵器の坏・甕が出土しているが、土師器の坏は全体的に少ない。438は大形の鉢とした。体部下端と底部は回転ヘラケズリ調整されている。土師器坏の内黒・非内黒の割合はほぼ半々で、非内黒の坏の底部径が大きいのが特徴である。墨書土器は1点(440)出土したが、判読できない。

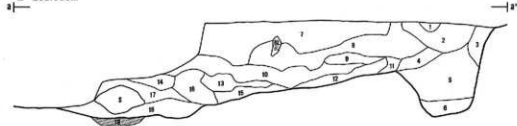
〔土製品〕〔鉄製品〕ともに出土していない。

時期 出土した土器の特徴から、9世紀末以前の年代(前回報告第II期)を想定した。今回本遺跡で確認された住居群の中では、一段階古い時期にあたるものと思われる。



第24図 第7号住居跡(2)

L=205.100m



(a-a')

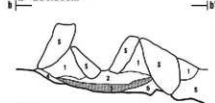
- 1 5YR3/2黄褐色シルト
- 2 10YR2/2黄褐色シルト
- 3 10YR2/1黒色シルト
- 4 7.5YR2/4赤褐色シルト
- 5 7.5YR2/3暗紫褐色シルト
- 6 7.5YR1.7/1黒色シルト
- 7 10YR2/2黄褐色シルト
- 8 10YR3/4暗褐色土質シルト
- 9 7.5YR2/1黒色シルト
- 10 7.5YR2/1黒褐色土質シルト

すすけた土層
炭化植物・炭土を含む。
V層緑線層面上。
暗赤褐色土層を全層に含む。
暗赤褐色土層を全層に含む。
炭化物がらみを含む。
オレンジパイス・土に含む。
緑石層の上に附られた粘土質土。
炭土を含む。
暗赤褐色土層小ブロック含む。

- 11 7.5YR2/1黒褐色土質シルト
- 12 7.5YR2/2暗褐色土質シルト
- 13 10YR4/4褐色土質シルト
- 14 7.5YR3/4暗褐色シルト
- 15 7.5YR3/4暗褐色シルト
- 16 7.5YR2/4暗褐色シルト
- 17 10YR2/1黒色シルト
- 18 5YR4/4にL3・赤褐色土質シルト
- 19 5YR4/8赤褐色シルト

黄褐色土層を含む。
暗赤褐色土層を全層に含む。
褐色土層を含む天井層層面上。
黒色土ブロック含む。
赤土に埋れた粘土。
暗褐色土層をまばらに含む。
赤褐色土層小ブロック含む。
鉄結核土層上の緑土層。
鉄結核土層で埋れた緑土。色-b'3に同じ。

L=204.900m



(b-b')

- 1 7.5YR1.7/1黒色シルト
- 2 7.5YR4/6暗褐色シルト
- 3 5YR4/8赤褐色シルト
- 4 7.5YR2/2黄褐色土質シルト
- 5 7.5YR2/1黒色シルト

暗褐色の塊土小ブロックを含む。
天井層から埋れた粘土で赤い色調。
鉄結核層を多く含む。
層L3層の埋り方層上。
埋り深層り方層上。暗褐色土層を含む。

L=204.900m

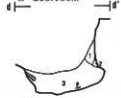


(c-c')

- 1 5YR4/8赤褐色シルト
- 2 7.5YR2/1黒色シルト
- 3 7.5YR2/3暗紫褐色土質シルト
- 4 5YR3/4暗赤褐色土質シルト
- 5 7.5YR2/1黒色土質シルト

結構が破損した部分。(損失部あり)
炭化材を含み高埋り。
壁に埋れたシルト層上で粘土小ブロックを含む。
埋り深層り方層上で暗褐色土層を含む。

L=205.100m



(d-d')

- 1 10YR2/1黒色シルト
- 2 10YR2/3暗褐色シルト
- 3 2.5YR2/1黒色

オレンジパイス・小埋り含む。
埋り深層り方層上。
炭化材を多く含む高埋り。

L=205.000m



(a-a')

- 1 10YR3/4暗褐色土質シルト
- 2 10YR2/2黄褐色土質シルト

暗褐色土層・黄褐色土層を含む。
暗赤褐色土層を全層に含む。

L=204.700m

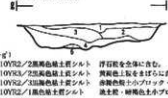


(e-e')

- 1 10YR2/2黄褐色シルト
- 2 10YR2/1黒色シルト

暗褐色土層・黄褐色土層を含む。
暗褐色土層を全層に含む。

L=204.700m

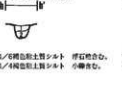


(f-f')

- 1 10YR2/2黄褐色土質シルト
- 2 10YR3/2暗褐色土質シルト
- 3 10YR2/3暗褐色土質シルト
- 4 10YR2/1黒褐色土質シルト
- 5 10YR2/4にL3・黄褐色土質シルト

浮石層を全層に含む。
黄褐色土層をまばらに含む。
赤褐色土層小ブロック・暗褐色土層を含む。
炭土層・暗褐色土層小ブロックを含む。
粘土ブロック。

L=204.700m



(g-g')

- 1 10YR4/6暗褐色土質シルト
- 2 10YR4/4暗褐色土質シルト

赤石を含む。
小埋り含む。

L=204.700m



(h-h')

- 1 10YR2/1黒色シルト

黄褐色土層を含む。

L=204.600m



(i-i')

- 1 5YR4/8赤褐色シルト

黒い炭化材。

0 1:50 (1:25) 2m

第25図 第7号住居跡 (3)

第8号住居跡 (N36住)

遺構 (第26図、写真図版56)

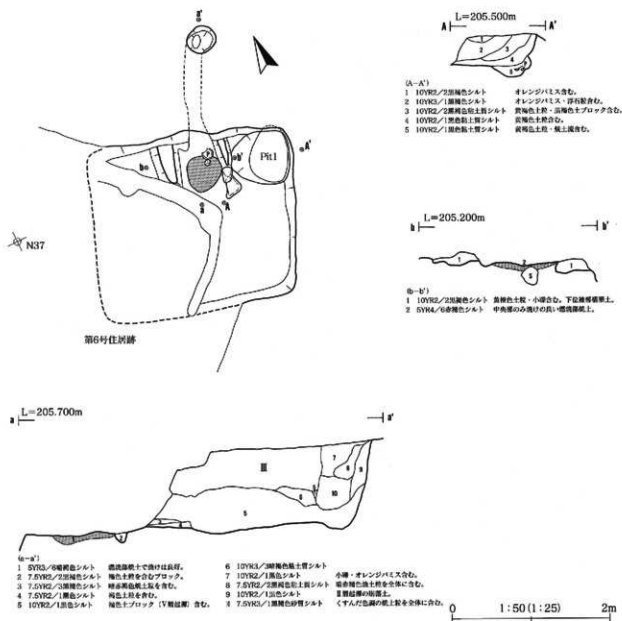
〔位置・重複〕平坦部中央にあり、第6号住居跡の東隅部分と重複している。本遺構のほうが古い。N37グリッド付近に位置し、その東約5mには第10号住居跡がある。

〔検出面・状況〕当初は重複に気づかず、第6号住居跡の精査時に第II層下面で検出した。平面プランは押さえずに精査した。

〔平面形〕主軸方向が短い長方形をなしていたものと思われる。

〔規模〕2.16m×? (壁高) 37cm

〔埋土〕4層に分層される自然堆積層である。まず壁際に黑色土、その後は黒褐色土が堆積する。灰白色火山灰は認められない。(壁) 急傾斜で立ち上がる。(床面) 第IV層を床面とする。貼床はない。



第26図 第8号住居跡

〔カマド〕第6号住居跡に左袖の一部が壊されているが、それ以外は本体・煙道部ともよく残っている。

〈位置〉北東部中央からやや東寄りか。〈煙道方位〉N-12° -E

〈本体〉左右の袖はシルト質土を積み上げて構築されるが、右袖手前側には礎が据えられている。燃焼部焼土は42cm×45cmの範囲に形成され、厚さは4cm前後を測る。焼土の奥壁側には支脚の礎が置かれ、そばから土師器の坏が1点出土した。

〈煙道・煙出し部〉煙道部はほぼ水平に煙出しに向かって傾り抜かれ、全長はおよそ135cmを測る。煙出し部の底面は、煙道のそれよりも若干低められている。深さは45cmである。

〔柱穴〕確認されない。〔土坑〕カマド右側の北東隅にPit1を検出した。貯蔵穴と思われる。

〔周溝〕検出されなかった。

〔その他〕埋土には円礫がほとんど含まれていなかった。

遺物 (第92図、写真図版56)

〔出土状況〕全体的に出土遺物は少ないが、完形に近い土師器の坏が5点出土し、それらを掲載した。この他は、土師器坏の細片がわずかに出土しているだけである。

〔土器〕土師器裏は出土しなかった。黒書土器は1点(458)出土している。

〔土製品〕〔鉄製品〕ともに出土していない。

時期 出土した土器の特徴および第6号住居跡との重複関係から、9世紀末以前(前回報告第II期)と考えられる。

第9号住居跡 (N39住)

遺構 (第27図、写真図版13)

〔位置・重複〕平坦部中央からわずかに南東寄りのO39グリッド付近に位置する。第6号住居状遺構に隣接、第11号住居跡とは南東に約6mの距離がある。第17号土坑と南東壁で重複するが、本遺構のほうが新しい。

〔検出面・状況〕第II層で検出した。黒褐色土の検出プランの輪郭に、わずかに灰白色火山灰を含んでいた。

〔平面形〕隅丸方形をなす。〔規模〕3.03m×3.20m(壁高)41cm~50cm

〔埋土〕13層に分層された。全体は黒褐色土と黒色土からなる自然堆積層で、上位に炭化物を含む焼の悪い焼土層が堆積する。灰白色火山灰は埋没が始まる早い段階で堆積した様相である。

〔壁〕北西壁以外は急傾斜で立ち上がっている。〔床面〕第IV層を床面とし、貼床は施されない。

〔カマド〕傾り抜き式の煙道を有する。残りは良い。

〈位置〉南東部中央からやや東隅寄りに位置する。〈煙道方位〉N-115° -E

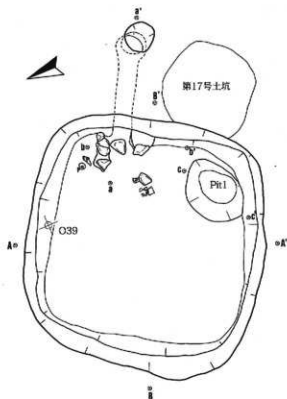
〈本体〉袖部は芯材の礫とシルト質土を貼り付けて構築したと思われるが、右袖は精査時にシルト質土を剥がしてしまっている。本体内には袖から崩落した礫を含むが、その下に燃焼部焼土は形成されていない。

〈煙道・煙出し部〉煙道部は、比較的急に煙出しに向かって傾り抜かれて下がり、そのまま煙出しに続く。埋土には火山灰のブロックを部分的に含んでいる。煙道の全長はおよそ120cm、煙出し部の底面までの深さは72cmである。〔柱穴〕確認されない。

〔土坑〕カマド右側の南隅に深さ33cmのPit1を確認した。貯蔵穴に類する土坑であろう。

〔周溝〕検出されなかった。

〔その他〕埋土からは円礫20ヶあまりが出土している。



L=205.400m



- (b-b')
- 1 10YR4/4褐色シルト 基岩の間に埋り付けたシルト。
 - 2 10YR2/3暗褐色粘土質シルト 埋りの層下土。
 - 3 7.5YR4/4褐色シルト To-aの埋小ブロック含む。
 - 4 7.5YR3/2暗褐色粘土質シルト 埋り層埋り方堆土。

L=205.200m



- (c-c')
- 1 7.5YR4/3褐色シルト 上記の非褐色粘土層・黄褐色粘土を全体に含む。
 - 2 10YR3/3暗褐色粘土質シルト 小溝を含む。
 - 3 7.5YR4/4褐色粘土質シルト 褐色土の小ブロック含む。
 - 4 7.5YR4/4褐色粘土質シルト 褐色土の小ブロック・浮石をわずかに含む。やからや。
 - 5 10YR3/3暗褐色粘土質シルト 4を一部含む。

L=205.700m

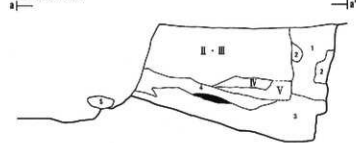


- (A-A'-B-B')
- 1 10YR2/2暗褐色シルト 褐色粘土・硬土層・To-aを埋め含む。
 - 2 7.5YR4/4褐色シルト 炭化物を含む埋りの底・硬土。
 - 3 10YR2/1黒色シルト To-aの埋小〜620mm次のブロックを含む。
 - 4 10YR2/2暗褐色シルト 3のTo-aブロックと粘土質を全体に含む。
 - 5 10YR1/1黒色シルト To-aの埋小ブロック含む。
 - 6 10YR3/2灰白粘土To-a 埋り方堆土を含む。
 - 7 7.5YR1.7/1黒色粘土質シルト オレンジパリスを全体に含む。
 - 8 7.5YR2/2暗褐色シルト 褐色粘土層を全体に含む。
 - 9 10YR2/1灰色シルト To-aの埋りを含む。
 - 10 10YR2/2暗褐色シルト II・III層の埋り土。
 - 11 10YR4/4褐色粘土質シルト 灰白層の埋り土??
 - 12 10YR2/1灰色シルト カマドの壁土。上記の褐色色の粘土ブロックを含む。
 - 13 10YR2/3暗褐色粘土質シルト 暗褐色色の埋小ブロック・赤褐色粘土ブロックを含む。

L=205.700m



L=205.700m



- (a-a')
- 1 10YR3/3暗褐色シルト 暗褐色土ブロックを含む。
 - 2 10YR2/2暗褐色シルト II層埋り土。
 - 3 7.5YR2/1褐色シルト ずすいた色土。
 - 4 10YR2/1黒色シルト To-aの大小ブロックを含む。

0 1:50 (1:25) 2m

第27図 第9号住居跡

遺物 (第92図、写真図版56)

〔出土状況〕 出土遺物は少なく、4点掲載したのみである。全体量はビニール袋1袋程度である。

〔土器〕 土師器環・甕、須恵器の坏が出土している。墨書・刻書は見あたらない。

〔土製品〕 (鉄製品) ともに出土していない。

時期 出土した土器の特徴、および灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀はじめにかけて存在した住居跡と思われる。

第10号住居跡 (O36住)

遺構 (第28・29図、写真図版14)

〔位置・重複〕 平坦部中央から北東寄りのP37グリッド付近にあり、第12号住居跡とは南東に約5mの距離を置く。第8号住居跡とも南西方向にほぼ同じくらの距離がある。遺構間の重複は認められない。

〔検出面・状況〕 検出面は第II層である。状況は、黒褐色土の方形プランに灰白色火山灰の粒子が混入しているため、輪郭が白っぽく見えた。

〔平面形〕 方形でやや隅丸をなす。〔規模〕 4.70m×5.04m 〔壁高〕 32cm～58cm

〔埋土〕 5層に分層された。黒褐色土と黒色土からなる自然堆積層である。灰白色火山灰は1層と2層の間にブロック状に堆積している。

〔壁〕 いずれの壁も急傾斜で立ち上がる。〔床面〕 第IV層を床面とし、貼床は施されていない。

〔カマド〕 掘り込み式の煙道で、本体は袖が不明瞭である。残存状況が悪く、人為的に壊されている可能性がある。

〈位置〉 南東壁の東隅寄りにある。〈煙道方位〉 N-135° - E

〈本体〉 破壊されているためか、残りが悪い。左袖部に芯材の礫と被覆されたシルト質土がわずかに残るだけであり、右袖部分には芯材の礫を抜き取りような痕跡があった。燃焼部焼土は23cm×30cmの範囲に拡がり、焼けは良好だが厚さは3cm程度と薄い。

〈煙道・煙出し部〉 両側に礫を伴わない掘り込み式の煙道で、底面は波打ちながら煙出しにかけて緩やかに上がる。煙道の全長は約1mである。また、煙出しの深さは14cmと浅く、雨水などの流入を防ぐ掘り込みは認められない。

〔柱穴〕 位置的に主柱穴はPP1～PP4と思われ、方形に配されている。柱穴間距離は、PP1～PP2が173cm、PP1～PP3が195cmで、主軸方向に幾分長い。PP5～PP7は性格が不明のものである。

〔土坑〕 検出されない。〔周溝〕 途切れながら巡るが、部分的に存在したのか。

〔その他〕 埋土中の円礫は中コンテナ1箱分出土した。層位は第2層からのものが多い。

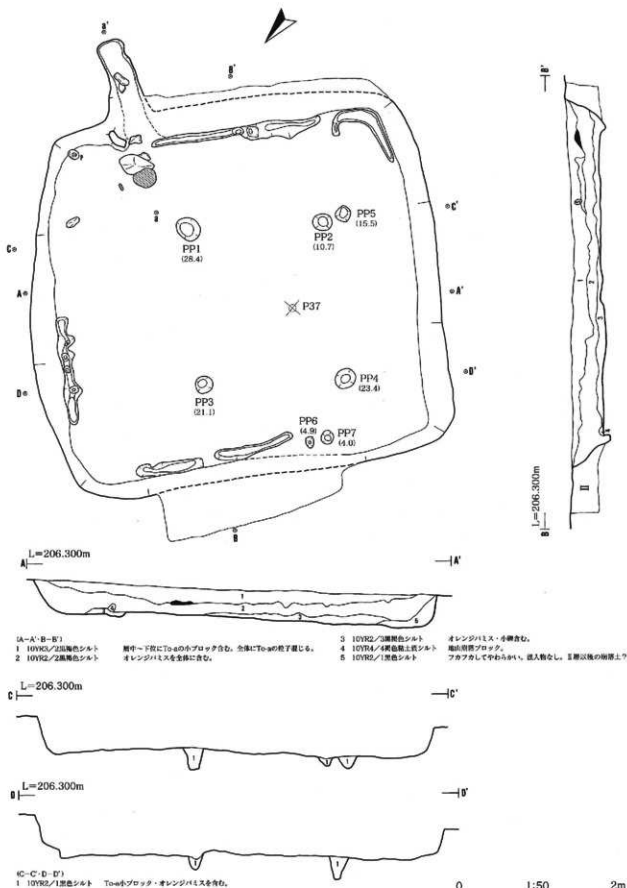
遺物 (第93図、写真図版56)

〔出土状況〕 出土遺物は少なく、全体量はビニール袋1袋程度である。遺物は7点掲載した。

〔土器〕 土師器環・甕、須恵器壺・大甕が出土した。458は「出」あるいは「山山」と重ねられた文字が体部に六文字書かれた墨書土器である。文字の大きさは様々であるが、一文字だけ他の五文字と違って大きく遅筆も異なっている。これ以外の五文字は記号化しており、これらが意味するところを考えなければならない。

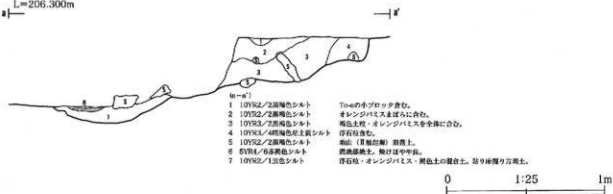
〔土製品〕 出土していない。〔鉄製品〕 刀子の欠損品が出土している。

時期 出土した土器の特徴や灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀はじめにかけて存在した住居跡と推定される。



第28図 第10号住居跡(1)

L=206.300m



第29図 第10号住居跡(2)

第11号住居跡 (O40住)

遺構 (第30・31図、写真図版15)

〔位置・重複〕平坦部中央から南東側のP40グリッド付近に位置する。第10号住居跡、第12～16号住居跡とはそれぞれ10m以上の距離を置く。遺構間の重複は認められない。

〔検出面・状況〕検出面は第II層で、黒色土の方形プランに灰白色火山灰のブロックが含まれていた。

〔平面形〕主軸方向に長い長方形だがわずかに歪んでいる。〔規模〕3.37m×3.90m (壁高)30cm～40cm

〔埋土〕黒色土の半層で、灰白色火山灰のブロックを最上部に含む自然堆積層である。

〔壁〕いずれの壁も直立気味に立ち上がる。

〔床面〕掘り込みが浅く第III層を床面とする。小さな凹凸が認められるが、貼床は施されていない。

〔カマド〕掘り込み式の煙道を持つ。残りが悪く、これも人為的に壊された様相を呈する。

<位置>南東壁の南隅寄りにある。 <煙道方位>N-135° -E

<本体>袖部に芯材の礫はなく、シルト質土の高まりがわずかに残るだけである。焼土部焼土は直径12cm、厚さ数cm程度しか発達しない。

<煙道・煙出し部>掘り込み式の煙道で一部に礫が配される。埋土には崩れた礫も認められる。底面は緩やかに上がり、その後水平に延びて煙出しへ続く。煙出し部は大きく掘り込まれるが、その深さは46cmである。

〔柱穴〕主柱穴は四隅にあるPP1～PP4と思われる。方形に配されるが、このような柱穴配置の住居は他には確認されなかった。上屋の構造に違いがあったものか。柱穴間距離は、PP1～PP2が260cm、PP1～PP3が320cmである。PP5～PP8は性格が不明のもの、PP9は貯蔵穴にはならないと思われたので柱穴状の小土坑とした。

〔土坑〕〔周溝〕ともに検出されない。〔その他〕円礫は十数個出土したのみである。

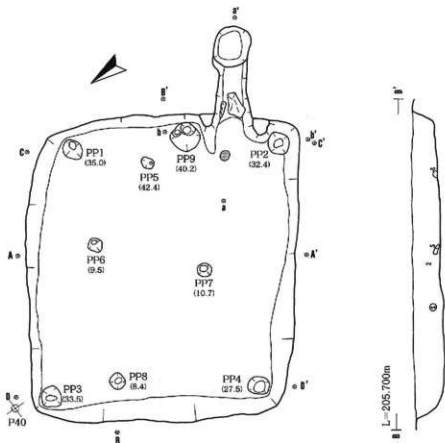
遺物 (第94図、写真図版57)

〔出土状況〕出土遺物の総量は小コンテナ1箱弱で、主に住居埋土、煙道内から出土した。8点掲載した。

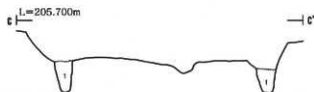
〔土器〕土師器環・甕・小形の鉢、須恵器環が出土した。墨書・刻書土器はみられない。

〔土製品〕〔鉄製品〕いずれも出土していない。

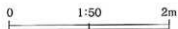
時期 出土した土器の特徴や灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末以前に存在した住居跡と推定される。



- (A-A'-B-B')
- 1 10YR7/1灰白色Toa 2の敷入段差。
 - 2 10YR2/1黒色シルト オレンジパルスまばらに含む。礫混入少ない。

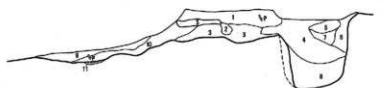


- (C-C'-D-D')
- 1 10YR2/1灰色粘土質シルト 明灰褐色土状・褐色土粒含む。
 - 2 10YR3/4暗褐色粘土質シルト 2層板の面層ブロック含む。



第30図 第11号住居跡 (1)

L=205.600m

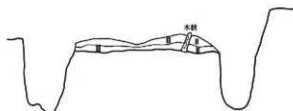


(a-e-1-a-b)

- 1 10YR2/1黒色シルト
- 2 10YR3/3暗褐色粘土質シルト
- 3 10YR2/1黒色シルト
- 4 7.5YR2/1黒色シルト
- 5 10YR5/4に多い黄褐色粘土質シルト
- 6 10YR2/1山色シルト
- 7 7.5YR2/2暗褐色シルト
- 8 10YR2/1黒褐色シルト
- 9 10YR2/2暗褐色シルト
- 10 7.5YR2/3暗褐色シルト
- 11 5YR5/3明褐色シルト

To aの範囲・黄褐色土質を含む。
 天井部腐葉土。
 オレンジパリス・黄褐色土層を全体に含む。
 黄色粘土層・灰黄褐色土の小ブロックを含む。
 暗褐色土・粘土質を含む。
 赤褐色腐葉土。
 暗褐色土の小ブロックを含む。
 オレンジパリスがわずかに含む。
 粘土質をまばらに含む。
 黄褐色土ブロックを含む天井部から落ちた塊土。
 掛けの暗い粘土。厚さもほとんどない。

L=205.600m



第31図 第11号住居跡(2)

第12号住居跡 (Q37住)

遺構 (第32・33図、写真図版16)

〔位置・重複〕 平坦部東寄りのR38グリッド付近、第10号住居跡と第13号住居跡の間に位置する。前者とは北西に4m、後者とは東に2.5mの距離を置く。

〔検出面・状況〕 第II層下面から第III層で検出した。黒褐色土の方形プランに灰白色火山灰の弧がりで見つかった。黄褐色に近い色調の火山灰も観察されたが、給源を別にするものかは調査時には判断できなかった。

〔平面形〕 隅丸方形をなす。〔規模〕 4.21m×4.23m 〔壁高〕 47cm～66cm

〔埋土〕 10層に分層される自然堆積層である。数枚の黒褐色土と黒色土、壁際に堆積する地山崩落土からなる。1・2層中には灰白色火山灰をブロックで含み、3層には例の円礫を多く含んでいる。

〔壁〕 いずれの壁も急傾斜で立ち上がる。〔床面〕 第IV層を床面とする。ほぼ平坦である。

〔カマド〕 比較的良好に残っている。割り抜き式の煙道を有する。

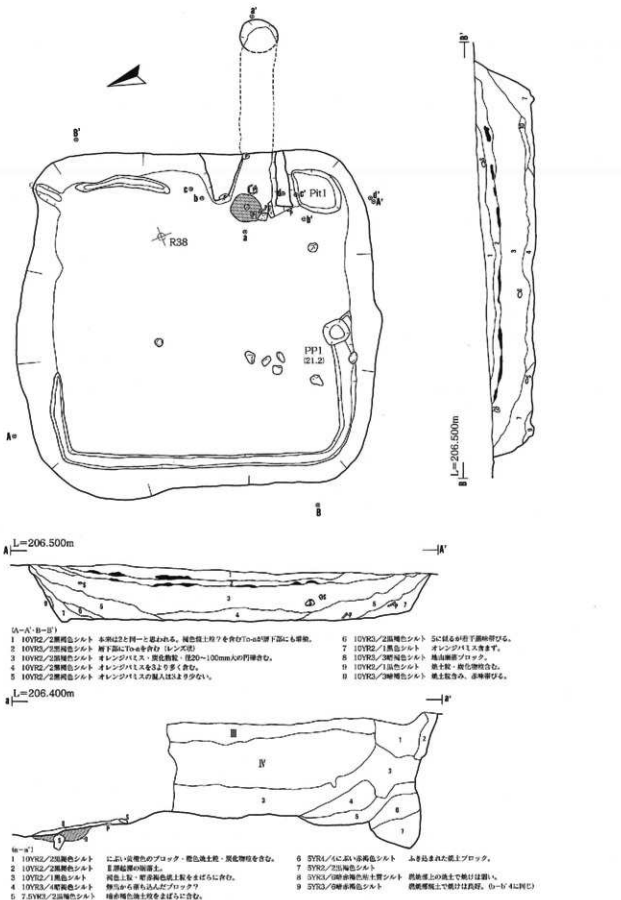
<位置> 南東壁の南隅寄りにある。 <煙道方向> N-113° -E

<本体> 焚き口側の右袖に芯材の礫が1個据えられるが、左袖は被覆したシルト質土が残るのみである。燃焼部焼土は直径36cmにわたって形成され、厚さは最大で7cmに及ぶ。この焼土から奥壁側には、支脚の土師器が置かれている。

<煙道・煙出し部> 割り抜き式の煙道で、全長は170cmを測る。底面はほぼ水平に延び、煙出し部で深く掘り込まれるが、深さは86cmである。埋土には焼土ブロックや炭化物粒が多く含まれている。

〔柱穴〕 柱穴状のもの (PP1) が1個検出されたが、柱穴にはならない。

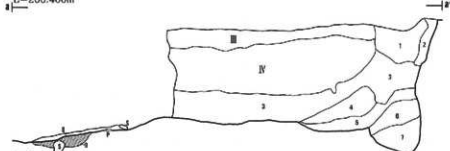
〔土坑〕 南隅に貯蔵穴と思われる土坑が1基礎確認された。深さは13cmである。また、北隅には住居の外側に細



【A-A'-B-B'】

- | | | | |
|-----------------|--|-----------------|----------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 本層は2と同一と見られる。褐色土層?を含むTo-a5(地下2)にも見られる。 | 6 10YR3/2黒褐色シルト | 5に似るが若干濃縮部がある。 |
| 2 10YR2/2黒褐色シルト | 地下部にTo-aを含む(レンズ状) | 7 10YR2/1黒色シルト | オレンジパリス層です。 |
| 3 10YR2/2黒褐色シルト | オレンジパリス・炭化物層。径20~100mm程度の円形を含む。 | 8 10YR2/3暗褐色シルト | 地山層のブロック。 |
| 4 10YR2/2黒褐色シルト | オレンジパリスを若干多く含む。 | 9 10YR2/1藍色シルト | 粘土質・炭化物を含む。 |
| 5 10YR2/2黒褐色シルト | オレンジパリスの層入部より少ない。 | 8 10YR2/3暗褐色シルト | 粘土を含む。炭化物を含む。 |

L=206.400m



【B-B'】

- | | | | |
|------------------|-------------------------|-------------------|--------------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 濃い炭褐色のブロック・褐色土層・炭化物を含む。 | 6 5YR4/4濃い赤褐色シルト | 本層は未だ未定ブロック。 |
| 2 10YR2/2黒褐色シルト | 瓦葺屋根の腐層土。 | 7 5YR2/2出褐色シルト | |
| 3 10YR2/1黒色シルト | 褐色土層・炭化物層土層をまばらに含む。 | 8 5YR3/3暗赤褐色土層シルト | 炭化物層上の塊土で焼けはじ(1A)。 |
| 4 10YR3/4暗褐色シルト | 壁土から壁も込んだブロック? | 9 5YR3/3暗赤褐色シルト | 炭化物層上で焼けはじ(1B)。0-b-4に同じ。 |
| 5 7.5YR3/2出褐色シルト | 暗赤褐色土層をまばらに含む。 | | |

第32図 第12号住居跡(1)

L=205.800m



北-南

- 1 10YR3/3暗褐色粘土質シルト 黒褐色土のブロック・遺土層を全体に含む厚積層状土。
 2 10YR5/4に赤い灰褐色粘土 粘土層の一部か？
 3 10YR4/4褐色シルト 粘土層より互層土。
 4 5YR3/6暗赤褐色シルト 遺積層状土で灰けは良好。
 5 5YR6/6赤褐色シルト 遺積層上にある質土層。

L=205.900m



北-南

- 1 10YR3/3暗褐色粘土質シルト 黒褐色土ブロック・小礫含む。稀薄積層土。
 2 10YR3/4暗褐色粘土質シルト 黒褐色土層を含む。稀薄積層土。
 3 10YR4/4褐色シルト 質化部分・小礫含む。
 4 10YR4/6赤褐色シルト 遺積層状土か？
 5 10YR2/2黒褐色シルト 粘土層より互層土。

L=206.300m



北-南

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 黄褐色土層を全体に含む。
 2 10YR3/4暗褐色粘土質シルト 褐色土層をまばらに含む。
 3 10YR5/4に赤い灰褐色粘土層シルト 暗赤褐色土層を含む。
 4 10YR4/4褐色粘土質シルト V層部近の位置でブロック。

0 1:50 (1:25) 2m

第33図 第12号住居跡(2)

長く掘り込まれる箇所があるが、用途は不明である。右側の周溝と関係があるものかもしれない。

〔周溝〕北西壁から他の2辺の一部、カマド左の壁際を巡る。PP1も周溝に関連するものか？

〔その他〕埋土に含まれる円礫は中コンテナ1箱分である。

遺物 (第94・95図、写真図版57・58)

〔出土状況〕遺物の総量は小コンテナ1箱弱である。住居層上、煙道などから出土した。15点掲載した。

〔土器〕土師器片・甕類、須恵器片・壺・甕類が出土した。477・478は底部外面にムシロ底を残している土師器の甕である。墨書土器・刻書土器は出土していない。

〔土製品〕出土していない。

〔鉄製品〕先端部等を欠く雁又鎌が1点出土している。

時期 出土した土器の特徴や灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末以前に存在した住居跡と推定される。

第13号住居跡 (R38住)

遺構 (第34図、写真図版17)

〔位置・重複〕平田部東寄りに位置し、S38区のグリッド杭が本遺構内の北側にある。第12号住居跡とは西に3m、第16号住居跡とは1mばかりの距離があるが、間隔的に第16号住居跡とは同時存在し得ないと思われる。

〔検出面・状況〕第II層下面から第III層上面で検出した。方形のプランに灰白色火山灰が混入していたため、全体に白っぽく見えた。

〔平面形〕歪な方形で、主軸方向に若干長い。〔規模〕3.40m×3.85m 〔壁高〕39cm~60cm

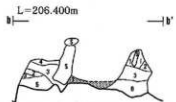
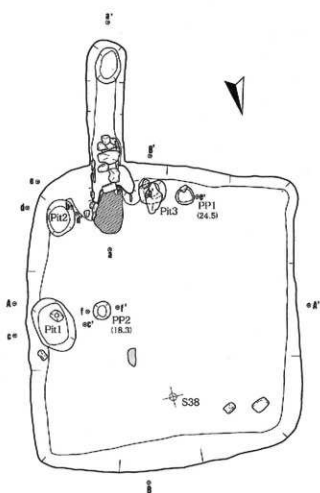
〔理土〕9層に分層される自然堆積層で、上位は黒褐色土、中位から下位にかけては黒色土からなる。1層中には灰白色火山灰が含まれ、層全体が白味がかっている。

〔壁〕東壁・西壁は急傾斜で、南壁・北壁は比較的緩やかに立ち上がる。

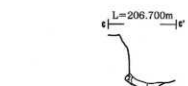
〔床面〕第IV層を床面とし、全体にはほぼ平らな床面である。また、一部に貼床が施されている。

〔カマド〕当初は、煙道の上部に見られる礎群付近が煙出しと思っていたが、精査の結果、煙道はさらに南側に延びた。

<位置>南壁の東隅寄りにある。 <煙道方位>N-160°-W



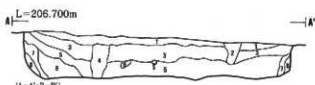
- (a-b')
- 1 10YR2/2黒褐色シルト 褐色土層をまばらに含む。
 - 2 10YR2/1黒色シルト 暗褐色土層をまばらに含む。
 - 3 7.5YR3/3暗褐色粘土質シルト 暗赤褐色土層を含む。
 - 4 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト 暗褐色土層と小ブロックとの混合土。
 - 5 10YR1/4暗褐色土 小礫を含む。取り除かれた方?
 - 6 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 取り除かれた方? 暗褐色土層と混合される。取り除かれた方? 暗褐色土層と、掘り残。
 - 7 5YR4/4暗褐色粘土質シルト



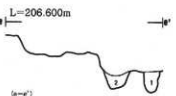
- (c-d')
- 1 7.5YR3/3暗褐色砂質シルト 暗赤褐色土層と、褐色土層を含む。
 - 2 7.5YR3/2暗褐色砂質シルト 暗赤褐色土層と、暗褐色土層を含む。



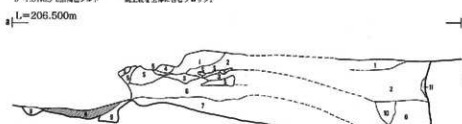
- (d-e')
- 1 7.5YR3/3暗褐色砂質シルト 暗褐色土層と、暗褐色土層を含む。



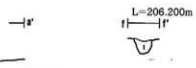
- (A-A'-B-B')
- 1 10YR2/2黒褐色シルト
 - 2 10YR2/1黒色シルト
 - 3 10YR2/1黒色シルト
 - 4 10YR2/2黒褐色シルト
 - 5 10YR2/2黒褐色シルト
 - 6 10YR1/7暗褐色シルト
 - 7 10YR2/1黒色シルト
 - 8 10YR2/1黒色シルト
 - 9 7.5YR2/2暗褐色シルト
- Toeブロックを含む。白っぽい。
Toeの塊小ブロックを含む。
オレンジパリスを含む。範囲10cm前後のパリスを含む。
Toeの塊小ブロックをわずかに含む。
よりオレンジパリスの混入が少ない。
オレンジパリスを含む。わずかに含む。
オレンジパリスを含む。厚層状の暗褐色土。
厚層状の暗褐色土。
黄土層を含む。わずかに含む。



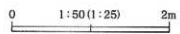
- (e-f')
- 1 10YR2/1黒色粘土質シルト
 - 2 7.5YR3/3暗褐色砂質シルト
- オレンジパリスをわずかに含む。
暗褐色土層と、暗褐色土層を含む。



- (e-e')
- 1 10YR2/1黒色シルト
 - 2 10YR3/4暗褐色粘土質シルト
 - 3 7.5YR3/2暗褐色粘土質シルト
 - 4 10YR5/4紅土。暗褐色粘土質シルト
 - 5 7.5YR4/4暗褐色粘土質シルト
 - 6 7.5YR2/2黒褐色シルト
 - 7 7.5YR3/2暗褐色シルト
 - 8 5YR4/6暗褐色シルト
 - 9 10YR2/3暗褐色シルト
 - 10 10YR3/4暗褐色粘土質シルト
 - 11 10YR4/4暗褐色粘土質シルト
- オレンジパリスをわずかに含む。
上部に知られていない層々か?
すずけた地層。
天竺の暗褐色土層。
天竺から取り除かれた塊の暗褐色土層。
石灰石・粘土層を含む。すずけた地層。
褐色土層・暗褐色土層を含む。
暗褐色土層で掘り残。
掘り残を含む。
黄土層をまばらに含む。
V層暗褐色土層。



- (e-f')
- 1 10YR2/1黒色粘土質シルト
- オレンジパリスをわずかに含む。



第34図 第13号住居跡

<本体>一連の煙道に続く礎は、左袖の内側に袖石として確認できた。右袖はシルト質土のみでつくられている。燃焼部焼土は34cm×60cmの楕円形に発達し、厚さは最大で4cmを測る。支脚は認められない。

<煙道・煙出し部>掘り込み式の煙道で、既述のようにカマド側には礎が配され、天井部も礎でわたされている。全長は150cmあまりで、煙道底面は緩やかに下り、煙出し部で急に深く掘り込まれる。深さは73cmほどである。埋土は、全体に吹き込まれた粘土や炭化物粒ですすけている。

〔柱穴〕柱穴状のものが2個検出されたが、柱穴にはならないと思われる。

〔土坑〕東壁際の中央とカマドの両側に、合計3基の貯蔵穴が確認された。いずれも小さめであるが、位置から土坑として扱った。〔周溝〕検出されない。〔その他〕埋土に含まれる円礫はほとんどなかった。

遺物 (第96図、写真図版58)

〔出土状況〕遺物の総量は小コンテナ1箱に満たない。カマドや煙道、Pit1から出土した。6点掲載した。

〔土器〕土師器環・甕、須恵器環が出土している。墨書・刻書土器は出土していない。

〔土製品〕鉄製品ともに出土していない。

時期 出土した土器の特徴や灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末以前に存在した住居跡と推定される。

第14号住居跡 (R40住)

遺構 (第35・36図、写真図版18)

〔位置・重複〕平州部東端のS41グリッド付近、第15号住居跡と第16号住居跡のちょうど中間に位置する。その距離はおおよそ10mである。遺構間の重複は認められないが、トレンチャーによる耕作により住居南東側が攪乱されている。

〔検出面・状況〕第II層では確認できず、検出面を若干下げた際に、第III層上面で黒褐色土の方形プランが確認された。灰白色火山灰はプランの際にわずかに認められた。

〔平面形〕隅丸方形をなすが若干歪む。〔規模〕4.70m×4.95m 〔壁高〕39cm～58cm

〔埋土〕7層に分層される自然堆積層である。上位は黒色土、中位以下は黒褐色土を主体とし、灰白色火山灰は3層下部の床面直上に観察される。これ以前に壁際に堆積した黒色土中には焼土等を含んでいる。

〔壁〕いずれの壁も緩やかに立ち上がる。

〔床面〕第IV層を床面とし全体的に平坦である。床面の直上に礫が散乱するが、カマドの袖に使われたものかは不明である。

〔カマド〕残存状態は良いが、トレンチャーにより断ち切られるところが数ヶ所ある。

<位置>南東部の東隅寄りにある。 <煙道方位>N-130° -E

<本体>本体周辺に袖の芯材に使われたと思われる礎が散乱する。原位置を保つものにはシルト質土が貼り付けられている。天井部の崩落土下には燃焼部焼土が直径35cmあまりに形成され、厚さは最大で4cmである。焼土奥には、支脚の礎が1個覆かれている。

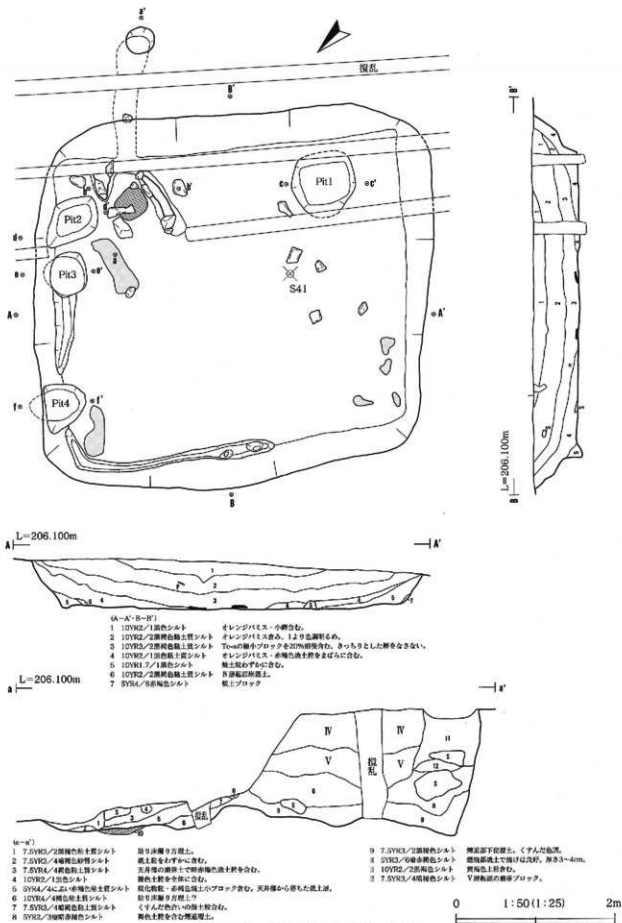
<煙道・煙出し部>第V層を切り抜く煙道で、全長は150cmあまりである。底面は、凹凸を持ちながら煙出し部まで緩やかに下がる。煙出しは特に掘り下げられていないが、検出面からの深さは80cmもある。

〔柱穴〕柱穴および柱穴状のものは検出されなかった。

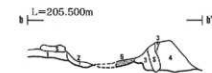
〔土坑〕南隅のPit1は、深さ17cmの貯蔵穴である。北東壁際に並ぶPit2～4もその類と思われる。

〔周溝〕北東壁際のPit3とPit4の間と後者から北西壁にかけての一部に認められた。小穴を伴う部分がある。

〔その他〕埋土に含まれる円礫は中コンテナ1箱分である。



第35図 第14号住居跡 (1)



0a-b'

- 1 10YR2/3暗褐色粘土質シルト
- 2 10YR2/2黒褐色シルト
- 3 10YR4/3に多い灰褐色粘土質シルト
- 4 10YR4/3に多い灰褐色粘土質シルト
- 5 5YR4/4に多い黄褐色粘土質シルト

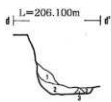
粘土質土。微小砂を含む。
 暗褐色粘土質シルト。
 小砂を含む。砂礫層(礫)の層が、わずかに混入している。
 粘土質土。
 砂礫層土。
 砂礫層土。堆積は、進みます。



0c-d'

- 1 7.5YR3/3暗褐色シルト
- 2 10YR2/1黒粘土質シルト
- 3 7.5YR3/4暗褐色粘土質シルト
- 4 10YR5/4に多い黄褐色粘土質シルト

灰褐色粘土。
 黄褐色土。粘土質を含む。
 黄褐色土。
 粗粒砂質土。



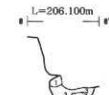
0d-e'

- 1 7.5YR4/4褐色シルト

黄褐色土。粘土質を含む。

- 2 7.5YR3/3暗褐色粘土質シルト
- 3 10YR4/3に多い黄褐色粘土質シルト

V源粘土。砂礫層を含む。
 黄褐色土。砂礫層を含む。



0e-f'

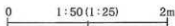
- 1 7.5YR4/4褐色シルト
- 2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト
- 3 10YR2/2暗褐色粘土質シルト

V源粘土。
 黄褐色土。粘土質を含む。
 黄褐色土。粘土質を含む。



0e-f'

- 1 10YR2/2暗褐色粘土質シルト



第36図 第14号住居跡(2)

遺物 (第96・97図、写真図版58)

〔出土状況〕総量は中コンテナ1箱程度である。住居埋土、煙道などから出土した。13点掲載した。

〔土器〕土師器環・甕、須恵器壺・大甕が出土している。土師器の環が多い。墨書土器は2点(511・512)、刻書土器は1点(513)出土した。

〔土製品〕出土していない。〔鉄製品〕両端を欠く鉄鍔が1点出土した。

〔時期〕出土した土器の特徴と灰白色火土灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀初めにかけて存在した住居跡と考えられる。

第15号住居跡 (R42住)

遺構 (第37・38図、写真図版19)

〔位置・重複〕平坦部南東端のS43グリッド付近に位置し、第7号住居跡遺構とはおよそ9mの距離を置く。第14号住居跡同様、幅70cm前後のトレンチャー痕が全体に入っている。遺構間の切り合いはない。

〔検出面・状況〕これも第Ⅲ層上面で検出した。状況は第14号住居跡と同じである。

〔平面形〕方形であるが、平行四辺形状に歪む。〔規模〕3.79m×4.01m〔壁高〕29cm～52cm

〔埋土〕5層に分層される自然堆積層である。2枚の黒褐色土がを主体で、壁際に灰白色火土灰をわずかに含む黒褐色土が堆積する。〔壁〕いずれの壁も急傾斜で立ち上がる。

〔床面〕第Ⅳ層を床面とし、細かい凹凸がある。貼床は部分的にしか認められない。

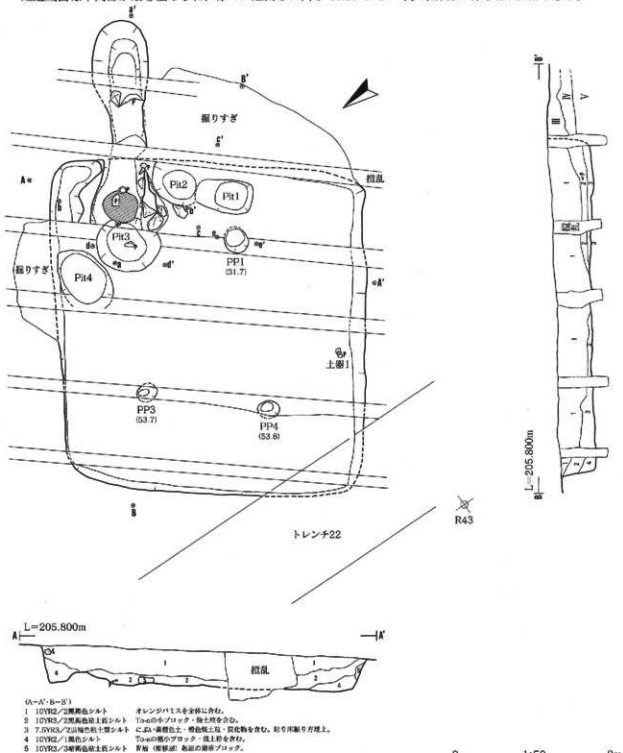
〔カマド〕煙道上部に須恵器大甕の破片を確認した。これもトレンチャーの攪乱により一部破壊されているが、カマド本体・煙道部とも良く残っている。

<位置>南東壁の東隅に寄る。<煙道方向>N-130°-E

<本体>右袖は芯材の礫が数個残る。左側には礫がなく、黄褐色のシルト質土の高まりのみが観察された。燃

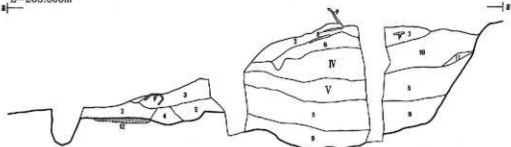
焼部焼土は直径40cmほどに形成され焼けも良好である。焼土の厚さは最大で4cmである。支脚には土師器の
 坏が据えられていた。

<煙道・煙出し部>これも第V層以下を削り抜く全長150cmあまりの煙道である。第IV層の上には、上述の
 ように遺物や焼土粒・炭化物粒を含む黄褐色土があり、煙道上部に何らかの手が加えられていた可能性がある。
 煙道底面は中間部が最も低められ、徐々に煙出しに向けて上がっていく。最深部の深さは78cmである。



第37図 第15号住居跡 (1)

L=205.800m



(a-a')

- | | |
|---------------------|----------------------------------|
| 1 7.SYR2/2黒褐色シルト | 横土層を含む。 |
| 2 7.SYR4/9褐色土質シルト | 天井層の残層土。横土層を全体に含む。 |
| 3 7.SYR3/2黒褐色粘土質シルト | 赤褐色土質ブロック・炭化物層を全体に含む。 |
| 4 7.SYR3/4暗褐色土質シルト | 赤褐色土質小ブロック・炭化物層上部を含む。 |
| 5 7.SYR2/1灰色シルト | 褐色土質ブロック・赤褐色小ブロック・To-aの小ブロックを含む。 |
| | 腐植層とか腐植層上部に落ちたシルト。 |
| 6 10YR2/2黒褐色シルト | 褐色赤褐色土ブロックを含む。 |
| 6 10YR3/4暗褐色シルト | 褐色土層を全体に含む。 |
| 8 10YR2/1灰色シルト | To-aのブロックを含む黒色土。 |
| 8 10YR5/3cにおよぶ褐色シルト | 横土層全体に広がる。 |
| 8 SYR4/6赤褐色シルト | 横土層層上で残りは良好。 |

L=205.500m



(b-b')

- | | |
|------------------|--------------------------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 横褐色土質小ブロック・褐色土質ブロックを含む腐植層層土。 |
| 2 10YR3/4暗褐色シルト | 赤褐色土質土層を含む腐植層層土 (F層)。 |
| 3 7.SYR2/4暗褐色シルト | 腐り分解り方層土で横土層を含む。 |
| 4 10YR2/3黒褐色シルト | 腐り分解り方層土で横土層を含む。 |
| 5 SYR4/9赤褐色シルト | 横土層層上で残りは良好。厚さ123cm程度。(カマド下で断面12に同じ) |

L=205.500m



(c-c')

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1 7.SYR3/2黒褐色シルト | におよぶ赤褐色土層・小塊を含むくすんだ土質。 |
| 2 10YR4/3におよぶ褐色土質シルト | 腐り分解り方層土上層? |

L=205.300m



(d-d')

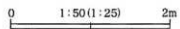
- | | |
|-------------------|---------------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 横褐色土層・横土層・炭化物を含む腐り分解り方層土。 |
| 2 10YR3/4暗褐色シルト | To-aブロック・塊土層・炭化物を含む。 |
| 3 10YR3/2黒褐色土質シルト | 横土層を含む。 |
| 4 10YR2/1灰色シルト | 横褐色土層・横土層を全体に含む。 |

L=205.300m



(e-e')

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1 10YR2/1黒褐色土質シルト | 赤褐色土質小ブロックを全体に含む。 |
| 2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト | 小塊を全体に含む。 |



第38図 第15号住居跡(2)

〔柱穴〕 主柱穴となるPP1・PP3・PP4の3個が確認された。それぞれの柱穴間距離は、PP1・PP4間が215cm、PP3・PP4間が155cmである。

〔土坑〕 住居使用時の土坑は、カマド右のPit1・Pit2、北東壁際にあるPit4の3基でいずれも貯蔵穴と思われる。Pit3は貼床除去時に確認された土坑で、本遺構が使われる以前のものである。

〔周溝〕 確認されていない。

〔その他〕 埋土には、粒径50～150mmの円礫が20個ほど(小コンテナ1箱)含まれていた。

遺物(第97～100図、写真図版59・60)

〔出土状況〕 出土した総量は中コンテナ1箱強で、主に住居埋土およびカマド関連施設から出土した。掲載した遺物は33点である。

〔土器〕土師器環・甕、須臾器壺・大甕の破片が出土している。土師器の環が目立つが、内黒と非内黒の割合は若干後者が多いようである。縄文土器も出土したが、早期の貝殻文土器1点を含み数片である。墨書土器は3点(514・518・523)、刻書土器は1点(516)出土した。この刻書土器は支脚として使われていたもので「三」と判読できる。〔土製品〕〔鉄製品〕ともに出土しなかった。

時期 出土した土器の特徴と灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀初めにかけて存在した住居跡と考えられる。第14号住居跡とは同時存在した様相である。

第16号住居跡 (S38住)

遺構 (第39図、写真図版20)

〔位置・重複〕平坦部北東端T39グリッド付近に位置し、北西側で第13号住居跡と隣接する。遺構間の重複は認められない。

〔検出面・状況〕これも本来の検出面である第11層を下げすぎ、第11層上面で検出した。灰白色火山灰は、プランの際にのみわずかに観察された。

〔平面形〕方形基調であるが、歪みが大きい。〔規模〕3.55m×3.97m 〔壁高〕17cm～36cm

〔埋土〕10層に分層されたが、大きくは黒褐色土と黒色上の二層からなる自然堆積層である。床面に近づくほど焼土や焼土粒の混じりが多くなる。

〔壁〕北西壁と北東壁は急傾斜で立ち上がり、南西壁は緩やかである。南東壁は崩落が著しく不明である。〔床面〕第IV層を床面とし、全体的に細かい凹凸がある。一部貼床されている。

〔カマド〕本体は、上述した焼土下に確認された。煙道は検出面を下げすぎたことにより、掘り込みか割り抜きかの別が判断できない。

<位置>南東壁の東隅にかなり寄っている。 <煙道方位>N-148°-E

<本体>両袖が残るが、被覆したシルト質土の高まりが確認されたにすぎない。土器片も袖に入れられている。燃焼部焼土は40cm×56cmにわたって形成され、厚さは最大で5cmである。本体中央部には、支脚として土師器の甕が据えられている。

<煙道・煙出し部>直径25cm、深さ45cmの煙出し穴のみを残す。

〔柱穴〕南隅にPP1、西隅そばにPP2の2個確認された。柱穴間距離は343cmであるが2個しか確認できず、上柱穴となるかは不明である。

〔土坑〕西隅にある楕円形のPit1、南西壁南寄りのPit2の2基検出した。Pit1の底面には厚さ9cmあまりの焼土が形成されていた。何らかの作業用の土坑か、祭祀に関連するものかと思われる。Pit2は貯蔵穴か。

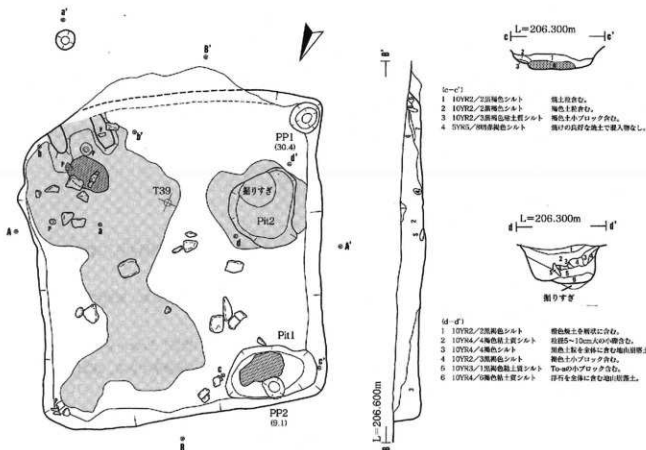
〔周溝〕確認されていない。

〔焼土〕住居の東側ほぼ半分には、家屋の焼失により形成されたものと思われる焼土が分布する。厚さは数cmであるが、かなり広範囲に認められる。しかし、それに伴う炭化材が確認されておらず、焼失住居であるかどうかの判断は難しい。灰も一部に確認されており、普通の焼失の仕方ではない可能性もある。

〔その他〕埋土には、円礫が小コンテナ1/2箱ほど含まれていた。

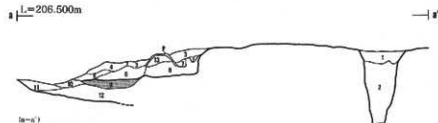
遺物 (第100～102図、写真図版61・62)

〔出土状況〕出土した遺物の総量は、中コンテナ1箱弱である。主に住居埋土およびカマド関連施設、Pit類から出土した。掲載した遺物は24点である。



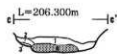
(A-A') B-B' 1

- | | |
|-------------------|---------------------------------|
| 1 10YR2/1黒色シルト | 褐色砂? |
| 2 10YR2/2黒褐色シルト | オレンジパミス、小礫をわずかに含む。To-aが入れない。 |
| 3 10YR2/1灰色土質シルト | To-aの小ブロック、炭化煤屑を含む。To-aは層を成さない。 |
| 4 10YR2/2黒褐色シルト | ブロック状 |
| 5 10YR2/2黒褐色砂質シルト | To-aの小ブロック、暗褐色土ブロック、炭化物を含む。 |
| 6 10YR2/3黒褐色シルト | 粘土を含む。 |
| 7 10YR2/3黒褐色シルト | 粘土土、炭化物を含む。 |
| 8 10YR3/2黒褐色砂質シルト | 厚層状腐葉土。 |
| 9 10YR4/3褐色土質シルト | 粘土を含む。 |
| 10 10YR2/1灰色シルト | 褐色粘土を含む。 |



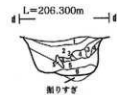
(B-B')

- | | |
|--------------------|------------------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | オレンジパミス全体を含む。 |
| 2 7.5YR2/1黒色シルト | すすけた色土。 |
| 3 7.5YR3/4暗褐色シルト | 火片部から落ちた塊状ブロック。 |
| 4 7.5YR4/6褐色シルト | 塊状部に入り粘土と混ざる。 |
| 5 7.5YR3/4暗褐色シルト | 炭化物をまばらに含む。 |
| 6 7.5YR4/4褐色土質シルト | 炭化腐葉土層上の塊状土。 |
| 7 10YR6/4に灰、黄褐色粘土 | 粘土ブロック。 |
| 8 7.5YR2/2黒褐色シルト | 褐色粘土層、暗褐色土層を含む。 |
| 9 5YR4/6赤褐色シルト | 炭化腐葉土上で塊状は黒灰。炭化腐葉中やすすけた色を含む。 |
| 10 7.5YR3/2暗褐色シルト | 暗赤褐色土をまばらに含む。陥り陥り方層上。 |
| 11 10YR2/3黒褐色シルト | 陥り陥り方。 |
| 12 10YR2/4に灰、黄褐色粘土 | 塊状土を含む土層内の土。 |
| 13 7.5YR4/4褐色シルト | |



(C-C')

- | | |
|-------------------|--------------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 塊状土を含む。 |
| 2 10YR2/2黒褐色シルト | 褐色土層を含む。 |
| 3 10YR2/2黒褐色土質シルト | 褐色土層を多量に含む塊状腐葉土。 |
| 4 5YR4/6赤褐色シルト | 塊状土を多量に含む。陥り陥り方層上で侵入層なし。 |



(D-D')

- | | |
|---------------------|------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 褐色粘土を塊状に含む。 |
| 2 10YR4/4褐色土質シルト | 直径5~10cm、大の礫を含む。 |
| 3 10YR4/4褐色シルト | 褐色土層を多量に含む塊状腐葉土。 |
| 4 10YR2/2黒褐色シルト | 褐色土の小ブロックを含む。 |
| 5 10YR3/1灰色黄褐色土質シルト | To-aの小ブロックを含む。 |
| 6 10YR4/6褐色土質シルト | 浮石を多量に含む塊状腐葉土。 |



(E-E')

- | | |
|-------------------|---|
| 1 7.5YR2/2暗褐色シルト | に灰、褐色、暗褐色粘土上のブロックを含む。 |
| 2 7.5YR4/4褐色シルト | 粘土ブロック。 |
| 3 7.5YR2/1灰色土質シルト | に灰、黄褐色の小ブロック - To-aの小ブロックが混入する。炭化腐葉をまばらに含む。 |
| 4 10YR3/4暗褐色土質シルト | 陥り陥り方層上。To-aの小ブロック土層土を含む。 |

0 1:50 (1:25) 2m

第39図 第16号住居跡

〔土器〕土師器坏・甕、須恵器坏・甕・甕類の破片が出土している。土師器坏の内黒と非内黒の割合は、ほぼ半々である。墨書はいずれも坏に見られるが、全部で5点出土した。545・546は非内黒坏の同一個体であるが、いわゆる長文墨書土器とか多文字の墨書土器と言われるものである。墨文は545が「弟/弟□〔在力〕」、546が「□〔署力〕□/□〔記号力〕愚□」である。

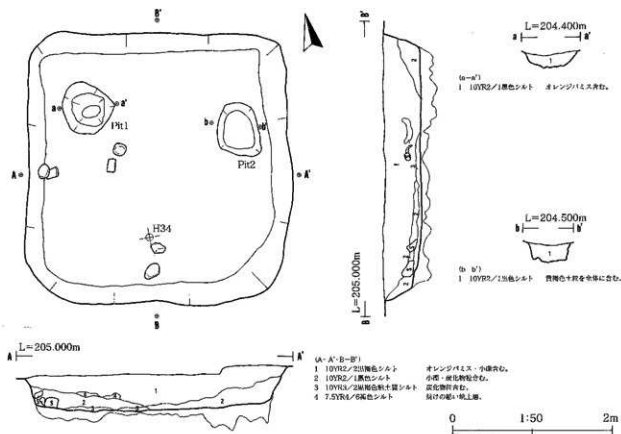
〔土製品〕羽目(561)が1点出土した。還元面はドットで示した。562は内外面が丁寧にヘラミガキされる台か?器種が特定できずここで扱った。

〔鉄製品〕種不明の鉄製品が1点出土した。

時期 出土した土器の特徴と灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀初めにかけて存在した住居跡と考えられる。床面に焼土が形成されているもの(第7号住居状遺構)、周溝を伴うもの(第4号住居状遺構)といった特徴がある。検出された地点は、1棟が斜面部裾で、残り6棟は南側平坦部である。これらの中には、ひとまわり規模が小さい土坑とともに、大形住居跡を囲むように配置されるものもある。

2. 住居状遺構

標準的な住居跡ほどの規模を持ち、カマド施設を持たないものを住居状遺構とした。7棟検出している。重複のあるものや壊されているものも含め、平面形はいずれも隅丸方形と思われる。土坑を有するもの(第1号住居状遺構)、床面に焼土が形成されているもの(第7号住居状遺構)、周溝を伴うもの(第4号住居状遺構)といった特徴がある。検出された地点は、1棟が斜面部裾で、残り6棟は南側平坦部である。これらの中には、ひとまわり規模が小さい土坑とともに、大形住居跡を囲むように配置されるものもある。



第40図 第1号住居状遺構

第1号住居状遺構 (G33住居状)

遺構 (第40図、写真図版21)

〔位置・検出面〕 平坦部西側、G33区に位置する。第1号住居跡と第2号住居跡の間にあり、前者とは北西に6m、後者とは南に3.5mの距離がある。検出面は、第II層である。

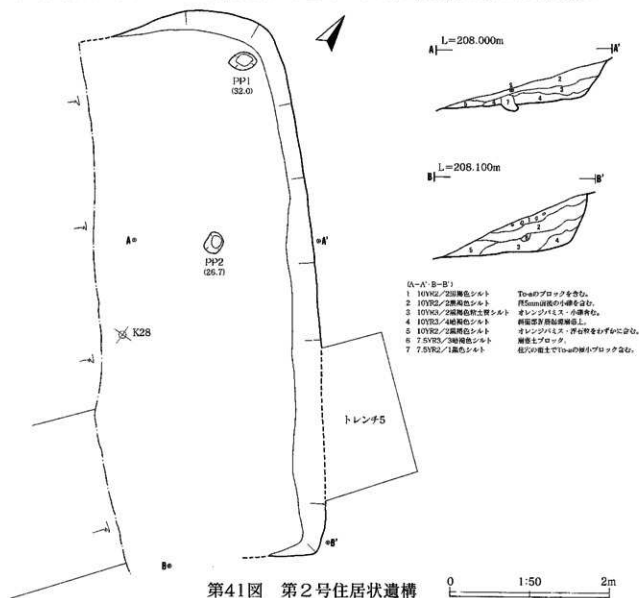
〔埋土〕 上位は小礫を含む黒褐色土、中位から下位にかけては炭化物を含む黒色土・黒褐色土からなる自然堆積層である。中位には、焼けの悪い焼土ブロックが混入する。また、床面や床面直上付近には、径が15～20cm程度の礫が観察された。

〔平面形〕 隅丸方形 (規模) 3.40×3.32m

〔壁〕 緩く外傾あるいは外反して立ち上がる。壁高は33～45cmである。

〔床面〕 第V層を床面とし、中央付近がわずかに凹むがほぼ平坦である。全体に貼床が施され、その厚さは数cmから深いところで30cmを測る。〔柱穴〕 検出されなかった。

〔土坑〕 北西隅から1基 (Pit 1) 東壁際北寄りから1基 (Pit 2) の計2基検出された。Pit 1は、規模67×



第41図 第2号住居状遺構

0 1:50 2m

63cmの不整形を呈し、深さは最大で18cmを測る。埋土はオレンジバミスを含む黒色土である。Pit 2は、規模64×52cmの不整形、深さは最大で23cmを測る。いずれも貯蔵穴に類するものと思われる。

〔遺構の性格〕 何らかの作業場（工房）として使われていたものと思われる。

遺物は土師器の細片が数点出土したのみである。

時期 埋土の状況、出土遺物から平安時代に属する遺構と考えられる。

第2号住居状遺構（J 27住居状）

遺構（第41図、写真図版22）

〔位置・検出面〕 斜面部裾のJ 27区に位置し、標高は207.8～208.3mである。第3号住居跡とは南西に10mの距離がある。斜面部第Ⅲ層で確認されたものであるが、調査以前の試掘トレンチにより、遺構の北東から南西にかけての壁の一部が欠われ、また斜面下（南西側）は、全体のおよそ3分の2程度が崩落により確認できなかった。したがって、カマドの有無は不明であるが、住居状遺構として扱うことにした。

〔埋土〕 上位は十和田a火山灰のブロックを含む黒褐色土、中位は炭化物粒を含む黒色土、中位から下位にかけては、第Ⅲ層起源と思われる暗褐色の崩落土や黒褐色土からなる自然堆積層である。

〔平面形〕 隅丸の方形基調と思われる。〔規模〕 6.84m×？

〔壁〕 残存する斜面側の壁は緩やかに外傾して立ち上がる。その壁高は58cmである。

〔床面〕 斜面部第Ⅶ層を床面とし、わずかに斜面下方に傾斜している。

〔柱穴〕 北側隅（PP1）と中央部北寄り（PP2）に1個ずつ確認された。PP2の埋土には十和田a火山灰の極小ブロックを含んでいる。

〔遺構の性格〕 本体の多くを失っており不明な点が多いが、比較的傾斜の急な斜面地にあることから、居住施設あるいは作業場・工房などとして、常時使用するのには適さないと思われる。物見納的な使われ方を想定してみたが、根拠はない。

遺物は土師器の細片が数点出土したが、掲載していない。

時期 埋土の状況、出土した遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）に属するものと思われる。

第3号住居状遺構（K 36住居状）

遺構（第42図、写真図版23）

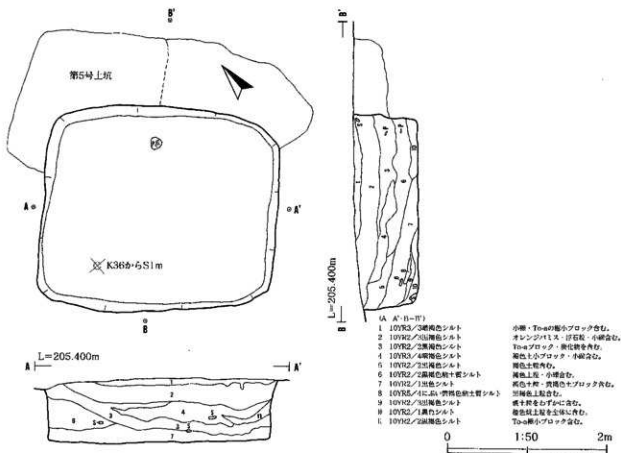
〔位置・重複・検出面〕 平坦部中央からやや西寄り、K 36区に位置する。大形住居跡である第4号型住居跡の北東に2.2mの距離にあり、軸方向をほぼ同じにしている。第Ⅱ層上面で、重複する第5号土坑とともに確認されたが、新旧関係は本遺構のほうが新しい。

〔埋土〕 11層に分層され、中位に円礫を含む。上位から中位にかけては暗褐色土と黒褐色土が主体で、下位は黒色土から構成される。十和田a火山灰は、上位の暗褐色土と中位の黒褐色土中に小さなブロックを含んでいる。堆積状況は人為的な煉瓦をみせている。〔平面形〕 不整形隅丸方形 〔規模〕 2.88×2.54m

〔壁〕 いずれの壁も直立して立ち上がる。壁高は64～80cmである。

〔床面〕 小さな凹凸はあるがほぼ平坦で、第Ⅴ層を床面とする。〔柱穴・土坑〕 確認されなかった。

〔遺構の性格〕 何らかの作業場（工房）、あるいは墨書や刻書を有することから、呪いなどの儀式が行われた遺構であった可能性がある。



第42図 第3号住居状遺構

遺物 (第104図、写真図版62)

埋土から、土師器の坏・甕類、須恵器の坏・大甕が出土しており、13点掲載した。墨書土器は1点、刻書土器は2点出土している。

時期 埋土の状況、出土した遺物から、平安時代(9世紀後半～10世紀初頭)に属するものと思われる。

第4号住居状遺構 (M35住居状)

遺構 (第43図、写真図版24)

〔位置・検出面〕 平坦部ほぼ中央、M35区に位置し、第5号住居跡の北東約30cmの距離に隣接している。これも住居跡と軸方向を同じにしているが、同時に存在したとするとあまりに近接しすぎている。検出面は第II層で、不明瞭な十和田a火山灰の輪郭でプランを想定し精査したが、北側にあった窪地に堆積した火山灰を本遺構のプランと誤認し、かなりの大ききで北側と東側を掘りすぎてしまっている。

〔埋土〕 上位は、十和田a火山灰が混じる黒褐色土とレンズ状に堆積する火山灰を主体とする灰白色土層、中位は焼土粒・炭化物を含む黒褐色土、下位は黒色土と黒褐色土からなる。

〔平面形〕 方形と思われる。〔規模〕 一部掘り過ぎがあり、推定4.20×3.80mほどと思われる。

〔壁〕 緩く外傾し立ち上がる。壁高は38～65cmである。

〔床面〕 第V層を床面とするほぼ平坦な床面である。〔柱穴・土坑〕 検出されなかった。

[周溝] 北側のコーナー付近を除き、壁際をはほぼ全周する。幅10cm前後、深さは5cm程度である。

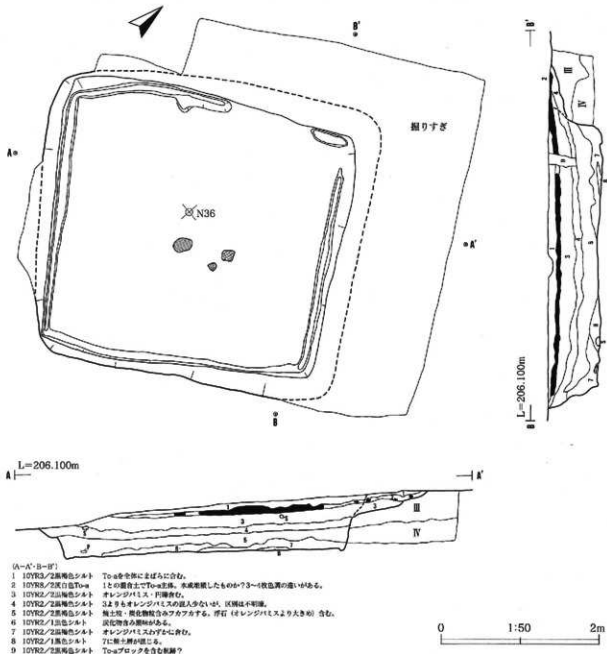
[その他] 中央付近から楕円形を呈する焼土が1基検出された。規模は27×18cmで、厚さは2cm程度である。

その東側には炭化材も確認された。

[遺構の性格] 床面に焼土が確認されており、小鍛冶等の作業場（工房）の可能性がある。今回、7棟の住居状遺構が確認されているが、周溝を有するものは本遺構だけであり、住居のつくりという点では他のものと異なるものかもしれない。

遺物は土師器の坏が数点出土したのみである。

時期 埋土の状況、出土した遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）に属するものと思われる。



第43図 第4号住居状遺構

第5号住居状遺構 (N37住居状)

遺構 (第44図、写真図版25)

〔位置・重複・検出面〕 平坦部中央からわずかに東に寄ったN37区に位置し、第6号住居跡の南東約2mの距離にある。第6号住居状遺構と重複していたが、本遺構の検出面は第II層で、この段階では重複関係にあることを把握できていなかった。重複する第6号住居状遺構は、第IV層上面まで検出面を下げた段階で確認されたものであり、よって新旧関係は本遺構の方が新しいと思われる。

〔埋土〕 12層に分層されたが、人為的な堆積状況である。上位は黒褐色土を主体とし、中位から下位にかけては黒色土を基調とする。全体に十和田a火山灰の小ブロックを含んでいるが、火山灰のレンズ状の堆積層は見られない。

〔平面形〕 隅丸方形 (規模) 3.08×3.16m

〔壁〕 直立して立ち上がるが、北東壁は比較的緩やかである。壁高は76~85cmである。

〔床面〕 第V層を床面とし、中央部がやや高い。小さな凹凸がある。

〔柱穴・土坑〕 検出されなかった。

〔遺構の性格〕 作業場 (工房) の可能性があるが、人為的に埋め戻されるなど、他の同種の遺構とは異なる面もあることから、使われ方の違いも想定される。

遺物は、埋土からわずかに土師器の細片が数点出土しただけである。

時期 埋土の状況から、平安時代 (9世紀後半~10世紀初頭) に属するものと思われる。

第6号住居状遺構 (N38住居状)

遺構 (第44図、写真図版26)

〔位置・重複・検出面〕 第5号住居状遺構に示したとおりである。本遺構の方が第6号よりも古い。本来は第II層面で検出可能な遺構と思われる。

〔埋土〕 黒色土の単層に暗褐色の地山崩落ブロックを含む。

〔平面形〕 不整形形と思われる。 (規模) 3.26×3.92m

〔壁〕 緩く外傾し立ち上がるものと思われる。壁高は7~16cmである。

〔床面〕 第V層を床面とし、緩く波打つ。〔柱穴・土坑〕 検出されなかった。

〔遺構の性格〕 作業場 (工房) の可能性があるが、裏付けるものに乏しい。

遺物 (第105図、写真図版63)

埋土から、土師器環・甕の破片が数点出土したが、1点掲載した。

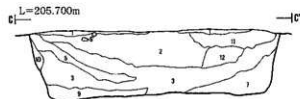
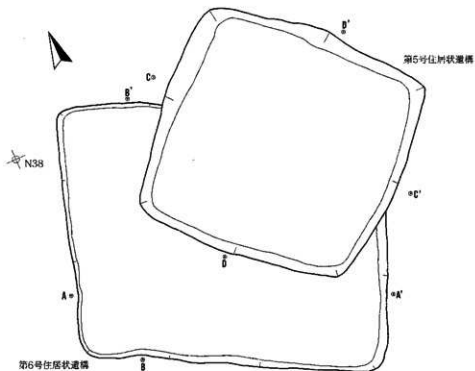
時期 出土遺物から、平安時代に属する遺構と思われる。

第7号住居状遺構 (O42住居状)

遺構 (第45図、写真図版27)

〔位置・検出面〕 平坦部南東隅O42区に位置する。平坦部にある住居状遺構の中では、他の住居跡と最も離れており、第15号住居跡とは東に8.7mの距離がある。第IV層まで下げた状況で検出された遺構であるが、第II・第III層の段階で検出できたかは不明である。

〔埋土〕 黒色土の単層に、第IV層起源の崩落ブロック、焼土粒を含む。

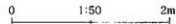


(A-A'-B-B')

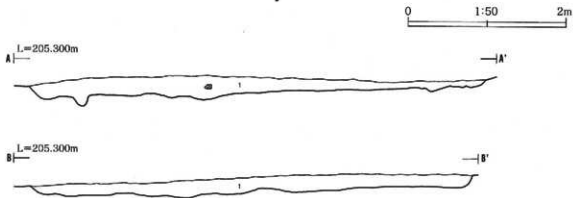
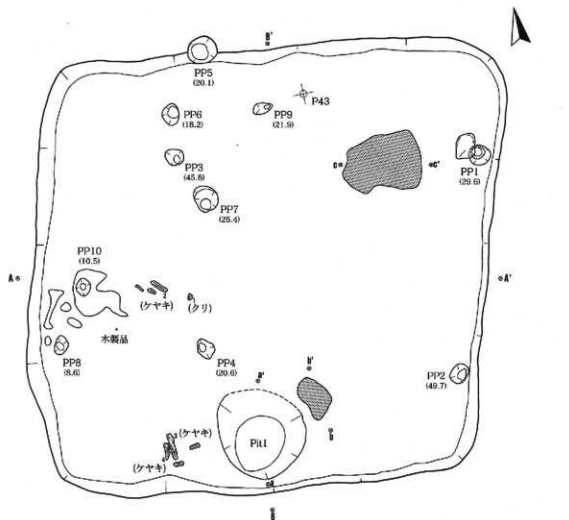
- 1 10YR2/1黒色シルト オレンジバミスまばらに含む。
2 10YR2/3灰褐色粘土質シルト 瓦礫層のブロック。

(C-C'-D-D')

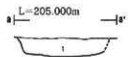
- 1 10YR2/2黒褐色シルト 黄褐色土灰を全層に含む。
2 10YR2/3灰褐色シルト To-aの小ブロック、オレンジバミス・浮石層を含む。
3 10YR2/1白色粘土質シルト 2が風人跡に互に積たれ小ブロック含む。
4 10YR2/1黒色粘土質シルト To-aブロックわずかに入る。オレンジバミス・浮石層を全層に含む。
5 10YR2/1白色粘土質シルト To-aブロック、オレンジバミス・浮石層を含む。より出現あり。
6 10YR2/1黒色粘土質シルト To-aブロック含まず。オレンジバミス・浮石層含む。
7 10YR1.7/1白色粘土質シルト To-aブロックと暗褐色土の小ブロック含む。
8 10YR2/2黒褐色粘土質シルト To-a小ブロック、オレンジバミス・浮石層含む。
9 10YR2/3灰褐色粘土質シルト 褐色土・黄褐色土の積層上で分離を含む。
10 10YR2/2黒褐色シルト 浮石層の遺構。
11 10YR2/2黒褐色粘土質シルト To-a小ブロック・褐色土ブロック全層に含む。
12 10YR2/1黒色粘土質シルト To-a小ブロック・褐色土ブロック・浮石層を含む。



第44図 第5・6号住居状遺構



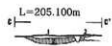
(A-A', B-B')
 1 10YR2/1黒色シルト オレンジパリスをまばらに含む。黒土粒及びそのブロックを含む箇所あり。



(a-a')
 1 10YR2/1黒色シルト オレンジパリスをまばらに含む。



(b-b')
 1 7.5YR4/6褐色シルト 中央部以外は堆積層、黄色土粒を含むのみ。



(c-c')
 1 7.5YR3/2黒褐色シルト 粘土質・酸化層を含む。
 2 5YR6/6赤褐色シルト 境目の2段女粒土層、全体的に黒褐色

第45図 第7号住居状遺構

〔平面形〕 不整隅丸方形 〔規模〕 5.74×5.60m

〔壁〕 残存している状況では、緩く外傾し立ち上がりしている。壁高は13～18cmである。

〔床面〕 第V層を床面とする。全体に凹凸がある。

〔柱穴〕 PP1～PP10の10個検出されたが、主柱穴となり得るものはPP1～PP4である。柱穴の配置は2個が東壁際に配され、もう2個は中央わずかに西寄りである。各柱穴間の距離はPP1とPP2間が2.82m、PP2とPP4間が3.31m、PP4とPP3間が2.38m、PP3とPP1間が3.78mである。この他については、性格は不明である。

〔土坑〕 南壁中央から1基（Pit1）検出された。北側に一部掘りすぎがあり、規模は径108cm前後と推定される。深さは最大で22cmである。

〔その他〕 焼土が、Pit1の北東側から1基（焼土1）、北東隅付近から1基（焼土2）、いずれも床面に検出された。焼土1は規模31×49cm、厚さ9cmを測る。不整長方形を呈し焼けは良好である。焼土2は規模69×100cm、厚さ8cmである。形状は不整長方形で、中央部以外は焼けが悪い。この二つは火的な使用により形成された焼土である。また、西壁中央部には焼土に伴う焼土ブロックがあり、その中から炭化した木製椀1点（三片）が出土した。

遺物（第105図、写真図版63・64）

埋土から土師器の坏・甕、須恵器の大甕が数点ずつ、この他に前述した木製椀が1点出土した。7点掲載した。

時期 出土遺物から、平安時代（9世紀～10世紀初頭）に属するものと考えられる。

（飯坂・濱田）

3. 土坑

調査区北側の尾根部から1基、南向き斜面部から1基、平坦部から18基の計20基検出された。縄文時代に属するものは、尾根部から検出された1基のみで、他の19基はいずれも平安時代に属するものと思われる。

平面形は、円形、隅丸方形、長方形の3つに大別される。そのうち、長方形のものは、形状から墓坑の可能性があり、隅丸方形を早するものは、一辺が2m前後と比較的大形のもので、貯蔵施設あるいは作業場の可能性を考えている。

第1号土坑（O15土坑）

遺構（第46図、写真図版28）

〔位置・検出面〕 北側尾根部標高223.0mの調査区北端、O15区に位置する。調査区境から検出されており、残りの約半分は調査区北西側にある。検出面は第VII層である。

〔埋土〕 11層に分層される自然堆積である。上位から中位にかけては黒色土・黒褐色土を主体とし、それ以下はVI層起源の褐色あるいは暗褐色の崩落土からなる。

〔平面形〕 円形と思われる。〔規模〕 1.97m×？ 〔深さ〕 101cm

〔壁〕 底面から直立して立ち上がり、中ほどから外傾する。

〔底面〕 ほぼ平坦で、第VII層下位を底面とする。

〔遺構の性格〕 食料貯蔵用の土坑と思われる。

遺物は出土していない。

時期 検出された層位および形状から縄文時代の遺構と考えられるが、出土遺物がなく詳細な時期は不明である。

第2号土坑 (H37土坑)

遺構 (第46図、写真図版28)

〔位置・検出面〕 調査区南西寄りの境界付近、H37区に位置し第4号住居跡南カマドの西側2mほどにある。

第IV層で確認したが、本来は第II層で検出すべきものである。

〔埋土〕 黒褐色土の単層であるが、検出面を下げすぎており、遺構上部は削られているものと思われる。

〔平面形〕 隅丸方形 (規模) 2.12×2.50m (深さ) 14cm

〔壁〕 緩く外傾して立ち上がるものと思われる。

〔底面〕 わずかに凹凸があり、傾斜に沿った底面をもつ。第V層を底面とする。

〔遺構の性格〕 貯蔵用の土坑かと思われるが、詳細は不明である。

遺物 (第106図、写真図版64)

〔出土状況〕 埋土から土師器環・甕、須恵器の大甕などの破片が数点ずつ出土した。中から3点掲載した。

時期 出土遺物から、平安時代 (9世紀中頃～10世紀初頭) の遺構と考えられる。

第3号土坑 (I33土坑)

遺構 (第46図、写真図版28)

〔位置・検出面〕 調査区平坦部内側、I33区に位置する。平坦部の中ではあまり遺構が確認されていない区域で、

最寄りの遺構 (第1号住居跡状遺構) までは西に7.5mの距離がある。第IV層で検出したが、第2号土坑同様、第II層で精査すべき遺構と思われる。

〔埋土〕 黒色土の単層である。遺構上部は大きく削り取られている。

〔平面形〕 長方形 (規模) 0.59×1.04m (深さ) 6cm

〔壁〕 ほとんど立たず不明である。〔底面〕 第V層を底面とし、地形に沿って波打つ。

〔遺構の性格〕 形状からは墓廬の可能性はあるが、詳細は不明である。

遺物は出土していない。

時期 古代に属する可能性があるが、時期は不明である。

第4号土坑 (J38土坑)

遺構 (第46図、写真図版28)

〔位置・検出面〕 調査区南端西寄り、J38区に位置し、第4号住居跡の南東約2.5mに隣接する。検出面は第III層である。

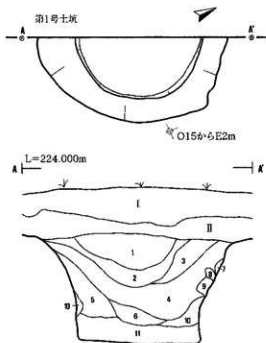
〔埋土〕 9層に分層され、全体に黒褐色土を主体とする。3層上部に十和田火山灰が薄く堆積しているが、量の多寡はあるにしろ、その上下層にも火山灰は万遍なく観察される。自然堆積である。

〔平面形〕 隅丸方形 (規模) 1.89×2.06m (深さ) 51cm

〔壁〕 底面から直立気味に立ち上がる。〔底面〕 第V層を底面とし、ほぼ平坦である。

〔その他〕 北東壁際に柱穴状の小土坑が1基確認された。規模は径25cm、深さは10cm前後である。

〔遺構の性格〕 貯蔵用の土坑、もしくは何らかの作業場的な用途かと思われる。第4号住居跡との関連も考えられるが、それを裏付ける資料に乏しい。

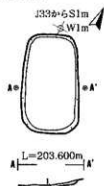


1号土坑 (O15土坑)

(A-A')

- | | |
|--------------------|------------------------------|
| 1 10YR2/1黒色シルト | オレンジハリスまばらに含む。 |
| 2 10YR2/2出層色シルト | オレンジハリス全体に含む。褐色小ブロック含む。 |
| 3 10YR3/4暗褐色シルト | 黒褐色土が少含まれる。 |
| 4 10YR2/2出層色シルト | 褐色土塊・浮石を含む。 |
| 5 10YR2/2出層色土質シルト | 堆積層がブロック（瓦割）浮石を含む。 |
| 6 10YR3/2暗褐色土質シルト | 浮石のみより濃味増する。 |
| 7 10YR2/4暗褐色シルト | 堆積層土（瓦割層）。 |
| 8 5Y6/4暗褐色土質シルト | 厚層状の暗褐色ブロック。 |
| 9 10YR2/2出層色シルト | 褐色土塊及びブロック。 |
| 10 10YR6/1褐色土質シルト | 厚層状の暗褐色土質土塊のブロックを含む。 |
| 11 10YR2/2出層色土質シルト | ツカフオている。出層色土質・褐色土質（ブロック）が限る。 |

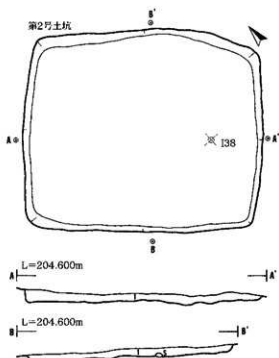
3号土坑



3号土坑 (J33土坑)

(A-A')

- | | |
|----------------|----------------|
| 1 10YR2/1黒色シルト | オレンジハリス上に散らばる。 |
|----------------|----------------|

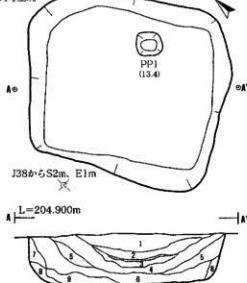


2号土坑 (H37土坑)

(A-A'・B-B')

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1 10YR2/2出層色シルト | オレンジハリスまばらに含む。 |
|-----------------|----------------|

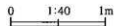
4号土坑



4号土坑 (J38土坑)

(A-A')

- | | |
|-------------------|----------------------------|
| 1 10YR3/2出層色シルト | To-a小ブロック・オレンジハリス少量含む。 |
| 2 10YR3/3暗褐色シルト | To-aのブロックは1より多め。炭化物を含む。 |
| 3 10YR6/3に灰・暗褐色 | To-aを層状に含む。 |
| 4 10YR3/2暗褐色シルト | To-aの浮石を土中に含む口縁がある。 |
| 5 10YR2/2出層色シルト | To-aよりもオレンジハリスが厚い。 |
| 6 10YR2/2出層色シルト | 炭化物層・オレンジハリス・To-aが土を全体に含む。 |
| 7 10YR3/2暗褐色シルト | 炭化物層の層の上。 |
| 8 10YR2/2出層色シルト | 厚層状（浮石ら?）の層の上。 |
| 9 10YR2/2出層色土質シルト | 小塊・オレンジハリス少量含む。 |



第46図 土坑 (1)

遺物 (第106図、写真図版64)

〔出土状況〕 埋土の上位を中心に土師器・須恵器の坏・甕が大量に出土した。その中から7点掲載した。

時期 出土遺物から、平安時代（9世紀中頃～10世紀初頭）の遺構と考えられる。

第5号土坑 (K35土坑)

遺構 (第47図、写真図版29)

〔位置・重複・検出面〕 平坦部中央からやや西寄り、K35区に位置する。第3号住居状遺構と重複関係にあるが、その第3号住居状遺構の精査時には重複に気づかずに行ったものである。よって、新旧は明確ではないが、本遺構のほうが古いものと思われる。検出面は第II層である。

〔埋土〕 2層に分層された。黒褐色土と黒色土からなり、十和田a火山灰は含んでいない。

〔平面形〕 隅丸方形と思われる。〔規模〕 1.82m×? 〔深さ〕 43cm

〔壁〕 底面から直立気味に立ち上がる。〔底面〕 第V層を底面とし、細かい凹凸がある。

〔その他〕 東隅に土坑 (Pit1) が1基確認された。規模は33×44cm、深さは15cm程度で、性格は不明である。

〔遺構の性格〕 貯蔵用の土坑、もしくは何らかの作業場的な用途かと思われる。

遺物 (第107図、写真図版64)

〔出土状況〕 埋土から土師器坏・甕が数点出土しているが、3点掲載した。

時期 出土遺物の特徴から、平安時代（9世紀中頃～10世紀初頭）の遺構と考えられる。

第6号土坑 (K37土坑)

遺構 (第47図、写真図版29)

〔位置・検出面〕 平坦部中央からやや西寄りのK37区に位置し、第4号住居跡とは1.8mほどの距離がある。検出面は第II層である。

〔埋土〕 上位は十和田a火山灰の小ブロックを含む黒褐色土、中位は厚い暗褐色土、下位は黒色土が堆積している。6層に分層される自然堆積である。

〔平面形〕 隅丸方形 〔規模〕 1.88×2.05m 〔深さ〕 68cm

〔壁〕 緩やかに外傾して立ち上がる。〔底面〕 第V層を底面とする。細かい凹凸があるが平坦である。

〔付属施設〕 北西側のコーナーが東側に横穴状に挟り込まれ、その底面には灰とわずかに焼土のブロックが観察された。用途を具体的に示すことはできないが、何らかの施設として使っていたものと考えられる。

〔遺構の性格〕 横穴状の遺構の存在から、何らかの作業場的な場所、あるいは祭壇等が設置されていた遺構の可能性はあるが、断定できない。

遺物 (第107図、写真図版64・65)

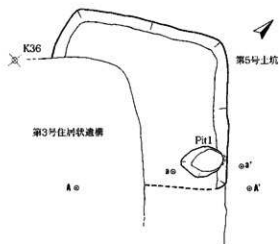
〔出土状況〕 埋土から土師器坏・甕、須恵器の壺・甕類が出土している。12点掲載した。

時期 出土遺物の特徴から、平安時代（9世紀中頃～10世紀初頭）の遺構と考えられる。

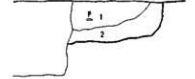
第7号土坑 (K39土坑)

遺構 (第47図、写真図版29)

〔位置・検出面〕 平坦部中央の南寄りのK39区、第4号住居跡と第7号住居跡のほぼ中間に位置する。第IV層



L=205.400m

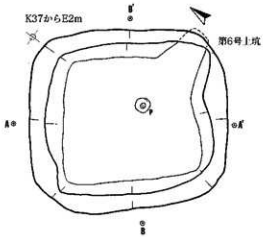


5号土坑 (K35土坑)
(A-A')
1 10YR2/2黄褐色シルト オレンジパミス含む。
2 10YR3/1黄褐色シルト 1.2ミリ小石あり。

L=205.400m



(B-B')
1 10YR2/2黄褐色シルト 黄褐色土層を含む。
2 10YR2/1黄褐色土層シルト

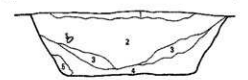


L=204.800m

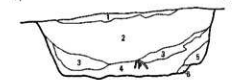


7号土坑 (K39土坑)
(A-A')
1 10YR2/1黄褐色シルト オレンジパミス含む。
2 10YR2/2黄褐色シルト 付石あり含む。

L=205.300m

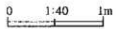


L=205.300m



6号土坑 (K37土坑)

(A-A'-B-B')
1 10YR3/2黄褐色シルト To-uの小アフリックを含む。
2 10YR2/3黄褐色シルト オレンジパミス・浮石・小砂を含む。
3 10YR2/2黄褐色土層シルト オレンジパミス・付石を含む。
4 10YR2/1黄褐色シルト オレンジパミスが少量に含む。
5 10YR2/2黄褐色シルト 浮石散在の層付。
6 10YR3/4黄褐色土層シルト 浮石散在の層付ブロック。



第47図 土坑 (2)

上面で検出したが、本来の検出面は第II層と思われる。

〔埋土〕 黒色土と黒褐色土の2層に分けられた。自然堆積と思われる。

〔平面形〕 長方形〔規模〕 0.67×1.49m〔深さ〕 10cm

〔壁〕 直立して立ち上がるが、上部が削られているため、全体としては不明である。

〔底面〕 第V層を底面とし、大きい凹凸がある。

〔遺構の性格〕 形状から、墓塚の可能性はあるが不明である。

遺物 (第108図、写真図版65)

〔出土状況〕 土師器片が1点出土した。

時期 出土遺物の特徴などから、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えられる。

第8号土坑 (L31土坑)

遺構 (第48図、写真図版29)

〔位置・検出面〕 調査区中央部、斜面と平坦部との変換点付近、L31区に位置する。第III層下～第IV層上面で第10号・第11号土坑とともに検出された。これらは、本来は第II層～第III層が検出面となる遺構である。

〔埋土〕 黒色土を主体とし、それに第V層起源の崩落土を含んでいた。炭化材が部分的に観察される。

〔平面形〕 不整隅丸方形〔規模〕 2.20×2.32m〔深さ〕 36cm

〔壁〕 直立気味に立ち上がるが、上部が削られているため、全体としては不明である。

〔底面〕 第V層を底面とし、東西方向に数cmの段差がある。

〔遺構の性格〕 貯蔵用の土坑、もしくは何らかの作業場的な用途かと思われる。

遺物 (第108図、写真図版65)

〔出土状況〕 わずかではあるが、埋土から土師器の片・甕が出土した。

時期 出土遺物の特徴などから、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えられる。

第9号土坑 (N31土坑)

遺構 (第48図、写真図版30)

〔位置・検出面〕 斜面部中央、平坦部との変換点付近のN31区に位置する。この北東約1.5mには第6号焼土があるが関連は不明である。本遺構は、重機により第III層相当層以下を除去作業中に、層厚確認のためのトレンチで確認されたもので、その際に遺構のほぼ半分を壊してしまっている。検出面は第III層上面である。

〔埋土〕 黒褐色土の単層で、底面付近に炭化物が厚さ数cm確認された。

〔平面形〕 円形と思われる〔規模〕 1.27m×?〔深さ〕 48cm

〔壁〕 緩やかに外傾して立ち上がる。斜面上位は第III・VII層、下位は第III層を壁とする。

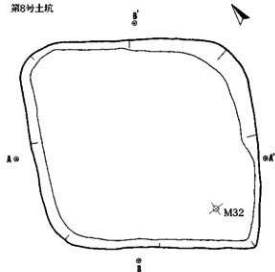
〔底面〕 斜面上位は第VII層、斜面下位は第III層を底面とする。わずかに波打つ。

〔遺構の性格〕 底面に炭化材が見られることから、鍛冶などに関連する貯蔵用土坑の可能性はあるが、詳細は不明である。

遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物はないが、ほぼ同じ等高線上に平安時代の遺物を出す焼土が数基あることなどから、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えておきたい。

第8号土坑



L=206.000m



L=206.200m



8号土坑 (L31土坑)

(A-A・B-B)

- 1 10YR2/2黒褐色シルト
- 2 10YR2/1灰色シルト
- 3 10YR4/4褐色粒上質シルト
- 4 10YR2/2黒褐色シルト

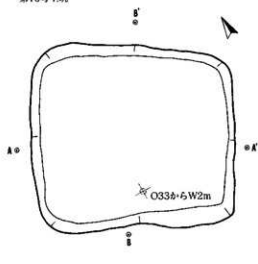
炭化材料を含む。

V部腐敗褐色土状を含む。

V部腐敗褐色土上で、2も混じる。

小礫及び炭粒も混じる。

第10号土坑



L=206.400m



L=206.600m



10号土坑 (N32土坑)

(A-A・B-B)

- 1 10YR2/2黒褐色シルト
- 2 10YR2/2黒褐色シルト
- 3 10YR3/2黄褐色シルト
- 4 10YR1.7/1黒色粘土質シルト

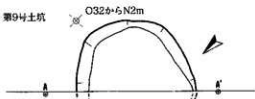
オレンジ色土を含む。

オレンジ色土を含む。褐色土粒も含む。

褐色土粒及びその小ブロックを含む。

灰色土ブロック。

第9号土坑



L=208.500m



9号土坑 (N31土坑)

(A-A)

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 小礫・仔石を含む。層下部(底面)に炭化物の層あり。

0 1:40 1m

第48図 土坑 (3)

第10号土坑 (N32土坑)

遺構 (第48図、写真図版30)

〔位置・検出面〕 調査区のほぼ中央、斜面と平坦部のとの変換点付近、N32区にある。同一規模・同一形状の第8号土坑とは北西に約8m、第11号土坑とは南に3mの距離がある。これは、第II層～III層が検出面となる遺構であるが、第IV層で検出した。

〔埋土〕 褐色土粒を含む黒褐色土を主体とする自然堆積層からなる。

〔平面形〕 隅丸方形 [規模] 1.90×2.12m [深さ] 26cm

〔壁〕 北側は緩く外傾し、南側は直立気味に立ち上がる。

〔底面〕 第V層を底面とし、わずかに凹凸がみられる。

〔遺構の性格〕 貯蔵用の土坑、もしくは何らかの作業場的な用途かと思われる。

遺物は出土しなかった。

時期 形状などから、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えられる。

第11号土坑 (N33土坑)

遺構 (第49図、写真図版30)

〔位置・検出面〕 調査区のほぼ中央、第10号土坑の南約3mにある。第IV層で検出した。

〔埋土〕 上位は十和田火山灰の細粒を含む黒色土、それ以下は黒色土・黒褐色土から構成される。いずれも自然堆積である。

〔平面形〕 不整隅丸方形 [規模] 2.16×2.43m [深さ] 30cm [壁] いずれの壁も直立気味に立ち上がる。

〔底面〕 第V層を底面とし、部分的に凹みがみられるところがある。それ以外はほぼ平坦である。

〔遺構の性格〕 貯蔵用の土坑、もしくは何らかの作業場的な用途かと思われる。

遺物は出土しなかった。

時期 形状などから、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えられる。

第12号土坑 (N34土坑)

遺構 (第49図、写真図版30)

〔位置・検出面〕 平坦部中央北寄りのN34区に位置し、この北西側約2.0mには第11号土坑が、南側には焼土遺構が3基ある。検出面は第II層である。

〔埋土〕 2層に分層される。上位は焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土、下位は十和田火山灰の小ブロックを含む黒色土からなる。

〔平面形〕 不整隅丸形 [規模] 0.80×1.18m [深さ] 41cm

〔壁〕 外傾して立ち上がる。〔底面〕 第IV層を底面とし、ほぼ平坦である。

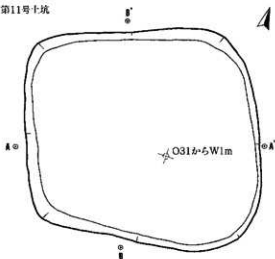
〔遺構の性格〕 不明である。

遺物 (第108図、写真図版65)

〔出土状況〕 土師器の甕の破片が数点出土した。うち、1点を掲載した。

時期 出土遺物の特徴や埋土に火山灰が観察されることから、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構としておく。

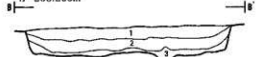
第11号土坑



L=206.200m



B=206.200m

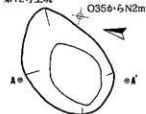


11号土坑 (N33土坑)

(A-A'-B-B')

- 1 10VR2/1黒色シルト To-aの緑粘・オレンジハリス・黒土ブロック含む。
- 2 10VR1.7/1黒色粘上質シルト オレンジハリス・黒色土粒含む。
- 3 10VR3/2黒色粘上質シルト 褐色土層小ブロック含む。

第12号土坑



L=206.200m



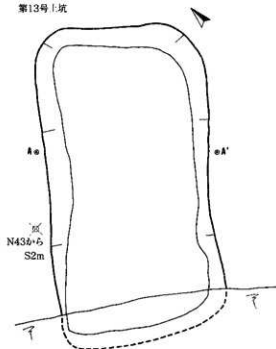
12号土坑 (N34土坑)

(A-A')

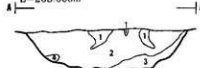
- 1 7.5VR2/2黒褐色シルト 多量に赤褐色土粒・炭化物粒を含む。
- 2 10VR2/1黒色シルト To-aの黒小ブロック・砂子を含量に含む。

0 1:40 1m

第13号土坑



L=205.000m

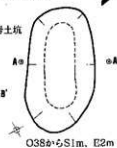


13号土坑 (N43土坑)

(A-A')

- 1 10VR2/1黒色シルト 空木断面。
- 2 10VR2/2黒褐色シルト To-aの黒小ブロック・褐色土粒を含む。
- 3 10VR2/2黒褐色シルト 2より若干下出峰を認むる。
- 4 10VR2/2黒褐色シルト V層粘層粘層。

第14号土坑



第15号土坑



L=205.900m

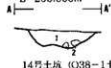


15号土坑 (O38-2土坑)

(B-B')

- 1 10VR2/2黒褐色シルト 上部・粘褐色土ブロック状を含む。To-a下に掘入。
- 2 10VR3/1黒色シルト オレンジハリスをばらに含む。

L=205.900m



(A-A')

- 1 10VR4/1褐色シルト
- 2 10VR2/1黒色シルト

第49図 土坑 (4)

第13号土坑 (N43土坑)

遺構 (第49図、写真図版31)

〔位置・検出面〕 調査区南端部東寄りのN43区、遺跡の最南端部に位置する。遺構南側は、事業地内ではあったが、農道の法面にかかるおそれがあったため、あとわずかのところで全範囲を精査することができなかった。第7号住居状遺構と隣接するが、東方向に5mほどの距離がある。検出面は第IV層であるが、第II層で確認すべき遺構と思われる。

〔埋土〕 黒褐色土を主体とし、部分的に第IV層起源の崩落土、十和田a火山灰の極小ブロック、褐色土粒を含んでいる。

〔平面形〕 隅丸長方形 [規模] 1.74×(3.20)m [深さ] 47cm

〔壁〕 底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。〔底面〕 第V層を底面とし、細かい凹凸が明瞭である。

〔遺構の性格〕 形状から墓壇の可能性はあるが、埋め戻された線子は見受けられず、規模も二回りぐらい大きい。底面の凹凸も気になるが、その理由はわからなかった。性格については不明としておく。

遺物 (第108図、写真図版65)

〔出土状況〕 埋土から土師器坏が数点出土している。3点掲載した。

時期 出土遺物の特徴から、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えられる。

第14号土坑 (O38-1土坑)

遺構 (第49図、写真図版31)

〔位置・検出面〕 平坦部中央東寄り、O38区に位置する。第15号土坑とは南に40cmの距離がある。検出面は第II層である。

〔埋土〕 褐色土の単層で、黒色土の小ブロックを含む。

〔平面形〕 長楕円形。〔規模〕 0.70×1.30m [深さ] 19cm [壁] 緩やかに外傾して立ち上がる。

〔底面〕 第III層を底面とする。土層観察用ベルト以外の壁・底面は掘りすぎている。

〔遺構の性格〕 不明である。

遺物は出土していない。

時期 検出面から、平安時代の遺構としておく。

第15号土坑 (O38-2土坑)

遺構 (第49図、写真図版31)

〔位置・検出面〕 第14号土坑と40cmほどの距離をおく。検出面は第II層である。

〔埋土〕 黒褐色土からなるが、2層に分層された。上位層に十和田a火山灰の小ブロックを含んでいる。

〔平面形〕 円形 [規模] 0.41×0.57m [深さ] 64cm

〔壁〕 直立気味に立ち上がる。〔底面〕 第V層を底面とする。

〔遺構の性格〕 大きめの柱穴ほどの規模であるが土坑として扱った。性格は不明である。

遺物は出土していない。

時期 埋土に火山灰を含むことから、平安時代の遺構としておく。

第16号土坑 (O39土坑)

遺構 (第50図、写真図版31)

〔位置・検出面〕 平坦部中央東寄りのO39区、第9号住居跡と第11号住居跡のほぼ中間に位置する。検出面は第11層である。

〔埋土〕 最上位の黒色土とそれ以下の黒褐色土からなるが、黒色土中には十和田a火山灰を含んでいる。

〔平面形〕 槽円形 〔規模〕 0.96×1.31m 〔深さ〕 40cm

〔壁〕 外傾して立ち上がる。〔底面〕 第IV層を底面とし、ほぼ平坦である。〔遺構の性格〕 不明である。

遺物 (第108図、写真図版65)

〔出土状況〕 須恵器の甕類の破片が出土した。量はさほどではない。

時期 出土遺物や埋土に火山灰を含む点から、平安時代の遺構と思われる。

第17号土坑 (O39-3土坑)

遺構 (第50図、写真図版32)

〔位置・重複・検出面〕 平坦部中央からやや南東寄りのO39区に位置し、第9号住居跡の南東壁に重複して確認された。本遺構が切られていることから、住居跡よりも古い。検出面は第11層である。

〔埋土〕 6層に分層された。上位から中位にかけては炭化物や焼土粒を含む黒褐色土を主体とし、それ以下は、十和田a火山灰を含む黒色土、焼土粒を含む暗褐色土、厚さ数cmの灰層、灰を含む黒褐色土などから構成される。底面は焼けの悪い焼土が形成されている。〔平面形〕 不整形円形 〔規模〕 1.12m×? 〔深さ〕 30cm

〔壁〕 南東壁の状況は、底面から緩やかに外傾しながら立ち上がっている。

〔底面〕 第IV層を底面とし、ほぼ平坦である。前述のとおり、35×45cmほどの焼土が観察されるが、厚さは6cm程度で、わずかに灰も含んでいる。

〔遺構の性格〕 検出された20基の土坑のうち、唯一底面に焼土が形成されているものである。第6号住居跡で確認されているロクロピットとの関連から、土坑内の焼土の発達が底面のみであったり、焼け具合も悪いなど根拠とするには弱い部分はあるが、ここでは土器焼成遺構の可能性を示しておきたい。

遺物 (第108図、写真図版65)

〔出土状況〕 埋土から土師器の杯・甕が数点と手持ち砥石の細片1点(不掲載)が出土した。2点掲載した。

時期 出土遺物の特徴から、平安時代(9世紀中頃~10世紀初頭)の遺構と考えられる。

第18号土坑 (P41土坑)

遺構 (第50図、写真図版32)

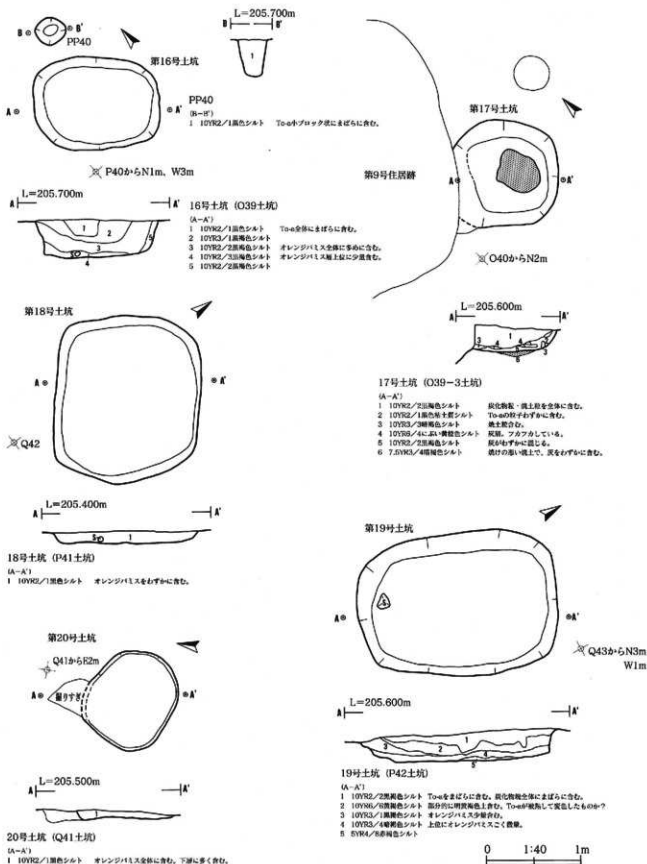
〔位置・検出面〕 調査区平坦部南東側のP41区に位置し、第20号土坑とは南西方向に約2mの距離がある。検出面は第IV層であるが、第II層~第III層の段階で検出すべきものである。十和田a火山灰の入りか少ないため、第II層面では確認できなかった。

〔埋土〕 黒色土の単層で、オレンジパミスをまばらに含んでいる。

〔平面形〕 隅丸方形 〔規模〕 1.54×1.76m 〔深さ〕 13cm

〔壁〕 緩やかに外傾して立ち上がる。〔底面〕 第V層を底面とし、ほぼ平坦である。

〔遺構の性格〕 貯蔵用もしくは何らかの作業場の用途と思われる土坑としておく。



第50図 土坑 (5)

遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物もなく検出面も定かではないが、平安時代の遺構としておく。

第19号土坑 (P42土坑)

遺構 (第50図、写真図版32)

〔位置・検出面〕 調査区平坦部南東隅のP42区に位置する。第7号伴后状遺構とは南西に約1.4mの距離がある。検出面は第Ⅲ層上面である。

〔埋土〕 5層に分層された。上位は十和田 a 火山灰・炭化物を含む黒色土、中位は炭化物を含む明黄褐色土(十和田 a 火山灰が赤っぽく変色したのか?)と黒褐色土、下位は暗褐色土と焼けの悪い焼土から構成される。人為的に埋め戻された様相である。

〔平面形〕 隅丸長方形 〔規模〕 1.30×2.12m 〔深さ〕 31cm

〔壁〕 北東壁は直立して外傾し、南西壁は底面から緩やかに段差をもって立ち上がっている。

〔底面〕 第Ⅴ層を底面とし、底面自体はほぼ平坦である。南西壁際には、径10～15cmほどの礫が一つ置かれていた。

〔遺構の性格〕 後述するが、出土遺物や埋土の状況、形状から墓塚の可能性はある。埋土に火山灰がうつすら変色したような箇所が見受けられるが、被熱によるものかは判断できなかった。

遺物 (第108・109図、写真図版65)

〔出土状況〕 埋土からは土師器の坏・甕類、黒曜石製のスクレーパーが出土した。7点図示している。

時期 出土遺物の特徴から、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えられる。

第20号土坑 (Q41土坑)

遺構 (第50図、写真図版32)

〔位置・検出面〕 平坦部南東側のQ41区に位置する。第Ⅳ層で検出したが、これも本来第Ⅱ層～第Ⅲ層の段階で検出すべきものである。

〔埋土〕 黒色土の単層で、オレンジバミスを含む。

〔平面形〕 不整形円形 〔規模〕 1.30×1.37m 〔深さ〕 15cm

〔壁〕 北側の壁を掘りすぎている。壁は外傾して立ち上がる。〔底面〕 第Ⅴ層を底面とし、ほぼ平坦である。

〔遺構の性格〕 不明である。

遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物もなく詳細な時期は不明だが、平安時代に属する可能性がある。

(飯坂・濱田)

4. 焼土遺構

焼土遺構は全部で10基検出した。検出箇所と時代は、尾根部で縄文時代のものが1基、斜面部で平安時代と思われるものが4基、平坦部で平安時代のものが4基と現代のものが1基である。

第1号焼土遺構 (K28焼土)

遺構 (第51図、写真図版33)

〔位置・検出面〕 斜面部割のK28区、第2号住居状遺構の南東約2mに位置する。第Ⅲ層中で検出した。

〔焼成〕 第Ⅲ層が赤褐色に変色し、焼け具合も良好な現地性焼土である。

〔平面形〕 不整円形 (規模) 47×48cm (厚さ) 7~11cm

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、平安時代に属するものと思われる。

第2号焼土遺構 (M35焼土)

遺構 (第51図、写真図版33)

〔位置・検出面〕 平坦部中央北寄りM35区にあり、第4号住居状遺構の北に第3号・第4号焼土遺構とともに検出された。検出面は第Ⅱ層上面である。

〔焼成〕 第Ⅱ層が橙色に変色するか焼けは悪い。現地性焼土である。

〔平面形〕 不整形 (規模) 20×52cm (厚さ) 3cm前後

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、平安時代に属するものと思われる。

第3号焼土遺構 (N35-1焼土)

遺構 (第51図、写真図版33)

〔位置・検出面〕 平坦部中央北寄りN35区にある。検出面は第Ⅱ層上面である。

〔焼成〕 第Ⅱ層が橙色に変色し、焼けも良好な現地性焼土である。〔平面形〕 不整形 (規模) 41×48cm

〔厚さ〕 2~3cm

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、平安時代に属するものと思われる。

第4号焼土遺構 (N35-2焼土)

遺構 (第51図、写真図版33)

〔位置・検出面〕 平坦部中央北寄りN35区にある。検出面は第Ⅱ層上面である。

〔焼成〕 第Ⅱ層が橙色に変色するが、焼けはあまり良くない現地性焼土である。

〔平面形〕 L字形 (規模) 幅10~15cm、長さ70cm前後 (厚さ) 3cm前後

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、平安時代に属するものと思われる。

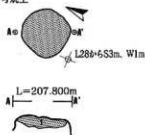
第5号焼土遺構 (N41焼土)

遺構 (第51図、写真図版34)

〔位置・検出面〕 平坦部南東寄りのN41区にある。隣接する遺構はない。検出面は第Ⅱ層上面である。

〔焼成〕 第Ⅱ層が暗褐色に変色するが、焼けはあまり良くない。投げ込まれたものか。

第1号焼土



1号焼土 (N27焼土)

(A-A')
1 5YR4/6赤褐色シルト 焼けは中等、良好。

N35からS1m

第2号焼土

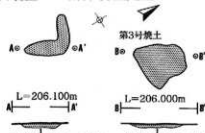


2号焼土 (M35焼土)

(A-A')
1 7.5YR2/6褐色シルト 赤褐色の粘粉質をブロックで含む。硬質は不明、良好らしい。

第4号焼土

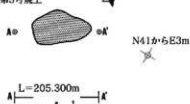
N35からS1m、E2m



3号焼土 (N35-1焼土)・4号焼土 (N35-2焼土)

(A-A')
1 7.5YR2/6褐色シルト 赤褐色の粘粉質をブロックで含む。硬質は不明、A-A'は良好らしい。

第5号焼土



5号焼土 (N41焼土)

(A-A')
1 7.5YR2/4暗褐色シルト 焼けはまれれた焼土かつ良好らしい。

O31からS1m、E1m

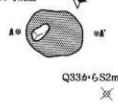
第6号焼土



6号焼土 (O31焼土)

(A-A')
1 10YR2/2黒褐色シルト 褐色質、におい、赤褐色土のブロックを含む。

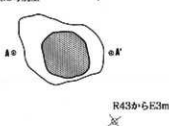
第7号焼土



7号焼土 (Q33焼土)

(A-A')
1 5YR4/3赤褐色シルト 土層断面を含む焼土。硬より表面の焼けが良好。

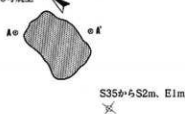
第8号焼土



8号焼土 (S35焼土)

(A-A')
1 5YR5/8暗赤褐色シルト 赤でられたようなしまりのない焼土。
2 5YR4/8赤褐色シルト 1と異なる焼けのよい焼土。
3 10YR2/4暗褐色シルト におい、黄褐色土、焼土を含む。
4 10YR2/2黒褐色シルト Sの小ブロック・焼土を含む。

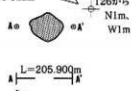
第9号焼土



9号焼土 (S35焼土)

(A-A')
1 10YR2/2黒褐色シルト 焼土灰、酸化鉄を全体に含む。
2 5YR4/3赤褐色シルト 焼けは良好。

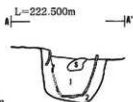
第10号焼土



10号焼土 (T25焼土)

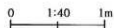
(A-A')
1 7.5YR5/6暗褐色 焼けのよい焼土。

第1号土器埋設遺構



1号土器埋設遺構 (T25埋設土器)

(A-A')
1 10YR4/4褐色シルト 土層よりほとんどない。
2 10YR4/3褐色シルト V層との区別は不明確。土層の層り方。



第51図 焼土遺構・土器埋設遺構

〔平面形〕 不整形 〔規模〕 37×62cm 〔厚さ〕 2cm前後

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、平安時代に属するものと思われる。

第6号焼土遺構 (O31焼土)

遺構 (第51図、写真図版34)

〔位置・検出面〕 斜面部O31区にあり、第9号土坑の北東約1.5mに位置する。検出面は第Ⅲ層中である。

〔焼成〕 第Ⅲ層がにぶい赤褐色に変色する部分があるのみで、焼けは良くない。炭化物が混入している。

〔平面形〕 ほぼ円形 〔規模〕 44×46cm 〔厚さ〕 4cm前後

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、平安時代に属するものと思われる。

第7号焼土遺構 (Q33焼土)

遺構 (第51図、写真図版34)

〔位置・検出面〕 斜面部Q33区にある。検出面は第Ⅲ層中である。

〔焼成〕 赤褐色に変色し、西側に罅を伴う。焼けは良好である。

〔平面形〕 ほぼ円形 〔規模〕 50×58cm 〔厚さ〕 8cm前後

遺構 (第109図、写真図版65)

〔出土状況〕 焼土の周辺から土師器の坏・甕が数点出土した。2点掲載した。

時期 出土遺物・検出状況から、平安時代に属する焼土遺構である。

第8号焼土遺構 (R43焼土)

遺構 (第51図、写真図版34)

〔位置・検出面〕 平坦部南東端のR43区に位置する。第15号住居跡の範囲内にあるが、検出面は第Ⅰ層耕作土中である。

〔焼成〕 現地性のものと他で焼かれ投げ込まれたものが混在している。また、焼土の周りを囲むように、黄褐色の土が広がっている。どのような構造の施設なのかは不明である。

〔平面形〕 ほぼ円形 〔規模〕 47×48cm 〔厚さ〕 10cm前後

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、現代の焼土遺構である。

第9号焼土遺構 (S35焼土)

遺構 (第51図、写真図版35)

〔位置・検出面〕 斜面部南東端S35区にある。検出面は第Ⅲ層中である。

〔焼成〕 第Ⅲ層が赤褐色に変色し、焼けも良好な現地性の焼土である。

〔平面形〕 隅丸長方形 〔規模〕 46×70cm 〔厚さ〕 8cm前後

遺物 〔出土状況〕 焼土の周辺から土師器の坏が1点出土したが、細片のため掲載しなかった。

時期 出土遺物・検出状況から、平安時代に属する焼土遺構である。

第10号焼土遺構 (T25焼土)

遺構 (第51図、写真図版35)

[位置・検出面] 尾根部東端T25区にあり、第1号土器埋設遺構の南約2mに位置する。

[焼成] 第Ⅶ層が明褐色に変色しているが、焼けが悪く不明瞭であった。現地性の焼土であるか否のものではなかった。

[平面形] ほぼ円形 [規模] 26×28cm [厚さ] 5～8cm

遺物は出土しなかった

時期 検出状況から、縄文時代の焼土遺構と思われる。

(濱田)

5. 柱穴

柱穴は、J32区から南東側のM34区にかけての一群と、第4号住居跡の南東側I37区・J37区付近にある一群の、大きく二つにまとまって検出された。これらは、いずれも第Ⅱ層以下を掘り下げた段階、第Ⅳ層の上面で確認したものであるが、本来は古代の遺構検出面で精査すべきものである。これら柱穴群の中には、数個が列をなすような箇所も見受けられたが、建物を構成するには至らず、また柱列として報告すべきものもないと判断した。よって、個々の柱穴については、表2に計測値等を入れた一覧表を、第52・53図に実測図を掲載し報告のすべととする。(写真図版35)

(濱田)

6. 土器埋設遺構

土器埋設遺構は、尾根部東端で1基確認された。時期は縄文時代中期末葉である。本遺構の西側、約2mに第10号焼土があるが、それとの関連は不明である。

第1号土器埋設遺構 (S25土器埋設遺構)

遺構 (第51図、写真図版35)

[位置・検出面] 尾根部東端のS25区にあり、第Ⅰ・Ⅳ層を除去後、第Ⅶ層上面で検出した。

[規模など] 深鉢形の土器が直径約35cm、深さ23cmの掘り方に正位に埋め込んであった。土器の内部には拳大の礫が一個入っている。

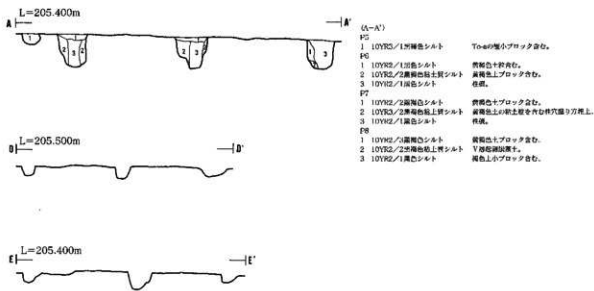
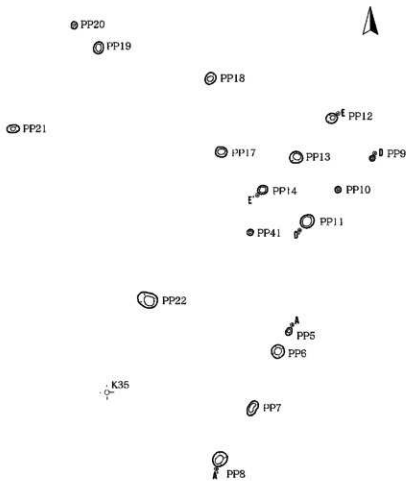
[遺構の性格] 土器内に礫を伴うことから、幼胎児の墓の可能性はあるが断定はできない。

遺物 (第109図、写真図版65)

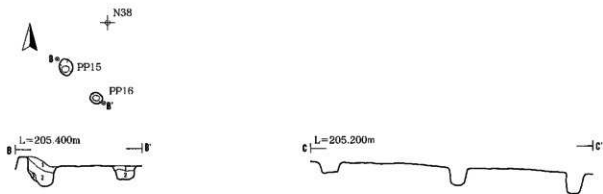
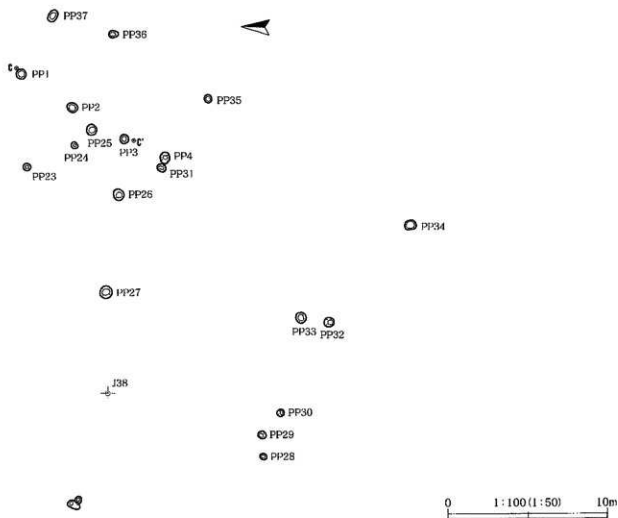
いわゆるキャリパー形の深鉢で、口縁は緩やかに波打ち、平行沈線、横位の列点が一週している。地文は単輪絡条体による懸糸文である。

時期 埋設された土器の特徴から、縄文時代中期末葉の遺構と思われる。

(濱田)



第52図 柱穴 (1)



(注) 単位

P15

- 1 10YR2.5/2.5 黒褐色シルト T₁₀-aのブロックを含む。
- 2 10YR2.5/2.5 黒褐色シルト T₁₀-aの小ブロックを含むツツキを中から取り出す。
- 3 10YR2.5/2.5 黒褐色シルト T₁₀-aの細粒・褐色土ブロックを含む。

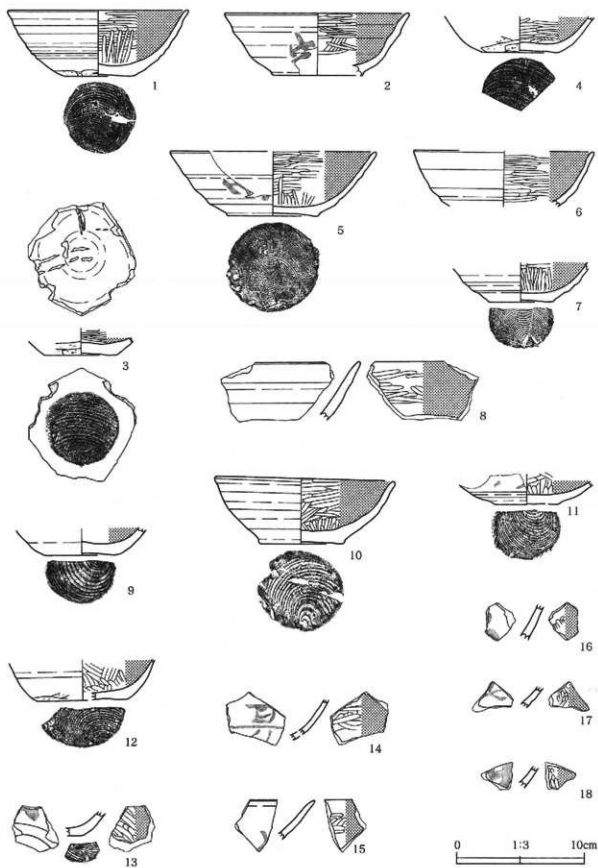
P16

- 1 10YR2.5/2.5 黒褐色シルト T₁₀-aの微小ブロックを含む。
- 2 10YR2.5/2.5 黒褐色シルト 小礫を含む。

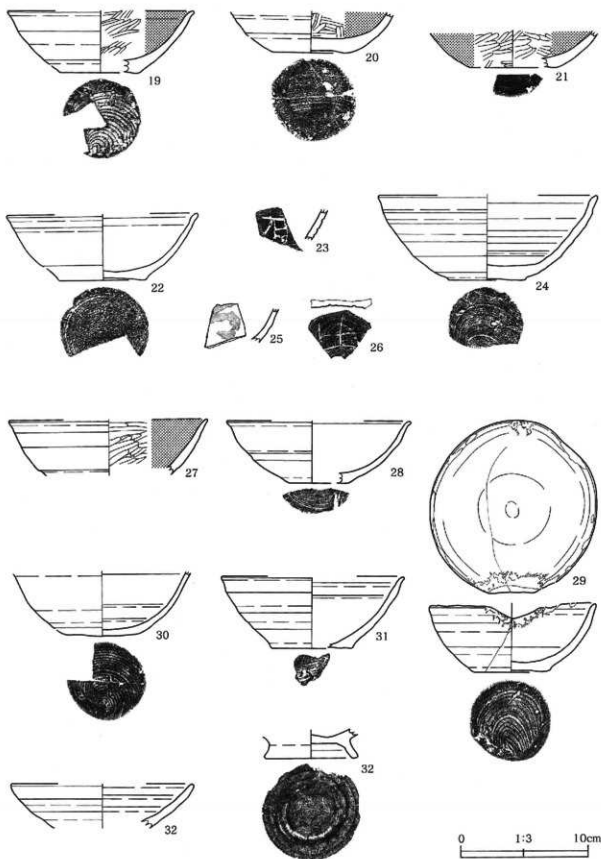
第53図 柱穴 (2)

表2 柱穴観察表

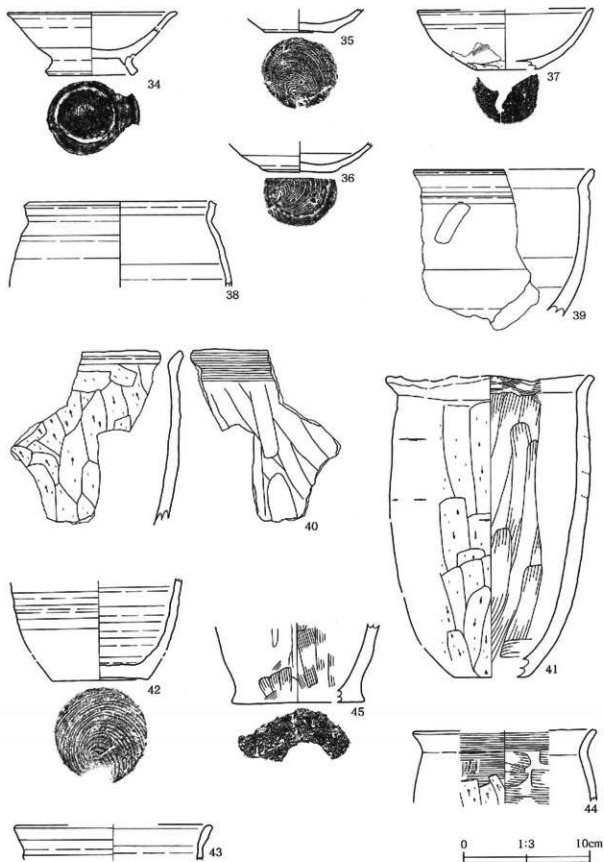
番号	規模(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)
P1	30×30	17.6	204.806
P2	32×31	28.9	204.585
P3	32×29	32.5	204.442
P4	39×31	36.3	204.333
P5	28×18	20.2	205.021
P6	42×40	50.6	204.712
P7	48×28	48.1	204.689
P8	48×46	49.4	204.620
P9	18×17	15.2	205.088
P10	21×18	19.0	205.010
P11	44×42	12.7	205.060
P12	42×30	15.2	205.040
P13	38×31	27.3	204.923
P14	42×38	13.4	205.022
P15	52×39	46.0	204.655
P16	41×34	15.8	204.972
P17	37×31	11.6	205.044
P18	40×33	12.2	205.006
P19	44×29	26.6	204.829
P20	20×20	19.8	204.850
P21	39×26	12.4	204.820
P22	66×50	39.6	204.667
P23	23×22	31.7	204.527
P24	23×21	13.5	204.693
P25	36×34	27.7	204.555
P26	36×34	28.6	204.423
P27	39×38	16.9	204.437
P28	20×20	21.3	204.138
P29	26×21	31.6	204.084
P30	23×21	17.9	204.220
P31	27×24	34.9	204.345
P32	31×31	22.6	204.320
P33	38×32	11.5	204.405
P34	37×29	34.1	204.186
P35	25×20	9.0	204.618
P36	30×25	19.3	204.774
P37	40×30	37.8	204.657
P38	42×26	21.6	204.287
P39	25×22	14.8	204.359
P40	32×28	39.0	205.146
P41	21×17	12.1	205.020



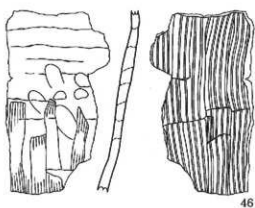
第54図 遺構内出土遺物 (1)



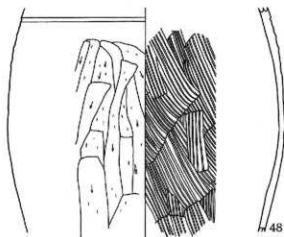
第55図 遺構内出土遺物 (2)



第56図 遺構内出土遺物 (3)



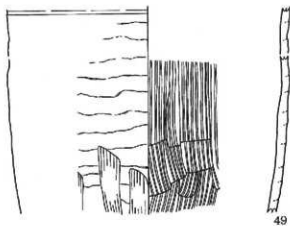
46



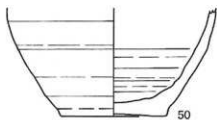
48



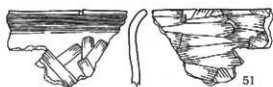
47



49



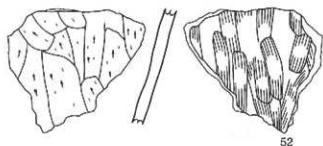
50



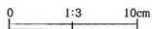
51



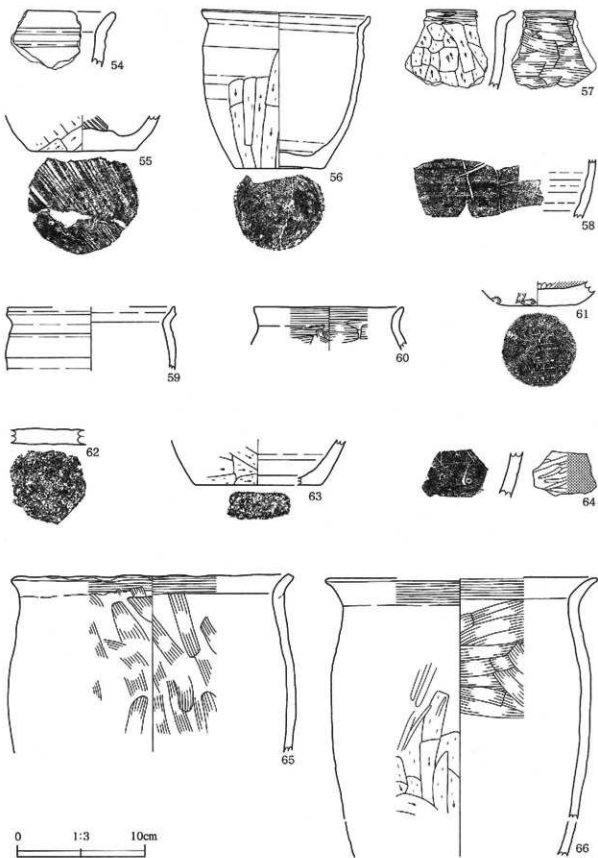
53



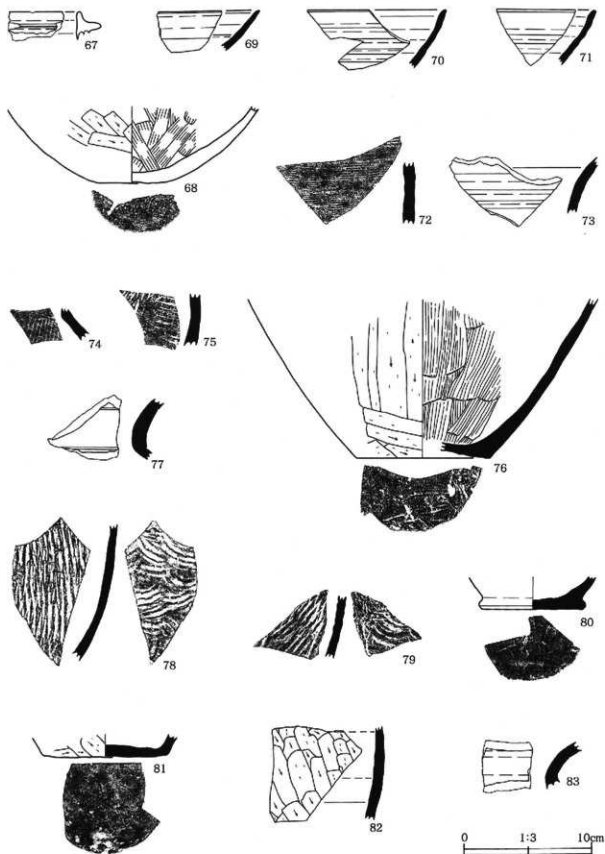
52



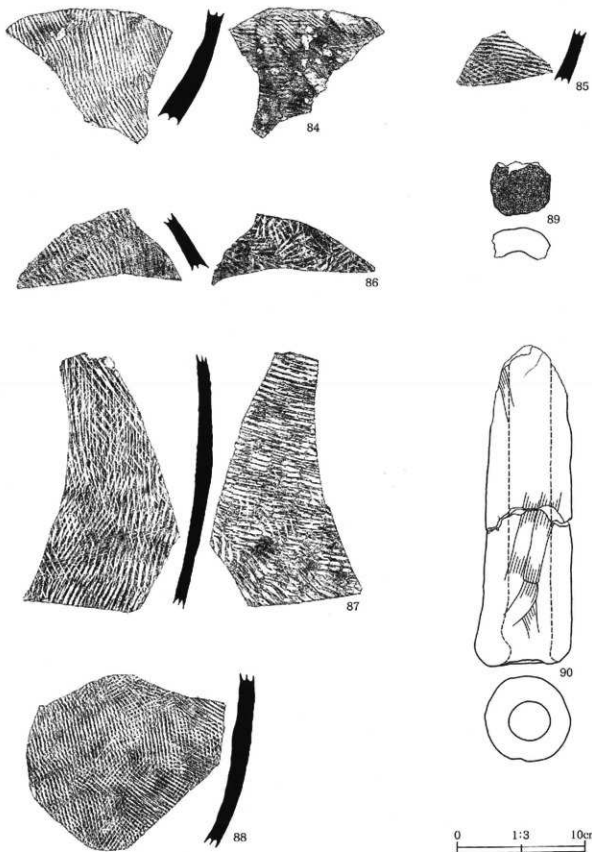
第57図 遺構内出土遺物 (4)



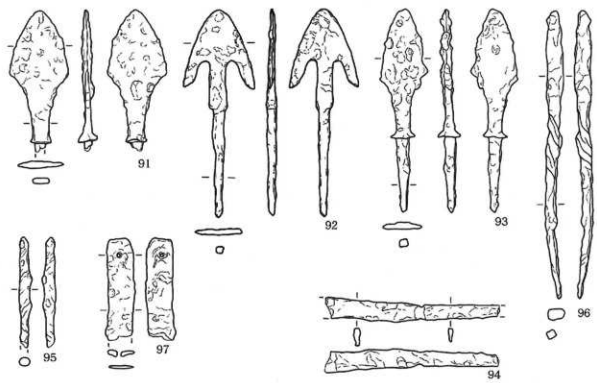
第58図 遺構内出土遺物 (5)



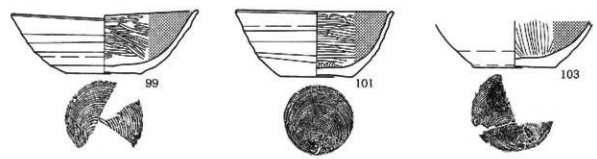
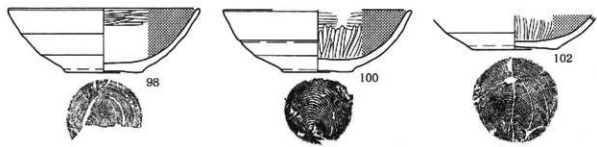
第59圖 遺構内出土遺物 (6)



第60図 遺構内出土遺物 (7)

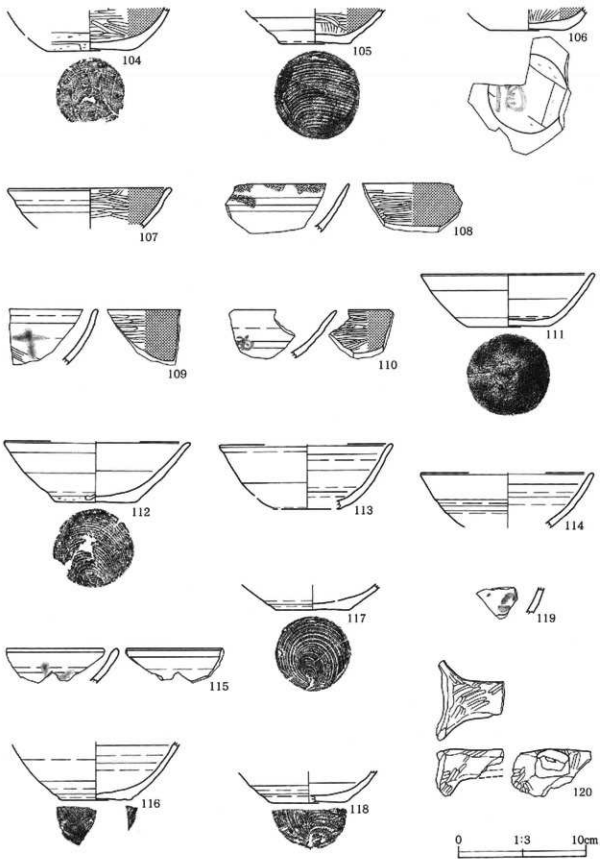


0 1:2 5cm
(91~97)



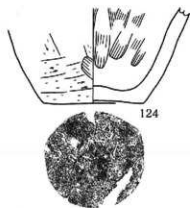
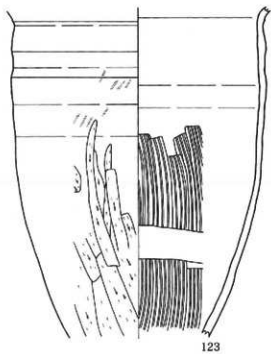
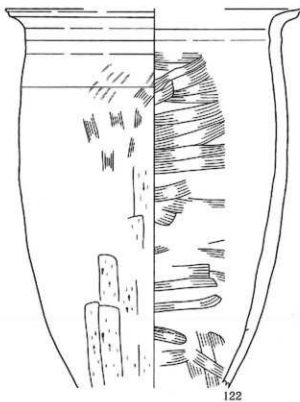
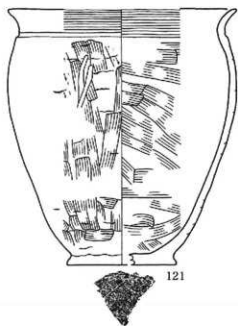
0 1:3 10cm

第61図 遺構内出土遺物 (8)



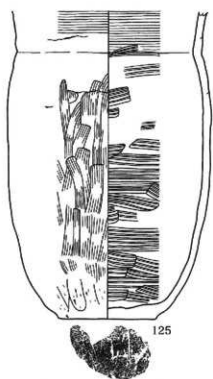
0 1:3 10cm

第62図 遺構内出土遺物 (9)

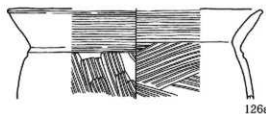


0 1:3 10cm

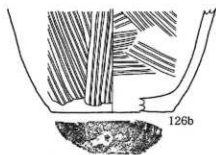
第63図 遺構内出土遺物 (10)



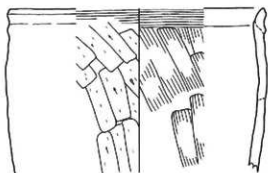
125



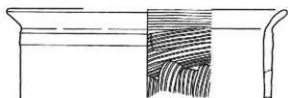
126a



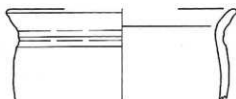
126b



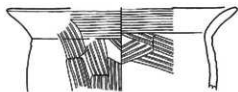
127



128



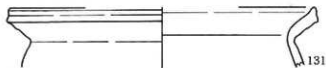
130



129



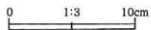
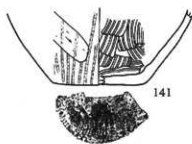
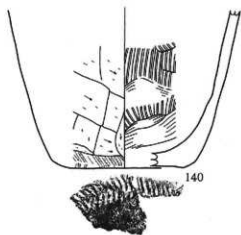
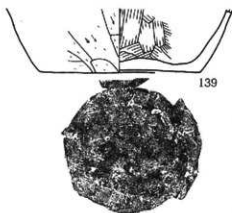
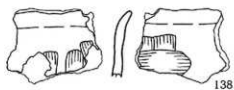
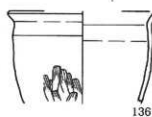
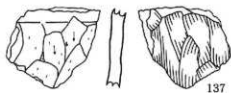
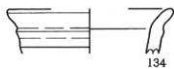
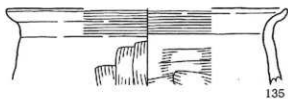
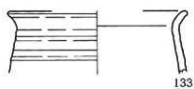
132



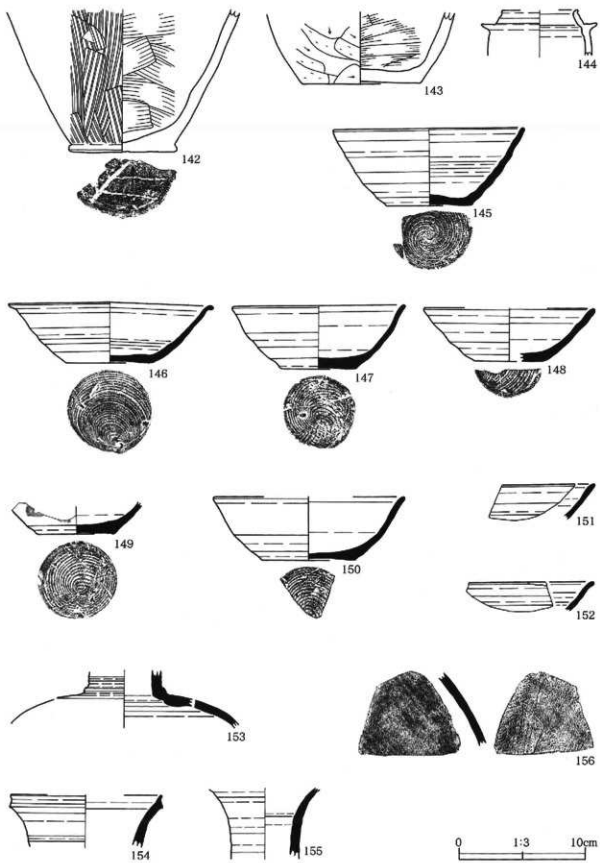
131

0 1:3 10cm

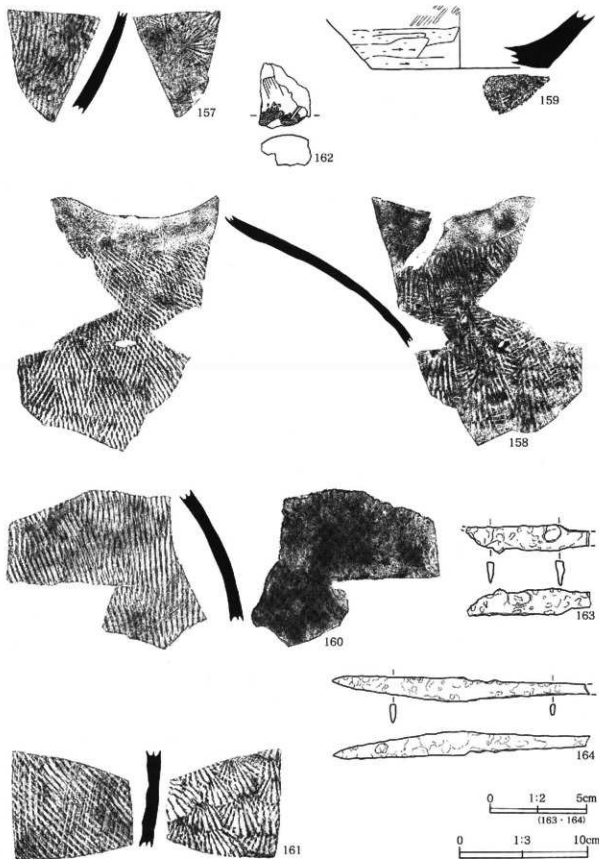
第64図 遺構内出土遺物 (11)



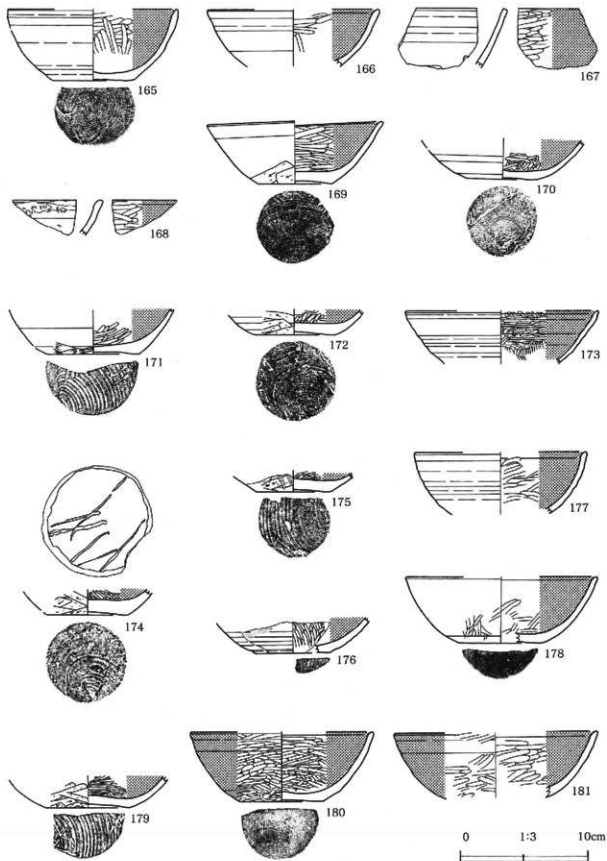
第65圖 道構内出土遺物 (12)



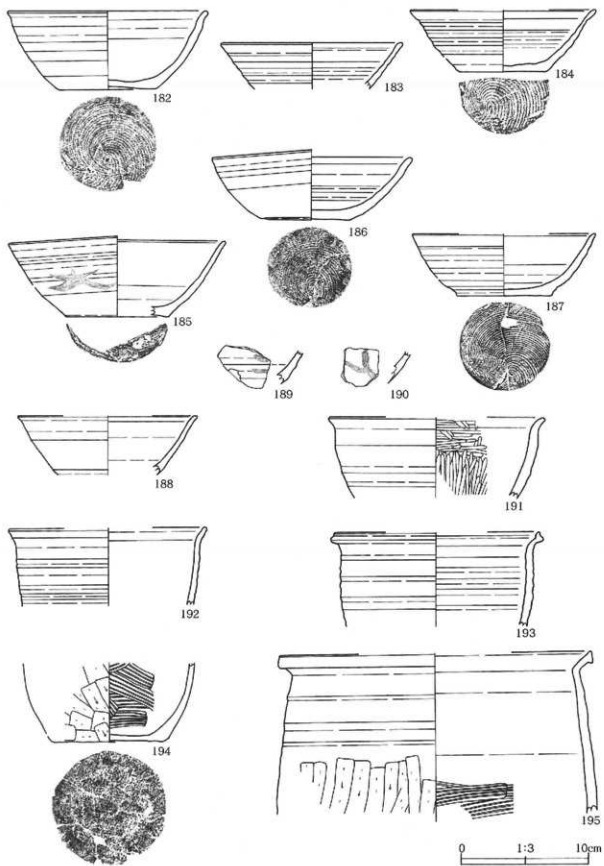
第66図 遺構内出土遺物 (13)



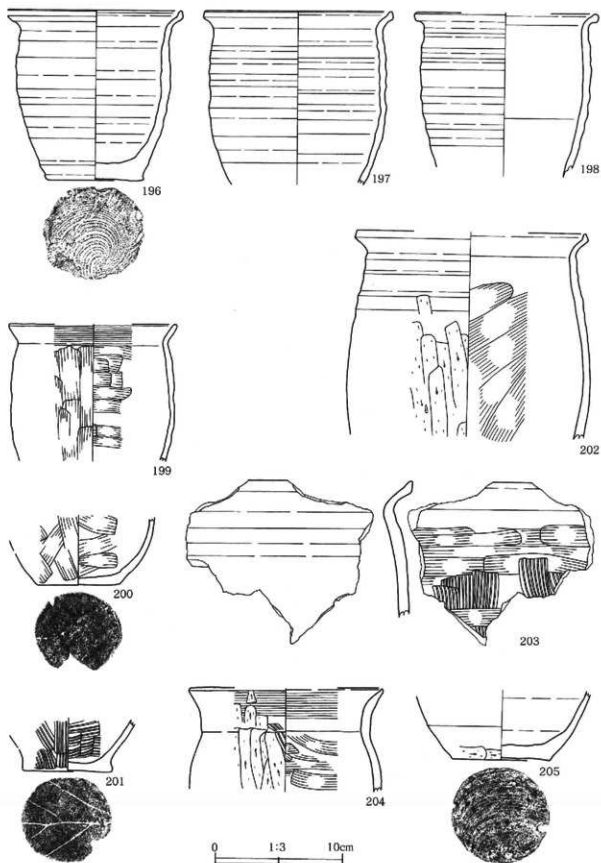
第67図 遺構内出土遺物 (14)



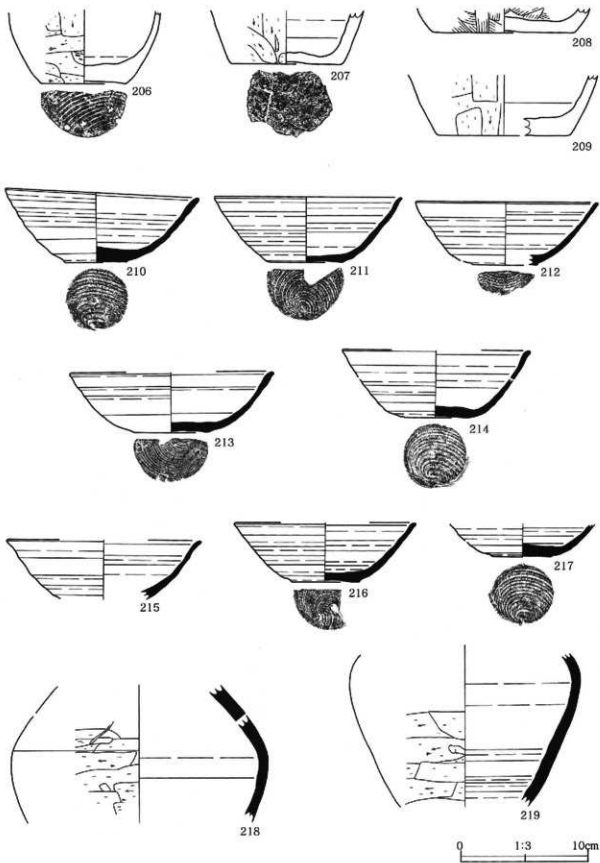
第68図 遺構内出土遺物 (15)



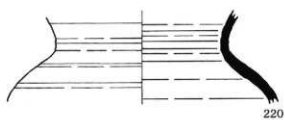
第69図 遺構内出土遺物 (16)



第70図 遺構内出土遺物 (17)



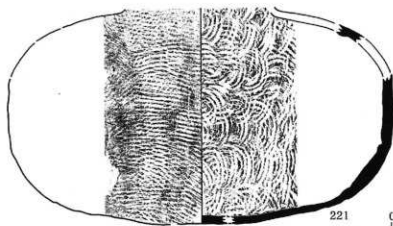
第71図 遺構内出土遺物 (18)



220

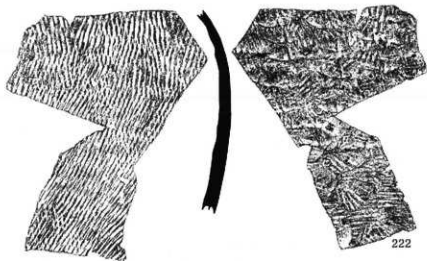


224

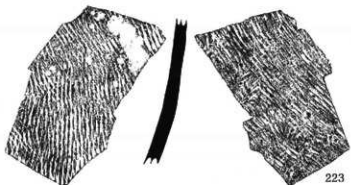


221

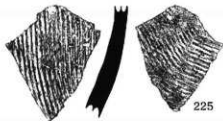
0 1:4 10cm
(221)



222



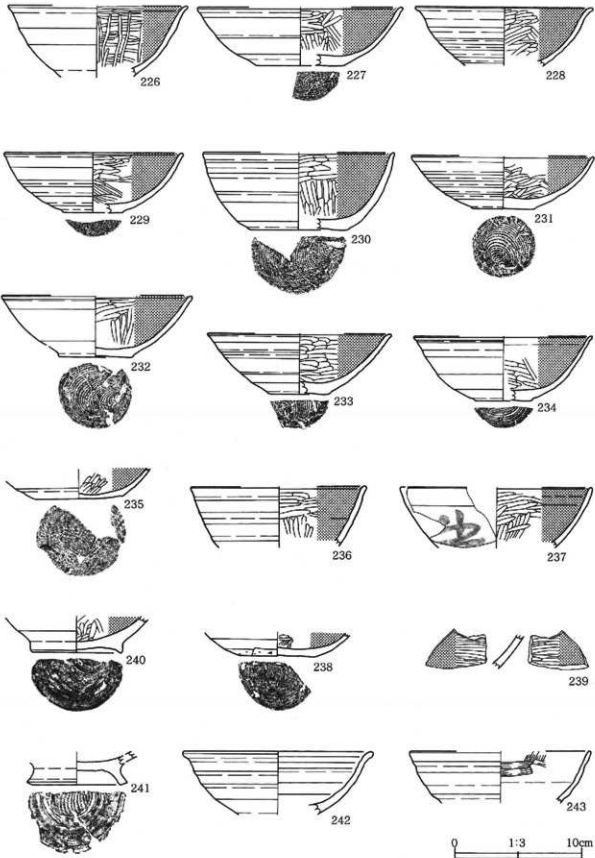
223



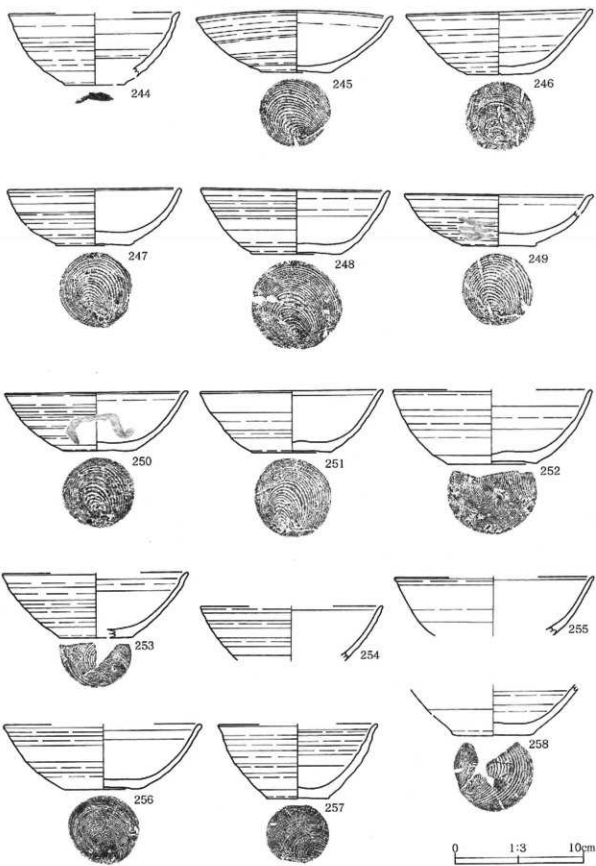
225

0 1:3 10cm

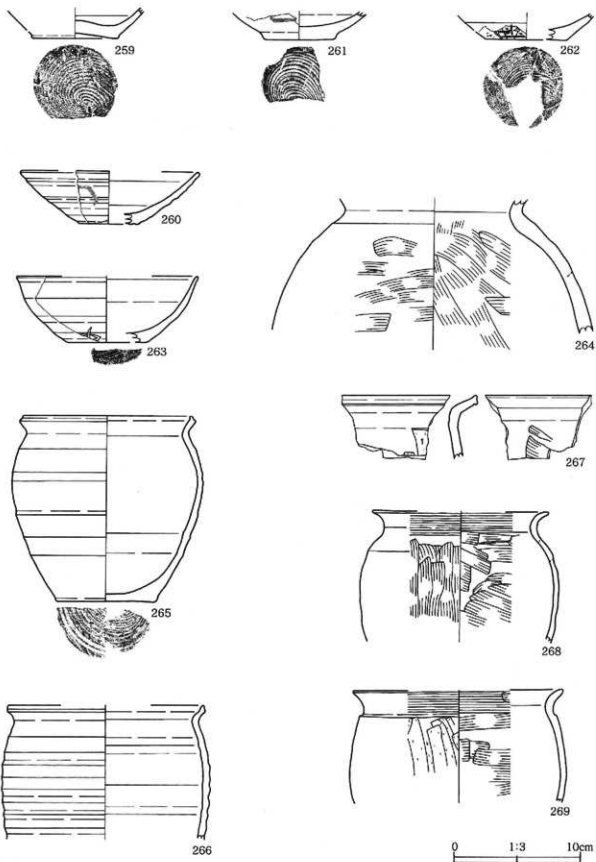
第72図 遺構内出土遺物 (19)



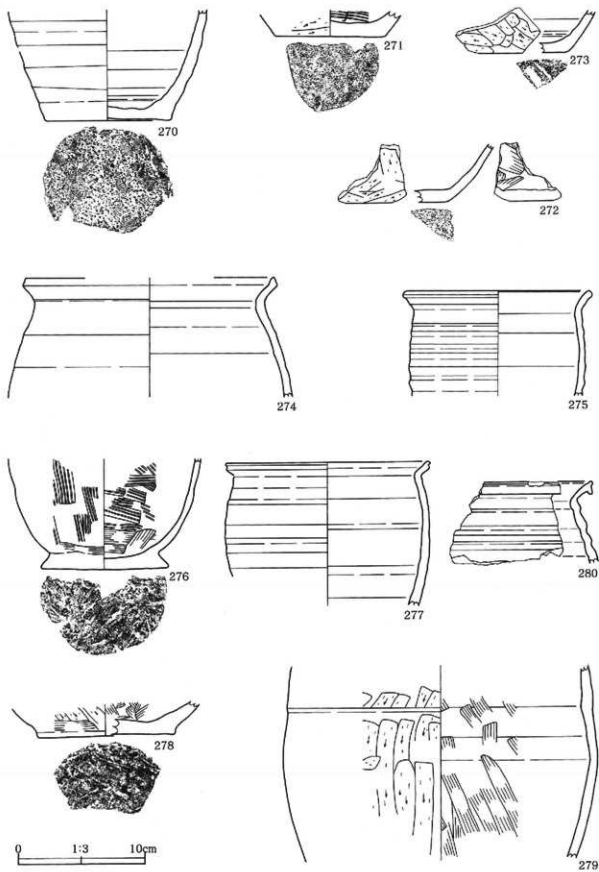
第73図 遺構内出土遺物 (20)



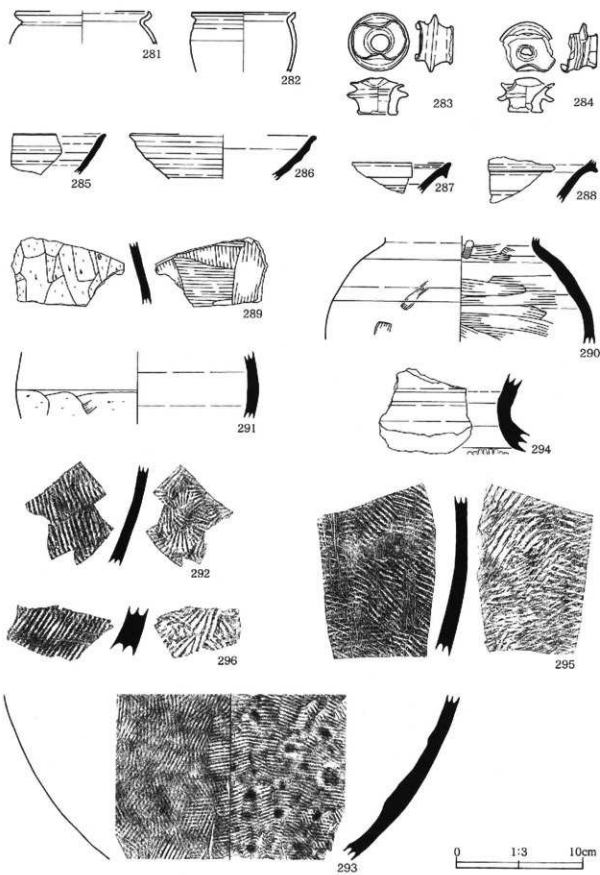
第74図 遺構内出土遺物 (21)



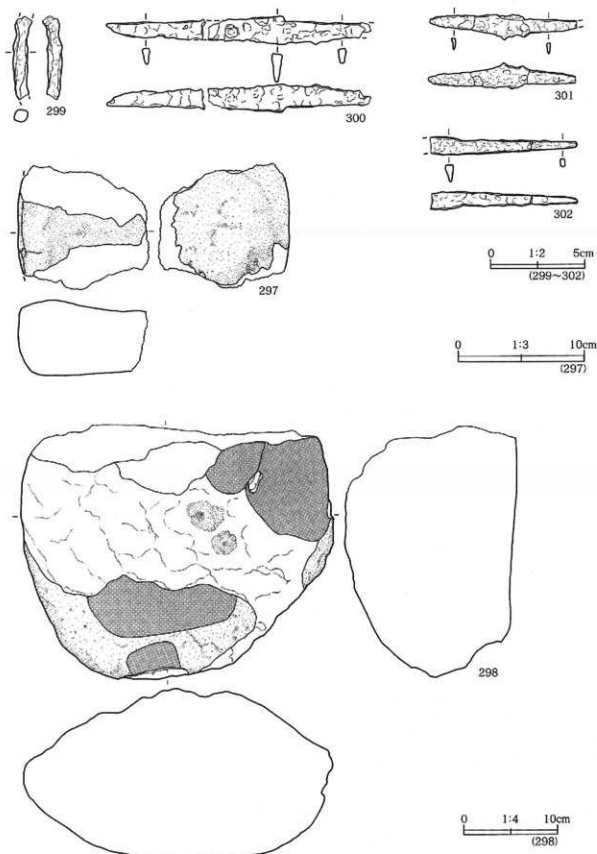
第75図 遺構内出土遺物 (22)



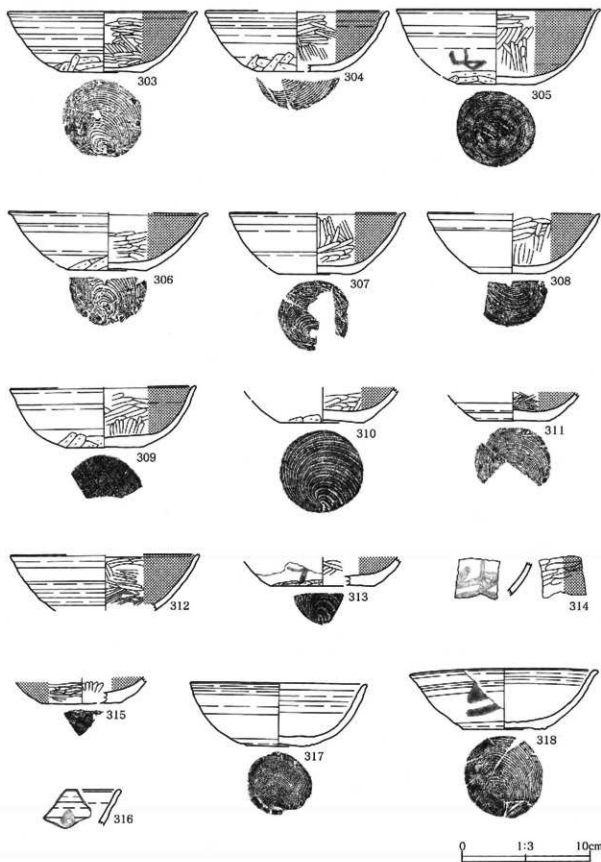
第76図 遺構内出土遺物 (23)



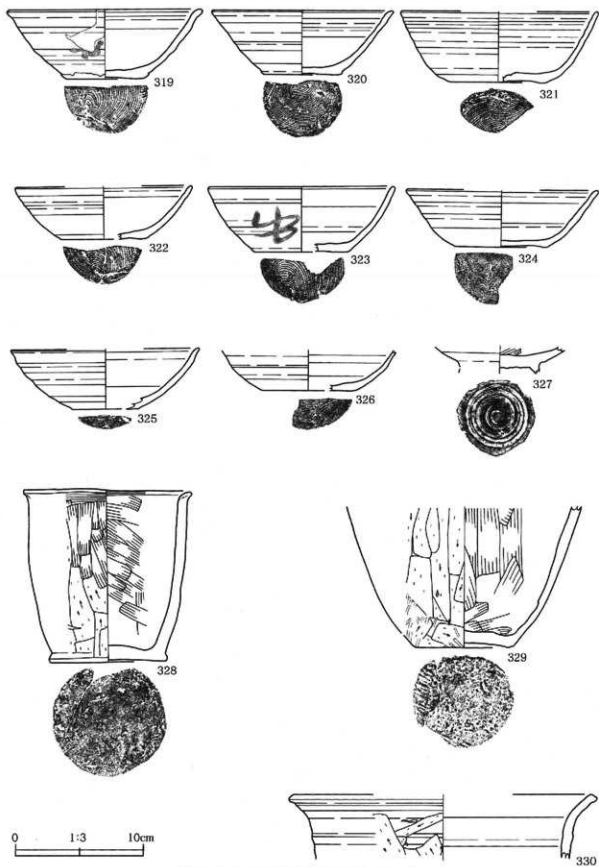
第77図 遺構内出土遺物 (24)



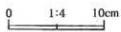
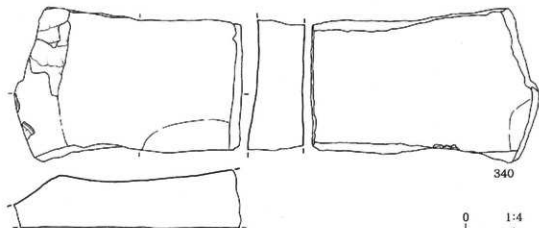
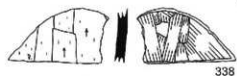
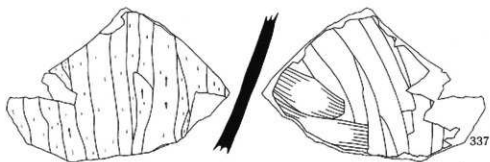
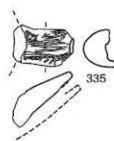
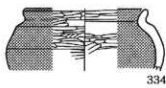
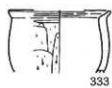
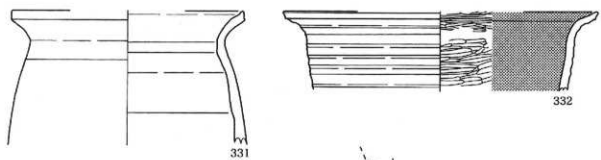
第78図 遺構内出土遺物 (25)



第79図 遺構内出土遺物 (26)

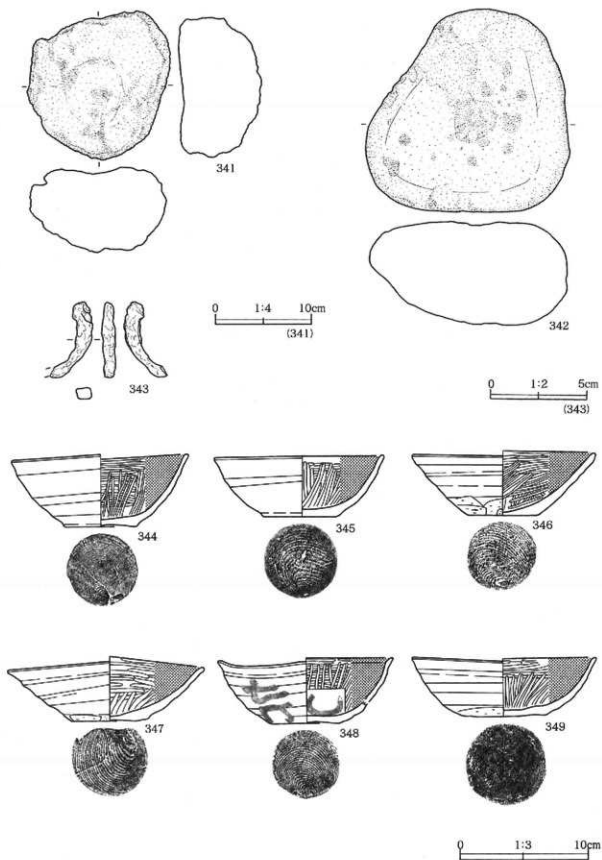


第80圖 遺構内出土遺物 (27)

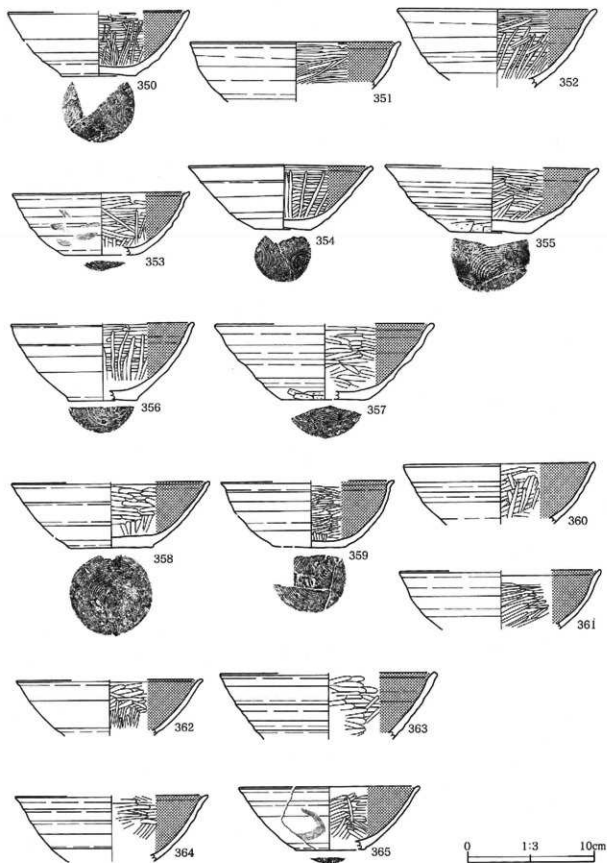


第81図 遺構内出土遺物 (28)

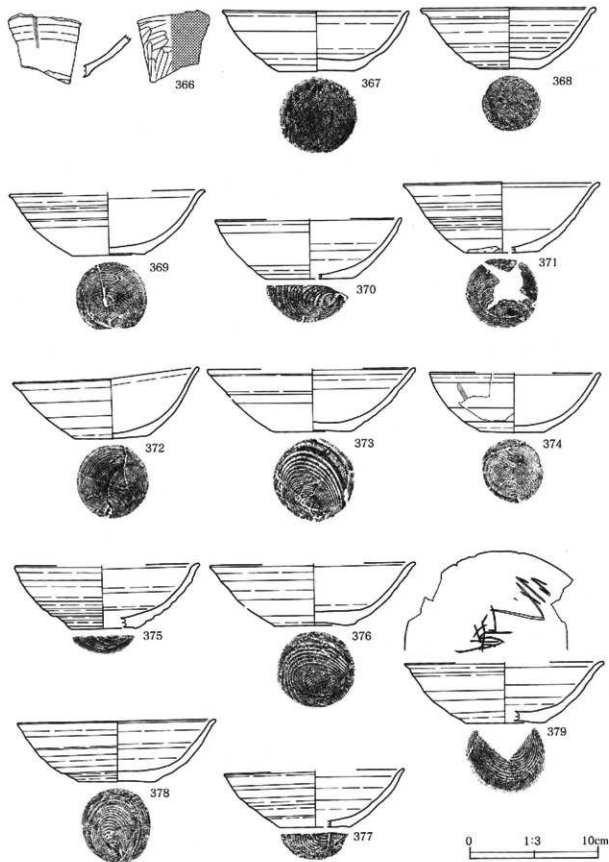
(340)



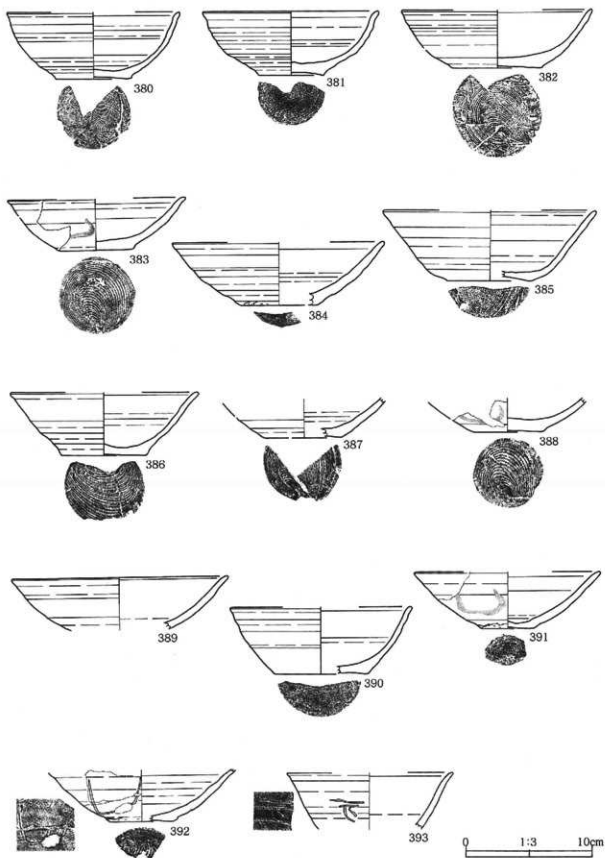
第82図 遺構内出土遺物 (29)



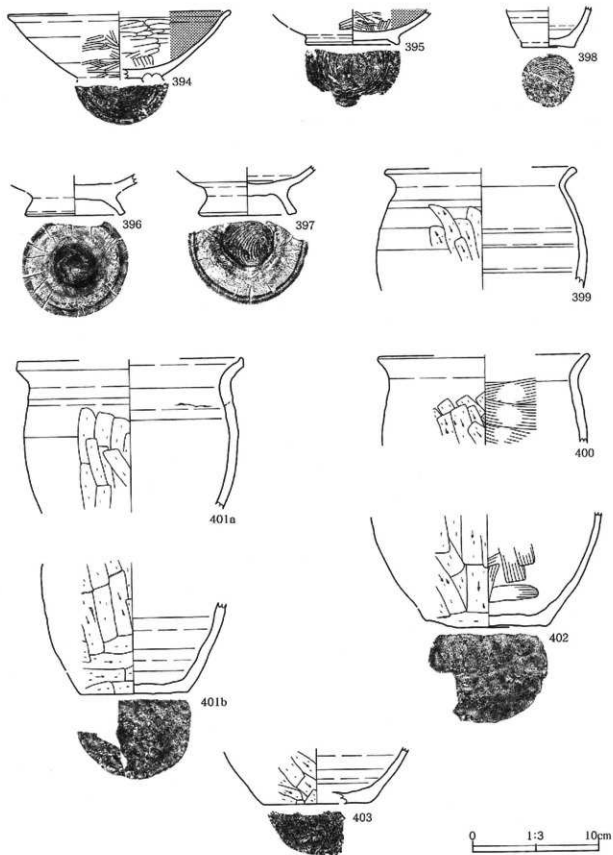
第83図 遺構内出土遺物 (30)



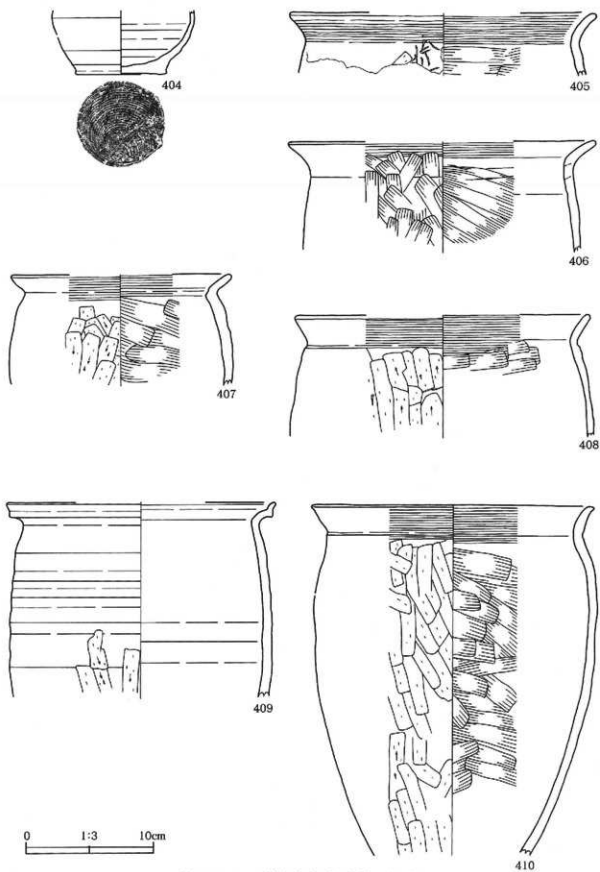
第84図 遺構内出土遺物 (31)



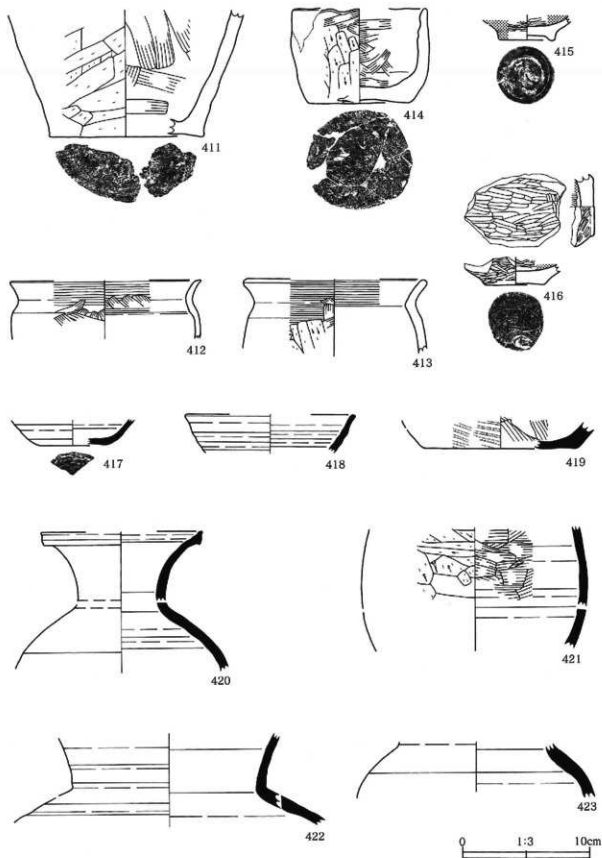
第85図 遺構内出土遺物 (32)



第86图 遺構内出土遺物 (33)



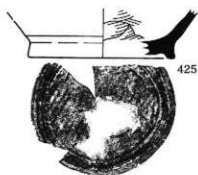
第87図 遺構内出土遺物 (34)



第88図 遺構内出土遺物 (35)



424



425

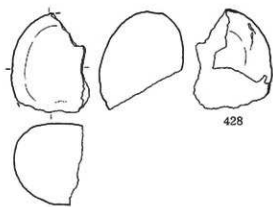


426

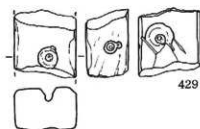


427

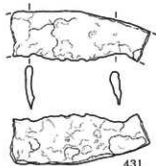
0 1:3 10cm



428



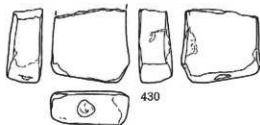
429



431



432



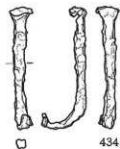
430

0 1:2 5cm
(429~432)

第89圖 遺構内出土遺物 (36)



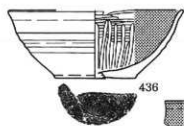
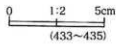
433



434



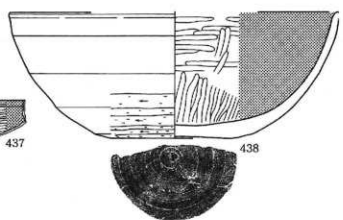
435



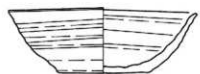
436



437



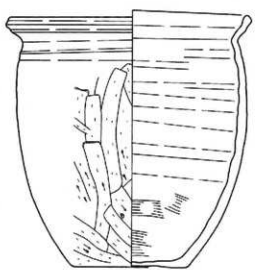
438



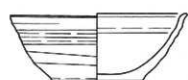
439



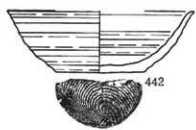
440



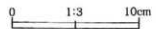
443



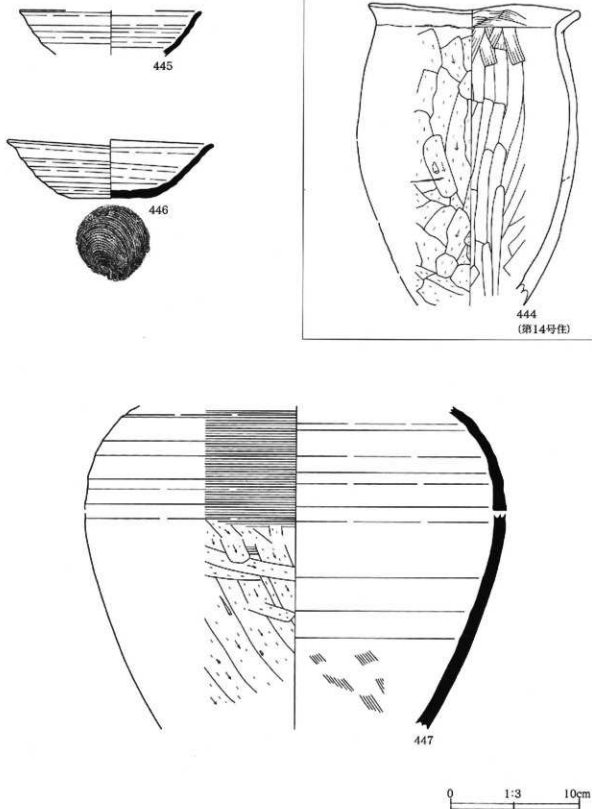
441



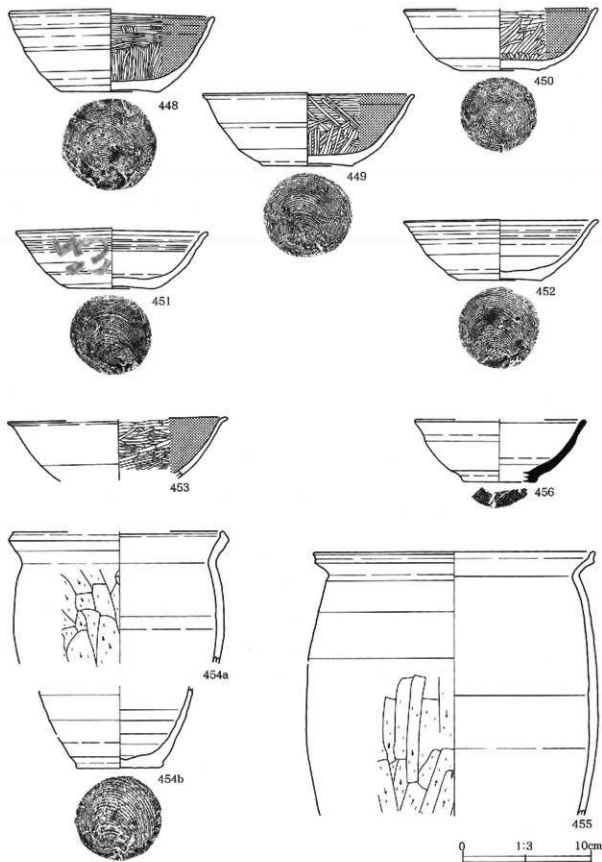
442



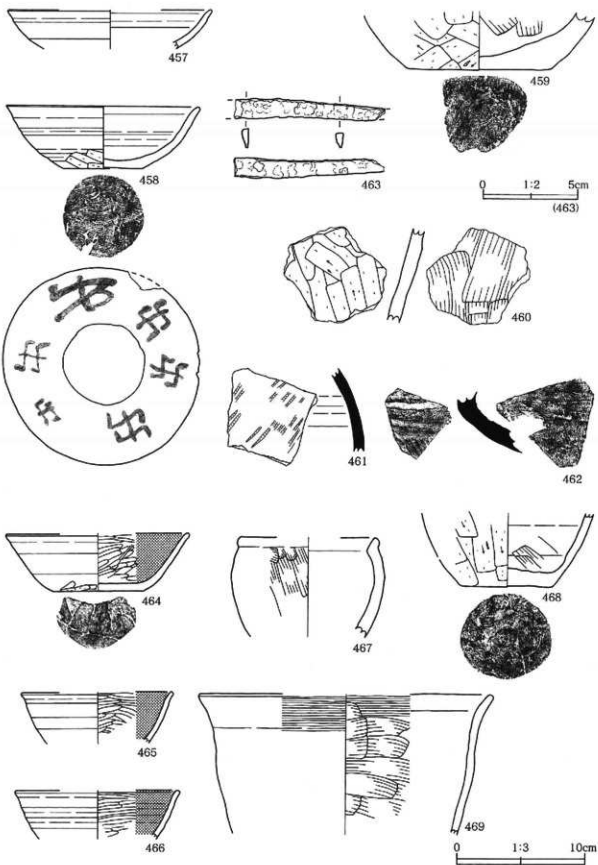
第90図 遺構内出土遺物 (37)



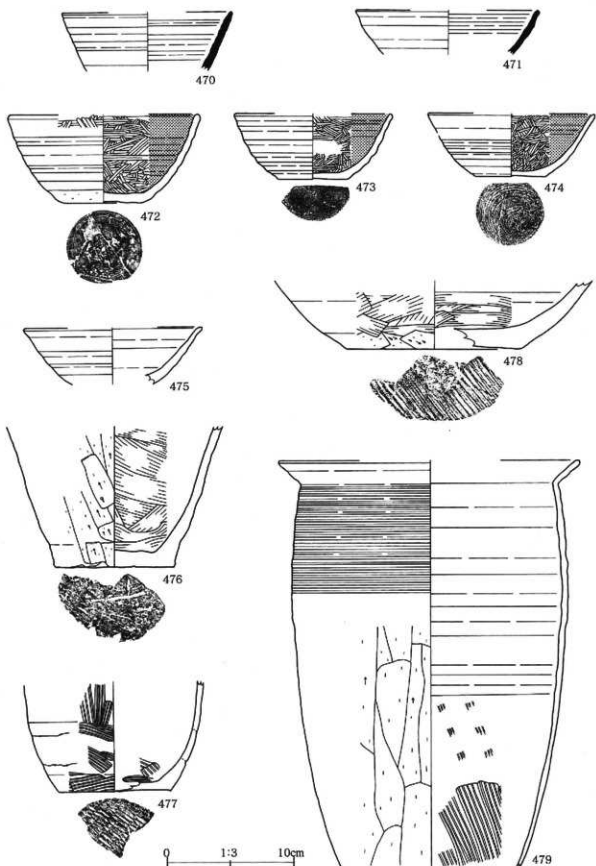
第91図 遺構内出土遺物 (38)



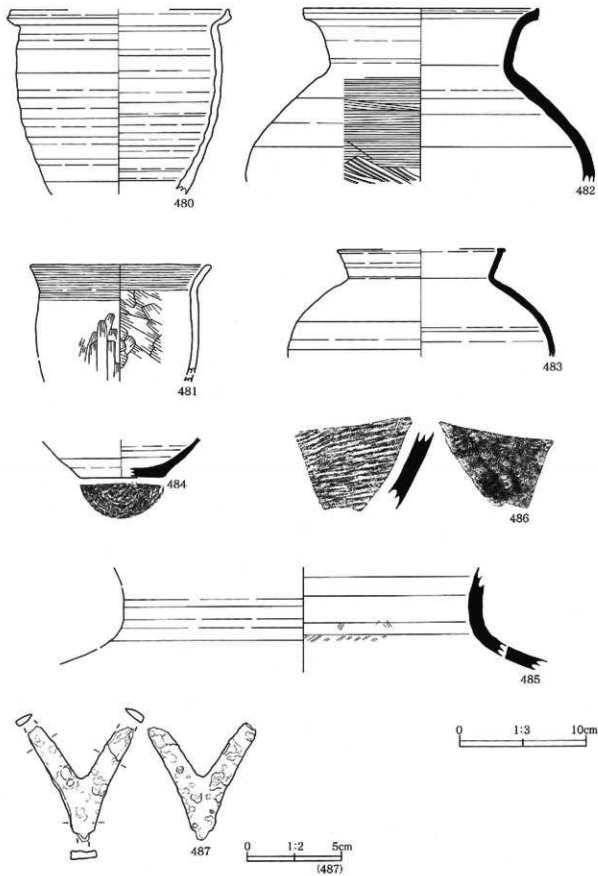
第92図 遺構内出土遺物 (39)



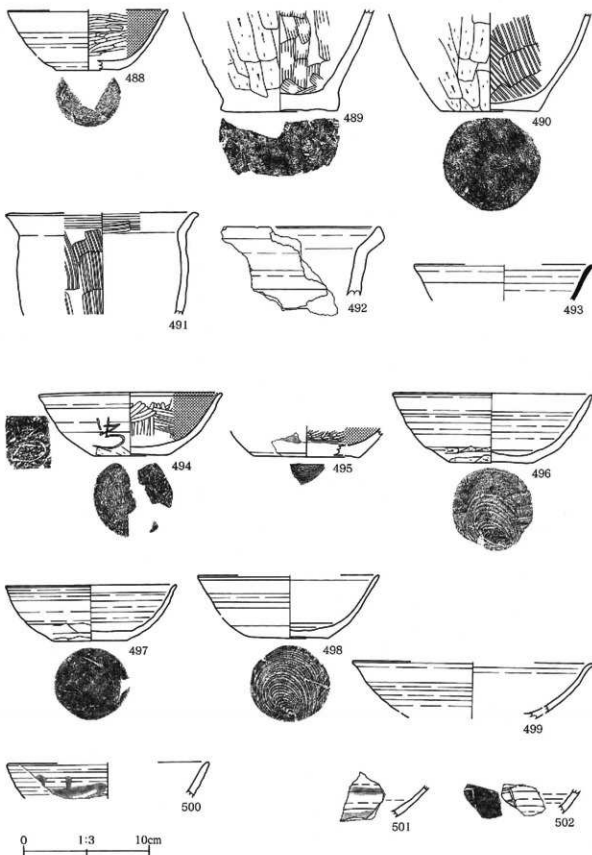
第93図 遺構内出土遺物 (40)



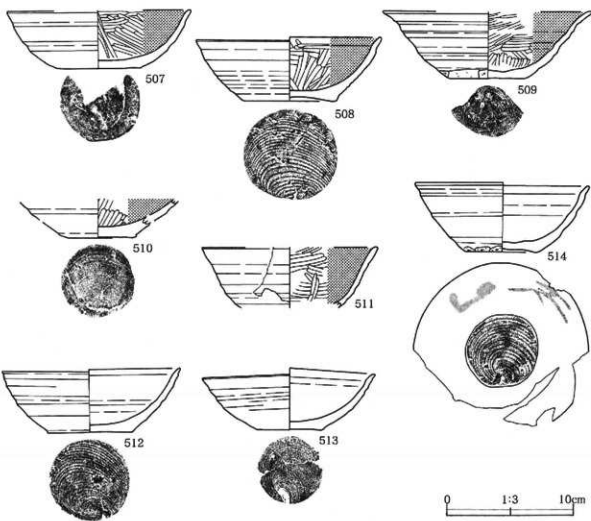
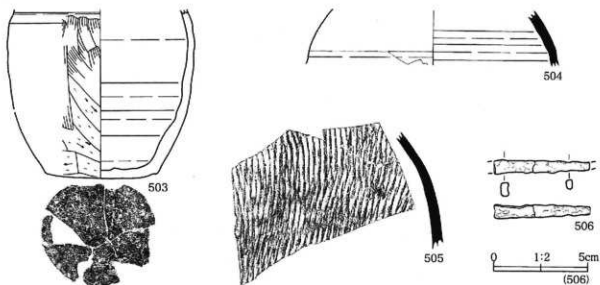
第94図 遺構内出土遺物 (41)



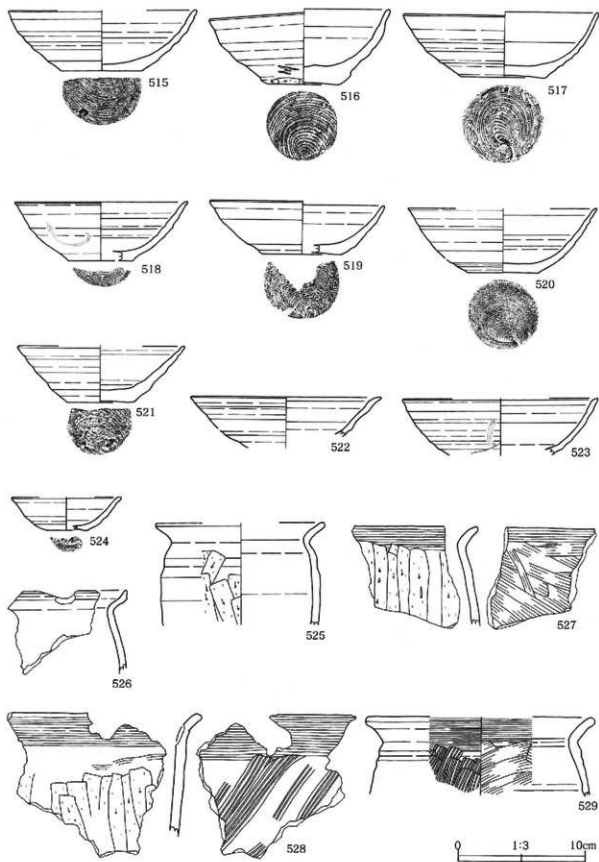
第95図 遺構内出土遺物 (42)



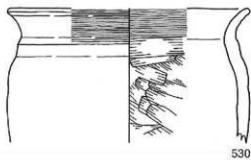
第96図 遺構内出土遺物 (43)



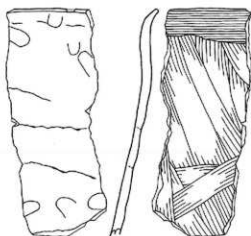
第97図 遺構内出土遺物 (44)



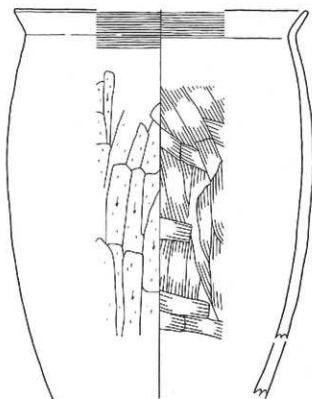
第98図 遺構内出土遺物 (45)



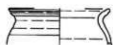
530



531



532



533



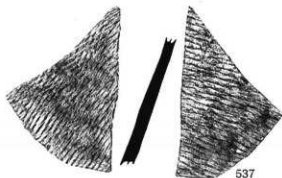
534



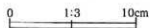
535



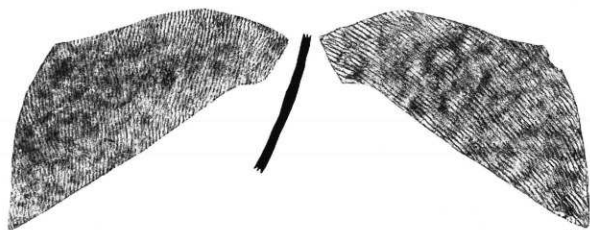
536



537



第99図 遺構内出土遺物 (46)



538

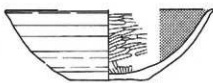
0 1:4 10cm
(538)



539



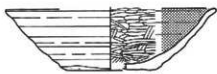
540



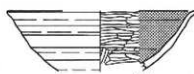
541



542



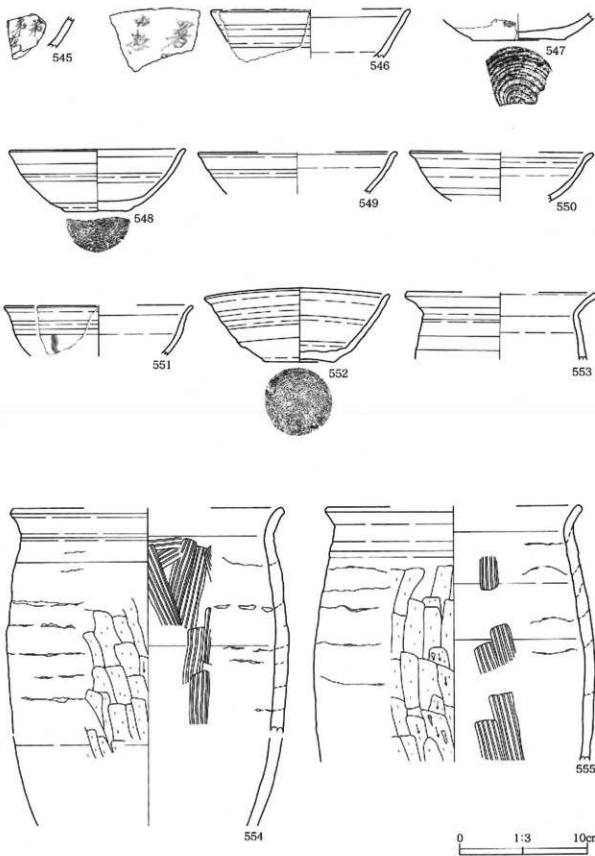
543



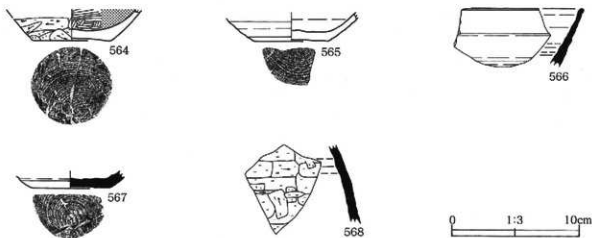
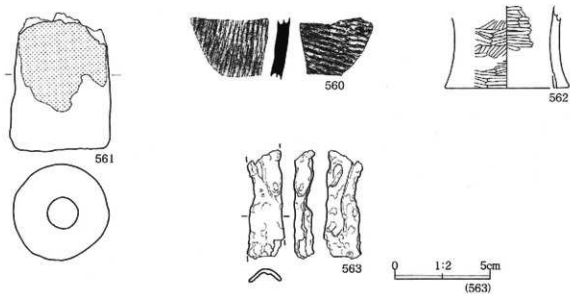
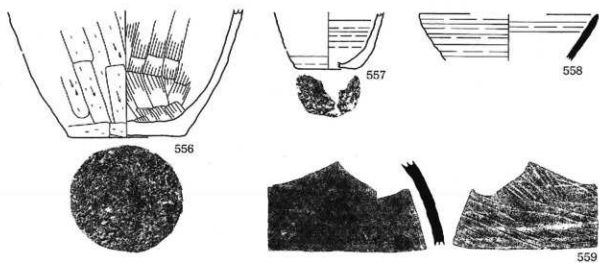
544

0 1:3 10cm

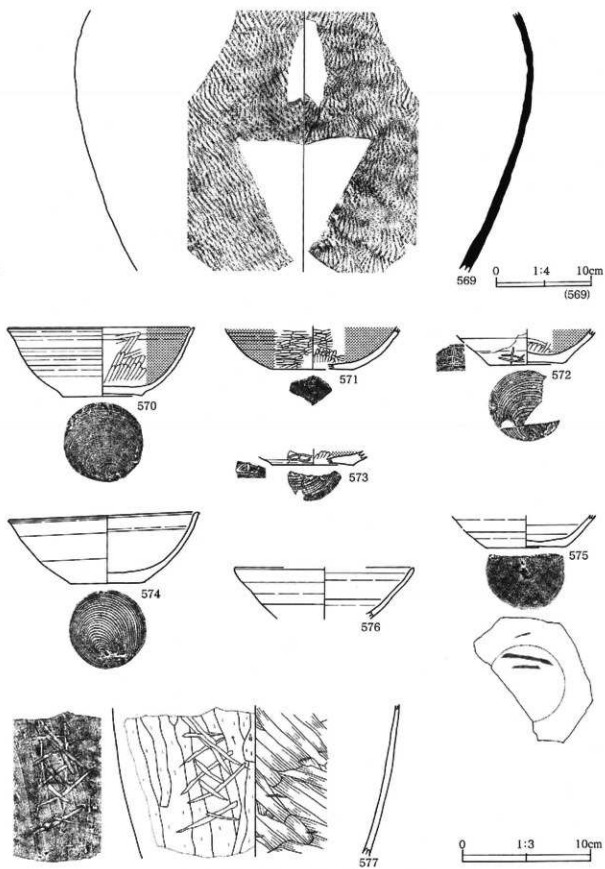
第100図 遺構内出土遺物 (47)



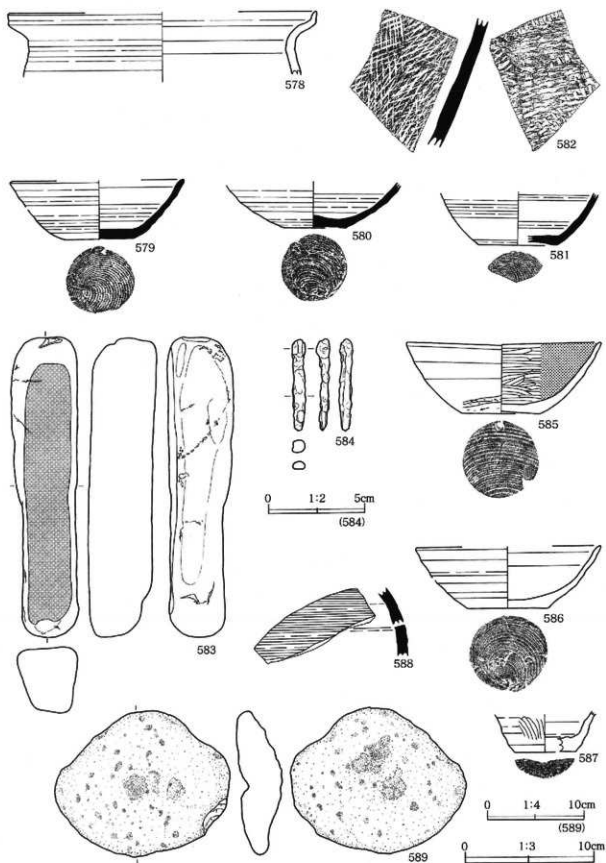
第101図 遺構内出土遺物 (48)



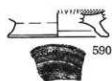
第102図 遺構内出土遺物 (49)



第103図 遺構内出土遺物 (50)



第104図 遺構内出土遺物 (51)



590



591



592



594



595



593



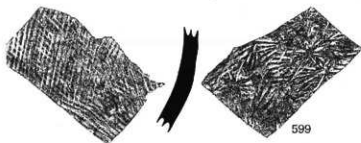
596



597



598



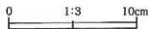
599



603



600



1:3

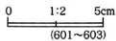
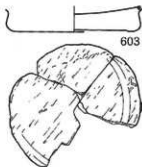
10cm



601



602

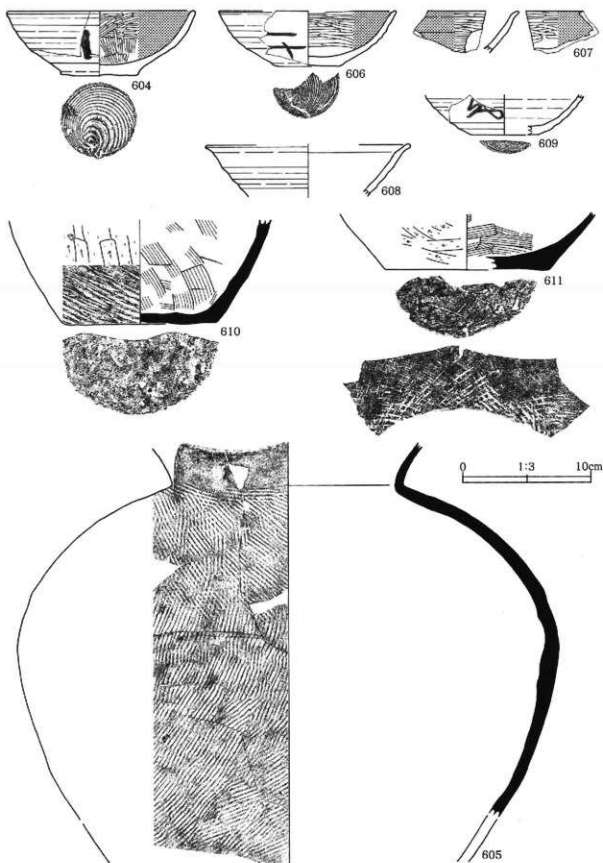


1:2

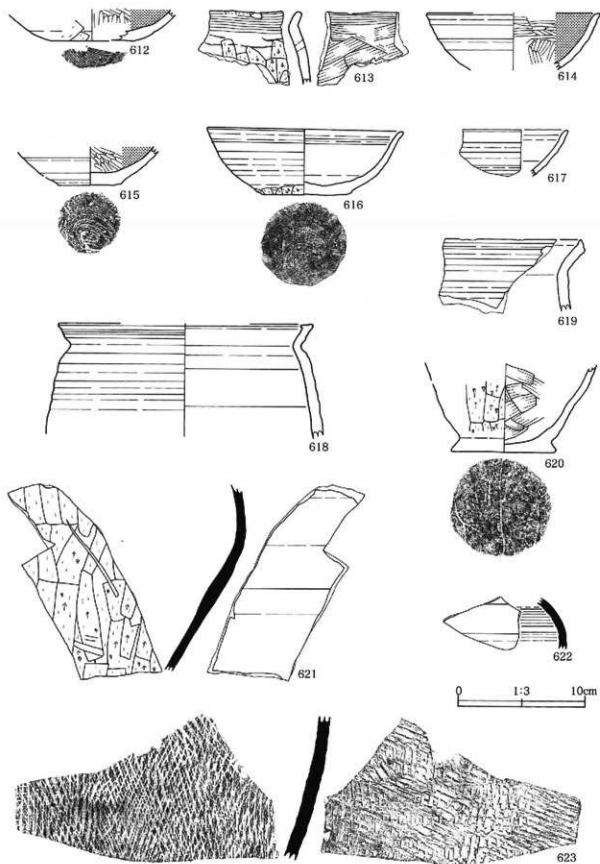
5cm

(601~603)

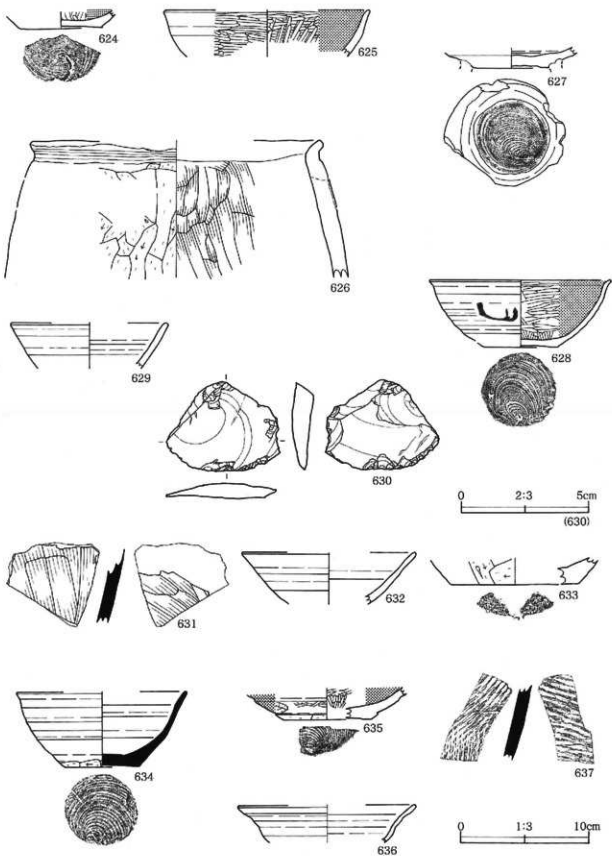
第105図 遺構内出土遺物 (52)



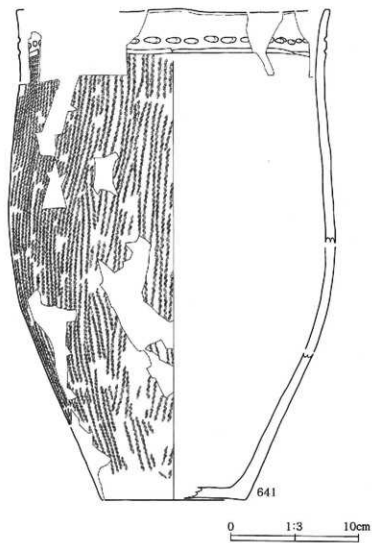
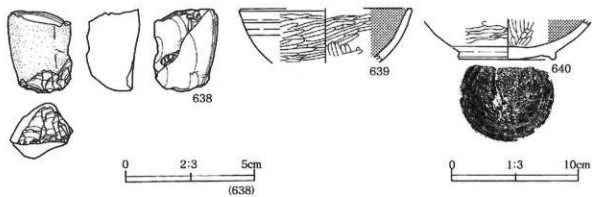
第106図 遺構内出土遺物 (53)



第107図 遺構内出土遺物 (54)



第108図 遺構内出土遺物 (55)



第109図 遺構内出土遺物 (56)

V 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物の総数は、大コンテナ4箱弱である。土器は縄文時代早期・中期・後期・晩期に所屬するもの、平安時代の土師器、須恵器がそれぞれ大1箱ずつ、石器類は中コンテナ1箱である。土製品には、縄文時代の円盤状土製品1点、陶輪1点、ミニチュア土器1点がある。石器類の内訳は、剥片石器・フレイク等が30点あまり、礫石器では縄文時代の磨製石斧・石皿・磨石が各1点ずつ出土した。また、金属製品では、平安時代と思われる鉄製品が4点、銭貨は1点で、「天聖元寶」（初鑄1023年）が出土した。

掲載した遺物は、土師器・須恵器（1001～1053）53点、金属製品（1054～1058）5点、剥片石器（1059～1066）8点（うち3点は古代に所屬）、礫石器（1067～1069）3点、縄文時代の土器（1070～1142）73点・土製品（1143～1145）3点の計145点である。主体となる平安時代の遺物から、掲載順に記述する。

1. 平安時代の遺物（第110～114図）

1001～1015は内黒の土師器杯、1016～1024は非内黒の杯である。これからは、墨書土器・刻書土器を中心に選択、掲載した。1007・1008の2点の刻書以外は、いずれも破片の墨書資料であるが、文字の全体を窺い知ることはできない。1007・1008は、明らかに文字ではなくヘラ記号である。

1025～1039は土師器の甕で、ロクロ成形されているものは、1025・1028・1030・1038などである。また、1025・1028・1031・1034・1039は、内黒の甕で外面に細線が数条見られる破片である。中には同一個体も有りそうである。観察される細線は、記号とは捉えがたい。1033は体部下端に4条の細線が墜下するものである。1026・1027・1032・1035の4点は砂底土器である。

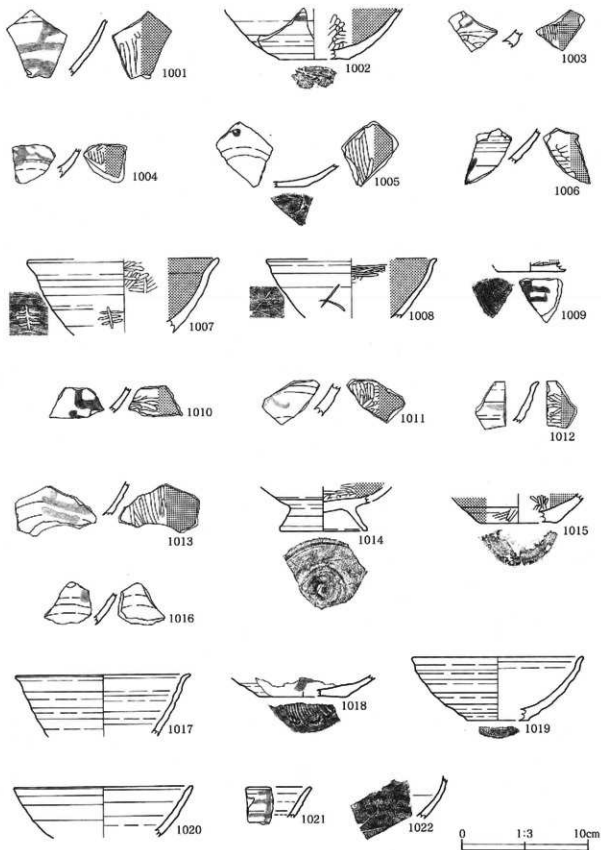
遺構外から出土した須恵器の器種には、杯（1040・1041）、壺（1042～1047）、甕類（1048～1053）がある。掲載にあたっては口縁部や頸部、底部等の破片を選んだが、それぞれ体部破片も多く出土している。二つの杯はかなりプロポーションが異なる個体で、時期差もあろうかと思われるもの。1049の底部には、焼成前にあけられた直径5mmほどの孔を有する。何らかの意味があるものか。1080には器表に貼り付く突帯がある個体である。

金属製品は、雁又鎌の基部（1054）、先端を欠く角釘（1055）、種類不明とした棒状の製品（1056）、やりがんな状の反りを持つ製品などが出土した。いずれも周辺にある住居に伴う遺物であろう。銭貨については上述のとおりである。

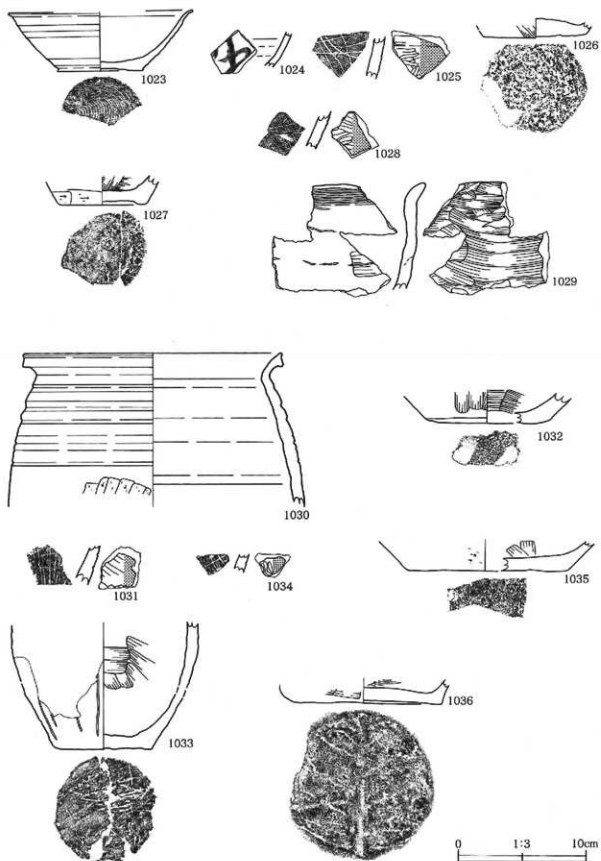
最後に石器であるが、黒曜石製の掻削が2点、細部加工されたフレイクが1点出土した。1064は円形搔器で、刃部がほぼ全周しているもの。1065は円形の素材の一部に刃部加工が施されるものである。1066も二辺に刃部が作り出されているように見える。これらは、古墳時代において皮なめし用の石器と言われているが、果たして平安期まで石器を用いたか、という問題が残る遺物である。

2. 縄文時代の遺物（第114～118図）

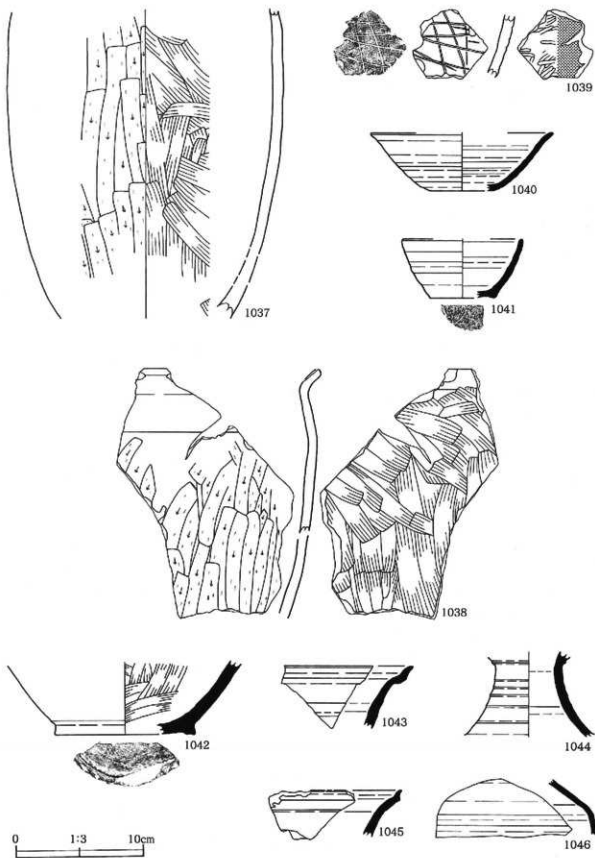
縄文時代に属する剥片石器は5点出土した。いずれも頁岩製で、内訳は、石鏃（1059・1060）2点、石匙（1061～1063）3点である。礫石器では、磨石（1067）、安山岩製の石皿（1068）、磨製石斧（1069）が出土しているが、1167の磨石は古代に属する可能性もある。この他は、フレイク・チップ類が30点あまり出土したのみで、全体的に縄文時代の石器は少ない。



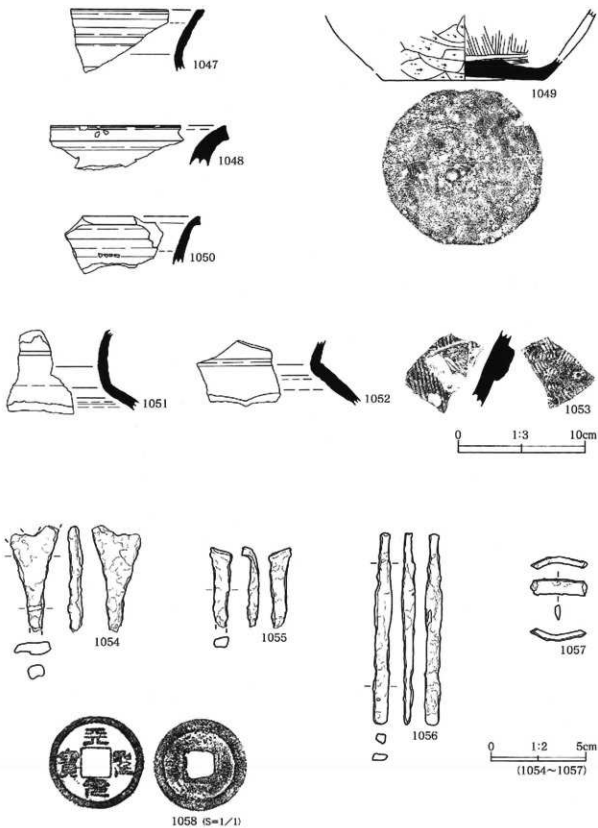
第110図 遺構外出土遺物 (1)



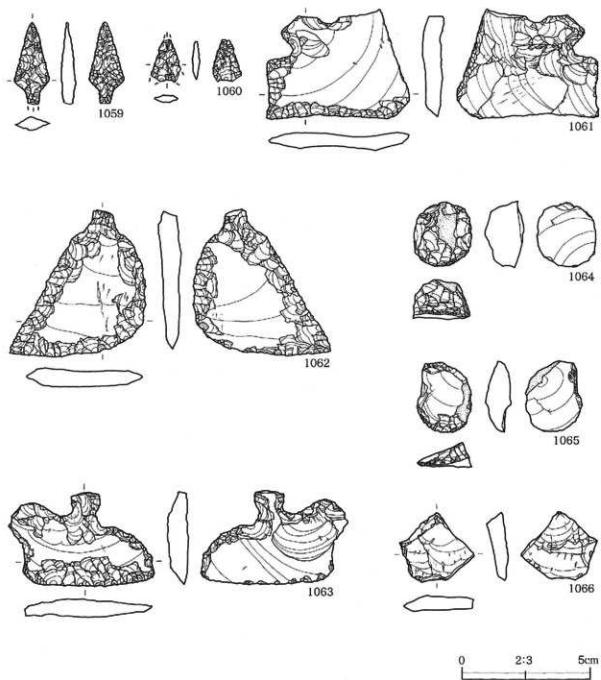
第111図 遺構外出土遺物(2)



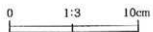
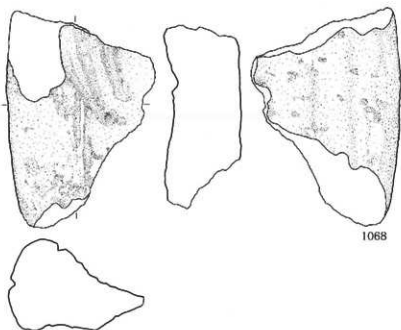
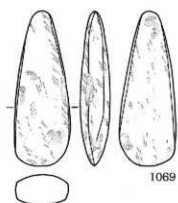
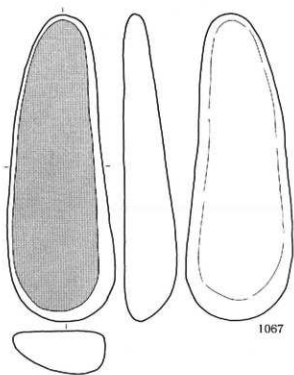
第112図 遺構外出土遺物 (3)



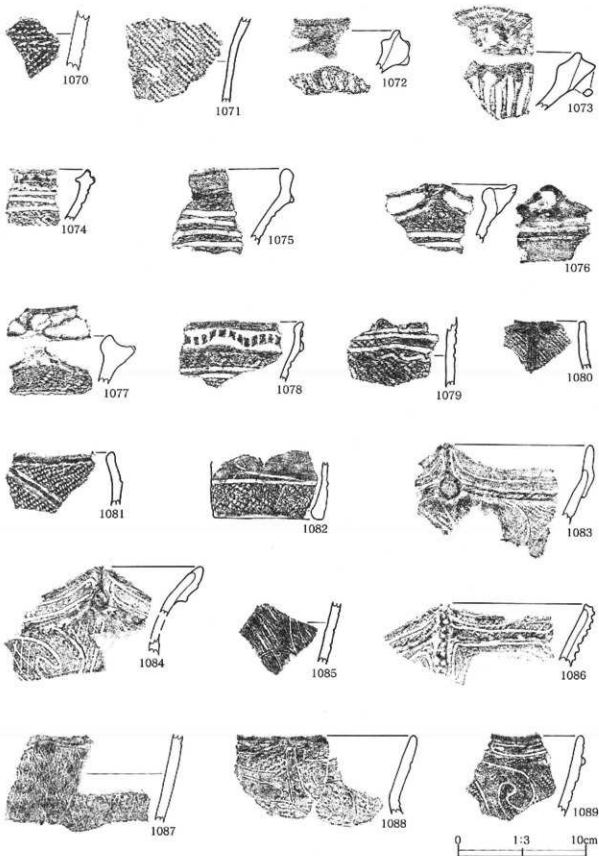
第113図 遺構外出土遺物 (4)



第114図 遺構外出土遺物 (5)



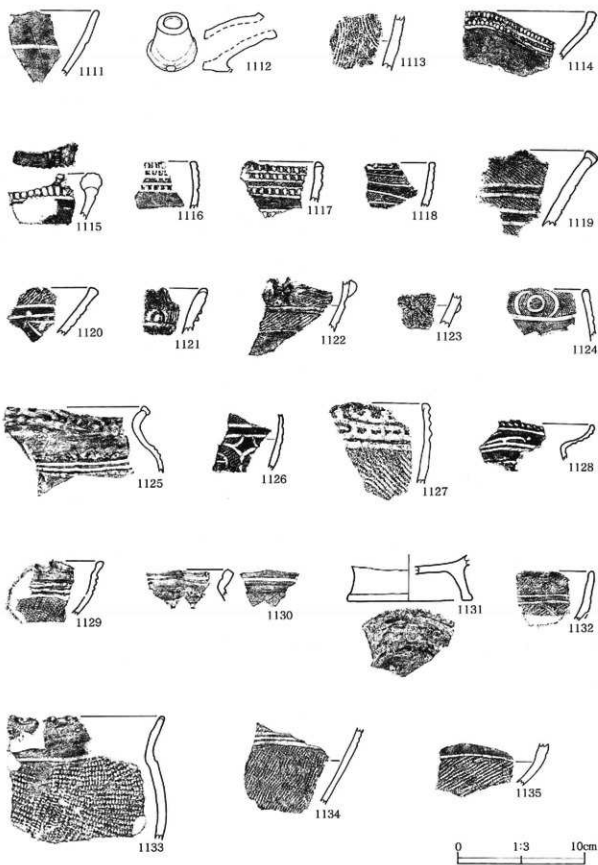
第115図 遺構外出土遺物 (6)



第116図 遺構外出土遺物 (7)



第117図 遺構外出土遺物 (8)



第118圖 遺構外出土遺物(9)



第119図 遺構外出土遺物 (10)

土器は、次の①～⑥の概ね6つの時期に大別される。⑦は時期不明の一群である。

- ①早期中葉 (1070) 1070は胴部破片で、2方向に貝殻複線文が施されている。寺の沢式相当と思われる。
- ②中期前葉～中葉 (1072～1082) 概ね大木7式・大木8a式に属するものである。4単位の波状口縁あるいは平縁、口縁部の内湾、隆・沈線による区画、粘土紐貼付などの特徴を有する一群である。
- ③後期初頭～前葉 (1083～1094) いわゆる前十腰内と十腰内1式に相当すると思われる一群である。折り返し口縁、口縁への粘土紐貼付、方形文様や渦巻き文様の連結などの特徴をもつものである。
- ④後期中葉 (1095～1117) 十腰内2式と十腰内3式に属すると思われるものを一括した。大きく開く口縁部、波状縁と平縁、平行沈線文、沈線に沿う円形刺突、口唇部に連続する刻み目などが特徴として挙げられる。1113は、櫛歯状の縦文様が見られるもので、ここに属するものか明らかでない。
- ⑤後期後葉 (1118～1123) 十腰内4式・十腰内5式相当と思われる一群である。胴部文様である人組文・木葉状文、樽掛け状文、連結する帯状文、貼瘤などが特徴である。
- ⑥晩期前葉～中葉 (1124～1130) 三叉文系の文様が主体となる大洞B式と、それから派生した羊歯状文・連続する珠文などを主体とする大洞B C式、いずれも雲形文を主体とする大洞C1・大洞C2式のいずれかに属する一群である。器種には鉢・壺・注口形が見られる。
- ⑦時期不明 (1071・1131～1142) 詳細な時期がわからないものを一括した。1132～1135の鉢類、1137の注口形は、いずれも晩期後葉に属するか？1142は部分的に赤色顔料が付着している。

土製品は、直径4cmあまりの土製円盤 (1143)、腕輪の破片 (1144)、ミニチュア土器 (1145) が出土した。

1144は内面外面ともきれいに磨かれ、推定される直径は9cm前後である。1145は天地が定かでない。

番号	通称名	出土地点	種類	器種	外周調整(LI/体部)	内周調整(LI/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
31	1号柱	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	-6.3	5.7	-	金雲母	AIIb1	
32	1号柱	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	-	<3.6>	回転糸切		AII	
33	1号柱	Q2埋土	土師器	坏(高台)	ロクロ	ロクロ	-	7.2	<2.1>	回転糸切	小量多	AIIc	出石付
34	1号柱	土師1	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.5	6.6	5.1	回転糸切		AIIc	高台付
35	1号柱	Q1埋土	(須)	坏	ロクロ	ロクロ	-	-5.4	<1.8>	回転糸切		AIIb2	還元不足
36	1号柱	Q2埋土	(須)	坏	ロクロ	ロクロ	-	5.2	<2.4>	-		AIIb2	還元不足
37	1号柱	東高(須)	坏	坏	ロクロ/ヘラケズリ	ロクロ/ロクロ	-13.8	4.8	4.8	高凸		AIIb2	還元不足(黒炭?)
38	1号柱	カマド・埋土	土師器	羹	ロクロ	ロクロ	14.3	-	<6.6>	縁部線付		(AII)	
39	1号柱	左袖・Pb1	土師器	羹	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-	回転糸切		(AII)	
40	1号柱	埋土内	土師器	羹	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ナデ(指)	-	-	-	回転糸切		(AII)	
41	1号柱	カマド・Pb1	土師器	羹	轆轤/ナケズリ	ヘラケズリ/ヘラケズリ	16.5	-5.7	23.9	背調整		(AIIc)	
42	1号柱	Pb1	土師器	羹	ロクロ	ロクロ	-	7.5	<7.8>	-		(AIIb)	
43	1号柱	Pb1	土師器	羹	ロクロ	ロクロ	-15.6	-	<8>	-		(AII)	
44	1号柱	Q1埋土	土師器	羹	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ヨコナデ	-14.7	-	<5.7>	-		(AIIb)	
45	1号柱	Q2埋土	土師器	羹	ナデ	ヘラケズリ	-	-10.1	6.6	-		(AIIb)	掛いつくり
46	1号柱	Q3埋土	土師器	羹	ヘラケズリ(下端)	ヘラケズリ	-	-	-	回転糸切		(AII)	外面極細目肌
47	1号柱	袈田山	土師器	羹	ヨコナデ・ミガキ/ ヘラケズリ	ヘラケズリ	-	-	-	-		(AIIa)	内黒
48	1号柱	左袖・埋土	土師器	羹	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヘラケズリ	-	-	-	-		(AIIa)	
49	1号柱	埋土内	土師器	羹	ナデ	ヘラケズリ	-	-	-	-		(AIIa)	
50	1号柱	狭野Pb1・右側	土師器	羹	ロクロ	ロクロ	8.3	-	<8.7>	-		(AIIb)	
51	1号柱	Pb1	土師器	羹	ヨコナデ/ナデ	ヨコナデ/ヘラケズリ	-	-	-	-		(AIIb)	
52	1号柱	Q2埋土	土師器	羹	ヘラケズリ	ナデ	-	-	-	-		(AIIb)	器表灰色
53	1号柱	Q2埋土	土師器	羹	ヘラケズリ	ヘラケズリ	-	9.3	<1.5>	-		(AII)	内黒の底部
54	1号柱	Q3埋土	土師器	羹	ロクロ・ヨコナデ? ヘラケズリ	ヨコナデ	-	-	-	回転糸切		(AII)	
55	1号柱	Q3埋土	土師器	羹	ヘラケズリ	ヘラケズリ	-	-	-	-		(AIIc)	
56	1号柱	カマド・埋土	土師器	羹	ヨコナデ/ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ	13.2	6.9	12.3	-		(AIIa)	
57	1号柱	カマド	土師器	羹	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ヘラケズリ	-	-	-	縁なし		(AIIb)	刻書「上地成富
58	1号柱	Q2埋土	土師器	羹	ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-	-		(AII)	赤褐色
59	1号柱	Q2埋土	土師器	羹	ロクロ	ロクロ	-13	-	<5.1>	縁部の盛り		(AII)	
60	1号柱	Q2埋土	土師器	羹	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ナデ	11.7	-	(3)	-		(AII)	

番号	通称名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	計上	分類	備考
61	1号住	東山ベルト	土師器	釜	/ヘラナデ	/ヘラミガキ	-	5.4	<1.9>	-	(A1)	内器蓋	
62	1号住	Q3庫上	土師器	釜	-	-	-	-	-	砂底	?		
63	1号住	Q4庫上	土師器	釜	/ヘラケズリ	/ナデ	-	9.9	<4.2>	砂底	(A1)		
64	1号住	Q2庫上	土師器	釜	/不明	/ヘラミガキ	-	-	-	-	(A1)	内器蓋(内底面に施刻の面割行)	
65	1号住	上器2	土師器	釜	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	22	-	<13.8>	-	(A1)	外面器蓋に付器物	
66	1号住	上器4-Q2庫上	土師器	釜	ヨコナデ/ナデ/下器ヘラケズリ	ヨコナデ/ヘラナデ/ナデ	-21.3	-	<23.6>	-	(A1b)		
67	1号住	Q3庫上	土師器	羽釜	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-	-			
68	1号住	南北ベルト	土師器	釜	/ヘラケズリ	/ナデ	-	5.1	<6>	なし	A	長径下部との施刻(帯、高踏及彫)	
69	1号住	Q2庫上	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	-	-	-	-	B		
70	1号住	Q3庫上	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-	-	B		
71	1号住	Q3庫上	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-	-	B		
72	1号住	Q3庫上	須恵器	壺	/カキメ	/カキメ	-	-	-	-	B		
73	1号住	08-東山ベルト庫上	須恵器	壺	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-	B		
74	1号住	Q3庫上	須恵器	壺	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-	B		
75	1号住	Q3庫上	須恵器	壺	/タタキメ	/タタキメ	-	-	-	-	B		
76	1号住	築道内	須恵器	壺	ヘラケズリ	ヘラケズリ	-	10.5	<12.6>	-	B		
77	1号住	Q1庫上	須恵器	壺	ロクロ	ロクロ	-	-	-	-	B		
78	1号住	Q2庫上	須恵器	壺	/タタキメ	/タタキメ	-	-	-	-	B		
79	1号住	東山ベルト	須恵器	壺	/タタキメ	/タタキメ	-	-	-	-	B		
80	1号住	Q1庫上+Q2庫上	須恵器	壺	ロクロ	ロクロ	-	7.8	<2.6>	-	B		
81	1号住	Q3庫上	須恵器	壺	/ヘラケズリ	/ナデ	-	9.7	<1.8>	-	B		
82	1号住	Q3庫上	須恵器	壺	/ヘラケズリ	/ロクロ	-	-	-	-	B		
83	1号住	Q3庫上	須恵器	壺	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-	B		
84	1号住	Q2庫上	須恵器	大甕	/タタキメ	/タタキメ	-	-	-	-	B		
85	1号住	東山ベルト	須恵器	大甕	/タタキメ	/タタキメ	-	-	-	-	B		
86	1号住	Q3庫上	須恵器	大甕	/タタキメ	/タタキメ	-	-	-	-	B		
87	1号住	上器3	須恵器	大甕	/タタキメ	/タタキメ	-	-	-	-	B		
88	1号住	Q4庫上	須恵器	人甕	/タタキメ	/タタキメ	-	-	-	-	B		
89	1号住	Q1庫上To-aF	土師器	羽口	長さ<4.2cm>		-	-	-	-	B	支脚(器用)	
90	1号住	カマド内	土師器	羽口	長さ<25.5cm>, 直径<6.6cm>, 内径<3.3cm>		-	-	-	-	B	支脚(器用)	

番号	漢字名	出土地点	種類	器種	外面形状(口/体部)	内面形状(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
91	1号住	馬十上位	鉄製品	鉄鍔	長さ:7.5cm,幅0.8~3.1cm,厚さ0.35cm,重さ21.4g								
92	1号住	Q1埋土To-a↑	鉄製品	鉄鍔	長さ:10.9cm,幅0.3~3.8cm,厚さ0.2~0.4cm,重さ15.9g								
93	1号住	埋土上位	鉄製品	鉄鍔	長さ:10.7cm,幅0.3~2.5cm,厚さ0.35cm,重さ20.2g								
94	1号住	Q4埋土	鉄製品	刀子	長さ:9.1cm,幅0.6~0.9cm,厚さ0.2cm,重さ8.0g								捨り
95	1号住	Q2埋土	鉄製品	釘?	長さ:5.9cm,幅0.5cm,厚さ0.5cm,重さ4.2g								捨り,漆柱状鉄製品?
96	1号住	Q3埋土To-a↑	鉄製品	未製品	長さ:15.3cm,幅0.9cm,厚さ0.5cm,重さ18.4g								孔あり
97	1号住	Q1埋土To-a↑	鉄製品	金具?	長さ:5.2cm,幅1.4cm,厚さ0.3cm,重さ4.4g								
98	2号住	Q1埋土	土師器	坏	口径/口径	口径/口径	15.3	6	5.1	回転糸切		A1b2	内黒
99	2号住	Q1埋土	土師器	坏	口径/口径	口径/口径	14.7	6	4.6	回転糸切		A1b2	内黒
100	2号住	Q4埋土	土師器	坏	口径/口径	口径/口径	-15	5.4	5	回転糸切		A1b2	内黒
101	2号住	Q3-ベルト埋土	土師器	坏	口径/口径	口径/口径	12.4	5.7	5.2	回転糸切		A1b2	内黒,器高有り,口径小
102	2号住	Q3埋土	土師器	坏	/口径	/口径	-	6.6	<2.7>	回転糸切		A1b1	内黒
103	2号住	Q1-Q2埋土	土師器	坏	/口径	/口径	-	6.3	<3.6>	回転糸切		A1b1	内黒,器高有り?
104	2号住	北器3	土師器	坏	/口径	/口径	-	6.6	<3.3>	停止糸切		A1a2	内黒,器高有り?
105	2号住	Q2埋土	土師器	坏	/口径	/口径	-	5.4	<2.9>	回転糸切		A1b1	内黒
106	2号住	Q3埋土	土師器	坏	/口径	/口径	-	6	<1.6>	織鉢-子付		A1b2	器高(底部)有り,「酒カ」
107	2号住	Q2埋土-撥亂	土師器	坏	口径/口径	口径/口径	12.9	-	<3.0>	-		A1	
108	2号住	ベルト-埋土	土師器	坏	口径/口径	口径/口径	-	-	-	-		A1	丸形皿?油煙
109	2号住	Q3埋土	土師器	坏	口径/口径	口径/口径	-	-	-	-		A1	器高有り?
110	2号住	Q1埋土	土師器	坏	口径/口径	口径/口径	-	-	-	-		A1	器高有り?
111	2号住	Q2-結珠-床面	土師器	坏	口径/口径	口径/口径	13.5	6.3	4.2	子付		A1b1	糸切片破損
112	2号住	Q1埋土	土師器	坏	口径/口径	口径/口径	-14.7	6.3	4.6	回転糸切		A1a1	
113	2号住	Q2埋土	土師器	坏	口径/口径	口径/口径	-13.5	-	5.1	-	しつとり	A1b2	
114	2号住	Q3埋土	土師器	坏	口径/口径	口径/口径	-13.5	-	(4.4)	-	しつとり	A1b2	
115	2号住	Q2埋土	土師器	坏	口径/口径	口径/口径	-	-	-	-		A1b2	器高有り?
116	2号住	Q2埋土	土師器	坏	/口径	/口径	-	5.7	(4.5)	回転糸切		A1b2	
117	2号住	Q2-Q3埋土	土師器	坏	/口径	/口径	-	5.7	(2.1)	回転糸切		A1b2	内面に付着物
118	2号住	Q4埋土	土師器	坏	/口径	/口径	-	5.7	(2.5)	回転糸切		A1b2	
119	2号住	Q3埋土	土師器	坏	/口径	/口径	-	-	-	-		A1b2	器高有り?
120	2号住	Q1埋土	土師器	把受付	ミガキ	-	-	-	-	-		A1b2	

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外周調整(口/胴部)	内周調整(口/胴部)	II 径	底径	高さ	底面	胎土	分類	備考
121	2号住	Q1~3階上	土師器 甕	土師器 甕	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ヘラナナナ?	-17.7	8.5	20.4	-	-	(A I)	糸織丸高口ヘラの底面(底面直線)
122	2号住	Q1階上	土師器 甕	土師器 甕	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ヘラナナナ?	-23.4	-	(30.0)	-	-	(A II a)	糸織き
123	2号住	土階2	土師器 甕	土師器 甕	/ヘラケズリ	/ヨコナデ/ハケメ	-	-	(26.1)	-	-	(A II a)	糸織き
124	2号住	埴野・石段出	土師器 甕	土師器 甕	/ヘラケズリ/ナナ	/ヘラナナナ?	-	7.8	(6.9)	縦なし	-	(A I b)	網目一挽成削
125	2号住	真鍮・運込内	土師器 甕	土師器 甕	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ヘラナナ	-20.1	-	(24.5)	縦なし	-	(A I)	a-b体あり
126	2号住	Q1-Q2・P10遺土	土師器 甕	土師器 甕	ヨコナデ/ハケメ	ヨコナデ/ハケメ	-20.4	-	-	-	-	(A I b)	口筋強い
127	2号住	Q1遺土	土師器 甕	土師器 甕	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ヘラナナ	-22.2	-	(6.9)	-	-	(A II)	糸織き
128	2号住	Q1-Q10階上	土師器 甕	土師器 甕	ロクロ/ロクロ	ヨコナデ/ハケメ	-18.3	-	(6.6)	-	-	(A I)	糸織き
129	2号住	Q3遺土	土師器 甕	土師器 甕	ヨコナデ/ハケメ	ヨコナデ/ハケメ	-18	-	(7.5)	-	-	(A II)	糸織き
130	2号住	右袖内	土師器 甕	土師器 甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.3	-	(4.5)	-	-	(A II)	糸織き
131	2号住	右袖内	土師器 甕	土師器 甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	-	(5.7)	-	-	(A II)	糸織き
132	2号住	Q3階上	土師器 甕	土師器 甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	-	(4.8)	-	-	(A II)	糸織き
133	2号住	Q1遺土	土師器 甕	土師器 甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.1	-	(3.6)	-	-	(A II)	糸織き
134	2号住	Q1遺土	土師器 甕	土師器 甕	ロクロ/	ロクロ/	-22.2	-	(6.0)	-	-	(A I)	糸織き
135	2号住	Q2階上	土師器 甕	土師器 甕	ヨコナデ/ヘラナナ	ヨコナデ/ヘラナナ	-11.7	-	(7.2)	-	-	(A II a)	粗織で口縁強い
136	2号住	Q1階上	土師器 甕	土師器 甕	ロクロ/ヘラナナ	ロクロ/ヘラナナ	-	-	-	-	-	(A I)	粗織で口縁強い
137	2号住	Q1階上	土師器 甕	土師器 甕	/ヘラケズリ	/ヘラナナ	-	-	-	-	-	(A I)	粗織で口縁強い
138	2号住	ベルト遺土	土師器 甕	土師器 甕	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	-	-	-	-	-	(A I)	粗織で口縁強い
139	2号住	Q1階上	土師器 甕	土師器 甕	/ナナ	/ナナ	-	12.6	(5.1)	縦なし	-	(A I b)	糸織き
140	2号住	Q2・P4内・組	土師器 甕	土師器 甕	/ハケメ	/ハケメ	-	9	(12.3)	砂底?	-	(A I b)	糸織き
141	2号住	Q1階上	土師器 甕	土師器 甕	/下層にタタキメ	/ハケメ	-	6.6	(5.4)	砂底? 割付片	-	(A I b)	糸織き
142	2号住	Q2・ベルト	土師器 甕	土師器 甕	/タタキメ	/ハケメ	-	8.4	(11.1)	木炭痕	-	(A I)	外周下部張り出し
143	2号住	Q2遺土	土師器 甕	土師器 甕	/ハケメ	/ヘラナナ	-	9.3	(5.6)	砂底	金雲母	(A I b)	外周下部張り出し
144	2号住	Q1遺土	土師器 甕	土師器 甕	/ヘラケズリ	/ヘラナナ	6	-	(3.6)	-	-	-	外周に炭化粉付着
145	2号住	Q2階上	土師器 甕	土師器 甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15	6.6	6	固転糸切	-	B1	
146	2号住	土階1	土師器 甕	土師器 甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	16.2	6.6	4.8	固転糸切	-	B1	
147	2号住	Q3階上	土師器 甕	土師器 甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.5	6	5.1	固転糸切	-	B2	
148	2号住	Q2階上	土師器 甕	土師器 甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.5	5.4	(5.4)	固転糸切	-	B2	
149	2号住	カマド内・機品	土師器 甕	土師器 甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	6	(2.7)	固転糸切	-	B2	網目?
150	2号住	カマド右壁土	土師器 甕	土師器 甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15	7.2	5.1	固転糸切	-	B1	

番号	通称名	出土施設	種類	設備	外周調整(口/体部)	内周調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
151	2号住	床面・浴体	須恵器	坏	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-	-	B		
152	2号住	Q4埋土	須恵器	坏	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-	-	B		
153	2号住	Q3埋土	須恵器	長頸壺	/突起・自然釉	/ナテ	-	-	<4.5>	-	B		
154	2号住	Q2埋土	須恵器	長頸壺	ロクロ/	ロクロ/	-12	-	<4.2>	-	B		
155	2号住	器出付直II層	須恵器	長頸壺	ロクロ/	ロクロ/	-	-	<5.7>	-	B		
156	2号住	Q3埋土	須恵器	壺?	/ナテ	/ナテ	-	-	-	-	B		
157	2号住	Q3埋土	須恵器	壺	/タタキメ	/タタキメ	-	-	-	-	B		
158	2号住	Q1埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具敷	-	-	-	-	B		
159	2号住	Q1-Q2-焼品	須恵器	大甕	/タタキメ・ハラケズリ	/ナテ	-	-	<13.8>	<5.1>	B		
160	2号住	Q2埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具敷	-	-	-	-	B		
161	2号住	Q3埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/タタキメ	-	-	-	-	B		
162	2号住	Q2埋土	土製品	羽門	長さ:-5.1cm,幅:-5.4cm,厚さ:2.4cm		-	-	-	-	B		
163	2号住	Q2埋土	鉄製品	刀子	長さ:-6.4cm,幅:1.3cm,厚さ:0.1~0.3cm,長さ:8.6g		-	-	-	-	B		
164	2号住	Q1埋土	鉄製品	刀子	長さ:-13.5cm,幅:0.5~1.3cm,厚さ:0.1~0.3cm,長さ:14.6g		-13.5	6	5.7	留底糸切	A1b2		内黒
165	3号住	Pw1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-13.5	-	<4.5>	-	A1		内黒
166	3号住	Pw1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-	-	-	-	A1		内黒
167	3号住	Pw1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-	-	-	-	A1		内黒
168	3号住	Pw1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-	-	-	-	A1		内黒・内外面黒釉付着
169	3号住	ベルト-Q2-Q3	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下層へラケズリ	ハラミガキ/ハラミガキ	13.8	5.9	4.9	留底糸切	A1a2		内黒
170	3号住	ベルト	土師器	坏	/ロクロ	ハラミガキ	-	5.4	<4.5>	留底糸切	A1b2		内黒
171	3号住	染出面	土師器	坏	/ロクロ	ハラミガキ	-	7.2	<3.5>	留底糸切	A1b1		内黒
172	3号住	ベルト	土師器	坏	/ロクロ下層へラケズリ	ハラミガキ/ハラミガキ	-	6	<1.8>	留底糸切	A1b2		内黒
173	3号住	染出面	土師器	坏	下層へラケズリ	ハラミガキ/ハラミガキ	-13.3	-	<4.2>	-	A1		内黒
174	3号住	染出面	土師器	坏	下層へラケズリ	ハラミガキ	-	6.3	<1.9>	留底糸切	A1a1		内黒・内面に黒釉のキズあり
175	3号住	染出面	土師器	坏	下層へラケズリ	ハラミガキ	-	5.7	<1.5>	留底糸切	A1a2		内黒・黒釉?]
176	3号住	Q1	土師器	坏	/ロクロ	ハラミガキ	-	6	<2.4>	留底糸切	A1b2		内黒・黒釉?]
177	3号住	上器2(Pw1埋土)	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ	-13.8	-	<4.8>	-	A1		内黒
178	3号住	土器2(Pw1埋土)	土師器	坏	ロクロ/ロクロ 下層黒釉	ロクロ/ロクロハラミガキ]	-	-6.3	5.4	黒地黒釉	A1b1		内黒
179	3号住	ベルト	土師器	坏	下層へラケズリ	ハラミガキ	-	6.4	<2.4>	留底糸切	A1a1		内黒・器部外面黒?]
180	3号住	Q3	土師器	坏	ハラミガキ/ハラミガキ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.4	6.6	<5.4>	継体付片	A1/I		内外面黒色黒

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外周調整(口/体部)	内周調整(口/体部)	口径	口径	器高	底面	胎土	分類	備考
181	3号住	左瀬内	土師器	坏	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	16.2	—	(5.4)	—	—	A I	内周黒色地型
182	3号住	カマド(支脚)	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15.7	7.5	6.3	回転糸切	金葉母	A IIb1	
183	3号住	カマド	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	—	-14.4	—	(3.6)	—	—	A II	
184	3号住	土器2 (内1深層)	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.7	6.9	4.8	回転糸切	—	A IIb1	
185	3号住	ベルト-Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	17.1	-8.1	6.3	回転糸切	—	A IIb1	黒土? [大カ]
186	3号住	土器1-Q1深層	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15.6	6.3	5.6	回転糸切	ざらつき	A IIb1	
187	3号住	Q1-Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	7.3	4.8	回転糸切	しつとり	A IIb1	
188	3号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.3	—	(4.5)	—	—	A II	
189	3号住	Q3	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	—	—	—	—	—	A II	黒土?]
190	3号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	—	—	—	—	—	A II	黒土?]
191	3号住	Q2	土師器	坏(輪)	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-16.9	—	(6.3)	—	—	A II	黒土赤みり、焼?
192	3号住	カマド右側-P61	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15.6	—	(6.0)	—	—	(A II)	赤焼き
193	3号住	Q2-埋土、打樋	土師器	甕	ロクロ/ハケレ	ロクロ/ロクロ	-16.2	—	(7.5)	—	—	(A II)	赤焼き
194	3号住	右瀬1	土師器	甕	/ヘラケズリ	/ハケ	—	8.7	(6.1)	砂底	—	(A I?)	赤焼き
195	3号住	赤土上段	土師器	甕	ロクロ/ロクロ/ヘラケズリ	ロクロ/ハケ	-26.6	—	(12.9)	—	金葉母	(A IIa)	赤焼き
196	3号住	カマド右土器3	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.8	7.5	13.5	回転糸切	—	(A IIb)	赤焼き
197	3号住	カマド内土器3	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.7	—	(13.6)	—	—	(A IIb)	赤焼き
198	3号住	P61埋土	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.4	—	(12.9)	—	—	(A IIb)	赤焼き
199	3号住	P61埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラナデ	ヨコナデ/ヘラナデ	-13.2	—	(1.1)	—	—	(A I)	
200	3号住	カマド内1	土師器	甕	/ヘラナデ	/ヘラナデ	—	6.4	(5.4)	顔なし	—	(A I)	
201	3号住	土器1-P61北面	土師器	甕	/ハケ	/ハケ	—	7	(3.9)	木草痕	—	(A I)	底部外周張り出し
202	3号住	P61埋土	土師器	甕	ロクロ/ヘラケズリ	ロクロ/ナデ	-18.1	—	(16.5)	—	—	(A IIa)	
203	3号住	Q2埋土	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	—	—	—	—	—	(A II)	
204	3号住	Q4埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ヘラナデ	-15.3	—	(8.3)	—	—	(A I b)	
205	3号住	ベルト	土師器	甕	ロクロ	/ロクロ	—	7.5	(5.4)	—	—	(A I b)	赤焼き
206	3号住	Q4埋土	土師器	甕	/ヘラケズリ	/ロクロ	—	6.7	(5.7)	静止糸切	—	(A IIa)	赤焼き
207	3号住	Q1埋土	土師器	甕	/ヘラケズリ	/ロクロ	—	8.7	(4.2)	顔なし	—	(A IIa)	赤焼き
208	3号住	Q3埋土	土師器	甕	/ナデ?	/ナデ?	—	11.1	(1.8)	砂底	—	(A I)	
209	3号住	Q1埋土	土師器	甕	/ヘラケズリ	/ロクロ?	—	-10.2	(4.8)	砂底	—	(A IIa)	
210	3号住	Q2-Q3-ベルト埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15.3	4.8	6.3	回転糸切	—	B2	回転筒

番号	遺構名	出土風点	種類	形状	外周調整(L/体部)	内周調整(口/体部)	口径	底径	壁厚	底面	胎土	分類	備考	
211	3号住	Q3-Q4・横出面	須恵器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	14.7	5.7	5.4	凹底糸切	B2	B2		
212	3号住	Q3-Q2埋土	須恵器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	14.4	-5.1	5.1	凹底糸切	B2	B2		
213	3号住	石敷内Q2埋土	須恵器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-15.9	6	4.8	凹底糸切	B2	B2	内外面火傷	
214	3号住	Q4-Q1埋土	須恵器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-14.7	5.1	5.4	凹底糸切	B2	B2		
215	3号住	Q3	須恵器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-15.3	5.7	<4.5>	-	B	B		
216	3号住	Q1-Q3・横出面	須恵器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	14.4	5.3	4.6	凹底糸切	B2	B2		
217	3号住	Q3	須恵器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-	4.5	<2.7>	凹底糸切	B	B		
218	3号住	Q2	須恵器	壺	/ハラケズリ	/口タロ	-	-	-	-	B	B	217と218同一形体か?	
219	3号住	Q1埋土	須恵器	壺	/ハラケズリ	/口タロ	-	-	-	-	B	B		
220	3号住	ベルド内	須恵器	壺	/口タロ	/口タロ	-	-	-	-	B	B		
221	3号住	Pr1・カマド	須恵器	壺	/タタキメ	/蓋て具痕	-	-	<17.1>	-	B	B	最大径30.3cm	
222	3号住	Q1-Q3埋土	須恵器	大壺	/タタキメ	/蓋て具痕	-	-	-	-	B	B		
223	3号住	Q1-Q4埋土	須恵器	大壺	/タタキメ	/蓋て具痕	-	-	-	-	B	B		
224	3号住	Q4埋土下位	須恵器	大壺	/自然焼	/蓋て具痕	-	-	-	-	B	B		
225	3号住	横出面	須恵器	大壺	/タタキメ	/蓋て具痕	-	-	-	-	B	B		
226	4号住	折方マド	土師器	坏	口タロ/口タロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.1	-	<5.7>	-	A1	A1	内黒	
227	4号住	Pr3土器2	土師器	坏	口タロ/口タロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-16.2	6.6	4.5	凹底糸切	A1b1	A1b1	内黒	
228	4号住	Pr3土器4	土師器	坏	口タロ/口タロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.1	-	<4.5>	-	A1	A1	内黒	
229	4号住	灰化土器1	土師器	坏	口タロ/口タロ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.1	-4.6	4.8	凹底糸切	A1b2	A1b2	内黒	
230	4号住	Q1・灰化	土師器	坏	口タロ/口タロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15	7.5	6.2	凹底糸切	A1b1	A1b1	内黒	
231	4号住	Q1埋土	土師器	坏	口タロ/口タロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.4	4.8	4.2	凹底糸切	A1b2	A1b2	内黒	
232	4号住	Q1埋土	土師器	坏	口タロ/口タロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15	5.7	4.8	凹底糸切	A1b2	A1b2	内黒	
233	4号住	Q3埋土	土師器	坏	口タロ/口タロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.4	-4.6	4.8	凹底糸切	A1b2	A1b2	内黒	
234	4号住	Pr1-Q2埋土	土師器	坏	口タロ/口タロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.1	-4.5	5.1	凹底糸切	A1b2	A1b2	内黒	
235	4号住	Q3埋土	土師器	坏	/口タロ	/ハラミガキ	-	5.1	<2.4>	凹底糸切	A1b2	A1b2	内黒	
236	4号住	貼床	土師器	坏	口タロ/口タロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-13.1	-	<4.8>	-	A1	A1	内黒	
237	4号住	Q1埋土	土師器	坏	口タロ/口タロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15	-	<4.8>	-	A1	A1	内黒・蓋裏「字」	
238	4号住	Q2埋土	土師器	坏	/ハラケズリ・口タロ	/ハラミガキ	-	5.7	<1.8>	?	金葉母	A1c	A1c	内黒
239	4号住	折方マド	土師器	坏	/ハラミガキ	/ハラミガキ	-	-	-	-	A1b2	A1b2	内外面黒色取埋	
240	4号住	Q3埋土	土師器	坏・埋附	/口タロ	/ハラミガキ	-	7.2	<3.0>	-	金葉母	A1c	A1c	内黒・蓋付

番号	遺構名	出土地点	種類	状態	外周調整(口/体部)	内周調整(口/体部)	口径	底径	高さ	断面	粘土	分類	備考
241	4号住	Q2埋土	土師器	甕(貯)	/口ノコ	/口ノコ	-	6.9	<2.7>	凹転糸切	しつとり	A1c	高台付
242	4号住	兼カマド	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	15	-	<4.9>	-	-	AII	-
243	4号住	南カマド	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	-14.4	-	<4.0>	-	-	AII	-
244	4号住	Q-0埋土・溝3マド	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	-13.5	-4.8	5.7	-	-	AIIb2	-
245	4号住	灰水土器2	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	15.3	5.4	4.8	凹転糸切	-	AIIb2	-
246	4号住	和土器・心柱・瓦	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	14.7	4.8	5.1	凹転糸切	-	AIIb2	-
247	4号住	PH3土器5	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	13.5	5.7	4.5	凹転糸切	金雲母	AIIb2	-
248	4号住	PH5埋土	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	15	6.9	5.1	凹転糸切	-	AIIb1	-
249	4号住	PH3土器3	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	14.7	5.7	4	凹転糸切	金雲母	AIIb2	器蓋「主」
250	4号住	Q1北側	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	14.4	5.4	4.6	凹転糸切	-	AIIb2	器蓋「九」
251	4号住	貼接	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	14.4	6.3	4.8	凹転糸切	-	AIIb1	口縁打欠き?
252	4号住	貼接	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	-15.6	6.9	6	-	-	AIIb1	-
253	4号住	貼接	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	-14.7	-5.7	5.1	凹転糸切	-	AIIb2	-
254	4号住	Q3埋土・溝6マド	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	-15.6	-	<4.6>	-	-	AII	-
255	4号住	Q3埋土	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	-15.6	6	5.1	凹転糸切	金雲母	AIIb2	-
256	4号住	貼接・Q3埋土	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	-12.6	4.8	5.8	凹転糸切	-	AIIb2	器高余り底径小
257	4号住	Q3-Q4	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	-	6	<3.9>	凹転糸切	-	AIIb2	-
258	4号住	Q1埋土	土師器	坏	/口ノコ	/口ノコ	-	6.7	<2.3>	凹転糸切	-	AIIb1	内面に器蓋?
259	4号住	貼接	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	-	6.7	<2.3>	凹転糸切	-	AIIb2	器蓋「?」[九カ]
260	4号住	Q3埋土	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	-14.1	-4.6	4.2	凹転糸切	-	AIIb2	器蓋「?」[九カ]
261	4号住	Q2埋土	土師器	坏	/口ノコ	/口ノコ	-	-5.4	<2.2>	凹転糸切	-	AIIb2	-
262	4号住	北側・Q1・溝6	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	-	6.3	<2.1>	凹転糸切	能持跡	AIIa1	肩付? 焼成前
263	4号住	Q3埋土	土師器	坏	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	-14.4	-6.2	5.1	凹転糸切	-	AIIb2	器蓋「?」 焼成前
264	4号住	兼カマド	土師器	壺	/ヘラナナ	/ヘラナナ	-	-	-	-	-	A	-
265	4号住	貼接	土師器	壺	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	13.2	7.8	14.7	凹転糸切?	-	(AIIb)	赤焼き
266	4号住	貼接	土師器	壺	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	-15.3	-	<10.3>	-	-	(AII)	赤焼き
267	4号住	Q2埋土	土師器	壺	口ノコ/口ノコ	口ノコ/口ノコ	-	-	-	-	-	(AIIa)	赤焼き
268	4号住	ベルト埋土	土師器	壺	ヨコナテ/ヘラナナ?	ヨコナテ/ヘラナナ?	-13.8	-	<12.0>	-	-	(AIIb)	赤口ノコ
269	4号住	Q1埋土	土師器	壺	ヨコナテ/ヘラケズリ	ヨコナテ/ヘラナナ?	-16.5	-	<9.0>	-	-	(AIIb)	赤口ノコ
270	4号住	Q2-兼カマド	土師器	壺	/口ノコ	/口ノコ	-	9.9	<8.7>	砂底	-	(AIIb)	赤焼き

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外周形状(口/体部)	内周形状(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
271	4号住	Q3埋土	土師器	壺	/ハナケズリ	/ハナケズリ	-	-8.7	(2.1)	砂底		(AⅠ)	非ロクロ?
272	4号住	東西へルト	土師器	壺	/ハナケズリ	/ナナ	-	-	-	砂底		(AⅠb)	非ロクロ?
273	4号住	Q2埋土	土師器	壺	/ハナケズリ	/ロクロ	-	-	-	砂底		(AⅡc)	
274	4号住	貼床	土師器	壺	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-19.5	-	(9.6)			(AⅡ)	赤焼き
275	4号住	西3埋土	土師器	壺	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.7	-	(8.2)			(AⅡ)	赤焼き
276	4号住	北垣	土師器	壺	/ハナケ	/ハナケ	-	10	(8.7)	面転糸切		(AⅠ)	内曇
277	4号住	東カマド及東奥内	土師器	壺	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15.9	-	(11.2)			(AⅡ)	赤焼き
278	4号住	東カマド	土師器	壺	/ハナケ	/ナナ	-	-10.5	(2.7)	痕なし		(AⅡ)	
279	4号住	東カマド東合	土師器	壺	ヨコナナ/ハナケズリ	ヨコナナ/ハナケズリ(ナナ)	-	-	-			(AⅡc)	
280	4号住	南カマド東内	土師器	壺	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-			(AⅡ)	体部上に北縁状の段
281	4号住	貼床	土師器	壺(微小)	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	10.5	-	(2.5)			(AⅡb)	赤焼き
282	4号住	Q1埋土	土師器	壺(微小)	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	8.1	-	(4.5)			(AⅡb)	赤焼き
283	4号住	南カマド埋土内	土師器	小皿	ロクロ成形	ロクロ成形	4.2	3	8.8			-	仏具の可能性?
284	4号住	Q3埋土	土師器	杯	ロクロ成形	ロクロ成形	-	-2.7	2.7			-	仏具の可能性?
285	4号住	南カマド	須恵器	杯	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-			B	
286	4号住	Q2埋土	須恵器	杯	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.7	-	(3.6)			B	
287	4号住	貼床	須恵器	長頸壺	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-			B	
288	4号住	貼床	須恵器	須恵壺	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-			B	
289	4号住	貼床	須恵器	壺?	/ハナケズリ)?	/ナナ	-	-	-			B	
290	4号住	Q2埋土	須恵器	壺	/11ケリ	/ナナ	-	-	-			B	
291	4号住	Q3埋土	須恵器	壺	/ロクロ	/ナナ	-	-	-			B	
292	4号住	Q3埋土	須恵器	壺	/タナキ	/当て具	-	-	-			B	
293	4号住	貼床	須恵器	大壺	/タナキ	/当て具	-	-	-			B	
294	4号住	Q2埋土	須恵器	入壺	/ロクロ	/ナナ/当て具	-	-	-			B	
295	4号住	Q2埋土	須恵器	大壺	/タナキ	/当て具	-	-	-			B	
296	4号住	北垣	須恵器	入壺	/タナキ	/当て具	-	-	-			B	
297	4号住	表面	石	石瓦	長さ:9.9cm,幅:10.2cm,厚さ:6.0cm,重さ:509g								耐用?
298	4号住	表面	石	鉄石	長さ:26.8cm,幅:34.8cm,厚さ:18.0cm,重さ:11.28g								安山岩 御四紀火山
299	4号住	東西へルト	鉄製品	釘	長さ:4.3cm,幅:0.65cm,厚さ:0.6cm,重さ:6.9g								安山岩 御四紀火山
300	4号住	西3埋土	鉄製品	刀子	長さ:13.5cm,幅:0.3-1.5cm,厚さ:0.3cm,重さ:17.7g								

番号	道標名	出土地点	複製	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
301	4号住	Q4埋土	複製品	刀子	長さ:~7.7cm, 幅0.3~0.8cm, 厚さ0.2~0.4cm, 重さ5.1g								
302	4号住	カマド	複製品	刀子	長さ:~7.7cm, 幅0.3~0.8cm, 厚さ0.2~0.4cm, 重さ5.1g								
303	5号住	Q4埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-15	6.3	4.8	回転糸切		A1a1	内黒, 底部に黒成前の孔
304	5号住	カマド	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-14.4	-6	4.8	回転糸切		A1a2	内黒
305	5号住	カマド	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	15.9	6	6	回転糸切		A1a2	内黒, 器底に「J」字が]
306	5号住	Q3埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-13.3	6.3	4.5	回転糸切		A1a1	内黒
307	5号住	Q3埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-13.5	5.7	4.8	回転糸切		A1a2	内黒
308	5号住	Q3埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-13.8	5.1	4.8	回転糸切		A1b2	内黒
309	5号住	Q270-a下	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-14.7	5.7	4.8	回転糸切	金雲母	A1a2	内黒
310	5号住	點状	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-	6.4	<2.8>	回転糸切		A1a1	内黒
311	5号住	點状	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-	5.7	<2.1>	回転糸切		A1b2	内黒
312	5号住	ベルト埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-15	-	<4.5>	-		A1	内黒
313	5号住	Q3埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-	-8.1	<2.4>	回転糸切		A1a1	内黒, 器底に「J」
314	5号住	Q3埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-	-	-	-		A1	内黒, 器底に「J」
315	5号住	ベルト埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-	-6.3	<2.1>	回転糸切		A1	内外黒色成理
316	5号住	埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-	-	-	-		A1E	器底に「J」
317	5号住	埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	13.8	4.7	5.1	回転糸切		A1b2	
318	5号住	Q3埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	14.7	6.6	4.8	回転糸切		A1b1	器底に「J」字が, ゆがみ
319	5号住	Q3埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	15.3	6	5.5	回転糸切		A1b2	器底に「J」
320	5号住	Q3埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	14.2	6	5.1	回転糸切		A1b2	外面に船上紋付着
321	5号住	Q3埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-15.6	7.5	5.7	回転糸切		A1b1	
322	5号住	Q4埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-13.8	-6.3	4.2	回転糸切		A1b1	
323	5号住	Q3埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	14.7	7.2	5.1	回転糸切		A1b1	器底に「J」字が, 器底の穴が?
324	5号住	Q3埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-15	7.2	4.5	回転糸切		A1b1	
325	5号住	Q2埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-14.7	-5.1	4.8	回転糸切		A1b2	
326	5号住	カマド	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-	6.9	<3.3>	回転糸切	金雲母	A1b2	底部内面に黒成
327	5号住	Q4埋土	土師器	坏	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-	-	<2.1>	回転糸切		A1c	高台付
328	5号住	Q3埋土	土師器	差	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	13.2	9	13.8	板なし		(A1c)	半口径
329	5号住	Q3-Q4埋土	土師器	差	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-	7.5	<11.4>	板なし		(A1c)	体部外面にタケキ
330	5号住	To-a下埋土	土師器	差	口径/口下径/体径/口高	口径/口下径/体径/口高	-23.5	-	<5.1>	-		(A1a)	337-338同?

番号	遺構名	出土地点	種類	形状	外面調査(口/体部)	内面調査(口/体部)	口径	底径	器高	底面	新土	分類	備考
331	5号住	藪窪ベロト埋上	土師器	甕	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	16.3	—	(10.8)	—	—	(A11)	赤焼き
332	5号住	ベロト埋土	土師器	甕	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	24.7	—	(6.3)	—	—	(A10)	口タロ部の内黒
333	5号住	Q3埋上・ベロト	土師器	壺(小)	ヨコナナ/ヘラケズリ	ヨコナナ/ナナ	—	—	(4.9)	—	—	(A1b)	身口タロ
334	5号住	Q3埋上・藪窪ベロト	土師器	甕	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	9.6	—	(4.8)	—	—	A	内外黒出包処の産
335	5号住	藪窪埋土	土師器	把手付	ヘラミガキ	—	—	—	—	—	—	—	—
336	5号住	Q3埋上・下	須恵器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	—	—	—	—	—	B	—
337	5号住	ナマ7津形区(ベ)	須恵器	甕	/ヘラケズリ	/ナナ/ヘラケズリ	—	—	—	—	—	B	—
338	5号住	Q2埋上To-aT	須恵器	甕?	/ヘラケズリ	/ナナ	—	—	—	—	—	B	—
339	5号住	Q3埋上・下	須恵器	大甕	/ナナキヌ	/鬚瓦具	—	—	—	—	—	B	—
340	5号住	藪窪ベロト	石器	石皿	長さ:16.4cm, 幅:24.0cm, 厚さ:0.6cm, 重さ:112.4g	—	—	—	—	—	—	—	安山岩 栗山産
341	5号住	床州	石器	鉄器石	長さ:16.0cm, 幅:14.4cm, 厚さ:9.2cm, 重さ:1264.7g	—	—	—	—	—	—	—	安山岩 栗山産
342	5号住	床面	石器	鉄器石	長さ:15.9cm, 幅:15.9cm, 厚さ:7.8cm, 重さ:1562.3g	—	—	—	—	—	—	—	安山岩 栗山産
343	5号住	Q3埋上To-aT	鉄製品	釘	長さ:—4.0cm, 幅:0.7cm, 厚さ:0.5mm, 重さ:5.3g	—	—	—	—	—	—	—	安山岩 栗山産
344	6号住	上層1	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.1	5.7	—	凹陥浅切	—	A1b2	内黒、人為的な欠け?
345	6号住	Pr11埋上	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	13.2	5.6	4.8	凹陥浅切	—	A1b2	内黒
346	6号住	上層2	土師器	坏	口タロ/口タロ下層/ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.4	5.5	5.1	凹陥浅切	—	A1a2	内黒
347	6号住	Pr11・Q4埋上	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	15.6	5.4	5.1	凹陥浅切	—	A1a2	内黒、大きゆがみ
348	6号住	Q4埋上	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	13.8	5.1	5.1	凹陥浅切	—	A1b2	内黒、墨断7片/2[凡本]
349	6号住	Pr1埋上	土師器	坏	口タロ/口タロ下層/ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.4	6.3	4.8	ヘラケズリ	—	A1a1	内黒
350	6号住	Q3埋上	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.4	6	5.1	凹陥浅切	—	A1b2	内黒
351	6号住	Q1埋上	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	16.5	—	(4.8)	—	—	A1	内黒
352	6号住	Q1埋上	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	15.7	—	(6.3)	—	—	A1	内黒
353	6号住	藪窪内・Pr10	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.1	5.7	4.8	—	—	A1b2	内黒、底押小
354	6号住	Pr11埋上・Pr3	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.4	4.5	5.1	凹陥浅切	—	A1b2	内黒、底押小
355	6号住	右堀内	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	16.8	6.3	5.1	凹陥浅切	—	A1a1	内黒
356	6号住	Q3埋上	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.4	5.4	6.1	凹陥浅切	—	A1b2	内黒
357	6号住	Q3埋上	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	17.2	6.6	6	凹陥浅切	—	A1a1	内黒
358	6号住	Q4埋上	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	15.6	6.6	5.1	凹陥浅切	—	A1b1	内黒
359	6号住	Q3埋上	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	13.8	5.7	5.2	凹陥浅切	—	A1b2	内黒
360	6号住	Pr1埋上	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	15	—	(4.8)	—	—	A1	内黒

番号	遺構名	出土地立	種類	器種	外面調査(口/体部)	内面調査(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
361	6号住	Q1堀土	土師器	坏	口口口/口口口	へろミガキ/へろミガキ	-15.9	-	(4.8)	-		A1	内黒
362	6号住	Pn1堀土	土師器	坏	口口口/口口口	へろミガキ/へろミガキ	-14.6	-	(4.5)	-		A1	内黒
363	6号住	Q3堀土	土師器	坏	口口口/口口口	へろミガキ/へろミガキ	-17.1	-	(5.2)	-		A1	内黒
364	6号住	Q2堀土	土師器	坏	口口口/口口口	へろミガキ/へろミガキ	-15.3	-	(5.3)	-		A1	内黒
365	6号住	北東御殿	土師器	坏	口口口/口口口	へろミガキ/へろミガキ	14.3	-5.6	5.1	圓形糸切		A1B2	内黒、黒土? [川島カ]
366	6号住	北東御殿	土師器	坏	口口口	へろミガキ	-	-	-	-		A1	内黒、黒土? [川島カ]
367	6号住	Pn1土器1	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	14.7	6	4.8	圓形糸切		A1B2	赤燒土
368	6号住	Pn1土器4	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	14	4.5	4.8	圓形糸切		A1B2	赤燒土、底径小
369	6号住	Pn1堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-15.5	5.7	5.1	圓形糸切	金雲母	A1B2	赤燒土
370	6号住	石堀内	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-14.7	6.9	4.8	圓形糸切		A1B1	赤燒土
371	6号住	Q3堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	15.5	5.7	5.7	圓形糸切		A1B2	赤燒土
372	6号住	Q3堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	14.7	5.7	4.8	圓形糸切		A1B2	赤燒土
373	6号住	Q2堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-16.5	6	5.1	圓形糸切		A1B1	赤燒土
374	6号住	Pn1堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-13.5	4.8	4.8	圓形糸切	金雲母	A1B2	赤燒土、黒土? [川島カ]
375	6号住	Pn1堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-14.6	-5.1	4.9	圓形糸切		A1B2	赤燒土、外周に段
376	6号住	Q4堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-16.2	6.3	4.8	圓形糸切		A1B1	赤燒土
377	6号住	Q3堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-14.2	-5.6	4.5	圓形糸切		A1B2	赤燒土
378	6号住	Q3堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	15.6	6	4.7	圓形糸切		A1B2	赤燒土
379	6号住	Q3堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-15.6	6	4.8	圓形糸切		A1B2	赤燒土
380	6号住	Q3堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-13.8	6	5.4	圓形糸切		A1B2	赤燒土
381	6号住	Q2堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	13.8	5.1	5.1	圓形糸切		A1B2	赤燒土
382	6号住	Q4堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-15	7	4.5	圓形糸切		A1B1	赤燒土
383	6号住	堀内内	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-14.1	6	4.2	圓形糸切		A1B2	赤燒土、黒土? [川島カ]
384	6号住	Pn1堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-16.6	-6	5.1	圓形糸切		A1B2	赤燒土
385	6号住	Q4堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-16.8	-6.6	5.6	圓形糸切		A1B1	赤燒土
386	6号住	Q3-Pn1堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-15	6.6	4.9	圓形糸切	砂粒多	A1B1	赤燒土
387	6号住	Q1堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-	-6	(3.1)	圓形糸切		A1B2	赤燒土
388	6号住	Q3堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-	-5.4	(2.7)	圓形糸切		A1B1	赤燒土、黒土? [川島カ]
389	6号住	カマド・左堀内	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	17.1	-	(3.9)	-		A1	赤燒土、大口徑
390	6号住	Q1堀土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-14.4	-7.5	5.4	圓形糸切		A1B1	赤燒土、外周に砂層

番号	通称名	出土地点	種類	朝顔	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
391	6号住	墓土	土師器 坏	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-14.7	-4.2	4.5	再調整		AIIa2	赤焼き、黒耀「几」
392	6号住	墓内内	土師器 坏	坏	/口タロ	/口タロ	-5.1	(4.0)	(4.0)	黒胎・赤切		AIIa2	赤焼き、黒耀「几」焼成前
393	6号住	Q4埋土	土師器 坏	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-13	(4.5)	—	—		AII	赤焼き、黒耀「一万」庄文字
394	6号住	Q1埋土	土師器 灰(焼物)	灰(焼物)	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-17.5	(5.3)	(5.3)	高台付		AIIc	内面、外周黒色灰質で、土キ
395	6号住	Q1埋土	土師器 灰(焼物)	灰(焼物)	/口タロ	/口タロ	—	7.5	(2.7)	曲線調整		AIIc	内黒
396	6号住	Q1埋土	土師器 灰(焼物)	灰(焼物)	/口タロ	/口タロ	—	7.5	(3.3)	目付調整	金雲母	AIIc	赤焼き
397	6号住	墓内内	土師器 灰(焼物)	灰(焼物)	/口タロ	/口タロ	—	7	(3.9)	目付調整		AIIc	赤焼き
398	6号住	Q1-Q3埋土	土師器 灰(焼物)	灰(焼物)	/口タロ	/口タロ	—	4.2	(3.1)	同形赤切		(AII)	赤焼き
399	6号住	Pr1埋土	土師器 葉	葉	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-14.7	—	(9.9)	—		(AIIa)	赤焼き
400	6号住	Pr1	土師器 葉	葉	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	16.5	—	(6.9)	—		(AIIa)	赤焼き
401	6号住	Q3埋土・Pr1	土師器 葉	葉	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	17.7	8.4	(12.0)	痕なし		(AIIa)	a・b体、赤焼き
402	6号住	Q1-Q埋土	土師器 葉	葉	/ハラケズリ	/ナテ	—	9.3	(9.0)	痕なし		(AIIb)	
403	6号住	Q3埋土	土師器 葉	葉	/ハラケズリ	/口タロ	—	-8.4	(4.4)	砂底		(AII)	赤焼き
404	6号住	Q3埋土	土師器 葉	葉	/口タロ	/口タロ	—	7	(5.1)	同形赤切		(AII)	赤焼き
405	6号住	Q4埋土	土師器 葉	葉	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-24	—	(5.3)	—		(AIIb)	黒耀?」焼成直
406	6号住	Q3埋土	土師器 葉	葉	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-24.2	—	(8.7)	—		(AII)	
407	6号住	Pr1	土師器 葉	葉	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-17.2	—	(8.7)	—	金雲母	(AII)	
408	6号住	Pr1	土師器 葉	葉	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-23.1	—	(9.6)	同形赤切		(AIIb)	内黒
409	6号住	Pr1	土師器 葉	葉	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-21	—	(15.6)	—		(AIIa)	赤焼き
410	6号住	Q3埋土	土師器 葉	葉	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	22.2	—	27.8	—		(AIIb)	赤口タロ
411	6号住	Q4埋土	土師器 葉	葉	/ナテ	/ナテ	—	-12.2	(9.9)	痕なし		(AIIa)	
412	6号住	Q3埋土	土師器 葉	葉	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-15	—	(4.5)	—		(AIIb)	
413	6号住	Q3埋土	土師器 葉	葉	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-13.9	—	(3.7)	—		(AIIb)	赤焼き
414	6号住	Q1-Q1-ベト埋土	土師器 灰(焼物)	灰(焼物)	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-10.5	7.9	7.5	痕なし		(AIIb)	粗糠
415	6号住	墓内内	土師器 耳皿	耳皿	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	—	4.5	(1.9)	竹付		—	内外黒色
416	6号住	Q3埋土	土師器 坏	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	—	4.6	(2.2)	—		—	内外黒色
417	6号住	Q2埋土	土師器 坏	坏	/口タロ	/口タロ	-13.5	-5.4	(2.1)	—		B2	
418	6号住	Q2埋土	土師器 坏	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-13.5	—	(3.0)	—		B	
419	6号住	Q4埋土	土師器 蓋?	蓋?	/タケキ	/タケキ	—	12	(2.5)	—		B	
420	6号住	Q4埋土	土師器 華	華	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	12.8	—	(11.1)	—		B	

番号	遺構名	出土地立	種類	器種	外周調整(口/体部)	内周調整(口/体部)	口径	径	径	器高	底面	始土	分類	備考
421	6号住	Q2埋土	須恵器	壺	ノ口口ロ・ヘラケズリ	ノカキメ	-	-	-	-	-	B		
422	6号住	Q4埋土	須恵器	壺	ノ口口ロ	ノ口口ロ	-	-	-	-	-	B		
423	6号住	Q4埋土	須恵器	壺	ノ口口ロ	ノ口口ロ	-	-	-	-	-	B		
424	6号住	Q2埋土	須恵器	壺	ノタタキメ	ノ当て具痕	-	-	-	-	-	B		
425	6号住	Q3埋土	須恵器	壺?	ノ口口ロ	ノナテ	-	11.6	(3.9)	-	-	B		
426	6号住	Q4埋土	須恵器	壺	口口口ノ	口口口ノ	21.3	-	(3.3)	-	-	B		
427	6号住	Q2埋土	須恵器	大壺	ノ口口ロ	ノ口口ロ	-	-	-	-	-	B		
428	6号住	埋土	石	碇石	長さ:-7.8cm,幅:-5.4cm,厚さ:6.3cm,重さ:276g									幸山岩 箱内配火山
429	6号住	検出面	石	碇石	長さ:-2.6cm,幅:3.2cm,厚さ:2.2cm,重さ:43.8g									手付ち,湖尻岩 奥羽山脈
430	6号住	Q2埋土	石	碇石	長さ:-3.8cm,幅:4.0cm,厚さ:1.8cm,重さ:41.9g									手付ち,湖尻岩 奥羽山脈
431	6号住	鉄製品	鉄製品	鎌	長さ:-7.3cm,幅:1.7~2.4cm,厚さ:0.2~0.4cm,重さ:20.7g									
432	6号住	鉄製品	鉄製品	刀子	長さ:-4.0cm,幅:0.6~0.9cm,厚さ:0.1~0.3cm,重さ:2.4g									
433	6号住	鉄製品	鉄製品	刀子	長さ:-11.7cm,幅:0.2~1.4cm,厚さ:0.2~0.4cm,重さ:8.8g									
434	6号住	鉄製品	鉄製品	釘	長さ:6.4cm,幅:0.5~1.2cm,厚さ:0.4cm,重さ:6.8g									
435	6号住	鉄製品	鉄製品	釘	長さ:-3.4cm,幅:0.3~0.7cm,厚さ:0.5cm,重さ:1.8g									
436	7号住	Q2・Q3・Q4	土師器	坏	口口口ノ口口口ノ	ヘラミガキノヘラミガキノ	-13.8	6.3	5.4	回転糸切		A1B1	内黒	
437	7号住	埋土内	土師器	坏	口口口ノヘラミガキノ	ヘラミガキノノ	-	-	-	-	-	A1	内黒?とび	
438	7号住	Q3・Q4・ベルト	土師器	坏(輪)	口口口ノ口口口ノ埋土内ヘラミガキノ	ヘラミガキノノヘラミガキノ	-25.9	9.6	9.9	回転糸切		A1a1	内黒,初大形	
439	7号住	埋土内・埋土内	土師器	坏	口口口ノ口口口ノ	口口口ノ口口口ノ	14.7	7.2	5.1	回転糸切		A1B1	赤焼き,内外面油滲	
440	7号住	Q3埋土	土師器	坏	口口口ノ口口口ノ	口口口ノ口口口ノ	14.1	7.2	5.7	回転糸切		A1B1	赤焼き,器淵「斗」	
441	7号住	ベルト・埋土	土師器	坏	口口口ノ口口口ノ	口口口ノ口口口ノ	14.1	7.1	5.4	回転糸切		A1B1	赤焼き	
442	7号住	Q3埋土	土師器	坏	口口口ノ口口口ノ	口口口ノ口口口ノ	14.7	6.9	4.8	回転糸切		A1B1	赤焼き	
443	7号住	土器1・埋土内	土師器	壺	口口口ノノヘラケズリ	口口口ノノナテ	19.2	9	20	傾伏し		(A1B)	赤焼き	
444	14号住	埋土	土師器	壺	ナテノヘラケズリ	ヘラナテノノヘラナテノナテ	16.5	-	(24.0)	-		(A1C)	ナテケズリ,14号住埋土層内	
445	7号住	Q3埋土	須恵器	坏	口口口ノ口口口ノ	口口口ノ口口口ノ	-14.4	-	(3.6)	-		B		
446	7号住	埋土内	須恵器	坏	口口口ノ口口口ノ	口口口ノ口口口ノ	14.8	6	4.6	回転糸切		B2		
447	7号住	Q1・Q2・Q4・埋土内	須恵器	壺	ノカキメ・ヘラケズリ	ノカキメ・口口口ノナテ	-	-	(25.8)	-		B		
448	8号住	埋土内	土師器	坏	口口口ノ口口口ノ	ヘラミガキノノヘラミガキノ	14.7	7.8	6.6	回転糸切		A1B1	内黒	
449	8号住	埋土内	土師器	坏	口口口ノ口口口ノ	ヘラミガキノノヘラミガキノ	16.6	6.9	5.9	回転糸切		A1B1	内黒	
450	8号住	埋土内	土師器	坏	口口口ノ口口口ノ	ヘラミガキノノヘラミガキノ	-15.3	6.3	5	回転糸切		A1B1	内黒	

番号	遺構名	出土地点	種類	形状	外周調整(口/体部)	内周調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
451	8号住	カマド内	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	15	6.6	4.8	—	—	A11a1	赤焼き(遺構中)
452	8号住	F11掘土	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	15.3	6.6	4.8	回転糸切	—	A11b1	外面に赤行迹
453	9号住	Q4掘土	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-17.4	—	<4.8>	—	—	A1	内黒
454	9号住	カマド付棟	土師器	罎	口タロ/ヘラケズリ	口タロ/口タロ	-16.5	6.9	<10.5>	回転糸切	—	(A11a)	赤焼き, a・b体
455	9号住	無道 Q2-Q4	土師器	罎	口タロ/ヘラケズリ	口タロ/口タロ	22.2	—	<20.7>	—	—	(A11a)	赤焼き
456	9号住	Q1-Q4掘土	須恵器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-13.5	-5.7	4.9	回転糸切	—	B2	—
457	10号住	ベルト	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-16.2	—	<3.0>	—	—	A11	赤焼き
458	10号住	土階1	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	15.3	6	4.9	ヘラケズリ	—	A11a2	遺構中/赤×S穴文字
459	10号住	Q3掘土	土師器	罎	/ナケズリ	/ヘラケズリ/ナケズリ	—	-11.1	<4.6>	痕なし	—	(A11c)	非ロクロか?
460	10号住	Q2掘土	土師器	罎	/ナケズリ	/ナケズリ	—	—	—	—	—	(A11b)	群くて痕無
461	10号住	Q2掘土	須恵器	罎	/タケキス・ロクロ	/ロクロ	—	—	—	—	—	B	—
462	10号住	Q4掘土	須恵器	大罎	/タケキス	/ロクロナナ	—	—	—	—	—	B	—
463	10号住	床面	鉄製品	刀子	長さ:-7.8cm, 幅:0.7~1.0cm, 厚さ:0.1~0.3cm, 重さ:9.9g	—	—	—	—	—	—	—	—
464	11号住	Q1掘土	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-14.4	7.2	4.5	回転糸切	—	A11a1	内黒
465	11号住	掘土・検出面	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-12.1	—	<3.9>	—	—	A1	内黒
466	11号住	カマド・掘土内	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-13.2	—	<3.9>	—	—	A1	内黒とび
467	11号住	掘土	土師器	罎	ヨコナナ/ナナ	ヨコナナ/ナナ	-11.1	—	<8.1>	—	—	A1	—
468	11号住	Q3掘土	土師器	罎	/ヘラケズリ	/ヘラケズリ	—	-6.9	<6.0>	ナケ	—	(A11c)	—
469	11号住	掘土掘土	土師器	罎	ヨコナナ/ヘラケズリ	ヨコナナ/ナナ	-23.1	—	<11.1>	—	—	(A11)	—
470	11号住	Q1掘土	須恵器	罎	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-13.2	—	<4.5>	—	—	B	—
471	11号住	Q1掘土	須恵器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-14.2	—	<3.3>	—	—	B	—
472	12号住	Q2掘土・ベルト下	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-15	6	6.9	回転糸切	—	A11a2	内黒
473	12号住	Q2掘土・ベルト下	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-12.5	-5.6	5.1	ヘラミガキ	—	A11b2	内黒
474	12号住	カマド内No1	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-13.2	5.6	4.8	回転糸切	—	A11c2	内黒とび
475	12号住	キヤド掘土・検出床	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-14.1	—	<4.5>	—	—	A111	赤焼き
476	12号住	Q2掘土下	土師器	罎	/ヘラケズリ	/ヘラケズリ	—	-9.3	<11.1>	痕なし	—	(A11a)	非ロクロ
477	12号住	床面・掘土	土師器	罎	/ナケズリ	/ナケズリ	—	-8.7	<8.7>	ムシロ底	—	(A11)	非ロクロ
478	12号住	床面・掘土	土師器	罎	/ヘラケズリ	/ナナ	—	-13.5	<5.4>	—	—	(A11)	非ロクロ
479	12号住	キヤド掘土No1	土師器	罎	口タロ/タケキス・ヘラケズリ	口タロ/口タロ・ハケス	-23.7	—	<32.1>	—	—	(A11a)	—
480	12号住	カマド内No1	土師器	罎	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-17.1	—	<14.7>	—	—	(A11b)	赤焼き

番号	遺構名	出土地点	種類	外周測影(L1/体部)	内周測影(L1/体部)	山径	直径	高さ	底面	貯上	分類	備考
481	12号住	カマド内No1	土師器 甕	ヨコナデ/ナデ	ヨコナデ/ヘラナデ	14.2	—	(9.1)	—	—	(A1)	赤ロクロ、支脚土器
482	12号住	Q1下縁部跡上	須恵器 壺	分ケキ	ロクロ	18.4	—	(15.3)	—	—	B	—
483	12号住	粗土	須恵器 壺	ロクロ/ロクロ(自然釉)	ロクロ/ロクロ	—	—	(8.4)	—	—	B	—
484	12号住	ベルト下	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	—	-6.6	(3.0)	再調整	—	B	—
485	12号住	粗土上	須恵器 大甕	ロクロ	ロクロ	—	—	(8.1)	—	—	B	—
486	12号住	Q1内土	須恵器 大甕	分ケキ	ナデ	—	—	—	—	—	B	—
487	12号住	柴雨	鉄製品 雁又鎌	長さ: 6.2cm、幅: 5.5cm、厚さ: 0.3~0.5cm、重さ: 20.5g	—	—	—	—	—	—	—	—
488	13号住	Q4粗土	土師器 坏	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-12.6	5.1	4.8	凹底糸切	—	A1b2	内黒
489	13号住	477E北半柱跡1	土師器 甕	ヘラケズリ	ヘナケズ	—	-9.1	(8.1)	底なし	—	A1c	赤ロクロ
490	13号住	カマド内土器1	土師器 甕	ナケズリ	ハケ	—	7.7	(7.8)	底なし	—	A1a	赤ロクロ
491	13号住	Pl1埋土	土師器 甕	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ハケ/ナデ	-13.3	—	(7.9)	—	—	A1	赤ロクロ
492	13号住	溝道内	土師器 甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	—	—	(6.9)	—	—	A11	赤焼き
493	13号住	カマド付近	須恵器 坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	—	(2.9)	—	—	B	—
494	14号住	赤面-Q2-ベルト	土師器 坏	ロクロ/ロクロ下縁ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.6	6	(5.0)	底なし	—	A1b2	内黒、黒鉛字焼成青銅器
495	14号住	黒土	土師器 坏	ロクロ	ロクロ	—	-8.2	(2.4)	凹底糸切	—	A1b1	内黒、黒鉛字?
496	14号住	洲山側溝	土師器 坏	ロクロ/ロクロ下縁ヘラケズリ	ロクロ/ロクロ	15.8	6.4	5.4	凹底糸切	—	A1a1	赤焼き
497	14号住	Q1内土	土師器 坏	ロクロ/ロクロ下縁ヘラケズリ	ロクロ/ロクロ	13.7	6	4.3	凹底糸切	—	A1a2	赤焼き
498	14号住	Q2粗土	土師器 坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	6.3	5.1	凹底糸切	—	A1b1	赤焼き
499	14号住	Q2埋土	土師器 坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-16.2	—	(4.5)	—	—	A11	赤焼き
500	14号住	カマド周辺	土師器 坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-16.2	—	(2.7)	—	—	A11	赤焼き、黒鉛字、Q2埋土、黒合
501	14号住	Q2埋土	土師器 坏	ロクロ	ロクロ	—	—	—	—	—	A11	赤焼き、黒鉛字?
502	14号住	カマド内	土師器 坏	ロクロ	ロクロ	—	—	—	—	—	A11	赤焼き、黒鉛字?、焼成前
503	14号住	Q1-Q4粗土	土師器 壺	ロクロヘラケズリ/ヘナケズ	ロクロ	—	9	(13.5)	—	—	(A1a)	—
504	14号住	Q3埋土	須恵器 壺	ロクロ	ロクロ	—	—	(4.5)	—	—	B	—
505	14号住	Q1-Q4埋土	須恵器 大甕	分ケキ	ナデ	—	—	—	—	—	B	b体
506	14号住	Q3埋土	鉄製品 刀子	長さ: 5.1cm、幅: 0.4~0.7cm、厚さ: 0.4cm、重さ: 3.3g	—	—	—	—	—	—	—	—
507	15号住	黒川カマド北柱	土師器 坏	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-14.4	6.3	4.7	ヘラミガキ	—	A1a1	内黒
508	15号住	Pl3埋土	土師器 坏	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.7	7.3	5.1	磨上赤土?	—	A1b1	内黒
509	15号住	Q1埋土	土師器 坏	ロクロ/ロクロ下縁ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-16.5	6	5.1	凹底糸切	—	A1a2	内黒
510	15号住	土器1	土師器 坏	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	—	5.4	(3.0)	凹底糸切	—	A1b1	内黒

番号	遺構名	出土地点	種類	位置	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
511	15号住	Q4埋土	土師器	坏	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-13.8	-	<4.8>	-	A I	内黒	
512	15号住	右側内	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	14.1	6.8	5.1	凹底糸切	A II b1	赤焼き	
513	15号住	支脚土器	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	13.8	5.1	4.8	凹底糸切	A II b2	赤焼き	ゆがみ
514	15号住	カマド-Q2	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	13.8	5.7	5.6	凹底糸切	A II a2	赤焼き	器蓋「几ノ？」
515	15号住	カマド・湯床	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-15	6.3	4.8	凹底糸切	A II b1	孔あり	
516	15号住	支脚土器	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	14.1	5.7	6	凹底糸切	A II a2	赤焼き	器蓋「二枚成後」
517	15号住	Pa-Q4埋土・埋込内	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	15.4	6.6	5.3	凹底糸切	A II b1	赤焼き	
518	15号住	無蓋内-Q1埋土	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	13.8	-5.1	4.6	凹底糸切	A II b2	赤焼き	器蓋「几ノ？」
519	15号住	Q4埋土	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	13.8	6.3	4.3	凹底糸切	A II b1	赤焼き	
520	15号住	埋土	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-15	5.6	5.1	凹底糸切	A II b2	赤焼き	器蓋
521	15号住	Q1埋土	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-13.2	5.3	4.5	凹底糸切	A II b2	赤焼き	
522	15号住	Q4埋土	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-15	-	<4.0>	-	A II	赤焼き	
523	15号住	Q2埋土	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-15.3	-	<4.5>	-	A II	赤焼き	器蓋「几ノ？」
524	15号住	Q4埋土	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-8.7	3	2.7	凹底四角縁	A II	赤焼き	小さい
525	15号住	カマド内	土師器	坏	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-13.2	-	<8.1>	-	(A II a)	赤焼き	
526	15号住	右側内	土師器	壺	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-	-	<6.6>	-	(A II b)	赤焼き	
527	15号住	ベルト内	土師器	壺	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-	-	<7.8>	-	(A I b)	赤口タロ	
528	15号住	ベルト	土師器	壺	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-	-	<11.4>	-	(A I b)	赤口タロ	
529	15号住	Pa-Q4埋土	土師器	壺	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-18	-	<6.1>	-	(A I)	赤口タロ	
530	15号住	Pa-Q4埋土	土師器	壺	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-19.2	-	<10.8>	-	(A I)	赤口タロ	
531	15号住	Pa-Q4埋土	土師器	壺	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-	-	<18.0>	-	(A I)	赤口タロ	口唇広い
532	15号住	上部2	土師器	壺	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-23.3	-	<30.9>	-	(A I b)	赤口タロ	
533	15号住	Q2埋土	土師器	壺(内)	口タロ/口タロ	口タロ/口タロ	-8.1	-	<3.0>	-	(A II)		
534	15号住	Q1埋土	土師器	壺?	ヘラミガキ	口タロ/口タロ	-	-10.4	<4.2>	砂底	(A II a)	口タロ	
535	15号住	Q4埋土	須恵器	壺	口タロ	口タロ	-11.1	-	<3.3>	-	B		
536	15号住	ベルト	須恵器	人蓋	/当て具類	/当て具類	-	-	-	-	B		
537	15号住	ベルト	須恵器	大蓋	/タケキ	/タケキ	-	-	-	-	B		
538	15号住	無蓋検出内	須恵器	大蓋	/タケキ	/タケキ	-	-	-	-	B		
539	15号住	Q3埋土	須恵器	大蓋	/タケキ	/タケキ	-	-	-	-	B		
540	16号住	土師2	土師器	輪郭付	口タロ/口タロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	15.6	7.9	6.6	溝付	A I c	内黒	

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外周調整(口/体部)	内周調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
541	16号住	Q2-Q4	土師器	坏	口口口/口口口	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-16.3	6.3	5.4	凹底高切	A1b1	内黒	
542	16号住	Q1埋土	土師器	坏	口口口/口口口	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-15.9	-	<3.9>	-	A1	内黒, 黒面[?]?	
543	16号住	Q3埋土	土師器	坏	口口口/口口口埋ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-16.6	-7	4.8	凹調整	A1a1	内黒	
544	16号住	カマヤ川沿	土師器	坏	口口口/口口口	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-15	-	<4.8>	-	A1	内黒	
545	16号住	埋土	土師器	坏	口口口	口口口	-	-	<2.4>	-	A11	多文字黒面[?]外[?]在[?]	
546	16号住	埋土	土師器	坏	口口口	口口口	-15.6	-	<3.9>	-	A11	多文字黒面[?]外[?]在[?]	
547	16号住	埋土	土師器	坏	口口口	口口口	-	-	<2.9>	-	A11b1	黒面[?]	
548	16号住	紀伊-Q1埋土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	13.8	4.8	4.8	凹底高切	A11b2	赤褐色	
549	16号住	Q3-P12	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-15.6	-	<3.3>	-	A11	赤褐色	
550	16号住	P11埋土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-14.6	-	<3.9>	-	A11	赤褐色	
551	16号住	東園地上内	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-14.9	-	<3.9>	-	A11	赤褐色, 黒面[?]	
552	16号住	土器1	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	14.6	5.4	5.9	凹底高切	A11b2	赤褐色, 外周黒面, 凹調整	
553	16号住	Q2埋土	土師器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-15	-	<5.4>	-	(A11)		
554	16号住	Q1-Q2-カマヤ内	土師器	甕	口口口/ヘラミガキ	口口口/ヘラミガキ	-21.3	-	<25.2>	-	(A11a)	外周黒面, 凹調整	
555	16号住	若井-Q1埋土	土師器	甕	口口口/ヘラミガキ	口口口/ヘラミガキ	-20.1	-	<20.4>	-	(A11a)	外周黒面, 凹調整	
556	16号住	支那土器	土師器	甕	ヘラミガキ	ヘラミガキ	-	-	<10.1>	-	小瀬多		
557	16号住	ベルト	土師器	甕	ナナ	ナナ	-	4.5	<4.5>	凹なし	(A11b)		
558	16号住	Q1埋土	須恵器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-14.1	-	<3.6>	-	B		
559	16号住	P12埋土	須恵器	甕	口口口	ヘラミガキ	-	-	-	-	B		
560	16号住	P12埋土	須恵器	甕	口口口	ヘラミガキ	-	-	-	-	B		
561	16号住	菅原後土内	土師器	割	長さ<10.8cm>, 直径7.5cm, 内径2.4cm		-	-	-	-			
562	16号住	埋土上位	土師器	支脚?	ヘラミガキ	ヘラミガキ	-	9.7	<6.6>	-	-	-	
563	16号住	埋土上位	須恵器	不明	長さ<5.6cm>, 高さ1.7cm, 厚さ0.2cm, 重さ10.5g		-	-	-	-	-	-	
564	1号住	Q3埋土	土師器	坏	口口口/口口口	ヘラミガキ	-	6	<2.6>	凹底高切	A1a2	内黒	
565	1号住	検出	土師器	坏	口口口	口口口	-	-5.8	<2.4>	凹底高切	A11b2	赤褐色	
566	1号住	Q1-Q2埋土	須恵器	坏	口口口/口口口	口口口/口口口	-	-	<4.5>	-	B		
567	1号住	検出	須恵器	坏	口口口	口口口	-	-6	<1.3>	凹底高切調整	B2		
568	1号住	Q3埋土	須恵器	甕?	ヘラミガキ	口口口	-	-	<6.3>	-	B		
569	1号住	埋土	須恵器	入蓋	口口口	口口口	-	-	<20.7>	-	B		
570	3号住	ベルト-Q3-Q4埋土	土師器	坏	口口口/口口口	ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.7	6.1	5.4	凹底高切	A11b2	内黒	

番号	遺構名	出土地点	種類	図様	外周調査(口/体部)	内周調査(口/体部)	口径	底径	持高	底面	粘土	分類	備考
571	3号鉢	Q3埋土	土師器	坏	ヘラミガキ /ヘラミガキ	ヘラミガキ /ロクロ	—	6.3	<3.4>	ヘラミガキ	A I	内外黒色処理	
572	3号鉢	Q1埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	—	-5.7	<2.7>	回転糸切	A I b2	赤焼き, 下層ニ黒跡付焼成済	
573	3号鉢	Q1埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	—	-6.5	<1.2>	回転糸切	A II b2	赤焼き, 下層ニ黒跡付? 焼成済	
574	3号鉢	赤土-Q3-Q4	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15	6	5.7	回転糸切	A II	赤焼き	
575	3号鉢	Q3埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	—	6	<2.6>	ナデ	A II b2	赤焼き, 下層ニ黒跡付? 一二文字?	
576	3号鉢	黒灰埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	—	<12.0>	—	A II	赤焼き	
577	3号鉢	黒灰埋土	土師器	坏	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—	<12.0>	—	(A I b)	外周口×××××焼成済赤書	
578	3号鉢	Q1埋土	土師器	委	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-24.3	—	<4.9>	—	(A II)	赤焼き	
579	3号鉢	黒灰-Q3埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.5	5.4	<4.7>	回転糸切	B2		
580	3号鉢	ベルト-Q4	須恵器	坏	/ロクロ	/ロクロ	—	4.6	<3.6>	回転糸切	B2		
581	3号鉢	Q4埋土	須恵器	坏	/ロクロ	/ロクロ	—	-6	<5.2>	回転糸切	B2		
582	3号鉢	Q4埋土	須恵器	大壺	/タタキ	/タタキ	—	—	—	—	B		
583	3号鉢	埋土	石器	灰石	長さ:23.7cm, 幅:5.1cm, 厚さ:4.8cm, 重さ:1133.4g							砂岩 灰羽山産	
584	3号鉢	埋土	灰製品	刀子	長さ:4.9cm, 幅:0.6cm, 厚さ:0.4-0.6cm, 重さ:2.7g								
585	4号鉢	No1	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下層ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	15.3	6	5.7	静止糸切	A I a2	内黒	
586	4号鉢	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	6.3	4.8	回転糸切	A II b1	赤焼き	
587	4号鉢	Q4埋土	土師器	製外	/ロクロ	/ロクロ	—	4.7	<3.1>	回転糸切	(A II)		
588	4号鉢	Q3埋土	須恵器	並?	/タタキ	/タタキ	—	—	<5.2>	—	B		
589	4号鉢	床前	石器	鉄器石	長さ:15.2cm, 幅:1.8cm, 厚さ:2.6cm, 重さ:206.4g							安山岩 奥羽山産	
590	5号鉢	Q1埋土	土師器	坏	/ロクロ	ヘラミガキ	—	-7.9	<2.1>	—	A I c	内黒	
591	5号鉢	Q1-Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	—	<3.3>	—	A II	赤焼き	
592	5号鉢	Q2-Q3埋土	須恵器	並	ロクロ/	ロクロ/	—	—	<4.8>	—	B		
593	5号鉢	ベルト内	須恵器	委	/タタキ	/当て具	—	—	—	—	B		
594	6号鉢	埋土	土師器	坏	/ロクロ	ヘラミガキ	—	—	—	—	B		
595	7号鉢	Q4埋土	土師器	製埋	/ロクロ	ヘラミガキ	—	9.1	<3.6>	回転糸切	A I c	内黒, 黒書付?	
596	7号鉢	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	—	—	<3.0>	—	A II	赤焼き	
597	7号鉢	Q3埋土	土師器	委	ヨコナデ/ヘラミガキ	ヨコナデ/ナデ	—	—	—	—	(A I c)	赤ロクロ	
598	7号鉢	Q3埋土	須恵器	大壺	/タタキ	/当て具	—	—	—	—	B		
599	7号鉢	Q4埋土	須恵器	大壺	/タタキ	/当て具	—	—	—	—	B		
600	7号鉢	Q4埋土	須恵器	大壺	/タタキ	/当て具	—	—	—	—	B		

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(1/体部)	内面調整(1/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考	
601	7号土坑	Q4埋土	鉄製品	刀子	長さ:5.5cm,幅0.3~1.3cm,厚さ0.2cm,重さ5.3g	内面調整(1/体部)								
602	7号土坑	埋土	鉄製品	刀	長さ:10.0cm,幅0.3~1.3cm,厚さ0.1~0.3cm,重さ6.5g			9.9	<2.1>					
603	7号土坑	埋土	鉄製品	刀子		ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.9	6	5.1	凹転赤切		A1b2	内黒,凹赤?]	
604	2号土坑	埋土	土師器	坏	/タケキメ								B	器底に彫れ,最大径40.3cm
605	2号土坑	埋土	須恵器	大甕		ヘラミガキ/ヘラミガキ	-13.9	4.8	<4.4>	凹転赤切		A1b2	内黒,凹赤?]	
606	4号土坑	ベルト埋土	土師器	坏	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ					金雲母		A1	内内黒色底面,内面油漣
607	4号土坑	ベルト内	土師器	坏	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ							AII	赤焼き
608	4号土坑	無土(南)	土師器	坏	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-14.7		<4.2>				AIIb2	赤焼き,凹赤?]
609	4号土坑	埋土(南)	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ		-5.1	<3.1>	凹転赤切				B
610	4号土坑	埋土(北)	須恵器	甕	/タケキメ	/タケキメ		12	<8.4>					B
611	4号土坑	埋土(北)	須恵器	甕	/タケキメ	/タケキメ		-12.6	<4.5>					B
612	5号土坑	ベルト北西	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ		-6.6	<2.4>	凹転赤切		A1a2	内黒	
613	5号土坑	ベルト南東	土師器	甕	ヨコナナ/ナナ	ヨコナナ/ナナ						(A1c)	赤ロクロ	
614	6号土坑	ベルト内	土師器	坏	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-13.8		<4.5>				A1	内黒
615	6号土坑	ベルト内	土師器	坏	/ロクロ	/ヘラミガキ		-4.5	<3.0>	凹転赤切		A1b2	内黒	
616	6号土坑	赤直	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下層/ヘラケズリ	ロクロ/ロクロ	15.3	6.6	5.4	凹転赤切		AIIa1	赤焼き	
617	6号土坑	ベルト内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ			<3.6>				AII	赤焼き
618	6号土坑	Q2埋土	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-20.1		<9.1>			(AII)	赤焼き	
619	6号土坑	ベルト内	土師器	甕	ヘラケズリ	ヘラケズリ			<5.7>			(AIIb)	赤焼き	
620	6号土坑	ベルト内	土師器	甕	/ヘラケズリ	/ヘラケズリ		8.3	<7.2>	木葉痕		(A1b)	赤ロクロ	
621	6号土坑	Q1埋土	須恵器	甕?	/ヘラケズリ	/ナナ			<15.0>			B		
622	6号土坑	Q3埋土	須恵器	甕	/ロクロ	/ロクロ			<3.9>			B		
623	6号土坑	ベルト内	須恵器	大甕	/タケキメ	/タケキメ						B		
624	7号土坑	埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ヘラミガキ		-6.3	<1.5>	凹転赤切	金雲母	A1b1	内黒	
625	8号土坑	埋土Q4	土師器	坏	/ロクロ	/ヘラミガキ			<3.6>				A1	内黒
626	12号土坑	埋土	土師器	甕	ヨコナナ/ヘラケズリ	ヨコナナ/ヘラケズリ	-16.2		<10.9>			(A1c)	赤ロクロ,凹赤?]	
627	13号土坑	埋土	土師器	甕	/ロクロ	/ナナ			<1.5>	凹転赤切	しとり	A1c	赤焼き	
628	13号土坑	ベルト	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.3	5.7	5.2	凹転赤切		A1b2	内黒,凹赤?]	
629	13号土坑	埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.6		<3.6>		しとり	AII	赤焼き	
630	13号土坑	埋土	石 器	採器	長さ7.0cm,幅8.7cm,厚さ1.6cm,重さ12.5g									真岩 奥羽山脈

番号	遺跡名	出土地点	種類	器種	外部調整(口/体部)	内部調整(口/体部)	口径	底径	高さ	表面	胎土	分類	備考
631	19号土坑	埋土	須恵器 壺	壺	/ハタケズリ	/ナデ	-	-	-	-	-	B	
632	19号土坑	埋土(北)	土師器 環	環	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.8	-	(4.0)	-	しつとり	AⅡ	赤焼き
633	19号土坑	埋土	土師器 土師器	壺	/ハタケズリ	/?	-	-9.9	(2.1)	-	-	(AⅡ)	
634	19号土坑	埋土上	須恵器 環	環	ロクロ/ロクロ下層へラズリ	ロクロ/ロクロ	-13.5	6	5.9	回転未切		B2	生焼け?
635	19号土坑	埋土上	土師器 土師器	環	/ロクロへ9ミタ付7層へラズリ	/ハタケズリ	-	-6.9	(2.4)	回転未切		A1	内黒
637	19号土坑	埋土上	須恵器 土師器	環	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	-	(3.0)	-	-	AⅡ	赤焼き
637	19号土坑	埋土上	須恵器 土師器	大壺	/タケキメ	/当て具痕	-	-	-	-	-	B	
638	19号土坑	埋土	石 器 搔器	搔器	長さ3.3cm、幅2.4cm、厚さ1.8cm、重さ17.1g								黒曜石産ノ番差?
639	7号土坑	検出箇	土師器 土師器	環	ロクロへハタケズリ	ロクロへハタケズリ	-13.5	-	(4.2)	-	-	AⅡ	内黒
640	7号土坑	検出箇	土師器 土師器	杯(扁形)	ロクロへハタケズリ	ロクロへハタケズリ	-	7.5	(3.3)	不明		A1c	内黒、670と同—
641	1号土坑		縄文土器 深鉢	深鉢	段縁、深鉢底、赤土(伴輪跡付)	ミガキ	-24.6	-11.4	39			-	中期末葉

表3-2 遺物調査表(遺構外)

番号	遺構名	出土地点	種類	状態	外部調査(山/体部)	内部調査(口/体底)	口径	高さ	径	器高	底面	胎上	分類	備考
1001	T15	II層	土師器	坏	/ロクロ	/ハタミガキ	-	-	-	-	-	発露部	A I	内黒、墨書「？」
1002	T15	II層	土師器	坏	/ロクロ	/ハタミガキ	-	-5.5	-	(4)	回転糸切	A I B2	A I B2	内黒、墨書「？」
1003	G31区	II層	土師器	坏	/ロクロ	/ハタミガキ	-	-	-	-	-	-	A I	内黒、墨書「？」 墨線い
1004	G36区	II層	土師器	坏	/ロクロ	/ハタミガキ	-	-	-	-	-	-	A I	内黒、墨書「？」
1005	D1区	II層検出面	土師器	坏	/ロクロ	/ハタミガキ	-	-	-	-	回転糸切	-	A I	内黒、墨書「？」 墨線い
1006	K32区	II層	土師器	坏	/ロクロ	/ハタミガキ	-	-	-	-	-	-	A I	内黒、墨書「？」
1007	K34区	II層上位	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハタミガキ/ハタミガキ	-15.2	-	-	(5.7)	-	-	A I	内黒、刻字後取置○I
1008	L41区	II層検出面	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハタミガキ/ハタミガキ	-13.3	-	-	(4.8)	回転糸切	-	A I	内黒、刻字「×」
1009	M37区	II層	土師器	坏	ロクロ	/ハタミガキ	-	-5.1	-	(0.6)	-	-	A I	内黒、墨書「？」
1010	M39区	II層	土師器	坏	/ロクロ	/ハタミガキ	-	-	-	-	-	-	A I	内黒、墨書「？」
1011	N34区	I層	土師器	坏	ロクロ	/ハタミガキ	-	-	-	-	-	-	A I	内黒、墨書「？」
1012	N1区	II層	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハタミガキ/ハタミガキ	-	-	-	-	-	-	A I	内黒、墨書「？」
1013	Q38区	II層検出面	土師器	坏	/ロクロ	/ハタミガキ	-	-	-	-	-	-	A I C	内黒
1014	R43区	II層	土師器	坏(赤土附)	/ロクロ	/ハタミガキ	-	-7	-	(3.5)	高台付	-	A I C	内黒
1015	G31区	II層	土師器	坏	ハタミガキ	/ハタミガキ	-	-6	-	(2.4)	ハタミガキ	-	A I B2	内外黒褐色斑
1016	T16	II層	土師器	坏	/ロクロ	/ハタミガキ	-	-	-	-	-	-	A II	赤焼き、墨書「？」
1017	D0区	I～II層	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14	-	-	(5)	-	-	A II	赤焼き
1018	R39区	II層検出面	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-6.8	-	(1.8)	回転糸切	-	A II b1	赤焼き
1019	R41区	II層	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.5	-4.8	-	5.1	回転糸切	-	A II B2	赤焼き
1020	W40区	II層検出面	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.1	-	-	(3.6)	-	-	A II	赤焼き
1021	L40区	I～II層	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-	-	-	-	A II	赤焼き、墨書○I?
1022	L40区	I～II層	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-	-	-	A II	赤焼き、刻字「？」
1023	M35区	I層	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.6	6.6	4.7	回転糸切	-	-	A II b1	赤焼き
1024	M41区	II層	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-	-	-	A II	赤焼き、墨書「山山」
1025	G9区	I～II層	土師器	差	/ハタミガキ	/ハタミガキ	-	-	-	-	-	-	(A II)	刻字「？」
1026	G9区	II層	土師器	差	/ハタミガキ	/ハタミガキ	-	8.1	-	(1.5)	初底	-	?	
1027	H35区	II層	土師器	差	/ハタミガキ	/ハタミガキ	-	-6.6	-	(2.3)	初底	-	(A II?)	底い高底
1028	J33区	II層	土師器	差	/ハタミガキ?	/ハタミガキ	-	-	-	-	-	-	(A II?)	内黒とび、刻字「？」
1029	K31区	II層	土師器	差	ナナ/ナナ	ナナ/ナナ	-	-	-	-	-	-	(A I)	赤ロクロ
1030	K38区	II層	土師器	差	ロクロ/ハタミガキ	ロクロ/ロクロ	20.3	-	-	(12)	-	-	(A II a)	赤焼き

番号	遺構名	出土地点	種類	外周調査(口/体部)	内周調査(口/体部)	口径	底径	器高	底面	粘土	分類	備考
1031	M39区	II層後出面	土師器 甕	-	/ハタミガキ	-	-	-	-		(AII?)	内周、割替?]
1032	N34区	II層	土師器 甕	/ナデ	/ハタミ	-	-7.5	<27>	平底		(AI?)	
1033	N35区	II層	土師器 甕	/ヘラケズリ?	/ヘラナデ	-	7.5	<10>	割替		(AII?)	底部外面に割替?]
1034	N36区	?	土師器 甕		/ハタミガキ?	-	-	-	-		(AII?)	内周、割替?]
1035	P36区	II層後出面	土師器 甕	/ヘラケズリ	/ヘラナデ	-	-12.3	<24>	平底		(AI?)	
1036	R40区	II層下	土師器 甕	/ナデ	/ナデ	-	11.7	<2>	木炭痕		(AI?)	内外面に木炭痕
1037	S42区	II層	土師器 甕	/ヘラケズリ	/ヘラナデ	-	-	<24.5>	-		(AIb)	非ロクロ
1038	S42区	II層	土師器 甕	/ロクロ・ヘラケズリ	/ヘラナデ	-	-	<19.8>	-		(AIIa)	未焼き
1039	T5		土師器 甕	/ヘラケズリ	/ハタミガキ	-	-	-	-		(AII?)	割替(ランダムな磁粉痕)
1040	I38区	I層	須恵器 坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	-4.9	1.5	再調査		B2	
1041	I38区	II層後出面	須恵器 坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-9.6	-5.1	4.6	四輪赤切		B2	
1042	O9-9	I~II層	須恵器 甕	/ロクロ	/ヘラナデ	-	-11.1	<5.7>	-		B	
1043	H34区	II層後出面	須恵器 甕	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-	-		B	
1044	H34区	II層後出面	須恵器 甕	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-	-		B	
1045	H35区	II層	須恵器 甕	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-	-		B	
1046	P19区	II層	須恵器 甕	/自然焼	/ロクロ	-	-	-	-		B	
1047	L39区	II層後出面	須恵器 甕?	/ロクロ	/カキヤ	-	-	-	-		B	
1048	M42区	I~II層	須恵器 人差	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-	-		B	
1049	M42区	I~II層	須恵器 大甕	/ヘラケズリ	/ナデ	-	-	<5.1>	-		B	底部に磁粉痕の孔
1050	K39区	II層後出面	須恵器 甕	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-	-		B	
1051	L39区	II層	須恵器 甕	ロクロ/カキヤ/	ロクロ/	-	-	-	-		B	
1052	O37区	II層	須恵器 甕	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-		B	
1053	N7区	?	須恵器 甕?	/カキヤ	/カキヤ	-	-	-	-		B	
1054	M34区	I層	鉄製品 釵又鑑		/当て具鉄	-	-	-	-		B	
1055	M37区	II層	鉄製品 釵	長さ:~5.6cm, 幅:2.5cm, 厚さ:2.5mm, 重さ:14.6g								
1056	T4		鉄製品 釵	長さ:~4.2cm, 幅:0.7cm, 厚さ:0.7cm, 重さ:4.8g								
1057	G35区	I~II層	鉄製品 不明	長さ:110cm, 幅:0.4~0.8cm, 厚さ:0.5mm, 重さ:11.7g								
1058	T9-9		鉄製品 刀子	長さ:~2.9cm, 幅:0.9cm, 厚さ:0.2cm, 重さ:2g								
1059	N38区		金 網	重さ:2.4cm, 重さ:2.4g								天竺元寶(初唐1023年)
1059	N38区		石 碇	長さ:~4.4cm, 最大幅:1.8cm, 最大厚:0.6cm, 重さ:1.5g								真岩 奥羽山脈
1060	N38区	II層	石 碇	長さ:~2.2cm, 最大幅:~1.7cm, 最大厚:0.3cm, 重さ:0.6g								真岩 奥羽山脈

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	法華文様印か	分割	備考
1061	O42区	Ⅱ層下	石器	石腕	長さ5.8cm, 最大幅7.6cm, 最大厚1.1cm, 重さ23.7g		貝石 奥羽山脈
1062	H4区	Ⅱ層下	石器	石腕	長さ7.6cm, 最大幅7cm, 最大厚1cm, 重さ23.8g		貝石 奥羽山脈
1063	N38区	Ⅱ層	石器	石腕	長さ5.5cm, 最大幅7.6cm, 最大厚1cm, 重さ17g		貝石 奥羽山脈
1064	埴原遺跡		石器	円形器	長さ3.4cm, 最大幅3cm, 厚さ2cm, 重さ10.1g		黒曜石(湯ノ倉塚?)
1065	M16区	Ⅱ層	石器	環状器	長さ3.8cm, 最大幅2.9cm, 最大厚1.4cm, 重さ4.6g		黒曜石(湯ノ倉塚?)
1066	T9		石器	Rフレ	長さ3.6cm, 最大幅3.9cm, 最大厚0.9cm, 重さ5g		
1067	S41区	Ⅱ層	石器	腕石	長さ24.3cm, 最大幅8.4cm, 最大厚4cm, 重さ1033.2g		
1068	Q4区	Ⅱ層下	石器	石腕	長さ17.1cm, 幅11.6cm, 厚さ7.2cm, 重さ415.3g		
1069	J33区	Ⅱ層	石器	巻石	長さ12.2cm, 幅4.2cm, 厚さ2.4cm, 重さ181.9g		
1070	R42区	Ⅱ層中?	縄文	漆鉢	貝殻文	①	阿保岩 北上山麓
1071	L36区	Ⅱ層中	縄文	漆鉢	IR縄文, 補修孔?	①	V1と名瀬時代の変形小舟
1072	印所遺跡	Q3出土	縄文	漆鉢	沈蝕, 突起	②	
1073	L33区	Ⅱ層検出層	縄文	漆鉢	平行沈蝕, 有孔	②	
1074	L61区	Ⅱ層	縄文	漆鉢	狭み, 船上縁起付, 平行沈蝕, 並面	②	
1075	O35区	Q3出土	縄文	漆鉢	沈蝕, 綫帯	②	
1076	O36区	Q1出土	縄文	漆鉢	突起, 平行沈蝕	②	
1077	O36区	Q1出土	縄文	漆鉢	船上縁起付, RL縄文	②	
1078	M8区	床面	縄文	漆鉢	船上縁起付, 側目, 平行沈蝕	②	
1079	M38区	Ⅱ層下	縄文	漆鉢	平行沈蝕, 連続沈蝕	②	
1080	M41区	Ⅱ層	縄文	壺	IR縄文, ナデ?	②	
1081	K33区	Ⅱ層	縄文	漆鉢	船上縁起付, 折り返し口縁	②	
1082	G34区	Q2出土	縄文	高坏?	無筋R, 沈蝕, ミガキ	②	
1083	R44区	Ⅱ層	縄文	漆鉢	曲線文, 船上縁起付	③	
1084	T42区	Ⅱ層	縄文	漆鉢	折り返し口縁, 斜目沈蝕	③	
1085	M42区	Ⅱ層	縄文	漆鉢	沈蝕, 突起文	③	
1086	Q41区	Ⅱ層下	縄文	漆鉢	斜目沈蝕, 並面	③	
1087	S45区		縄文	漆鉢	曲線文	③	
1088	R41区	Ⅱ層	縄文	漆鉢	沈蝕による曲線文	③	
1089	P44区	Ⅱ層下	縄文	漆鉢	曲線文	③	
1090	R45区	Ⅱ層	縄文	漆鉢	曲線文	③	

番号	遺構名	出土地点	種類	群種	文様ほか	分類	備考
1091	S45区 I層		縄文	漆？	平行沈線による区画文	③	
1092	P39区 I層		縄文	漆鉢	折り返し口縁、沈線、無指L	③	
1093	S41区 II層		縄文	漆鉢	沈線、断片文、無指	③	
1094	Q41区 粉出面		縄文	漆鉢	断片文、凹文	③	
1095	P40区 II層中		縄文	突起	ミガキ、凹形突起	④	
1096	S34区 I層		縄文	漆鉢	断片、沈線、LR断文	④	
1097	L35区 Q1壁上		縄文	漆鉢	漆鉢口縁、入組沈線文	④	
1098	L36区 II層下		縄文	漆鉢	波状口縁、人組文？	④	
1099	L37区 II層下		縄文	漆鉢	人組文？ミガキ	④	
1100	G35区 I層		縄文	壺	平行沈線	④	
1101	L40区 Q3壁上		縄文	漆鉢	山形突起、沈線、人組文	④	
1102	O42区 Q2壁上		縄文	漆鉢	突起、ミガキ	④	
1103	N41区 II層		縄文	漆鉢	口唇上に突起、平行沈線	④	
1104	M35区 I層		縄文	漆鉢	ミガキ、波状口縁、人組文	④	
1105	L36区 古代検出面		縄文	漆鉢	ミガキ、LR断文	④	
1106	J38区 I層		縄文	漆鉢	突起、平行沈線	④	
1107	M41区 II層		縄文	漆鉢	ミガキ、波状口縁	④	
1108	S40区 II層		縄文	鉢	ミガキ、LR断文、波状口縁	④	
1109	M42区 II層下位		縄文	漆鉢	ミガキ、波状口縁、無指L	④	
1110	O38区 II層検出面		縄文	漆鉢	波状口縁、ミガキ	④	
1111	N39区 I層		縄文	漆鉢	小突起	④	
1112	L37区 I層？		縄文	注口	ミガキ	④	
1113	S40-4区 I層		縄文	漆鉢	無指L	④	
1114	D41区 I層		縄文	漆鉢	波状口縁、初み目	④	
1115	N41区 I層		縄文	漆鉢	口唇上に突起、初み目	④	
1116	L39区 II層検出面		縄文	漆鉢	初み、ミガキ	④	
1117	K9-L3区 II層下		縄文	漆鉢	平行沈線、初み、小突起	④	
1118	M39区 II層検出面		縄文	鉢	断片、平行沈線、LR断文	④	
1119	M39区 I層		縄文	漆鉢	平行沈線、RL断文、初目突起	④	
1120	M39区 I層検出面		縄文	漆鉢	初目突起、沈線	④	

番号・通称名	出土地点	種類	器種	文様ほか	分類	備考
1121 M39区	田内	縄文 文	深鉢	ボタン状出付、突起、刷目目	⑤	
1122 Q44区	田留下	縄文 文	鉢	平行沈線、LR縄文、突起	⑤	
1123 Q44区	田留下	縄文 文	深鉢	防風、LR縄文	⑤	
1124 Q37区	田留下	縄文 文	鉢	山部刻み、三叉文	⑥	
1125 Q32区	IV層	縄文 文	鉢	平行沈線、ミガキ	⑥	
1126 M42区	I～II層	縄文 文	鉢	平行沈線	⑥	
1127 09-12区	掘土(北)	縄文 文	鉢	三叉文、LR縄文、沈線	⑥	
1128 K33区	田留	縄文 文	注門	平行沈線、刺突、ミガキ	⑥	
1129 L35区	—	縄文 文	鉢	平行沈線、突起	⑥	
1130 S43区	田留	縄文 文	盆(深?)	沈線、ミガキ、内面沈線	⑥	
1131 L33区	田留	縄文 文	台付鉢?	ミガキ	⑦	
1132 I.32区	II層極出層	縄文 文	鉢	平行沈線	⑦	
1133 09-12区	I・田留	縄文 文	鉢	山部ミガキ、LR縄文	⑦	
1134 Q32区	IV層	縄文 文	鉢	平行沈線、LR縄文	⑦	
1135 Q41区	II層	縄文 文	盤	LR縄文、沈線	⑦	
1136 O99区	田留下	縄文 文	深鉢	LR縄文	⑦	
1137 09-12区	Q2掘土	縄文 文	注II	ミガキ	⑦	
1138 M39区	田留	縄文 文	注門	ミガキ	⑦	
1139 N34区	I層	縄文 文	鉢	LR縄文、黒点文	⑦	
1140 I38区	田留	縄文 文	小形鉢	新突、沈線、LR縄文	⑦	
1141 R44区	田留	縄文 文	深鉢	内形刺突、線赤文	⑦	
1142 H90区	I層	縄文 文	皿	無文?	?	赤色顔料付着
1143 R45区	田留	縄文 文	土製品	LR縄文		
1144 J99区	I～II層	縄文 文	製輪?	ミガキ		
1145 O99区	田留下	縄文 文	土製品?	?		

VI まとめ

1. 遺構

(1) 竪穴住居跡

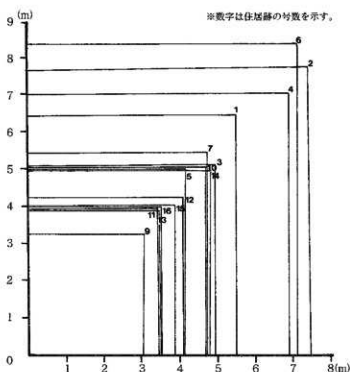
今回16棟の竪穴住居跡が確認され、前回調査時のそれとあわせると、総数は37棟を数えることとなった。これらが、平安期における一連の集落であることはこれまで述べてきたとおりであり、当然その評価は、前調査の結果を総合して判断すべきであるが、ここでは今回の調査で検出した16棟の規模やカマドの詳細、柱穴配置などについて、簡単にまとめることとする。

表4に住居跡の観察一覧を掲載した。平面形は方形基調のものが多く、この他は長方形を呈するものが数棟見られる程度である。規模では、①3～4m前後（小形）6棟、②4～5m前後（中形）4棟、③5～6m前後（大形）3棟、④7m以上（特大）3棟、の四種類に分けられる。④の特大クラスは、本集落の有力者の住む住居であることは疑いようが無い。祭祀的な儀式を執り行っていたと思われる第4号住居跡、土器の製作工房である第6号住居跡のほか、第2号住居跡がこれに該当する。これら3棟が同時に存在し、集落内の中心的役割を担っていたと考えるほうが自然とも思えるが、遺物等からはその確証は見いだせない。

その他の①、②、③のクラスでは、それぞれまとまった占地をするなどの傾向は窺えない。強いて言えば、①・②クラスの小規模住居が東寄りに分布している様相が見受けられることが挙げられるだけである。また、第121図や表4にみるとおり、住居跡の軸方向（煙道方位）もそのほとんどが南東方向にあるなど、遺物や埋土に堆積する火山灰から想定した集落内における存続時期の差（第II期か、第III期か）を判断する材料にはならない。ことカマドに關しても、扁平な礫を袖の芯材や煙道に多用したりしなかったりすることや、煙道構造に掘り込みと削り抜きの違いがあっても、それが埋土時期差にはつながって来ないと思われる。支脚の有無や、それが礫か土層かといった点も同様である。

(2) 住居状遺構

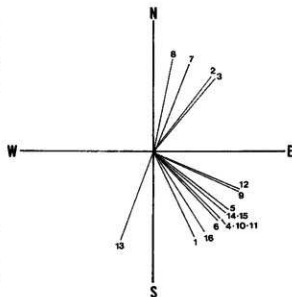
今回確認された住居状遺構は、斜面部裾に1棟、平坦部に6棟の合計7棟で、前回の調査では4棟検出されている。これらの平面形は方形あるいは長方形を基調とし、既述のとおり、竪穴住居跡とはほぼ時期を同じくし、集落内にある作業場や小鍛冶等の工房（床面に焼土が形成されるもの—第7号住居状遺構）として利用されたものと思われる。7棟の平面規模をみると、2.5～3m前後・4m前後、5m以上の主に三種に分類される。このうち、最も規模が小さい2.5～3m前後のものについては、大形の方形土坑との境界を明確にできたわけではない。



第120図 住居跡長辺・短辺比

住居跡に付属する屋外施設として存在した可能性がある例としては、①第4号住居跡・第3号住居状遺構、②第6号住居跡・第4号住居状遺構の二つが挙げられる。遺構間に、そう想定するに適当な間隔が空いていることや、二つの遺構の軸方向がほぼ同じであることなどがその理由である。また、第5号・第6号住居状遺構の間には重複が認められ、住居跡同様この遺構にも存続した期間に時期差があることも判明している。

なお、第2号住居状遺構は唯一斜面部に確認されたもので、他の住居状遺構よりも一段高い場所に位置することから、作業場などは少し違った使われ方をしている施設の可能性がある。例えば、物見櫓的な施設である。



第121図 カマド煙道方位

(3) 土坑

縄文時代に属する1基、平安時代のいずれかの時期に属する19基の計20基が確認された。その平面形状から、円形(楕円形)・方形・長方形の三種に分類される。

円形あるいは楕円形の土坑は8基である。尾根部に検出された第1号土坑は、縄文時代に所属する貯蔵穴と思われるもの。斜面部にある第9号土坑は底面の炭化材から鍛冶関連の土坑と判断した。第9号住居跡と重複する第17号土坑では、底面に焼上が形成されており土器焼成遺構の可能性のあるものである。

長方形を呈するものは、第3号・7号・13号・19号土坑の4基で、形状から墓塚であった可能性があるこ

表4 住居跡一覧表

住居名	平面形	縦	横	壁高	主柱穴	煙道方位 (軸方向)	焼失	厨溝	土坑	時期	備 考
第1号	長方形	Ⓐ	5.57×(6.30)m	51~69cm	3	N-155°-E	×	あり	1	Ⅲ	
第2号	不整方形	㊦	7.40×7.78m	35~50cm	3	N-38°-E	×	あり	3?	Ⅱ	
第3号	方形	Ⓒ	4.94×5.08m	51~71cm	4	N-40°-E	×	なし	1	Ⅲ	
第4号	方形基調	㊦	6.90×7.00m	45~59cm	4	N-135°-E	×	あり	5	Ⅲ	祭祀関連施設か?
第5号	長方形	㊦	4.17×4.98m	43~71cm	1	N-128°-E	×	なし	3	Ⅲ	
第6号	方形基調	㊦	7.08×8.30m	28~50cm	4	N-136°-E	×	あり	5	Ⅲ	土器製作工房
第7号	長方形	Ⓒ	(4.70)×5.28m	34~57cm	4	N-22°-E	○	なし	4	Ⅱ	小鍛冶に伴う焼土
第8号	長方形	Ⓒ	2.16×?	37cm	なし	N-12°-E	×	なし	1	Ⅱ	
第9号	隅丸方形	Ⓒ	3.03×3.20m	41~50cm	なし	N-115°-E	×	なし	1	Ⅱ	
第10号	隅丸方形	Ⓒ	4.70×5.04m	32~58cm	4	N-135°-E	×	あり	なし	Ⅱ	
第11号	長方形基調	Ⓒ	3.37×3.90m	30~40cm	4	N-135°-E	×	なし	1?	Ⅱ	
第12号	隅丸方形	Ⓒ	4.21×4.23m	47~66cm	なし	N-113°-E	×	あり	1	Ⅱ	
第13号	方形	Ⓒ	3.40×3.85m	39~60cm	なし	N-200°-E	×	なし	3	Ⅱ	
第14号	隅丸方形	Ⓒ	4.70×4.95m	39~58cm	なし	N-130°-E	×	あり	4	Ⅲ	
第15号	方形基調	Ⓒ	3.79×4.01m	29~52cm	3	N-130°-E	×	なし	3	Ⅲ	
第16号	不整方形	Ⓒ	3.55×3.97m	17~36cm	2	N-148°-E	○	なし	2	Ⅱ	祭祀関連施設か?

とを指摘したが、規模や出土遺物の有無などに差異があり、一概には判断できない部分もある。第19号土坑のように、平安時代の土師器とともに黒曜石製のスクレーパーが出土する例もあり、この石器が所属する時期や用途など検討すべき事項も多い。

方形の土坑は、第2号・4号・5号・6号・8号・10号・11号・18号土坑の8基で、貯蔵穴や作業場の用途を想定した。分布を見ると、平坦部の北側にある一群、第4号住居跡の周辺にある一群、の大きく二つに分けられる。あくまでも推測であるが、後者については先に取り上げたように、住居跡に付属した何らかの屋外施設となる可能性がある。第4号住居跡が、祭祀に関連する要素を有することからも、そのことは想像に難くない。

詳しくは後述することになるが、今回の調査では、時期的には9世紀後半から10世紀初頭に存続した集落と、それ以前の9世紀前半から中頃にかけての集落が確認され、それは居住するための聚穴住居跡、作業場であろう住居状遺構、貯蔵施設である土坑、埋葬施設の墓壇というそれぞれの遺構から構成されることが明らかとなった。また、前者に所属すると思われる住居跡が後者の2倍以上となっている（第125図参照）ことから、本集落の平安時代における主体は、9世紀後半から10世紀前半にあったと判断されよう。

表5 カマド一覧表

住居名	カマド位置	カマド油部	煙道構造	煙道方位	支脚	煙出部の掘り込み	煙組み	備考
第1号	南東壁東隅寄り	芯材に煙・シルト	掘り込み式	N-155°-E	羽口転用	あり	あり	煙道部確のトンネル
第2号	北東壁ほぼ中央	芯材に煙・シルト	掘り込み式	N-38°-E	土師器壺	あり	あり	確のトンネル
第3号	北東壁東寄り	芯材に煙・シルト	掘り込み式	N-40°-E	土師器坏・壳	なし	あり	
第4号	南東壁東隅寄り	シルト	掘り込み式	N-135°-E	土師器壺	なし	あり	祭祀関連住居か？
第5号	南東壁西寄り	芯材に煙・シルト	掘り込み式	N-128°-E	なし	あり	なし	
第6号	南東壁東隅寄り	シルト主体	掘り込み式？	N-136°-E	なし	なし	なし	大土器上にきて、土器製作工房
第7号	北東壁東寄り	芯材に煙・シルト	掘り込み式	N-22°-E	確	あり	なし	
第8号	北東壁東寄り	煙・シルト	釣り抜き式	N-12°-E	確	あり	なし	
第9号	南東壁東隅寄り	芯材に煙・シルト	釣り抜き式	N-115°-E	なし	あり	なし	
第10号	南東壁東隅寄り	芯材に煙・シルト	掘り込み式	N-135°-E	なし	なし	なし	破壊された？
第11号	南東壁南隅寄り	シルトのみ残る	掘り込み式	N-135°-E	なし	あり	なし	破壊された？
第12号	南東壁南隅寄り	芯材に煙・シルト	釣り抜き式	N-113°-E	土師器壺	あり	なし	
第13号	南東壁東隅寄り	芯材に煙・シルト	掘り込み式	N-200°-E	なし	あり	あり	一部確のトンネル
第14号	南東壁東隅寄り	芯材に煙・シルト	釣り抜き式	N-130°-E	確	あり	なし	
第15号	南東壁東隅寄り	芯材に煙・シルト	釣り抜き式	N-130°-E	土師器坏無蓋あり	なし	なし	
第16号	南東壁東隅寄り	シルト主体	不明	N-148°-E	土師器壺	あり	なし	祭祀関連か？

2. 遺物

今回出土した遺物は、そのほとんどが平安時代の遺構に伴う土師器・須恵器の土器類で、他に土製品、金属製品、木製品があった。遺構内外から出土したその他の遺物には、縄文土器、石器類、土師器・須恵器、金属製品があり、それらをあわせた総出土量は大コンテナ（容量40^{リットル}）25箱に及ぶ。このうち、約9割近くは遺構内出土の遺物である。自然遺物は、炭化材サンプル小コンテナ（容量14^{リットル}）1箱を持ち帰った。

本報告書の掲載にあたっては、土器類は残存状態が良くかつ個々の特徴を示していると思われるものを中心に選別、掲載した。その他の土製品・石器類・金属製品・木製品については、遺構の内外を問わず全点掲載した。内訳は、下表のとおりである。

	遺構内の出土量（出土点数）	遺構外の出土量（出土点数）
土器類	大コンテナ20箱	大コンテナ4箱（うち縄文土器1箱）
土製品	羽口3点・	土製円盤・腕輪・ミニチュア各1点
石器類	製品12点	製品11点、フレイクなど中コンテナ1箱
金属製品	鉄製品26点、鉄滓2点	鉄製品4点、銭貨1点、鉄滓1点
木製品	木製椀1点	なし

(1) 土器の分類

次に、遺物の主体である平安時代の土師器・須恵器の分類を行い、その組成と灰白色火山灰の堆積状況等から、本集落が存在した実年代を想定してみる。分類基準については、今回得られた出土遺物の特徴や内容、想定される年代が前回の調査結果と類似しており、一連の集落跡になることが明らかであることから、前回の報告の際に設けた基準をそのまま用いることとした（第122図参照）。若干、分類における用語の表現をかえた部分（胴部一体部など）がある。以下に、再度分類基準を示す。

<坏>

A群—土師器（酸化焙焼されているもの）

I類—ロクロ成形後、内面ヘラミガキ・黒色処理（内黒）が施されるもの

a種—回転糸切り後、体部下端および底部が再調整されるもの

b種—回転糸切り後、再調整されていないもの

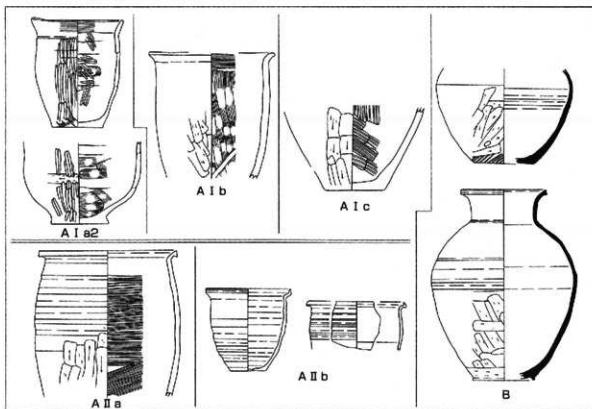
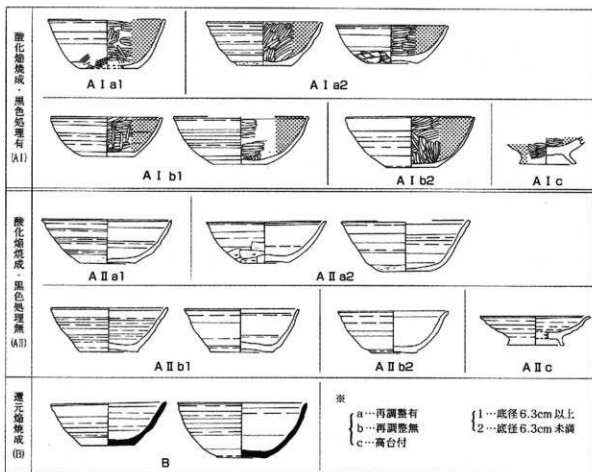
c種—回転糸切り後、高台が付けられているもの

（a種・b種で底径が6.3cm以上のもの1、それ未満のもの2）

II類—ロクロ成形後、内面にヘラミガキ・黒色処理（内黒）が施されないもの

a種—回転糸切り後、体部下端および底部が再調整されるもの（いわゆる赤焼き土器以外のもの）

b種—回転糸切り後、再調整されていないもの（いわゆる赤焼き土器）



第122図 土器分類図

- c 種一回転糸切り後、高台が付けられているもの
 (a 種・b 種で底径が6.3cm以上のもの1、それ未満のもの2)

B群-須恵器 (還元焰焼成されているもの)

<甕>

A群-土師器 (酸化焰焼成されているもの)

I類-ロクロ成形されていないもの

- a 種-一部部の内外面がヘラミガキ調整主体のもの *今回は該当遺物なし
 b 種-一部部の外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ・ヘラケズリ調整主体のもの
 c 種-一部部の外面が粗いヘラケズリ調整主体のもの

II類-ロクロ成形されているもの

- a 種-一部部の外面にロクロ痕以外にヘラケズリ等の調整がみられるもの
 b 種-一部部にロクロ痕のみが残るもの。

B群-須恵器 (還元焰焼成されているもの)

<壺・鉢類>

A群-土師器 (酸化焰焼成されているもの)

B群-須恵器 (還元焰焼成されているもの)

表6 遺構別出土土器一覽表

	罎										甕						
	A群					B群					A群				B群		
	I類		II類			I類		II類			I類		II類				
a1	a2	b1	b2	c	a1	a2	b1	b2	c	a	b	c	a	b			
第1号住	1	3	4	5			1	2	6	2	3	—	6	2	3	2	17
第2号住		1	3	5		1		1	4		8	—	8		3		4
第3号住	2	2	2	4				5			8	—	1		5	3	9
第4号住			2	6	3	1		4	13	1	2	—	2		2	5	10
第5号住	4	3		3				5	5	1	1	—	1	2	1		3
第6号住	3	2	1	9	4		4	8	13		2	—	8		5		9
第7号住	1		1					4			2	—			1		1
第8号住			3					2			—	—					—
第9号住											1	—			2		—
第10号住							1				—	—	1	1			2
第11号住	1										2	—		1			—
第12号住		1		2							1	—			2	1	4
第13号住			1								1	—		1			—
第14号住			1	1		1	1	1			—	—	1	1			2
第15号住	1	1	2				2	4	4		—	—	3		2		5
第16号住	1		1		1			1	2		1	—		1	2	1	—
第1号住居状		1							1		2	—					2
第2号住居状											—	—					—
第3号住居状				2					2		3	—	1				1
第4号住居状		1						1			—	—					1
第5号住居状					1						—	—					—
第6号住居状											—	—					—
第7号住居状					1						—	—	1				3
第4号上坑				1					1		—	—					—
第6号上坑				1		1					—	—	1				3
第13号上坑				1						1	—	—					—
第19号上坑											—	—					1
合計	14	15	20	41	10	4	9	38	51	5	37	0	31	10	30	12	77

(2) 遺構別土器組成

上記の基準によって分類された土師器の坏・甕ほかの出土状況を表6にまとめ、遺構毎の土器組成を示した。なお、これは本報告書に掲載した遺物についてのみまとめたもので、不掲載遺物は対象にしなかった。

前回の報告でも、同様の分類を行い遺構毎の土器組成を検討し、その結果第1期（8世紀中頃～後半）・第II期（9世紀初頭～前半）・第III期（9世紀後半～10世紀初頭）の3期にわたる実年代を想定した。今回の調査では、第1期に相当する遺物は認められず、いずれもが第II期あるいは第III期に属するという結果となった。以下に、再び時期毎の様相を記す。

第II期（9世紀初頭～前半）は、土師器坏A1a・A1b・A1c・Alla・Allb、甕A1b・Alla・A11b、B群から構成される一群で、再調整を有するもの（a種）が主体となる。

第III期（9世紀後半～10世紀初頭）は、土器構成は基本的に第II期と変わらないが、土師器坏においてa種が減少、非内面黒色処理のものが増える傾向がある。甕では粗いヘラケズリ（ナタケズリ）調整が見られるものが増える。これら、第II期・第III期に属する遺物は、それぞれ第124図に示したとおりである。

この他、土師器では甕の底部に砂が付着したいわゆる砂底土器や、耳皿（底部に小孔のある耳皿含む）、把手付土器などが前回と同様出土している。墨書・刻書土器については、100点を超える出土をみた。次項では、特に墨書土器を取り上げてみる。

3. 墨書土器について

芋田II遺跡第2次調査では、竪穴住居跡などの遺構外から合計81点、遺構外から24点の墨書土器（刻書を含む）が出土している。それらの釈文や墨書部位といった基本的事柄は表7として別掲している。

すでに芋田II遺跡第1次調査では20点の墨書土器が出土しており、これを合わせれば芋田II遺跡から出土した墨書土器の総計は125点に及ぶ。近年の開発に伴う大規模調査によって1遺跡から出土する文字資料の点数は増える傾向にある。ただ、岩手県に限ってみれば出土する墨書土器の点数が100を超える遺跡はまれである。また、岩手県では盛岡市以南の北上川中流域に立地する遺跡では比較的多く出土する傾向にあるが、芋田II遺跡が位置する上流域では墨書土器が出土する遺跡も少なく、点数もそれほど多くない。これらをふまえれば、芋田II遺跡から出土した墨書土器は平安時代の北上川上流域の歴史を探る上で貴重な資料群と評価することができよう。ここではそれらのうち点数について検討を加えることにする。

545・546号墨書土器

釈文 545号 第/第□ [在力]

546号 □ [署力] □/□ (記号力) 愚□

墨書の特徴 とともに土師器坏の体部外面に正位で記されている。文字は非常に小さく記されている。545号の第1・2字がともに1.1×1.4cm、第3字が1.0cm四方である。546号は第1字が2.0cm四方とこの中ではやや大きいが、第3字は1.7cm四方とやはり小さい部類にはいる。249号が3.0cmであることを考慮すれば、これらの文字はかなり細かく書かれているといえよう。しかも、これらの文字は画数が少なかったり、単純な字形というわけではない。そのため細い筆が使われていたようで、最も細いところで1mm前後となっている。このように細い筆が使われて小さな文字が土器に記されることは集落遺跡ではまれといえる。細い筆で小さな文字を記すにはそれなりの習熟が必要であろうことは想像に難くない。この点からすれば本資料はかなりの文

字に習熟していた人物の手によって記されたものであるということができよう。

また、文字が記された土器にも特徴がある。破片のため器形など全体的なことは不明とせざるを得ないが、その色調は灰黄褐色を呈しており、他の墨書土器が黄褐色あるいは黄褐色であることと比較すれば在地の他の土器とは区別できる（誤解のないように断っておけば、545・546が芋田Ⅱ遺跡周辺以外で製作されたといいたいわけではない）。このことから考えると、特に色調が異なる土器を選び、その上で文字を書いたものと推測される。

墨書の内容 8文字が確認されるが、破片であることからその内容は不明である。いわゆる多文字の墨書土器であるが、文を構成しているかどうかは現況からは判断できない。「弟」という文字が2回記されていることに注目すれば習書である可能性は否定できない。ただ、それでも全体的な文字の割付を復元できない以上、可能性の提示にとどまる。判読できた文字は、この「弟」と「愚」だが、いずれも土器に記される文字としては一般的ではない（ちなみに吉村武彦が作成した全国墨書・刻書土器データベース(1)では弟は7例、愚の例は皆無だった）。

本資料の意義 少なくとも8字以上の文字が記されているが残念ながらその内容を明らかにすることはできなかった。けれども記された墨書の特徴から、文字に習熟した人物が芋田Ⅱ遺跡に起居していたことを想起させる。この時期、文字に習熟していた者は、僧侶を除けば官人あるいは官衙と関わりを持つ者といっていよう。とすれば、芋田Ⅱ遺跡は一般集落ではなく、城柵官衙と関わりを持つ遺跡だった可能性が高いと言えよう。

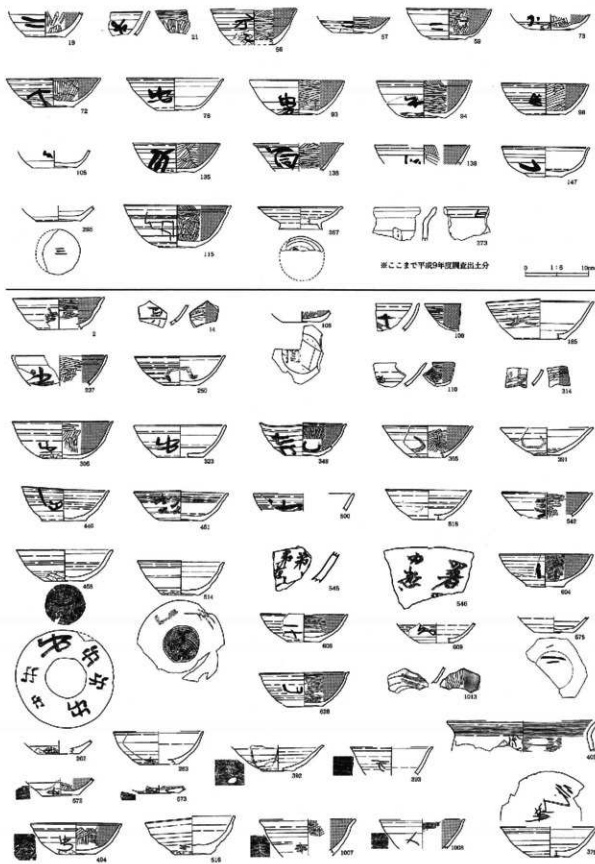
458号墨書土器

积文 ㇿ/ㇿ/ㇿ/ㇿ/ㇿ/ㇿ/ㇿ

墨書の特徴 土師器坏の体部外面に正位にて記されている。最初の文字は特に肉内に記されており、1個所のみとあるのでおそらくこの「文字」が一番初めに書かれたものと推測される。「文字」同士の角度を測ると45°～70°と区々であり、間隔も同様であることから、あらかじめ割付が決められていたわけではないようである。また、ㇿの「文字」はその形がそれぞれ微妙に異なっており、複数人の手によって記されたものと判断される。これらのことから、まずㇿと記された後に何人かの人物がㇿと書き加えたと考えられる。

また、本資料は口縁の一部を欠いただけの完形品であるが、ㇿと記された部分が割られており、それらの破片を接合したものである。しかも、別々の住居（10号住と14号住）から出土したものであることから廃棄後に破損したわけではなく、廃棄する前に割れたようである。問題はそれが故意か否かであるが、にはわかに判断しかねる。ただ、墨書土器は欠損したものが多く、しかもそれは文字が記された部分に多く見られる。このことから、墨書土器は廃棄される際、意図的に文字の部分で破砕されることがあったのではないかとされている（平川南氏のご教示による）。本資料も廃棄前の破損であり、破損部分に文字が記されていることから故意に破砕された可能性が高い。

墨書の内容 ㇿについてはいかなる文字なのか、判読できなかった。芋田Ⅱ遺跡では同様なものが、第1次調査分を含め14点出土しており、芋田Ⅱ遺跡を代表する「文字」といえよう。ㇿについては類似するものが燕沢遺跡（仙台市）から出土している（第124図）。これについては平川南氏が「山マ」と判読している。この「山マ」を、「艱夷」が「山夷」「山夷」にわけられたことを参考にし、またこの墨書土器が出土する遺跡の多くは平野に突出した台地に位置していることから生業を山中に求めた人々の呼称ではないかとしている。芋田Ⅱ遺跡も北上川の中段段丘に位置しており、燕沢遺跡と同じような立地である。したがって、ㇿが「山マ」



第123図 代表的な墨書・刻書土器

である可能性は高い。しかし、その可能性を残しながら※としておく。

本資料の意義 前項で述べたように、※と記された後、※が何名かによって次々と記されていったという行為が復元され、本資料には最大で6名の人物が文字の筆記に関わっていることになる。では、なぜこのようなことが行われたのだろうか。あえて推測するならば、同朋意識を醸成するためだったのではなからうか。すなわち、ひとつの土器に同じ「文字」を書き記すということは同じ意識を共有することにつながると思われるからである。このことに誤りがなければ、本資料は当時の人々の精神活動を探る上で良好な資料となろう。

250号墨書土器

釈文 几

墨書土器の特徴 土師器環の体部外面に正位にて記されている。墨書部分の観察から第74図のように3画にて記されている。このような形の「文字」は、断定できないものまで含めると11点出土しており、芋田II遺跡でこれまで出土した墨書土器の中で最も点数の多い「文字」である。しかし、3棟の堅穴住居跡からしか出土していない。しかも、そのうち6点は6号住居からのものである。このように、本資料は偏った出土傾向にあると言える。

墨書の内容 几は、おそらく則天文字を模したものと考えられる。則天文字ないしはそれを模した「文字」が記された土器の出土は芋田II遺跡周辺はもちろん岩手県内ではこれまでなかった。

本資料の意義 平川南氏によれば、則天文字の伝播には文書行政に伴う場合と伝典を通じて会得した僧侶によってなされたのではないかとしている（平川南「墨書土器と古代の村落」『墨書土器の研究』所収）。本資料は則天文字そのものではないが、それを模したものであることはほぼ間違いない。とすれば、土器に几と記した人々は則天文字ないしはそれを模したものを実際に目にしていたと考えられる。つまり、官人や僧侶に近い人物が芋田II遺跡にいたことになる。先に芋田II遺跡が城柵官衙と何らかの関わりがあったことを推測したが、ここでもそうしたことが窺われるのである。

注 (1) 明治大学 資料武蔵ゼミのHPで公開されている (<http://www.isc.meij.ac.jp/~yoshima/>)

表7 墨書(刻書含む)土器一覧表

遺物番号(遺構名)	釈文	器種	部位	方向	備考
2(1号住)	几	土師器-環	体部外面	正位	
5(○)	□	土師器-環	体部外面	?	
11(○)	□	土師器-環	体部外面	側位	
13(○)	□	土師器-環	体部外面	側位	墨付
14(○)	百万	土師器-環	体部外面	?	
15(○)	□	土師器-環	体部外面	?	墨付
16(○)	□	土師器-環	体部外面	?	墨付
17(○)	□	土師器-環	体部外面	?	
18(○)	□	土師器-環	体部外面	?	
23(○)	宀	土師器-環	体部外面	?	焼成後刻書
25(○)	□	土師器-環	体部外面	?	
26(○)	李	土師器-環	底面外面		焼成前刻書
37(○)	□	土師器-環	体部外面	?	
58(○)	+	土師器-壺	体部外面	正位	焼成前刻書
64(○)	□	土師器-壺	体部外面	?	焼成前刻書
103(2号住)	□	土師器-環	体部外面	?	墨付
106(○)	□[酒カ]	土師器-環	底面外面		
109(○)	十	土師器-環	体部外面	正位	
110(○)	□	土師器-環	体部外面	正位	
115(○)	□	土師器-環	体部外面	正位	
119(○)	□	土師器-環	体部外面	?	墨付
121(○)	□	土師器-壺	体部外面		焼成前刻書

遺物番号(遺構名)	釈文	器種	部位	方向	備考
125(2号住)	一	土師器-壺	底部外面		焼成前割書
149(○)	□	須臾器-坏	体部外面	?	
175(3号住)	□	土師器-坏	体部外面	?	墨付
176(○)	□	土師器-坏	体部外面	?	墨付
179(○)	□	土師器-坏	底部外面		焼成前割書
185(○)	□[大カ]	土師器-坏	体部外面	正位	
189(○)	□	土師器-坏	体部外面	?	墨付
190(○)	□	土師器-坏	体部外面	?	墨付
227(4号住)	半	土師器-坏	体部外面	正位	
249(○)	土	土師器-坏	体部外面	倒位	
250(○)	几	土師器-坏	体部外面	横位	
260(○)	□[八カ]	土師器-坏	体部外面	正位	
261(○)	□	土師器-坏	体部外面	倒位	墨付
262(○)	□	土師器-坏	体部外面	?	焼成前割書
263(○)	□	土師器-坏	体部外面	?	焼成前割書
305(5号住)	□[李カ]	土師器-坏	体部外面	正位	
313(○)	□	土師器-坏	体部外面	?	墨付
314(○)	半	土師器-坏	体部外面	?	
316(○)	□	土師器-坏	体部外面	?	墨付
318(○)	□[李カ]	土師器-坏	体部外面	正位	
319(○)	□	土師器-坏	体部外面	倒位	
323(○)	半	土師器-坏	体部外面	正位	
348(6号住)	七万/□[八カ]	土師器-坏	体部外面	正位	八は倒位
353(○)	□	土師器-坏	体部外面	正位	
365(○)	□[八カ]	土師器-坏	体部外面	横位	
366(○)	□	土師器-坏	体部外面	横位	
374(○)	□	土師器-坏	体部外面	?	
379(○)	□	土師器-坏	底部内面		複数の刻線(焼成前)
383(○)	□[八カ]	土師器-坏	体部外面	倒位	
388(○)	□[八カ]	土師器-坏	体部外面	倒位	
391(○)	几	土師器-坏	体部外面	倒位	
392(○)	几	土師器-坏	体部外面	倒位	焼成前割書
393(○)	一万	土師器-坏	体部外面	正位	左文字
405(○)	□	土師器-壺	頸部外面	正位	焼成前割書
440(7号住)	半	土師器-坏	体部外面	倒位	
451(8号住)	半	土師器-坏	体部外面	正位	
458(10号住)	半/半/半/半/半/半	土師器-坏	体部外面	正位	
494(14号住)	半	土師器-坏	体部外面	正位	焼成前割書
495(○)	□	土師器-坏	体部外面	?	墨付
501(○)	□	土師器-坏	体部外面	?	墨付
502(○)	□	土師器-坏	体部外面	?	焼成前割書
514(15号住)	几/□	土師器-坏	体部外面	倒位	□は正位
516(○)	三	土師器-坏	体部外面	倒位	焼成後割書
518(○)	几	土師器-坏	体部外面	倒位	
523(○)	□[八カ]	土師器-坏	体部外面	倒位	
542(16号住)	半□	土師器-坏	体部外面	正位	1次調査No93と同じカ
545(○)	□[辨カ]/□[効カ]在□	土師器-坏	体部外面	?	
546(○)	□/□□[懸カ]□	土師器-坏	体部外面	正位	No545と同様か
547(○)	□	土師器-坏	体部外面	?	墨付
551(○)	□	土師器-坏	体部外面	倒位	墨付
572(3号住状)	并	土師器-坏	体部外面	倒位	焼成前割書
573(○)	□	土師器-坏	体部外面	?	焼成前割書
575(○)	□	土師器-坏	底部外面		
577(○)	××××	土師器-壺	体部外面	倒位	焼成前割書
594(6号住状)	□	土師器-坏	体部外面	正位	
604(2号土坑)	□	土師器-坏	体部外面	正位	墨付
606(4号土坑)	一+	土師器-坏	体部外面	正位	
609(4号土坑)	□	土師器-坏	体部外面	正位	

遺物番号(遺物名)	釈文	器種	部位	方向	備考
628(13号土坑)	□	土師器-坏	体部外面	横位	
1001	□□	土師器-坏	体部外面	正位?	
1002	□	土師器-坏	体部外面	?	
1003	□[下カ]	土師器-坏	体部外面	正位	内面に2条の線
1004	□	土師器-坏	体部外面	正位?	
1005	□[○カ]	土師器-坏	体部外面	正位	
1006	□	土師器-坏	体部外面	?	
1007	□	土師器-坏	体部外面	?	九字の省略形か?
1008	ノ	土師器-坏	体部外面	正位	焼成後刻書
1009	□	土師器-坏	底部外面		
1010	□	土師器-坏	体部外面	側位	
1011	□[大カ]	土師器-坏	体部外面	正位	
1012	□	土師器-坏	体部外面	正位?	
1013	□□	土師器-坏	体部外面	側位	
1016	□	土師器-坏	体部外面	?	
1018	□	土師器-坏	体部外面	正位	
1021	□	土師器-坏	体部外面	?	
1022	×カ	土師器-坏	体部外面	横位	焼成前刻書
1024	□	土師器-坏	体部外面	?	
1025	□	土師器-甕	体部外面	?	焼成前刻書
1028	□	土師器-甕	体部外面	?	焼成前刻書、九字の変形か?
1031	□	土師器-甕	体部外面	?	焼成後刻書、九字の変形か?
1033		土師器-甕	体部外面	底部外面、側位?	焼成前刻書
1034	□	土師器-甕	体部外面		焼成後刻書、九字の変形か?
1039	□	土師器-甕	体部外面		焼成後刻書?

4. 芋田Ⅱ遺跡の集落のあり方

今回2回目となる発掘調査によって、芋田Ⅱ遺跡の古代集落の様相はさらに明らかとなり、より具体的な姿を見せつつあるが、以下にそれらについて列挙する。

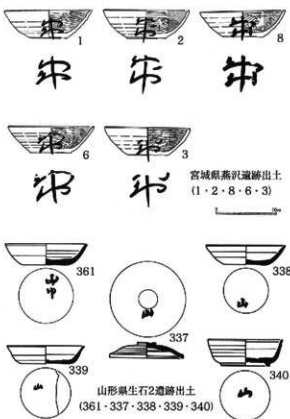
①今回確認された住居跡をはじめとする平安時代の遺構は、前回報告の第Ⅱ期(9世紀前半)・第Ⅲ期(9世紀後半～10世紀初頭)の大きく二時期に属する。(第125図参照)

②芋田Ⅱ遺跡の古代集落は、前回確認されている奈良時代(8世紀半ば～後半)を含む三時期にわたる、総数50棟を超える規模を有すると推定される。

③今回の調査でも、耳皿・墨書土器・刻書土器などが出土したことから、城柵・官衙(志波城・徳丹城)との関連が想定される。

④土器工房を兼ねるとされる住居跡や鍛冶関連の遺物が出土する住居跡、作業場かと思われる住居状遺構・土坑が確認され、集落内における生産活動の一端が明らかになった。

⑤これまであまり類例のない住居に付属する煙道状の施設や、四隅に小孔を伴う特殊な土坑が確認されたこ



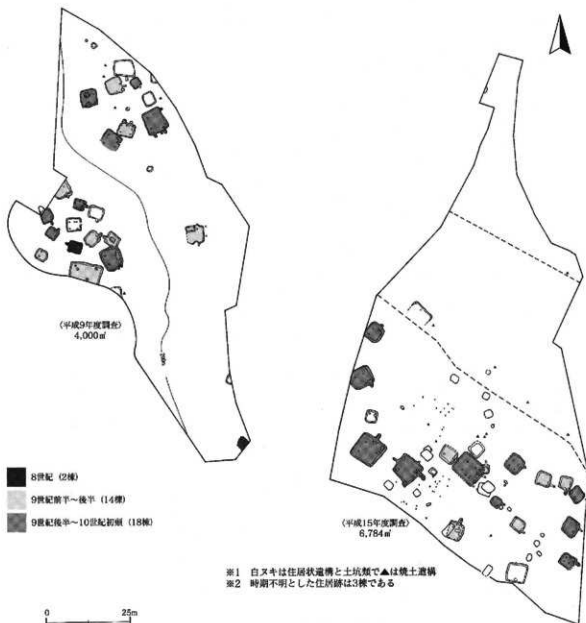
第124図 「山マ」に関わる墨書土器

とから、何か祭祀的な儀式などを行っていた住居が存在した可能性がある。

⑥把手付土器・砂底土器などの遺物が出土していることから、津軽地方など北部地域との流通・交流を思わせる状況もある。また、おびただしい量の須恵器の産地も気にかかる。

以上①・③・⑥は、前回の調査報告書で記載した内容をここで再提示しただけであるが、③の墨書・刻書土器については今回かなりの出土をみ、前回調査のものを含めると、それらの総出土点数は100点を優に超える。さらに、その中には長文（多文字）墨書土器が2点含まれており、このことは集落内にかなり文字に親しんだ識字層がいたことを示唆している。また、県内出土の墨書土器集成（註1）によれば、現在の岩手郡内で確認されている墨書土器のほとんどは、本遺跡から出土したものと報告がなされている。

次に、まず②についてであるが、50棟という数字は地形的に遺構の拡がりか予想される範囲と、これまで



第125図 集落の変遷

に検出された遺構密度から想定したあくまでも下限の数であり、未調査区の状況次第では、さらに規模の大きな集落となる可能性がであろう。④・⑤については、今回の調査で得られた本遺跡の新たな特徴・特色として挙げられるもので、集落内に暮らす人々の生活をより具体的に示す内容である。

これまでの調査成果から、上記のような特徴を有する集落は、「一般集落」に対して「拠点集落」などと呼ばれることがある。後者は、在地の有力者に囲むる集落として前者とは区別され、周辺地域をとりまとめた官衙的集落として存在したとされる。本遺跡の場合、近くを流れる北上川を含めた交通の要衝という面からも、その条件の一部を満たしているが、平安期の代表的な拠点集落とされる遠野市高瀬Ⅰ・高瀬Ⅱ遺跡とは集落構造に関して決定的な違いがある。高瀬Ⅰ・高瀬Ⅱ遺跡は、出土した墨書土器をはじめとする遺物の特徴などから、地方官衙的性格が強い集落ともいわれる(註2)が、先の相違点とは集落を構成する遺構、具体的には掘立柱建物跡の有無である。本遺跡からは、これまで1棟の掘立柱建物跡も確認されておらず、集落の構成要素の中にはこれが加わる可能性はほとんどない。無論、高瀬Ⅰ・高瀬Ⅱ遺跡でもその集落構成には違いがあり、前者は堅穴住居中心の形態が変わらずに発展する集落、後者は次第に掘立柱建物跡のみで構成される集落へ変遷する(註3)とされる。これらが、同時に集落を構成するか否かの問題はあがあるが、両遺跡とも地域の有力者が生活する集落であったことは疑いがない。

いずれにせよ、芋田Ⅱ遺跡の古代集落は8世紀後半から10世紀にかけて、現在の岩手郡を中心とする周辺地域の拠点的な集落として存在し、その主体となる時期は、9世紀後半から10世紀初めにあったことが明らかとなった。また、集落内における生産活動や祭祀に関連する発見もあり、「顕貴集落」のあり方に新たな問題を投げかける遺跡のひとつになるものと思われる。

最後になりましたが、本報告書の作成にあたり、野外調査・室内整理でお世話いただいた作業員・臨時職員の方皆さん、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、玉山村教育委員会には、多くのご協力をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

註1. 第29回古代史サマナーセミナー資料集「奥六郡地域の古代史～律令国家から平朝国家へ～」(岩手県内出土古代文字資料集成)による。

註2・3. 『墨書土器の研究』(墨書土器と古代の村落) P378～385

<参考文献>

- 細野彰子 (1995) : 『いわゆるムシロ鹿について』(北上市立博物館研究報告) 第10号 北上市立博物館
- 郡山県教育委員会 (1992) : 『群馬県出土の墨書・刻書土器集成』(2)
- 藤澤博司 (1989) : 『高瀬Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩文壇調査報告書第156集 (附) 岩埋文
- 佐藤浩彦 (1998) : 『高瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡』遠野市埋蔵文化財調査報告書第5集 岩手県遠野市教育委員会
- 佐藤浩彦 (2003) : 『大久保遺跡発掘調査報告書』遠野市埋蔵文化財調査報告書第14集 遠野市教育委員会
- 奥川司男 (2000) : 『田 産屋された文字-墨書土器』(発掘された文字-墨書土器展-)
- 仙台市教育委員会 (1984) : 『高瀬遺跡』仙台市文化財報告書第62集 仙台市教育委員会
- 高島英之 (2000) : 『古代出土文字資料の研究』東京堂出版
- 中村 浩 (1999) : 『古墳出土土器集成』第4巻 東日本編Ⅱ 雄山閣出版
- 水井 久美男 (1996) : 『日本出土鉄器論』兵庫屋蔵蔵調査会
- 羽原直人 (2000) : 『村越 穂先生古稀記念論文集』弘前大学教育学部考古学研究室OH会
- 濱田 宏 (1999) : 『芋田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩文壇調査報告書第304集 (附) 岩埋文
- 平川 南 (2000) : 『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 埋蔵文化財研究会 (1998) : 『第39回埋蔵文化財研究会古代の本製土器-養生期から平安期にかけての木製土器-』
<第11分科北海道・東北・関東・中部>
- 三上眞孝 (2003) : 『文献史学からみた墨書土器の機能と役割』『古代官衙・集落と墨書土器-墨書土器の機能と性格をめぐって-』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
- 宮 宏明 (1998) : 『余市大川遺跡出土古代の文字資料をめぐって』『北奥古代文化-飯沼・飯沼文庫から神楽面-』第25号
北奥古代文化研究会
- 村上 拓 (1999) : 『芦名氏Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩文壇調査報告書第295集 (附) 岩埋文
- 山形県教育委員会 (1986) : 『生石Ⅱ遺跡発掘調査報告書』(2) 山形県埋蔵文化財調査報告書第99集 山形県・山形県教育委員会

付篇

芋田Ⅱ遺跡の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県岩手郡玉山村に所在する芋田遺跡は、北上川左岸の段丘面及び後背山地より伸びる丘陵上に位置している。発掘調査の結果、縄文時代の土器埋設遺構や焼土跡、平安時代の竪穴住居跡や土坑、焼土遺構などが検出されている。また、縄文時代の遺構は丘陵尾根部より、平安時代の遺構は段丘平坦面からと、異なる立地で確認されている。

本報告では、上記の平安時代の遺構より出土した、木製遺物を対象に樹種同定を行い、その種類を明らかにする。

1. 試料

試料は、平安時代の7号住居状遺構から出土した炭化した木製塊1点である。7号住居状遺構は、平面は一辺約5.5m方形を呈し、発掘調査時の所見では工房的な遺構と推定されている。試料の木製塊は、完全に炭化しており、径約10cmの円形を呈する。試料の採取は、調査担当者との協議を行い、3片に割れた試料1片の破断面を対象に行った。

2. 分析方法

木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

木製塊は、落葉広葉樹のケヤキに同定された。以下に、解剖学的特徴等を記す。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔部は1-2列、孔間外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞層、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

4. 考察

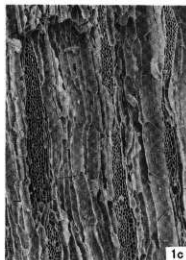
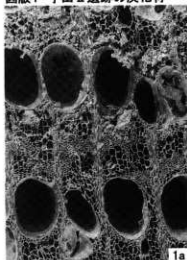
ケヤキは、ブナ属やトチノキとともに櫟の材料としてよく確認される種類であり、既存の調査事例でも報告例が多い（高地・伊東, 1988）。これらの樹種の利用は、民俗事例における挽物の櫛や皿の素材に使用される樹種とも調和している（橋本, 1979）。

岩手県内における平安時代の木材利用については、住居構築材と考えられる炭化材の調査により資料の蓄積を行っている。一方、櫛等の木製品の木材利用状況については、現段階では種類が少なく樹種の傾向等に言及できない。この点については、当該期の木製品の調査事例を蓄積し、改めて検討したいと考えている。

引用文献

- 橋本 鉄男, 1979, ろくろ (ものと人間の文化史31), 法政大学出版局, 444p.
高地 謙・伊東 隆夫 (編), 1988, 日本の遺跡出土木製品総覧, 葦山閣, 296p.

図版1 芋田Ⅱ遺跡の炭化材



1. ケヤキ(7号住居状遺構 木製構)
a:木口, b:椀目, c:板目

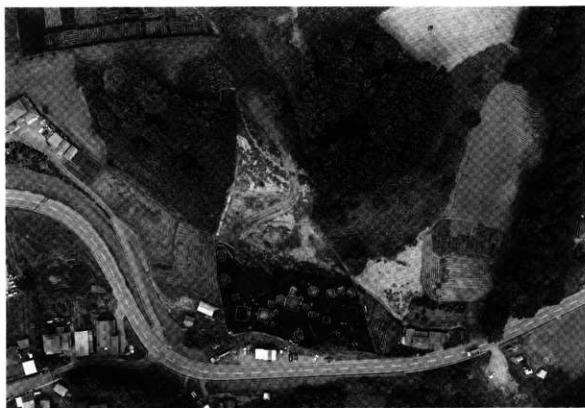
200 μ m a

200 μ m b,c

写 真 图 版



遺跡遠景



遺跡全景

写真図版1 空中写真

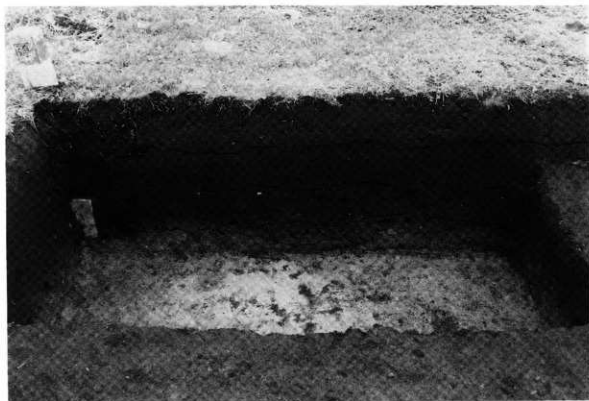


平垣部調査前



平垣部調査中の状況

写真図版 2 平垣部近景



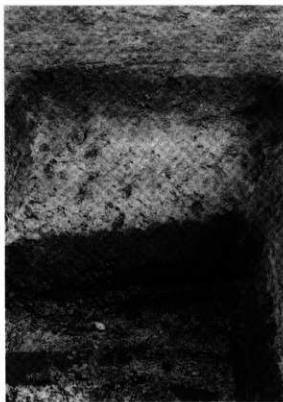
基本層序



斜面部

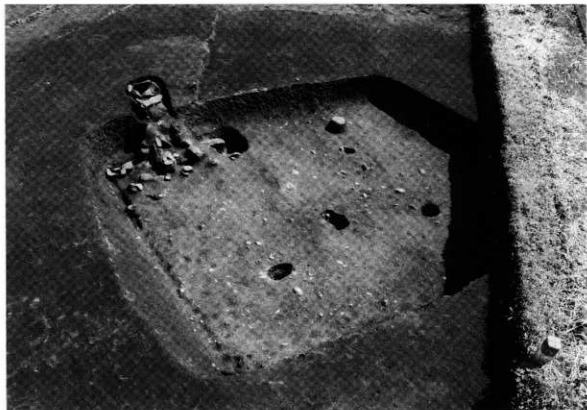


尾根部



IV層以下の層序

写真図版3 基本層序と調査区各部の全景



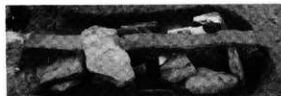
全 景



埋 土



カマド全景



煙道部埋土



Pit 1 埋土

写真図版 4 第 1 号住居跡



全 景



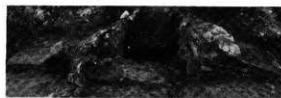
埋 土



カマド全景

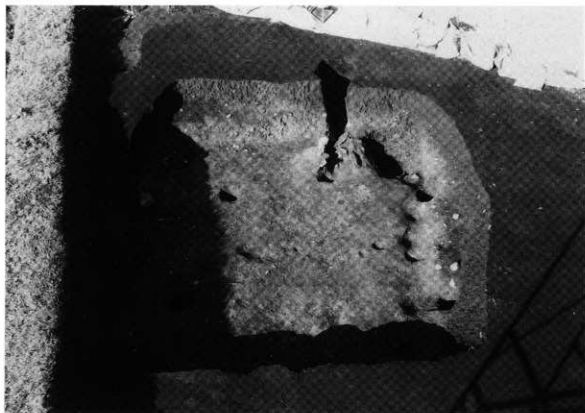


煙出・煙道部 横組み



燃焼部焼土 たち割り

写真図版5 第2号住居跡



全 景



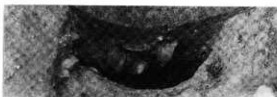
埋 土



カマド袖部 たち割り



煙道・煙出部埋土

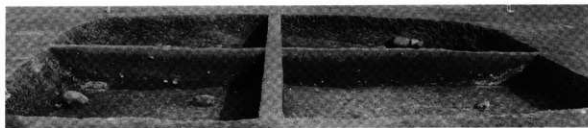


Pit 1 埋土

写真図版 6 第 3 号住居跡



全景



埋土



PR 3 全景



PR 3 埋土

写真図版 7 第 4 号住居跡 (1)



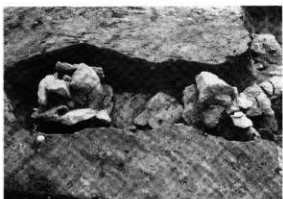
カマド全景



煙道状施設 2



煙道状施設 1



カマド煙出・煙道部 線組み



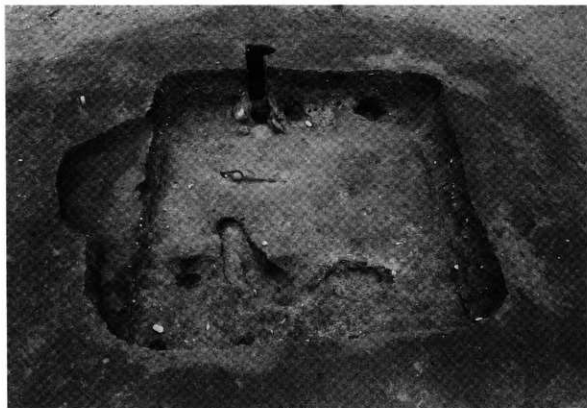
煙道状施設 3



カマド袖部 たち割り



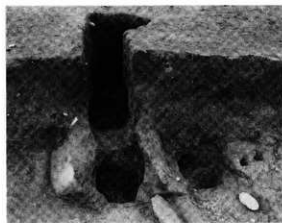
貼床除去後全景



全 景



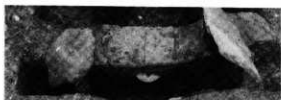
埋 土



カマド全景

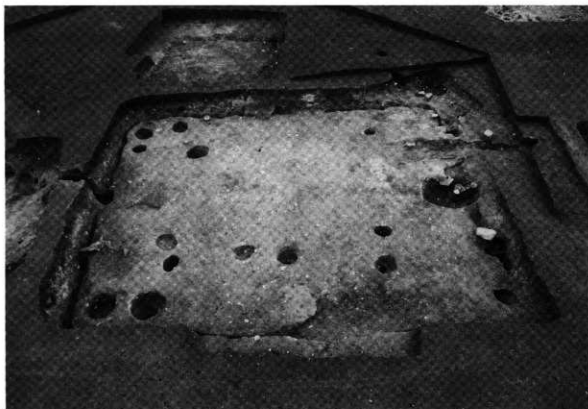


煙道部埋土



燃焼部焼土 たち割り

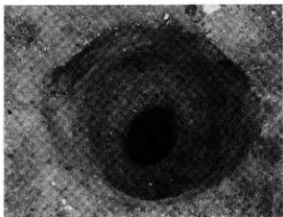
写真図版9 第5号住居跡



全 景



埋 土



ロクロピット

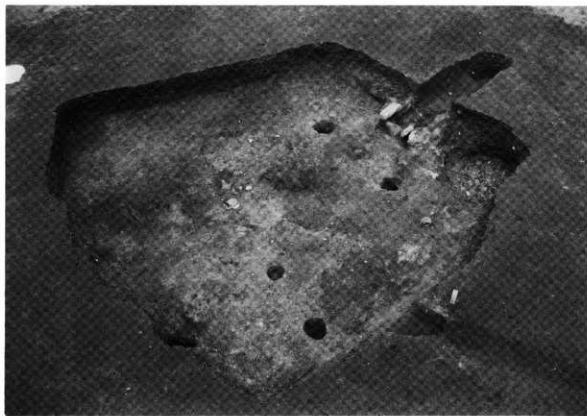


PR1 埋土

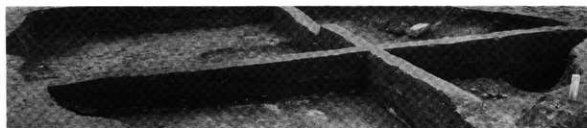


カマド袖部 たち割り

写真図版10 第6号住居跡



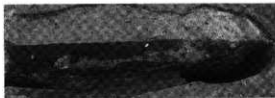
全 景



埋 土



焼土 1・土器出土状況



煙道・煙出部埋土

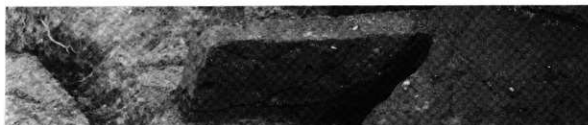


燃焼部焼土 たち割り

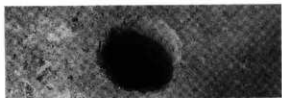
写真図版11 第7号住居跡



全 景



埋 土



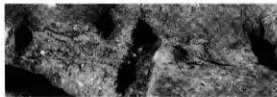
煙出



燃焼部焼土 たち割り

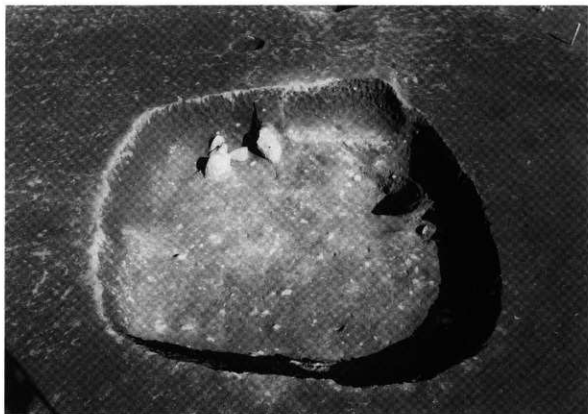


煙道部埋土



カマド袖部 たち割り

写真図版12 第8号住居跡



全 景



埋 土



カマド本体部

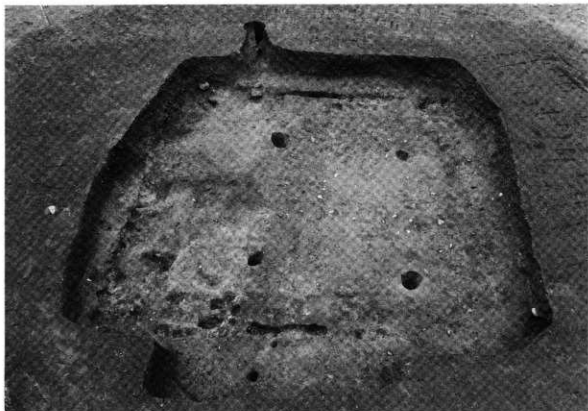


カマド埋土



煙道部埋土

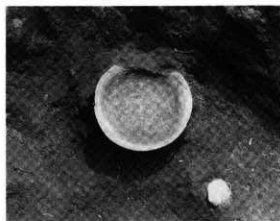
写真図版13 第9号住居跡



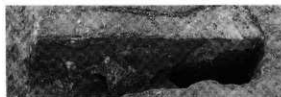
全 景



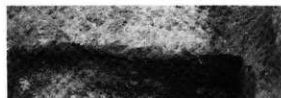
埋 土



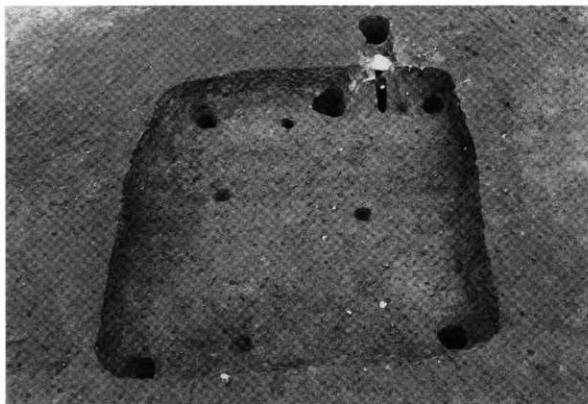
坏出土状況



煙出・煙道部埋土



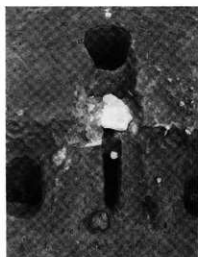
燃焼部焼土 たち割り



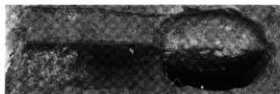
全 景



埋 土



カマド全景

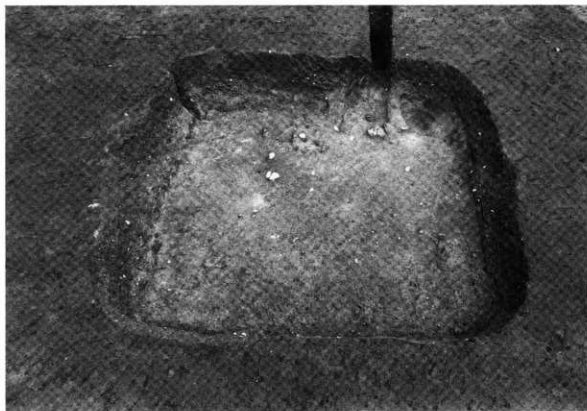


煙道・煙出部埋土



カマド袖部 たち割り

写真図版15 第11号住居跡



全 景



埋 土



カマド全景

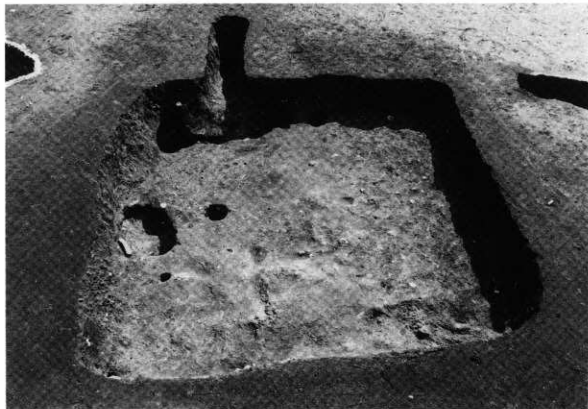


カマド埋土



支脚部分でのたち割り

写真図版16 第12号住居跡



全 景



埋 土



Pit 1 埋土



燃焼部焼土 たち割り

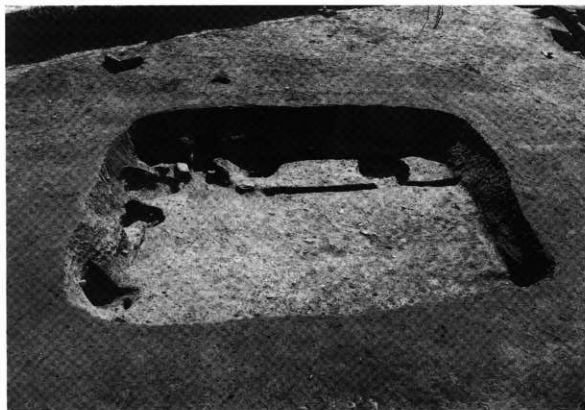


Pit 2 埋土



カマド袖部 たち割り

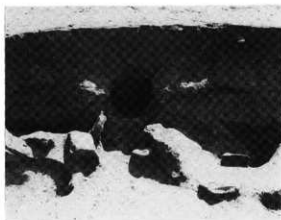
写真図版17 第13号住居跡



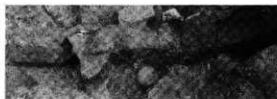
全 景



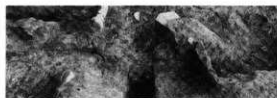
埋 土



カマド全景



カマド埋土

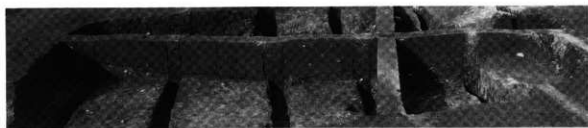


カマド袖部 たち割り

写真図版18 第14号住居跡



全 景



埋 土



カマド全景

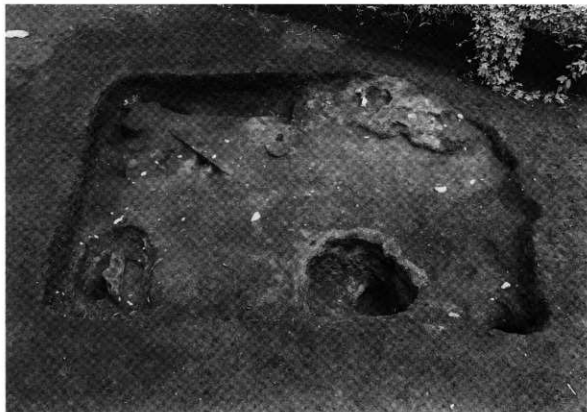


煙道・煙出部埋土



Pit 3埋土

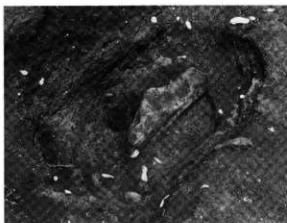
写真図版19 第15号住居跡



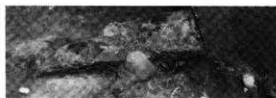
全 景



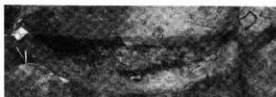
埋 土



PI1 全景



カマド埋土



燃焼部焼土 たち割り

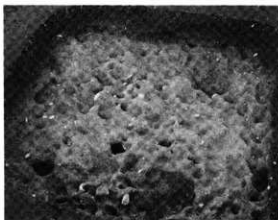
写真図版20 第16号住居跡



全 景



埋 土



貼床除去後全景

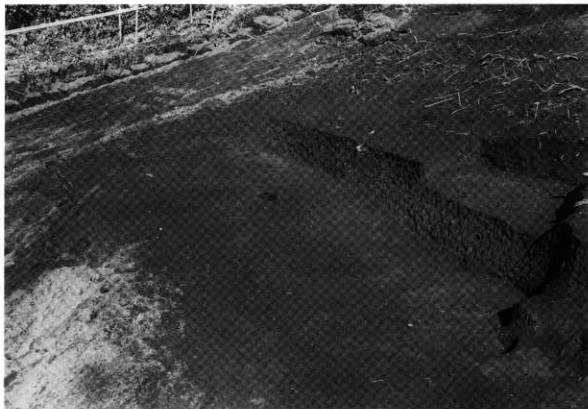


Pit 1 埋土



Pit 2 埋土

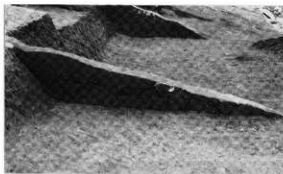
写真図版21 第1号住居状遺構



全景 (南→)



全景 (南東→)

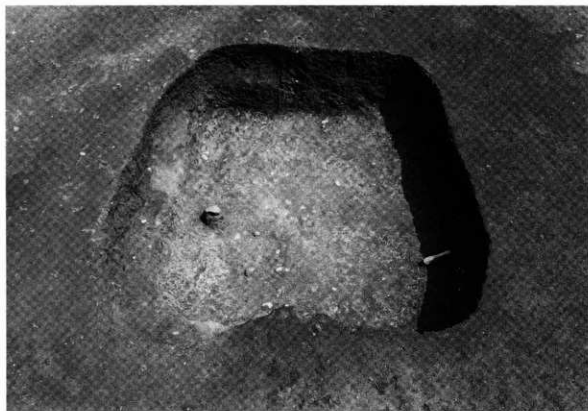


埋土 (1)



埋土 (2)

写真図版22 第2号住居状遺構



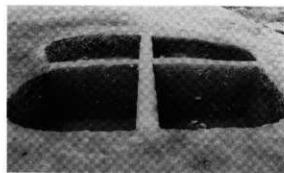
全景



坏出土状况

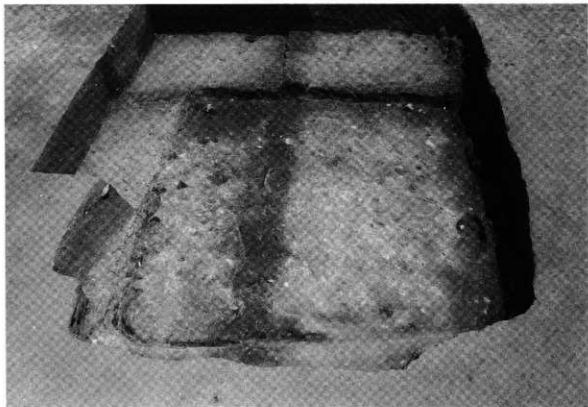


埋土(1)



埋土(2)

写真图版23 第3号住居状遺構



全 景

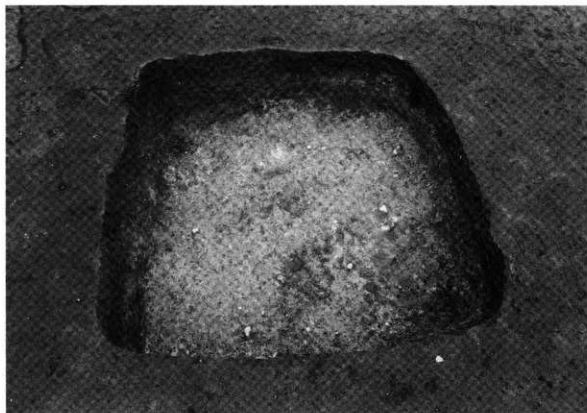


埋土 (1)



埋土 (2)

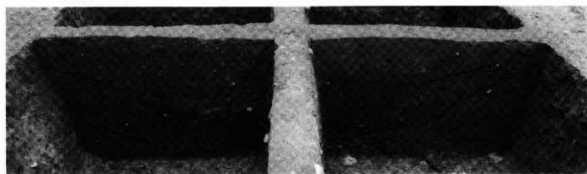
写真図版24 第4号住居状遺構



全 景



埋土 (1)

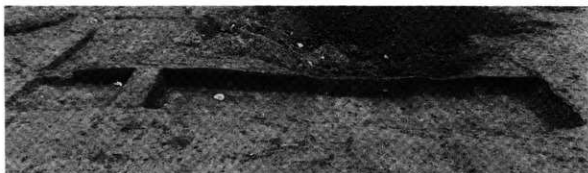


埋土 (2)

写真図版25 第5号住居状遺構



全 景

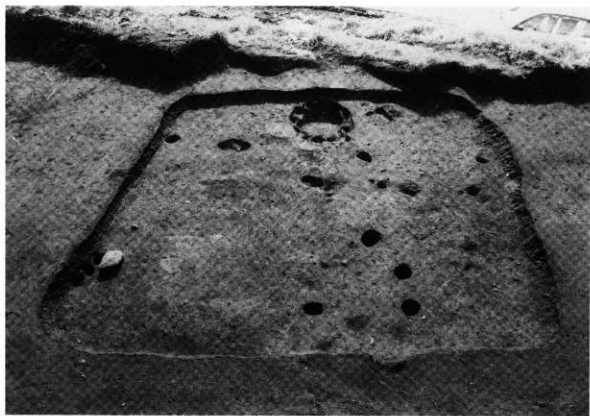


埋土 (1)



埋土 (2)

写真図版26 第6号住居状遺構



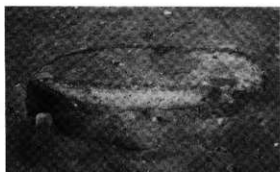
全 景



埋 土



焼土 1 たち割り

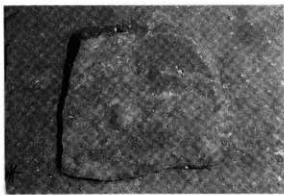


焼土 2 たち割り

写真図版27 第7号位居状遺構



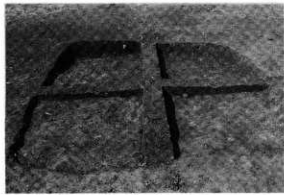
第1号土坑全景



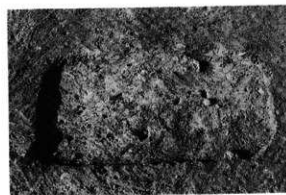
第2号土坑全景



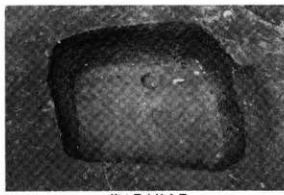
埋土



埋土



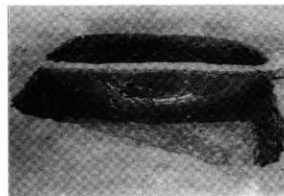
第3号土坑全景



第4号土坑全景



埋土

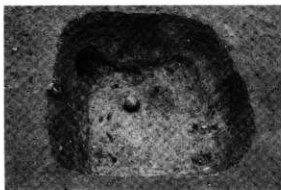


埋土

写真图版28 土坑(1)



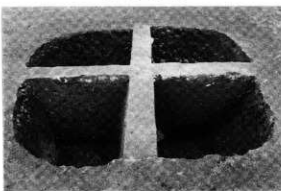
第5号土坑全景



第6号土坑全景



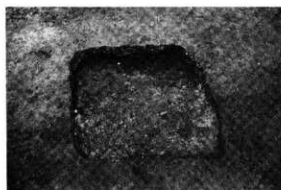
埋土



埋土



第7号土坑全景



第8号土坑全景



埋土

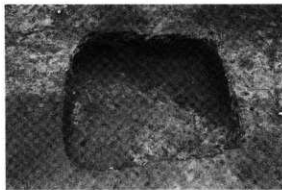


埋土

写真图版29 土坑(2)



第9号土坑全景



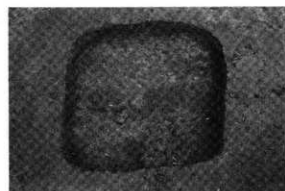
第10号土坑全景



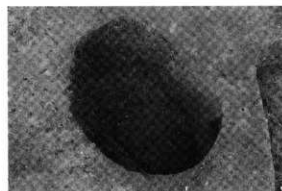
埋土



埋土



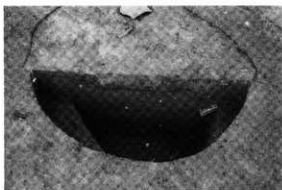
第11号土坑全景



第12号土坑全景



埋土

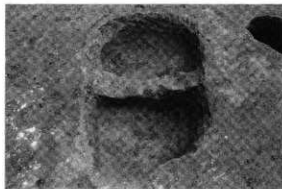


埋土

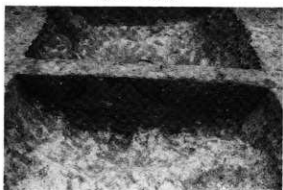
写真版30 土坑(3)



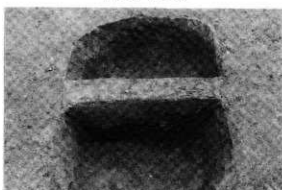
第13号土坑全景



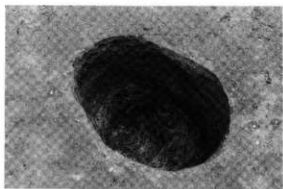
第14号土坑全景



埋土



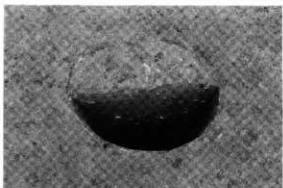
埋土



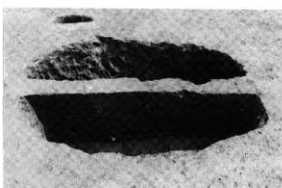
第15号土坑全景



第16号土坑全景

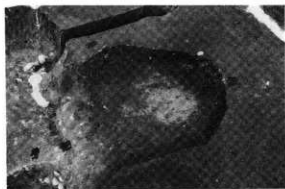


埋土

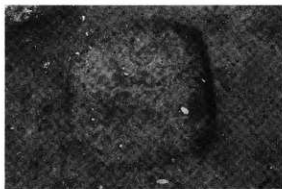


埋土

写真図版31 土坑(4)



第17号土坑全景



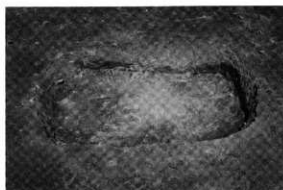
第18号土坑全景



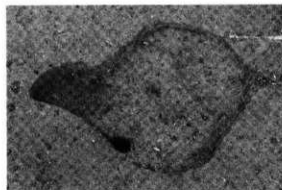
埋土



埋土



第19号土坑全景



第20号土坑全景



埋土

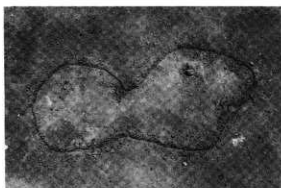


埋土

写真图版32 土坑(5)



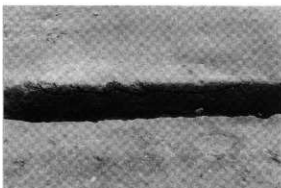
第1号焼土遺構平面



第2号焼土遺構平面



たち割り



たち割り



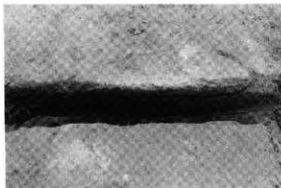
第3号焼土遺構平面



第4号焼土遺構平面



たち割り

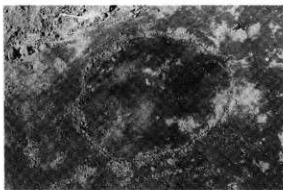


たち割り

写真図版33 焼土遺構(1)



第5号焼土遺構平面



第6号焼土遺構平面



たち割り



たち割り



第7号焼土遺構平面



第8号焼土遺構平面



作業風景（屋根部）



たち割り

写真図版34 焼土遺構（2）



第9号焼土遺構平面



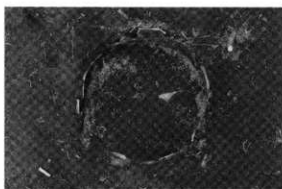
第10号焼土遺構平面



たち割り



たち割り



第1号土器埋設遺構検出状況



作業風景 (平埴部)

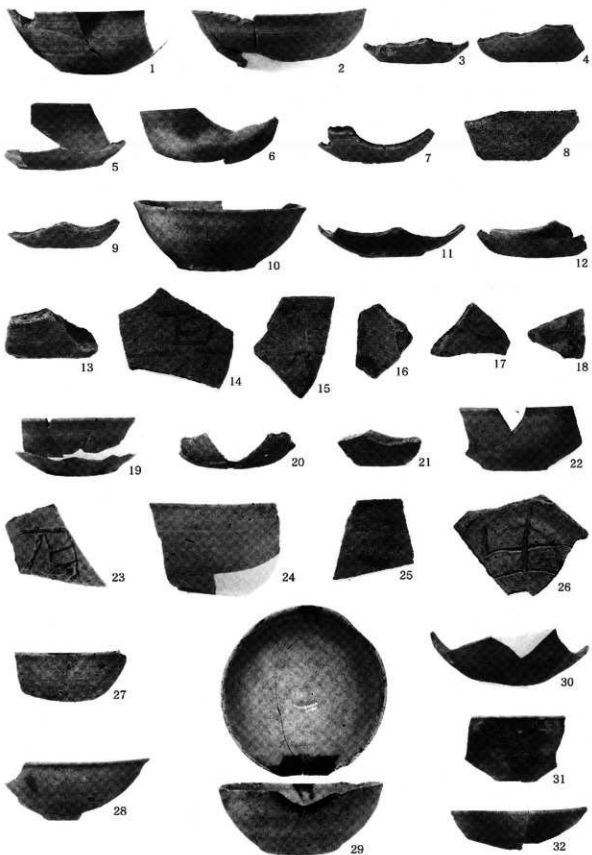


たち割り



尾根部から臨む岩手山

写真図版35 焼土遺構(3)・土器埋設遺構ほか



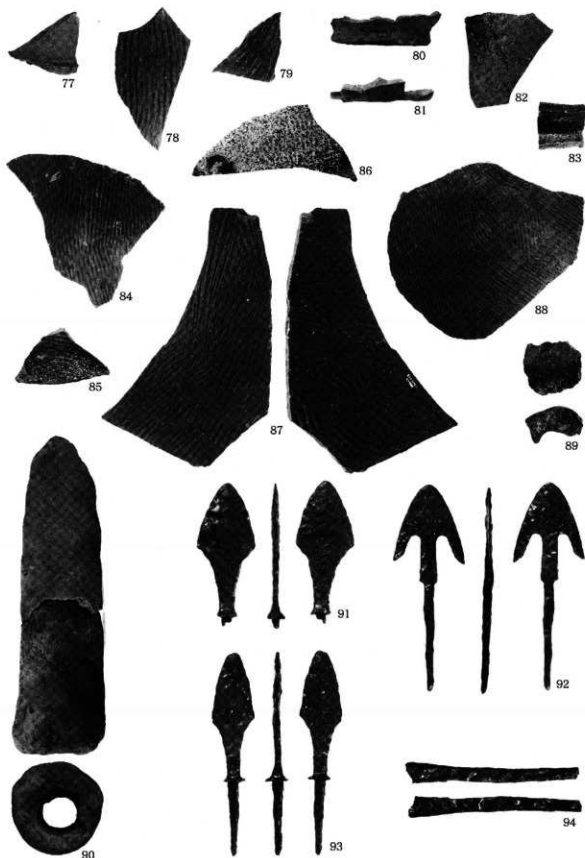
写真図版36 遺構内出土遺物 (1)



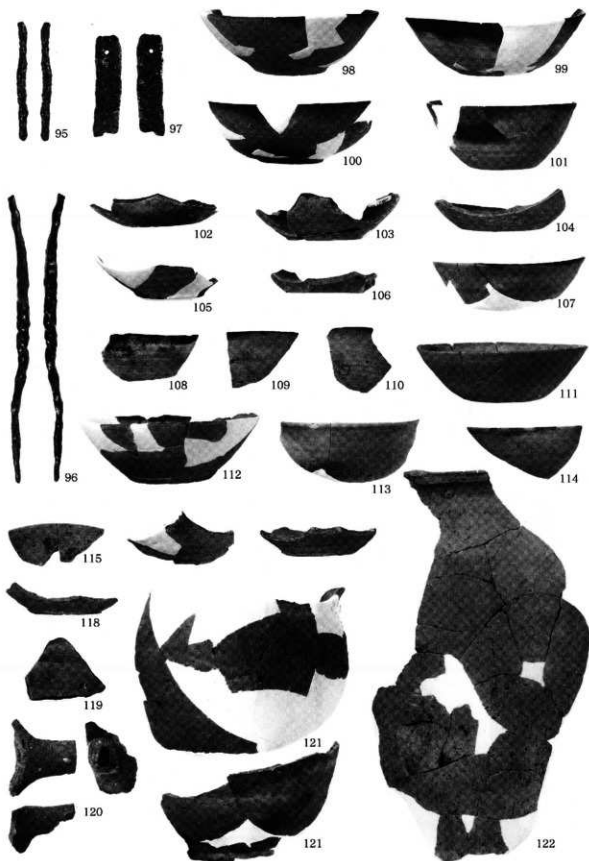
写真図版37 遺構内出土遺物(2)



写真図版38 遺構内出土遺物(3)



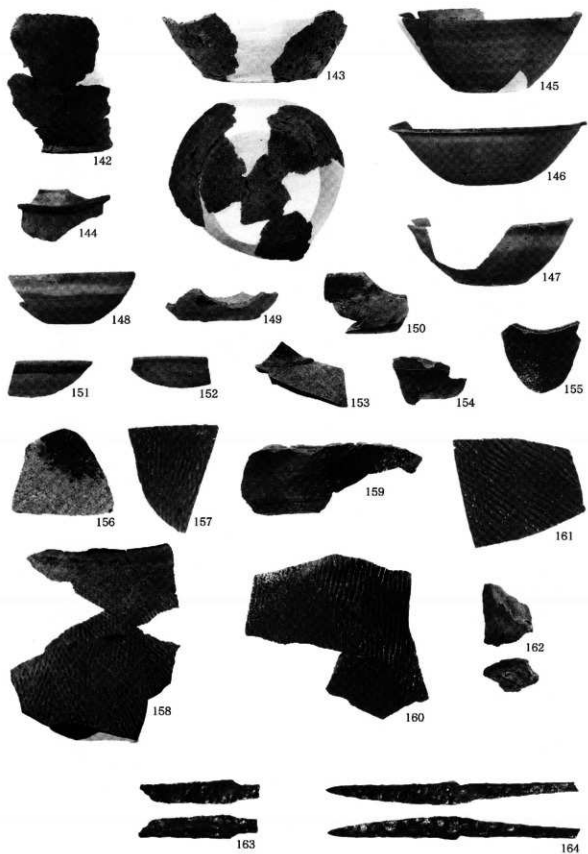
写真図版39 遺構内出土遺物(4)



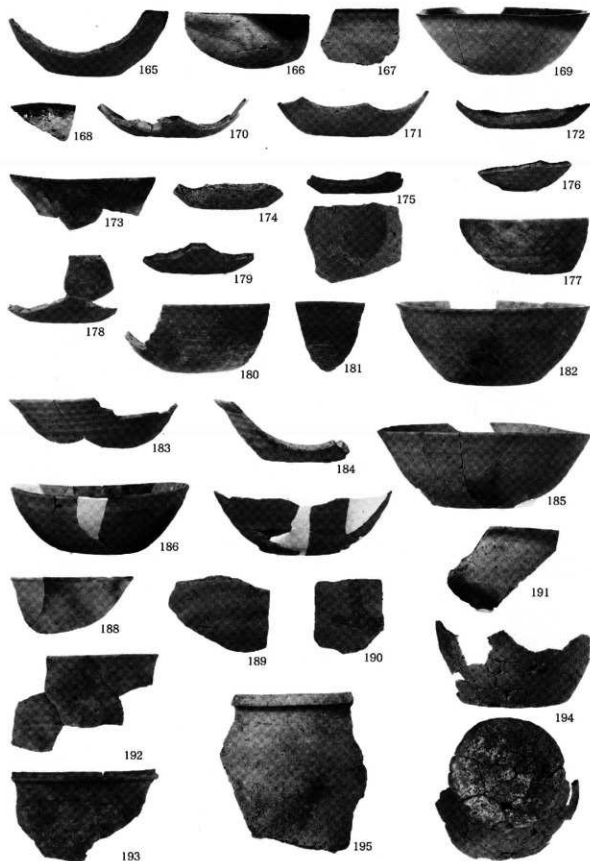
写真図版40 遺構内出土遺物 (5)



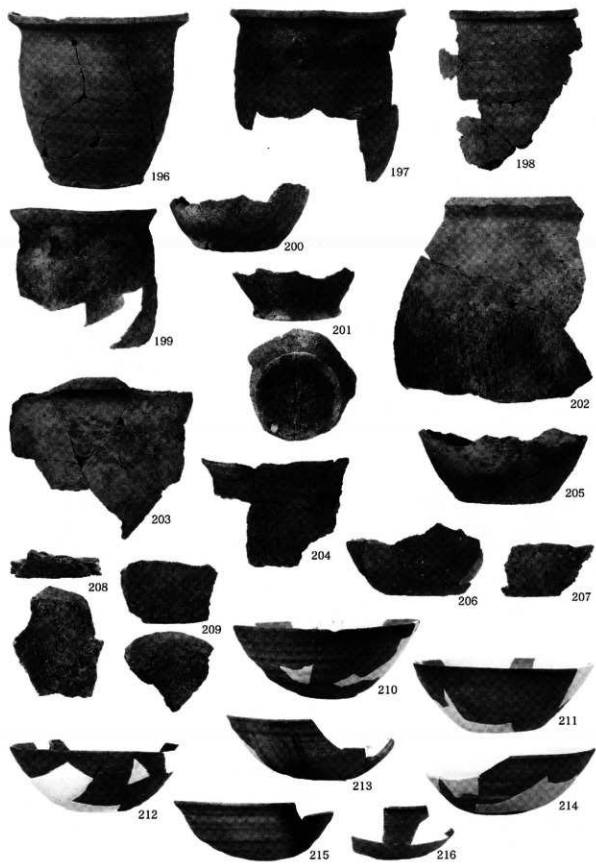
写真図版41 遺構内出土遺物(6)



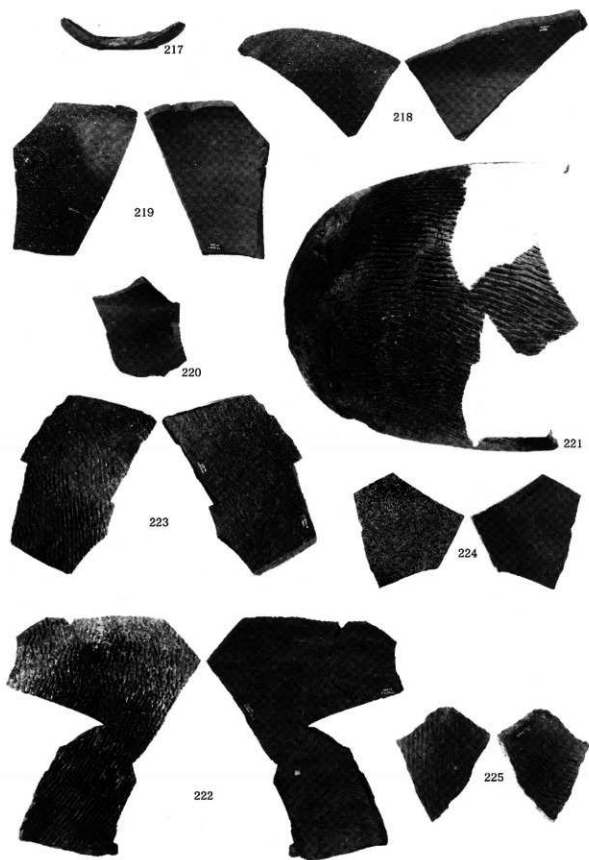
写真図版42 遺構内出土遺物(7)



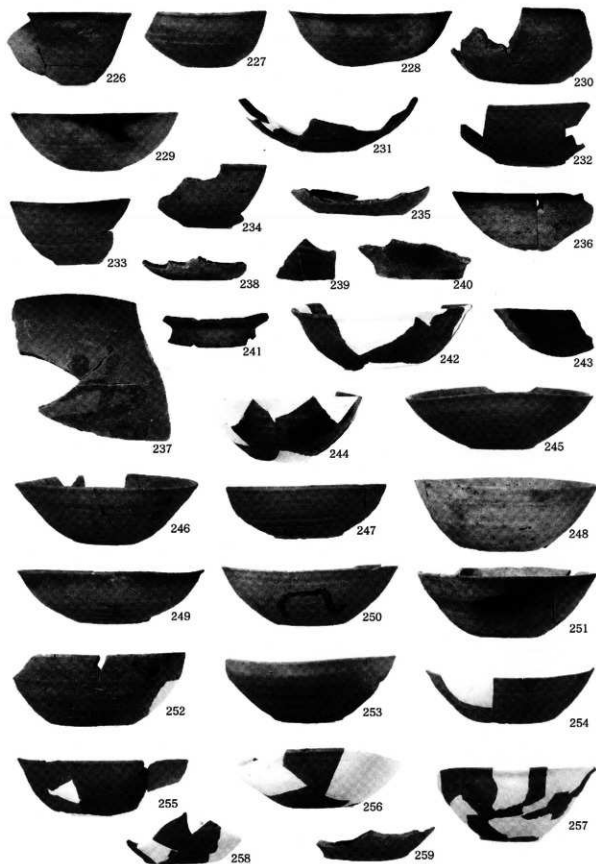
写真図版43 遺構内出土遺物(8)



写真図版44 遺構内出土遺物 (9)



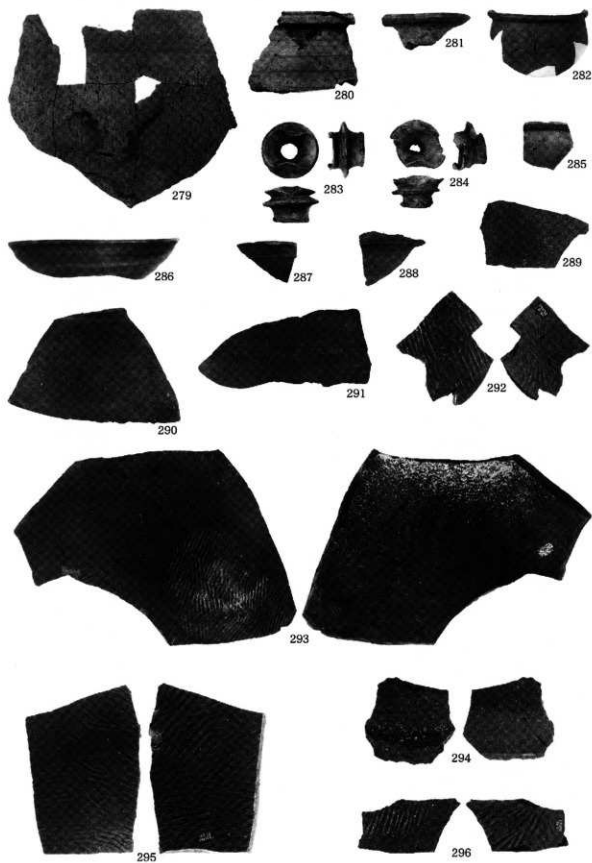
写真図版45 遺構内出土遺物 (10)



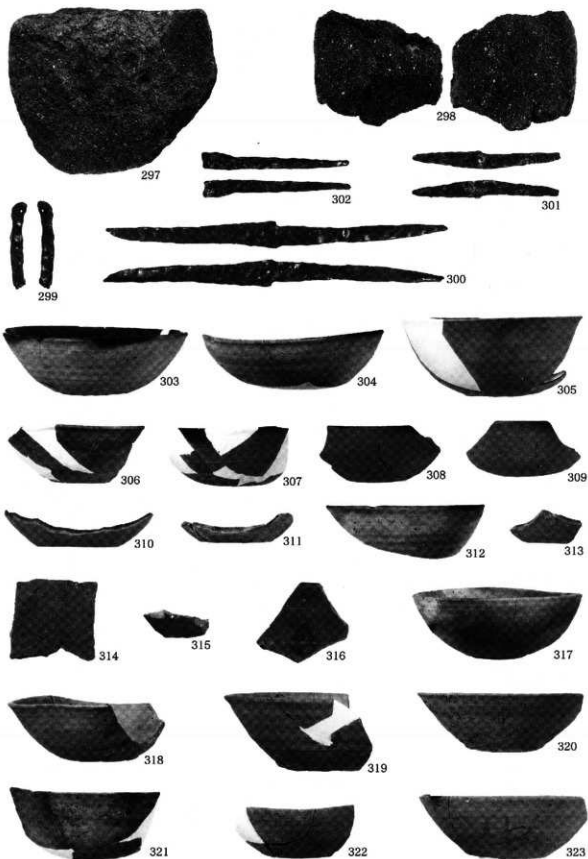
写真図版46 遺構内出土遺物 (11)



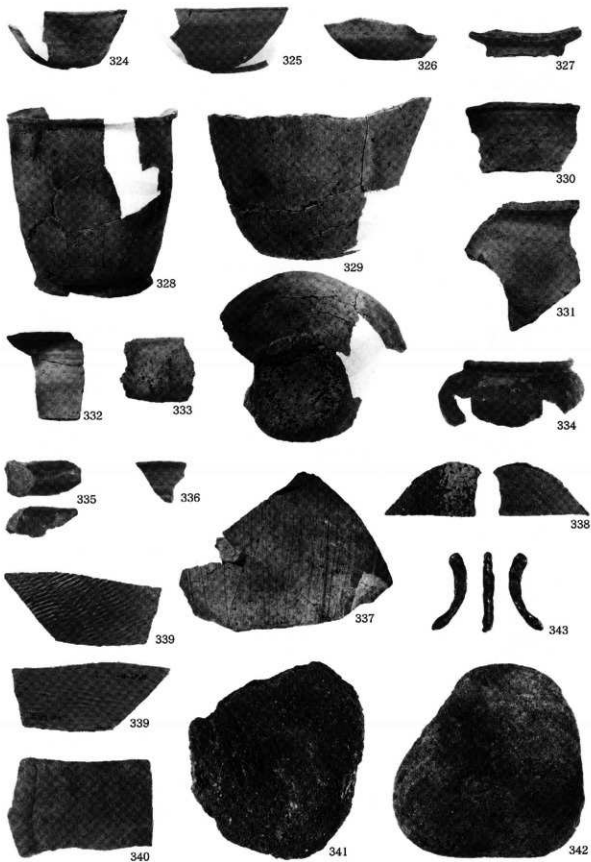
写真図版47 遺構内出土遺物 (12)



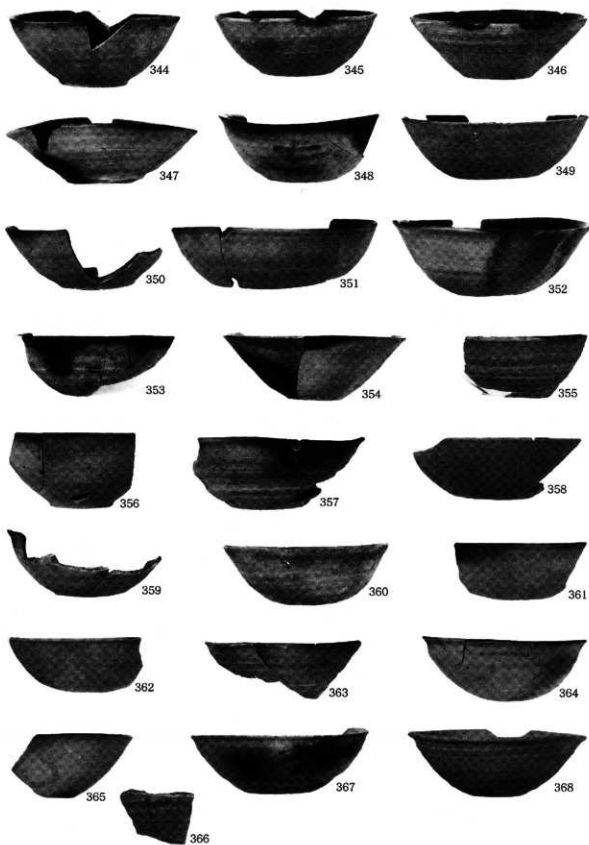
写真図版48 遺構内出土遺物 (13)



写真図版49 遺構内出土遺物 (14)



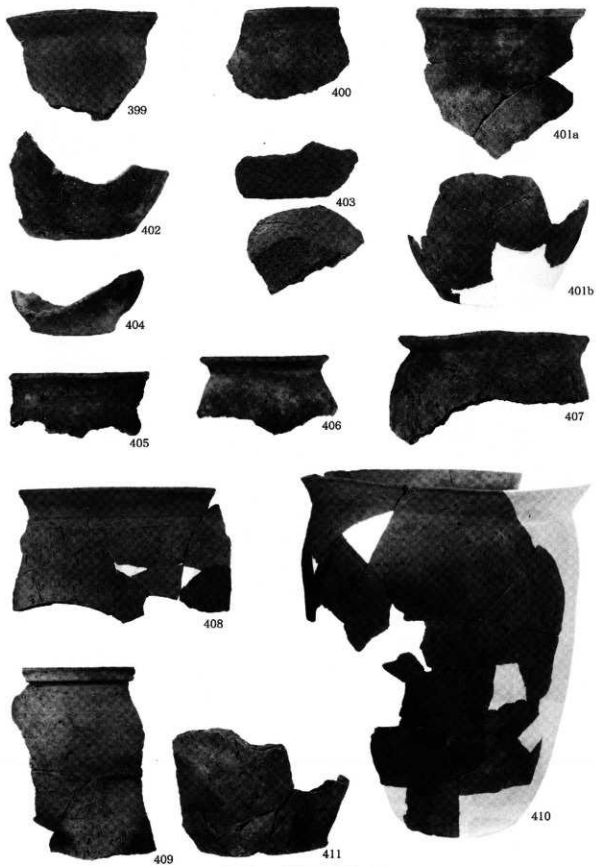
写真図版50 遺構内出土遺物 (15)



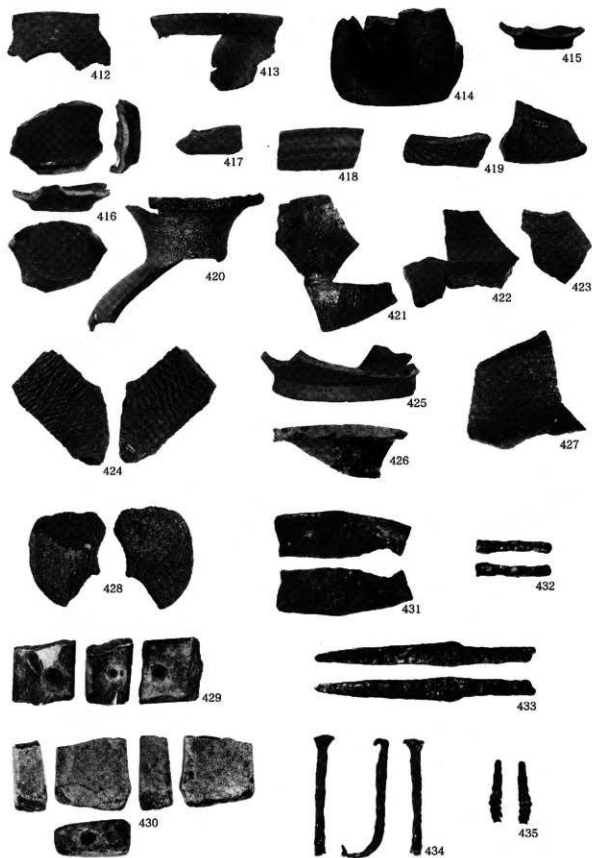
写真図版51 遺構内出土遺物 (16)



写真図版52 遺構内出土遺物 (17)



写真図版53 遺構内出土遺物 (18)



写真図版54 遺構内出土遺物 (19)



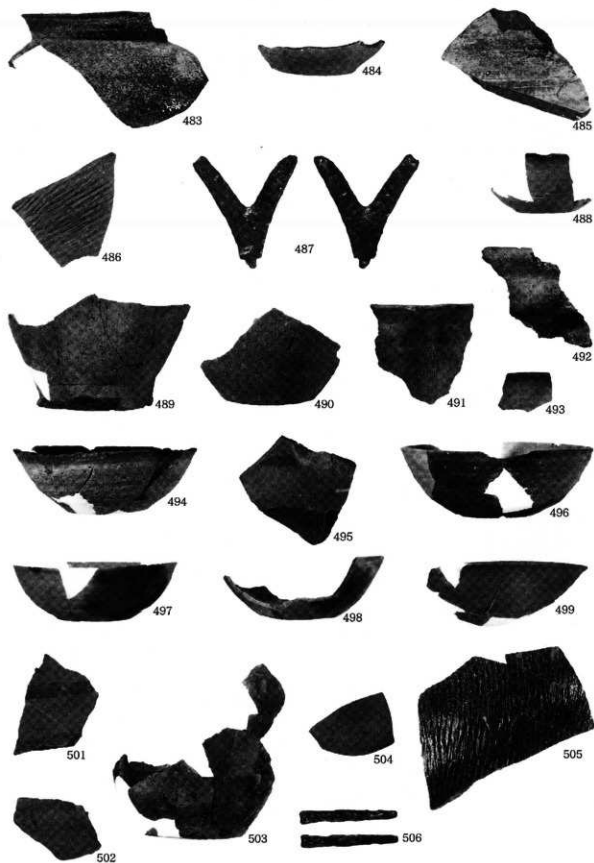
写真図版55 遺構内出土遺物 (20)



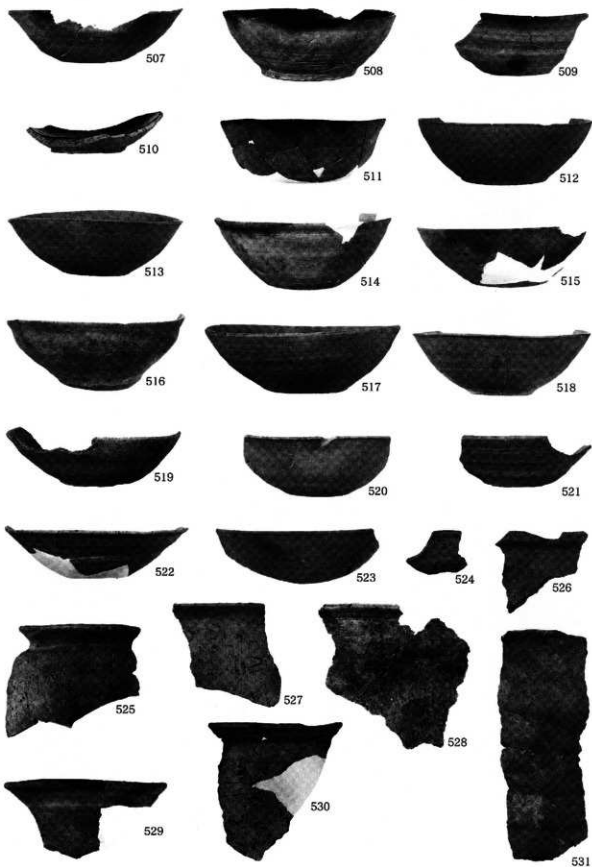
写真図版56 遺構内出土遺物 (21)



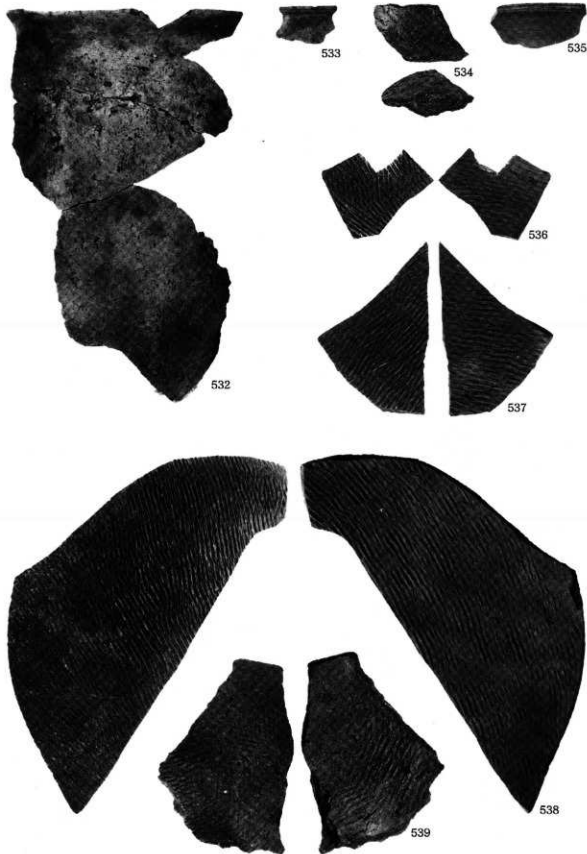
写真図版57 遺構内出土遺物 (22)



写真図版58 遺構内出土遺物 (23)



写真図版59 遺構内出土遺物 (24)



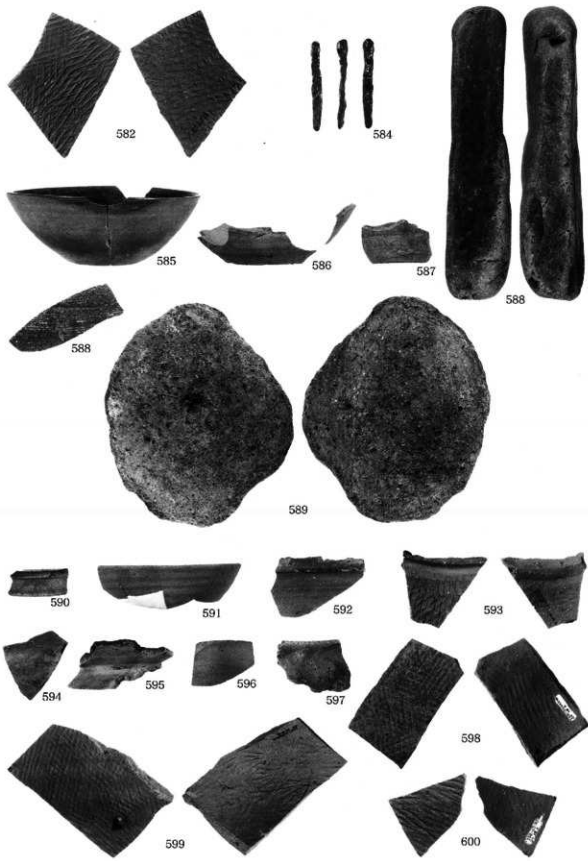
写真図版60 遺構内出土遺物 (25)



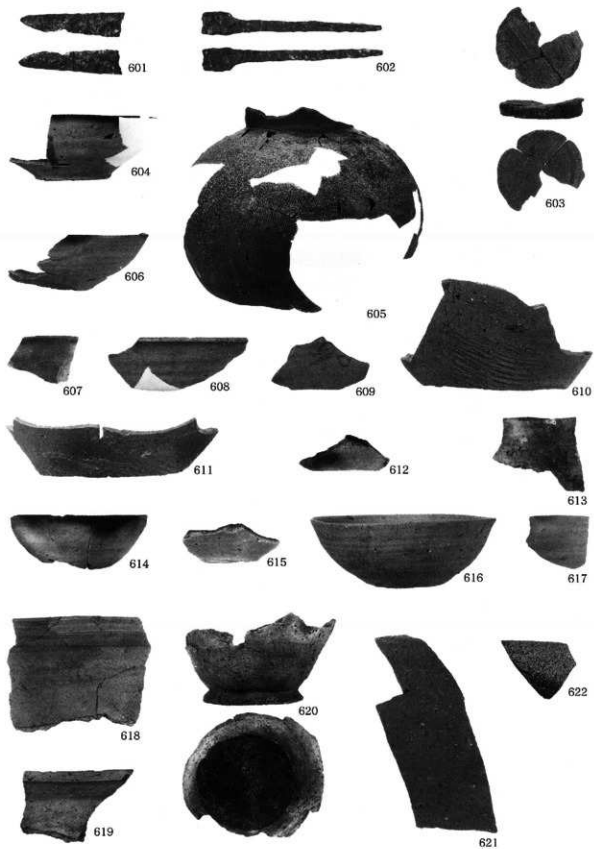
写真図版61 遺構内出土遺物 (26)



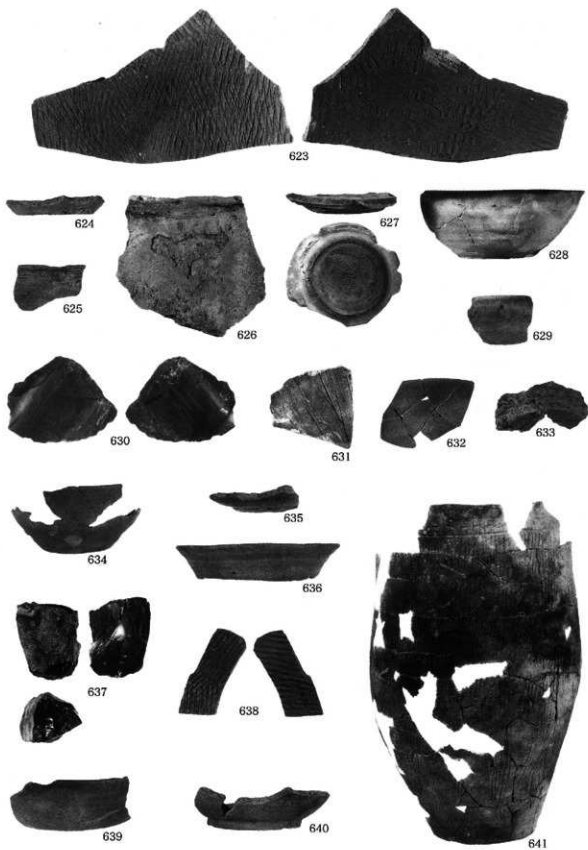
写真図版62 遺構内出土遺物 (27)



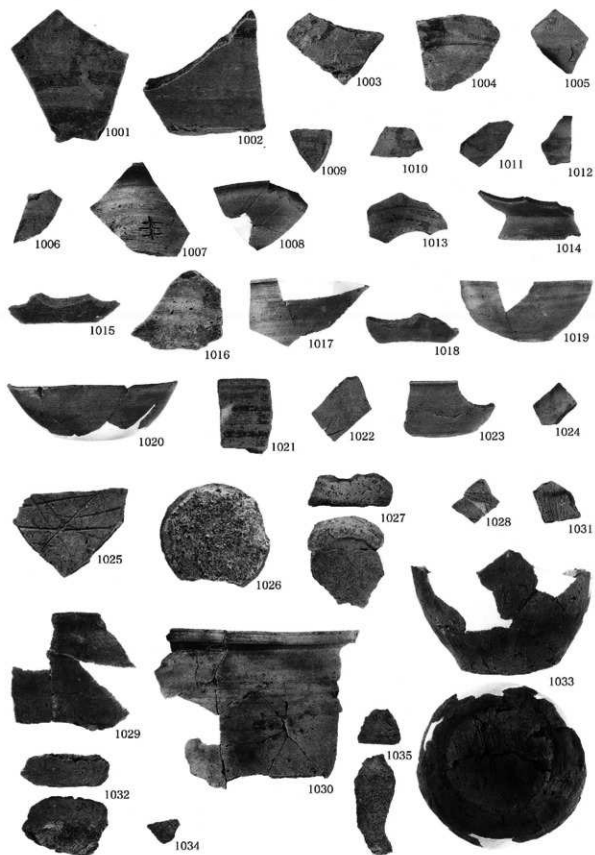
写真図版63 遺構内出土遺物 (26)



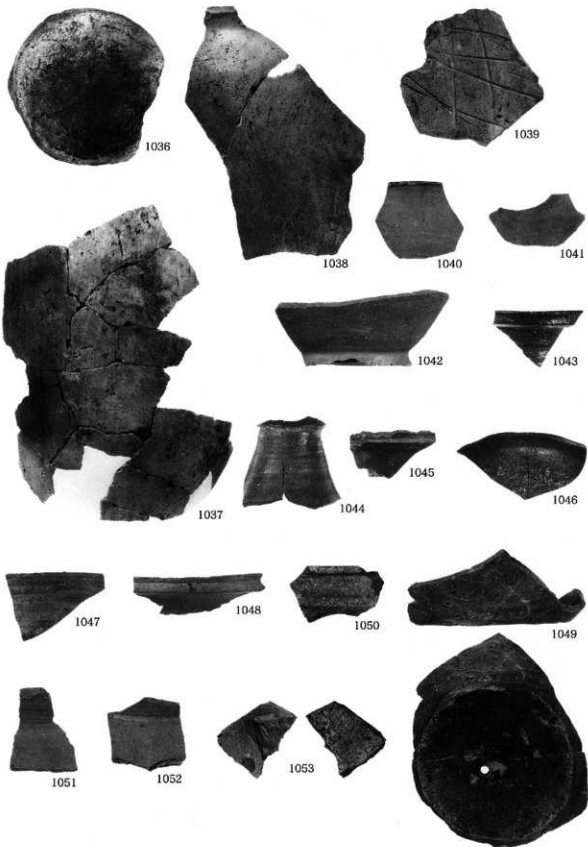
写真図版64 遺構内出土遺物 (29)



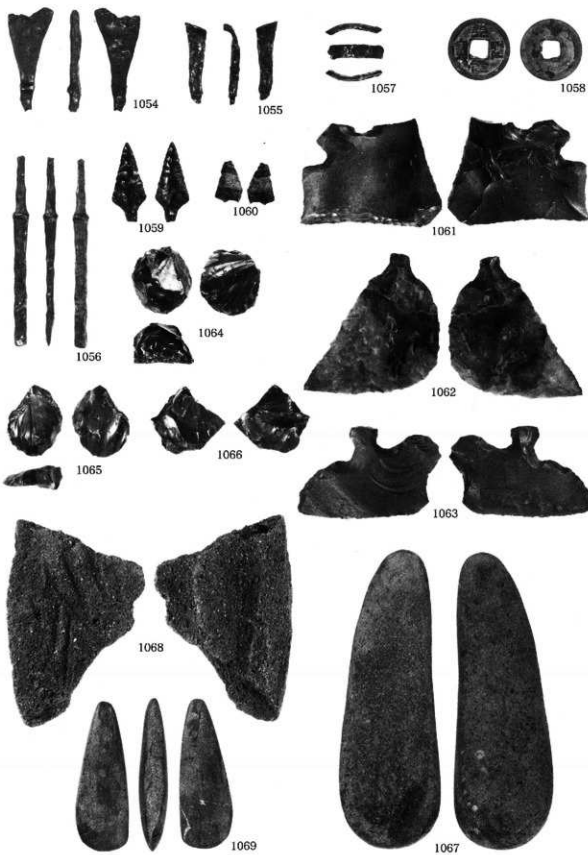
写真図版65 遺構内出土遺物 (30)



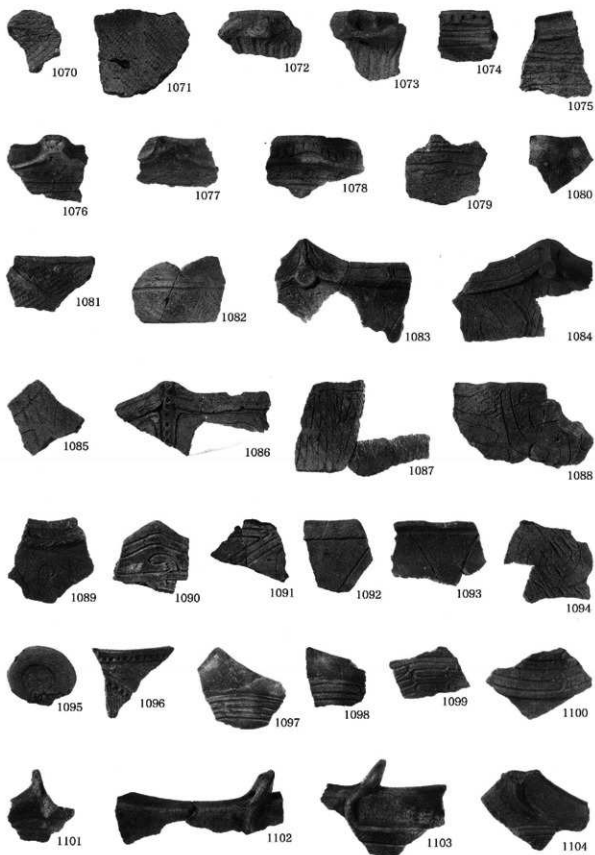
写真図版66 遺構外出土遺物(1)



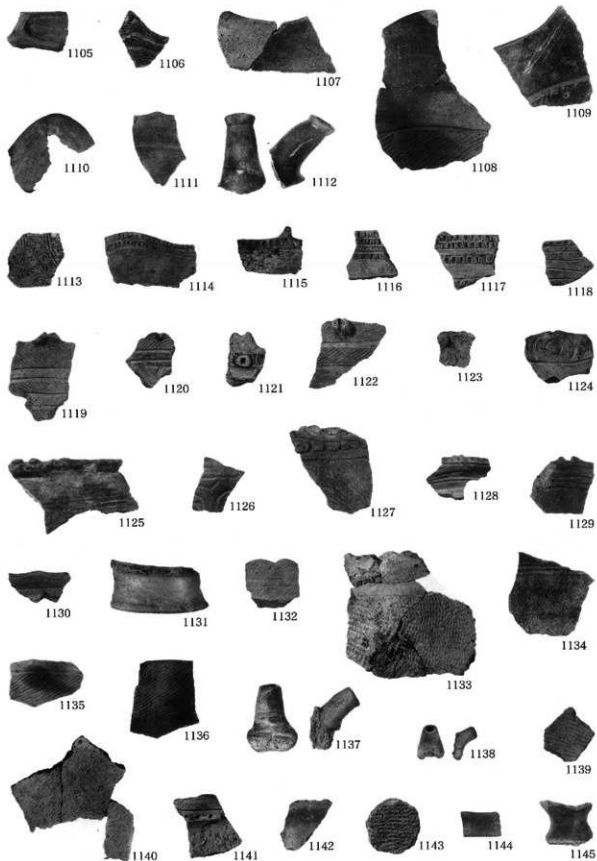
写真図版66 遺構外出土遺物(2)



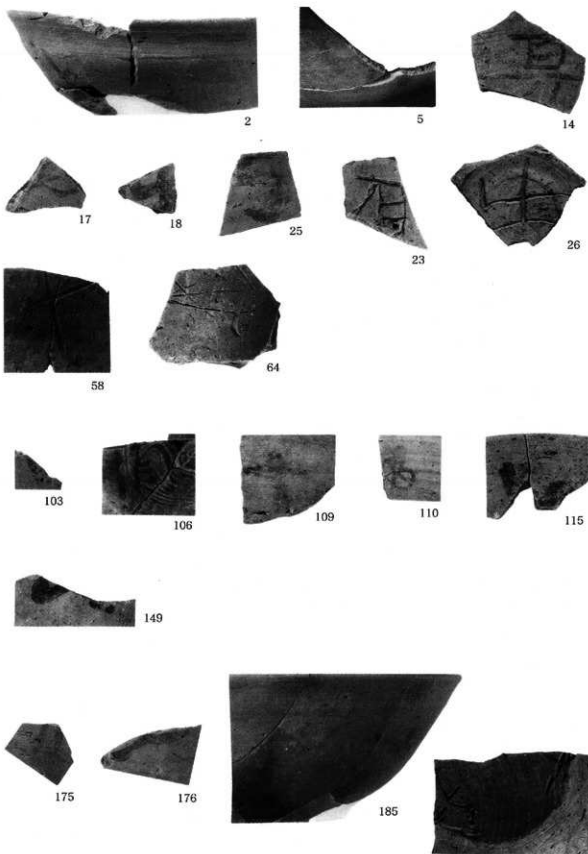
写真図版68 遺構外出土遺物(3)



写真図版69 遺構外出土遺物(4)



写真図版70 道構外出土遺物(5)



写真図版71 墨書・刻書土器集成(1)



237



249



250



260



261



262



263



305



313



314



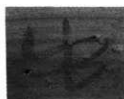
316



318



319



323



348



353



365



366



374



383



388



391

写真図版72 墨書・刻書土器集成(2)



379



392



393



405



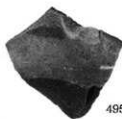
440



451



458



495



501



502



494



514



518



523



516

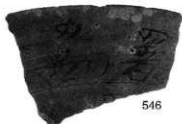
写真図版73 墨書・刻書土器集成(3)



542



545



546



547



572



573



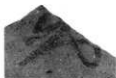
575



604



606



609



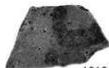
628



1004



1009



1010



1013



1018



1007



1008



1022



1025



1033



1039

写真図版74 墨書・刻書土器集成(4)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いもだにいせきはつくつちょうきほうこくしよ							
書 名	芋田II遺跡発掘調査報告書							
副 書 名	国道4号渋民バイパス建設事業関連遺跡発掘調査							
巻 次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第457集							
編 著 者 名	濱田 宏・飯坂一重							
編 集 機 関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦2005年2月18日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
いもだにいせき 芋田II遺跡	いもだにいせき 芋田II遺跡 岩手県岩手郡玉 山村大字字田字 芋田53-10ほか	03307	KE47-2199	39度 51分 59秒 世界測地系	141度 10分 50秒	2003.04.12 ~ 2003.11.11	6,784㎡	国道4号渋民 バイパス建設 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構					特記事項
芋田II遺跡	築斎跡	縄文時代 平安時代 近 世	土器埋設遺構	1基	縄文土器（早・中・後 ・晩期）石器類・土師 器・須恵器・墨書上 器・刻書土器・土製 品・木器・銭貨・金属 製品など			・墨書・刻書土器出土 ・一辺7～8m級の大型住居跡3棟 ・ロクロピットの検出

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第457集

芋田II遺跡発掘調査報告書

国道4号渋民バイパス建設事業関連発掘調査

印刷 平成17年2月14日

発行 平成17年2月18日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

TEL (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 杜陵高速印刷株式会社

〒020-0811 盛岡市川目町23-2

TEL (019) 651-2110

